

## 第2節 人工遺物各論

### 1. 陶磁器類

羽生 淳子・秋元 智也子

理学部7号館地点からは、多量の陶磁器類が出土した。これらの陶磁器類の生産地は、肥前および瀬戸・美濃の二大生産地を中心として多岐にわたり、器種も多様である。本報告では、各遺構内からまとめて出土した資料を重視し、遺構内から出土した陶磁器のうち、実測が可能なものについてはできる限り図版に掲載するよう努力した。また、必要に応じて破片資料の実測図も掲載した。これに対し、遺構外から出土した資料については、特に重要と考えられる資料のみを抽出し、実測図を示した。

#### (1) 磁器

本地点から出土した磁器は、中国製品と、肥前、瀬戸・美濃等の国産品とに大別される。これらの磁器については、観察表の「特徴」の欄に、①文様の種別（染付、色絵、青磁、白磁など）ないし俗称（呉須赤絵、餅花手など）、②器種、③生産地、④推定生産年代、⑤その他の特徴、の順に記載を行った。施釉部と無釉部の境界線は、原則として実測図の断面に直線で示してあるが、見込を蛇の目釉剥ぎした資料など、側面図ないし上面図に境界線を示せるものについては、一点鎖線でこれをあらわした。青磁および瑠璃釉は、スクリーン・トーンで示し、遺物番号の下に「青磁」、「瑠璃釉」と記載した。破片のうち、内面に模様があるものについては、断面の右側に内面図を示した。

#### a. 中国磁器

中国製品の出土量は非常に少なく、実測図で示した資料も小片が多い。これらの多くは、中国江西省景德鎮窯の製品と考えられるものである（1号井戸-1：図15，2号井戸-1・2：図24，1・2号地下式土坑-1：図32，2号土坑-10：図78，43号土坑-1：図100，1号溝-2：図121，83号土坑-2：図128，5号井戸-2：図145，10号地下式土坑-2：図147，18号地下式土坑-8・10：図160，119号土坑-1：図179，遺構外-1~3：図196，遺構外-15：図197。なお、図示はしなかったが、この他に、1号井戸，5号井戸，1号土坑から各8点，18号地下式土坑から4点，2号土坑から1点の中国製磁器片が出土している）。これらの大半は染付だが，2号土

坑-10, 18号地下式土坑-8, 遺構外-15は, 染付辰砂の碗, 1号溝-2, 18号地下式土坑-8は色絵鉢, 43号土坑-1は, 褐色釉を吹き付けた上に白釉で施文した餅花手の小片である。素地は, 肥前産の製品に比して緻密で, 高台内や高台脇には, 整形の際の放射状の削り痕を残すものが多い。出土資料のほとんどは, 17世紀前半の製品と推定される。

これに対し, 7・8号地下式土坑-1 (図 62), 30号土坑-1 (図 97), 83号土坑-1 (図 128), 18号地下式土坑-1 (図 160), 5号井戸・136号土坑・137号土坑-2 (図 186), 遺構外-4~7 (図 196)は, 「呉須赤絵」と呼ばれる, 上絵付を施した半磁器質の一群である。素地は灰色味を帯びて粒子が粗く, 全体に厚手である。83号土坑-1および18号地下式土坑-1の高台畳付には砂が熔着する。これらは, 中国南部福建・広東省付近の製品といわれており, 生産年代は, 17世紀前半と推定される (斎藤 1976)。

これらの中国製磁器は, 1号井戸, 2号井戸, 5号井戸, 18号地下式土坑, 1号土坑, 2号土坑など, 廃棄年代が17世紀代と考えられる遺構を中心として出土している。しかし, その出土量は, いずれも少量であり, 各遺構からの出土遺物全体の中では, ごくわずかの割合を占めるに過ぎない。このことは, 本地点の遺構の主たる年代が17世紀中葉以降であることに起因すると考えられる (第7章参照)。

なお, 上記の出土資料のうち, 1号井戸-1, 遺構外-1・2の染付皿3点, および83号土坑-1, 18号地下式土坑-1の「呉須赤絵」皿2点, の計5点については, 第6章第1節において素地の化学分析を試みている。

## b. 国産磁器

国産磁器の主体を占めるものは肥前磁器である。これらの製品の推定生産年代は, 1630年代~幕末にわたり, 皿および碗を中心として多様な器種が出土している。

特に本地点においては, 都内の近世遺跡では比較的報告例の少なかった17世紀代の資料が, いくつかの遺構内 (1号井戸, 2号土坑, 1号土坑など) からまとまって出土している点が注目される (第7章参照)。これらのうち4点は, 古九谷様式の鉢および皿の破片である (4号地下式土坑-1: 図 36, 1号土坑-4: 図 66, 4号井戸-16: 図 137, 遺構外-23: 図 197)。これらの4点および肥前産と考えられる色絵皿1点 (142号土坑-1: 図 189) の素地については, 第6章第1節で化学分析を行っている。

18世紀代の出土資料の内容は, 都内の他の近世遺跡と共通する要素が多い。6号地下式土坑からは, 推定生産年代が1690年代~1750年代の肥前磁器がまとまって出土している。6号地下式土坑-1, 3 (図 52), 6, 7, 9 (図 53), 遺構間接合資料-2 (図 192)などは, 作りの丁寧な製品である。これ以降に位置づけられる遺構では, 精製品の出土量は減少し, 厚手で粗雑な作

りの製品が、出土した肥前磁器の主体を占めるようになる。3号井戸-1(図26)、4号井戸-5~9(図137)、16号地下式土坑-3(図157)等は、内側面に粗雑な唐草文を描き、見込に印判五弁花を施した厚手の皿である。3号井戸-2(図26)、4号地下式土坑-2(図36)、11号地下式土坑-1(図148)は、見込を蛇の目釉剥ぎしてある。3号地下式土坑-1(図33)、4号地下式土坑-3(図36)は、内側面に二重網目文を施し、見込を蛇の目釉剥ぎした、高台径の小さな皿である。これらの多くは、素地が灰色味を帯び、釉薬は生掛けである。磁器碗の出土量は、全体に少ないが、推定廃棄年代が18世紀中葉以降の遺構からは、筒形碗(3号地下式土坑-2:図33、4号地下式土坑-6:図36など)、高台径の小さな薄手の碗(4号地下式土坑-4:図36、5号地下式土坑-5:図45、7・8号地下式土坑-5:図62など)の出土が目立つ。4号地下式土坑-6の筒形碗は、本地点の出土資料の中では数少ない18世紀代の色絵磁器のひとつである。

18世紀末~19世紀代の資料は、出土磁器全体の割合からみると、あまり多くない。特に、都内の他遺跡において比較的一般的に出土する広東碗は、本地点では実測可能な資料は1点もなかった。19世紀代になると、肥前以外の地域においても磁器が生産されるようになる。これらの資料は、胎土および呉須の色調が、肥前産のものとは明らかに異なっている。1号遺物集中-1(図115)は、型打により雀を模した変形皿である。63号土坑-6(図106)は、底部に焼成前の穿孔を有する色絵の小杯である。内面には、赤と金による上絵付が施されている。113号土坑-1(図177)は、蓋・身とも型押および染付による竜文を施した水注である。蓋の欠損部は、漆喰状の物質で補修されている。胴部には焼継痕が見られる。

## (2) 陶器

本地点から出土した陶器のうち、最も出土量が多いのは、瀬戸・美濃産の製品である。17世紀代~18世紀中葉の磁器を伴う遺構からは、肥前産の陶器も比較的多く出土しているが、これらは、推定廃棄年代が18世紀後半以降の遺構からはほとんど出土しなくなる。陶器については、観察表の特徴の欄に、①器種、②生産地、③推定生産地、④その他の特徴、の順に記載を行った。ただし、一部の資料については、器種の前に、「三島手」、「二彩手」などの俗称を記した。施釉部と無釉部の境界線は、原則として、実測図中に一点鎖線で示した。一個体に二種類以上の釉ないし絵の具が施されている場合には、必要に応じて、図中にスクリーン・トーンを貼り込んである。

本地点から出土した陶器のうち、徳利、播鉢、燈明皿については、本節-2, 4, 6で改めて記載を行うので、ここでは、それ以外の陶器について、a. 肥前産、b. 瀬戸・美濃産、c. その他、の順に、主な出土品について記載する。

#### a. 肥前陶器

肥前産の陶器は、その多くが、17世紀代～18世紀中葉の肥前磁器に伴っている。特に、17世紀代の肥前磁器を多量に出土した1号井戸からは、肥前産の陶器が比較的まとまって出土した。1号井戸—32, 33 (図 19) は、17世紀前半に位置づけられる砂目積みの皿で、18号地下式土坑—19 (図 161) の碗とともに、出土した肥前陶磁器の中では最も古いグループに属する。1号井戸—39 (図 20) は、高麗茶碗を模した切り高台の茶碗である。生産年代は、17世紀前半～中葉と推定される。1号井戸—42 (図 21) は、内面に白土による刷毛目を施し、鉄・銅の二彩で文様を描いた鉢である。見込には、砂・胎土目痕を有する。生産年代は、17世紀中葉～後半と推測される。1号井戸—34 (図 20) は、白土で象嵌を施した上に透明釉を掛け、いわゆる三島手の皿である。非常に丁寧な作りで、象嵌文様がくっきりとしている。高台畳付の整形は平坦であり、畳付内外面には、削りは施されていない。これに対し、同じ三島手でも、6号地下式土坑—29 (図 55)、7号地下式土坑—11 (図 59)、16号地下式土坑—8 (図 157) では、象嵌文様は粗雑になり、整形も粗くなる。高台畳付は、内外面を削ってある。これらは、1号井戸—34よりも、相対的に新しい時期の整品と考えられる。

3号井戸—15 (図 27)、4号井戸—25 (図 138)、46, 47 (図 139)、111号土坑—4 (図 175) は、鉄絵を施した京焼風の皿および碗であるが、素地および調整上の特徴から肥前産と判断した。3号井戸—15、4号井戸—25は「清水」銘を、111号土坑—4は、「中村金」銘を、それぞれ高台内に有する。

3号井戸—16, 17 (図 27)、6号地下式土坑—25 (図 54)、7号地下式土坑—14 (図 60)、7・8号地下式土坑—11 (図 62)、4号井戸—27 (図 138)、遺構外—35, 36 (図 198) は、白泥による刷毛目の上に透明釉を施した碗である。3号井戸—26 (図 28) の鉢、7・8号地下式土坑—15 (図 62) の壺底部、83号土坑—5 (図 128) の鉢は、同様の刷毛目技法を用いた製品である。これらの多くは、18世紀前半～中葉の肥前磁器と共伴している。同じ刷毛目の碗でも、比較的薄手で作りの丁寧なもの、厚手で雑な作りのものがある。4号井戸—27の碗、83号土坑—5の鉢は、見込を蛇の目釉剥ぎしている。18号地下式土坑—17 (図 161) は、灰褐色の素地に白泥の刷毛目を施した皿である。共伴する肥前磁器の年代から、17世紀代の製品と推定される。図示はしていないが、同一個体と考えられる破片が、9号地下式土坑より1点、遺構外より2点出土している。

3号井戸—13 (図 27)、5号地下式土坑—6 (図 45)、6号地下式土坑—17～24 (図 54)、7号地下式土坑—9 (図 59)、43号土坑—3 (図 100)、4号井戸—24 (図 138) は、内面に銅緑釉、外面に透明釉を施し、見込を蛇の目釉剥ぎした、高台径の小さな皿である。いずれも18世紀前半～中葉の肥前磁器に伴っている。類品は、内野山窯から出土している。1号土坑—24 (図 68)

は、同様の銅緑釉を施した碗の小片である。

## b. 瀬戸・美濃陶器

瀬戸・美濃産の陶器は、本地点から出土した陶器のうちで、最も出土量が多い。出土資料の推定生産年代は、17世紀～19世紀にわたるが、量的に多数を占めるのは、18世紀以降に位置づけられる資料である。

17世紀代の陶磁器がまとめて出土した遺構のうち、2号土坑からは、1630年代～17世紀中葉に位置づけられる肥前磁器に伴って、何点かの瀬戸・美濃産の陶器が出土している。2号土坑—33, 34 (図 79) は、灰釉を施した型打菊皿である。1号井戸—36 (図 20) は、同様の菊皿であるが、三脚を有すると思われる。2号土坑—35, 36 (図 79) は、灰釉を施した粗雑な作りの皿である。これに類似する資料としては、1号土坑—20, 21 (図 68), 17号地下式土坑—2 (図 159), 遺構外 32 (図 197), 38 (図 198) 等があげられる。2号土坑—40 (図 70) は天目碗である。瀬戸・美濃産の天目碗としては、他に 51号土坑—1 (図 192) がある。

1号井戸は、17世紀中葉～後半の肥前磁器を大量に出土した遺構であるが、ここからも、瀬戸・美濃産の陶器が何点か出土している。1号井戸—35 (図 20) は、四隅に足を貼付した、型作りの変形額皿である。内側面および見込に鉄で文様を描き、全体に灰釉を施す。1号井戸—37 (図 20) は、長石釉の小皿, 38 (図 20) は鉛釉の中皿, 40 は鉄釉の碗である。43 (図 21) の鉢は、内面に鉄で施文し、緑釉を流しかけた上に灰釉を施してある。

17世紀代の生産年代が推定される主な資料としては、この他に、1号土坑—22 (図 68), 遺構外—42 (図 198) がある。1号土坑—22 は、内面に赤色の銅釉を流しかけた上に灰釉を施した変形皿である。遺構外—42 の鉢は、内面に鉄で蔦と思われる文様を描き、緑釉を流しかけた後、灰釉を施す。

18世紀以降に生産されたと考えられる資料は数多い。特に出土量の多いものとして、灰釉を施した大型の碗があげられる(3号井戸—19～22 : 図 27, 3号地下式土坑—11, 12 : 図 34, 4号地下式土坑—21～23 : 図 37, 5号地下式土坑—9～16 : 図 45, 4号井戸—32～43 : 図 138, 139, 17号地下式土坑—4 : 図 159, 19号地下式土坑—7 : 図 163 など)。これらの多くは、内外面にへら削りの痕跡を残す特徴的な整形である。特に、18世紀前半～中葉の肥前陶磁器を伴う遺構からまとめて出土する傾向を示す。外面下半部に鉄釉, 外面口縁部および内面に灰釉を施した掛け分けの碗も、18世紀前半～中葉の肥前陶磁器に伴って出土している(3号井戸—18 : 図 27, 6号地下式土坑—27 : 図 54, 4号井戸—30, 31 : 図 138)。65号土坑—1 (図 109), 74号土坑—3 (図 112) も掛け分けの碗だが、形態および整形上の特徴から、上記の資料よりも新しい時期の製品と考えている。3号地下式土坑—6 (図 34), 4号地下式土坑—11 (図 37), 7号地下式土坑—8 (図

59), 14号土坑—6, 7 (図 89), 13号地下式土坑—7~11 (図 152), 遺構外—33 (図 197) 等は、鉄で摺絵を施した灰釉の皿である。そのほとんどが、18世紀代の肥前磁器に伴っている。外面には、前述の灰釉碗と同様に、ヘラ削りによる整形痕を残す。4号井戸—50 (図 39) の鬘盤は、同様の摺絵技法によって施文されている。

18世紀中葉以降の肥前磁器を伴う遺構からは、灰釉を施した徳利の出土量が著しく増加し、出土する瀬戸・美濃産陶器の大多数を徳利が占めるようになる。徳利以外の瀬戸・美濃産陶器としては、磁器を模した呉須絵の陶器が目だっている(14号土坑—1: 図 89, 26号土坑—2: 図 94, 52・53号土坑—1: 図 102, 13号地下式土坑—3: 図 151, 138・139・140号土坑—2: 図 187 など)。

### c. その他の陶器

肥前および瀬戸・美濃産以外の陶器のうち、量的に主体を占めるのは、京焼系と呼ばれる一群である。これらの多くは、白味を帯びた胎土を用いた特徴的な陶器であり、器壁は薄手のものが多い。これらは、一般に京焼系と総称されているが、京焼そのものについては窯跡の調査例がほとんどなく、不明な部分が多いことから、今回の報告では、銘から京焼と推測されるものについてのみ、観察表の生産地の欄に「京都?」と記し、他は生産地不明とした。

京焼系の資料のうち、銘を有する主なものとしては、2号井戸—5 (図 25), 5号地下式土坑—29 (図 46), 11号地下式土坑—2 (図 148), 遺構外—40 (図 198), 遺構外—47 (図 198), 遺構外—48 (図 199) などがある。5号地下式土坑—29は、竹を模した筒形の容器で、底裏に「青山」銘を有する。焼成後に口唇部を打ち欠いて研磨し、香炉に転用しているが、元来の用途は不明である。11号地下式土坑—2は、底裏に「洛東山」と思われる銘を有する碗である。胎土は灰色で焼き締り、外面には黒色顔料の上に白土で草花文、内面には白化粧を施し、全体に透明釉を施釉する。遺構外—47, 48は、ともに「道仙」銘を有する用途不明の製品である。47はツノ形で中空を呈し、内面に灰釉を施す。48は蒲鉾形で、底部に一ヶ所、両脇に三ヶ所の切込みを有するところから、壁に掛けたものと思われる。遺構外—40は「岩倉山」銘を有する。

いわゆる京焼系と呼ばれる一群のうち、出土量の多かった資料としては、上絵付を施した高台径の小さな碗(4号地下式土坑—17~20: 図 37, 20号地下式土坑—2: 図 169), および、高台脇を直角に削った特徴的な器形の碗(26号土坑—3: 図 94, 27号土坑—7~9: 図 95, 63号土坑—9: 図 106, 74号土坑—4: 図 112, A・B区柱穴および小土坑—7: 図 120, 5号井戸—6: 図 145, 11号地下式土坑—3・4: 図 148, 12号地下式土坑—3: 図 150)がある。後者は、外面に鉄で若松を描いたものが多い。素地は、ともに、やや黄色味を帯びた灰褐色ないし半磁器質の灰白色を呈し、全体に薄手である。これらの碗については、信楽の窯跡出土資料に類例が存在

する<sup>1)</sup>が、前述の通り、京都および京都近郊の窯については、不明な部分が多いため、観察表の生産地の欄の記載には、「産地不明(信楽?)」としてある。3号地下式土坑-9(図34)、4号地下式土坑-15(図37)、5号地下式土坑-18・19(図46)等は、器形および胎土が上記のグループと類似することから、同様の分類とした。

肥前産、瀬戸・美濃産、京焼系以外で特筆すべき資料としては、志戸呂の製品があげられる。これらの資料は、主として18世紀代の製品と考えられるが、2号井戸-7(図25)の徳利は、共伴するその他の陶磁器から、17世紀代の製品と推測される。器種としては、圧倒的に徳利と燈明皿が多い(本節2および6参照)。4号地下式土坑-41(図38)、13号地下式土坑-15(図152)は、18世紀中葉~後半の陶磁器と共伴する蓋物の蓋である。4号地下式土坑においては、図示はしていないが、身の破片も出土している。いずれも炆器質であり、鉄釉が施される。志戸呂の製品が19世紀代の陶磁器と共伴する例は、本地点においては確認されていない。

この他に、量的にはごくわずかであるが、八代、延岡など、九州の中小規模の陶器生産地の製品が出土している。八代の製品としては、1号土坑-28(図68)の三島手鉢があげられる。胎土は黒褐色を呈し、内面には象嵌文様が施される。焼成時に、貝殻を敷いて窯詰めしたために、高台畳付には貝殻背圧痕が認められる。この資料は、17世紀後半の肥前磁器に伴っている。74号土坑-2(図112)は、蕪文および蝶文が象嵌されており、同じく八代の製品の可能性が高い。共伴する陶磁器は、18世紀代の瀬戸・美濃の製品である。142号土坑-3(図189)は、高台脇に「延岡」の刻印を有することから、現宮崎県延岡市の丸山焼と考えられる。内外面を白土で斑状に化粧し、その上面に鉄で笹文を描き、内外に透明釉を施している。内面に3ヶ所の目痕を残す。丸山焼の窯は、天保の初め(1830年頃)に創業され、短期間で生産を終えている(明治16年(1883)に廃窯となる)(小田1982)ことから、この製品の生産年代は19世紀代であることが確実である。八代、延岡などの製品が少量ながら確認されたことは、これら九州の中小規模の生産地の製品が江戸市中に流通していたことを示している点で興味深い。

上記の諸生産地以外では、丹波、備前、信楽等の製品が比較的多く出土している。特に、廃棄年代が17世紀代と考えられる遺構からの出土例が目立つ。18世紀後半以降の遺構からは、生産地が同定できなかった資料が多数出土するようになる。

### (3) 器種別組成および生産地別組成の時間的変化

以上、理学部7号館地点から出土した陶磁器のうち、主なものについてその特徴を述べてきた。これら出土陶磁器の大部分は、井戸・地下式土坑およびいくつかの土坑からまとまって出土しており、各遺構内から得られた一括資料は、それぞれ、比較的短期間のうちに廃棄されたと推定される。そこで、各遺構内から得られた一括資料のうち、8遺構の出土資料について器

種別および生産地別の組成比を調べ、その時間的変化を検討した。

検討の対象とした遺構は、1号井戸、4号井戸、4号地下式土坑、5号地下式土坑、6号地下式土坑、14号地下式土坑、2号土坑、63号土坑の計8基である。これら8基を、出土した陶磁器を基準として、推定廃棄年代順に並べるならば、2号土坑が17世紀中葉、1号井戸が17世紀後半、6号地下式土坑が18世紀前半、4号井戸が18世紀前半～中葉、5号地下式土坑・4号地下式土坑が18世紀中葉～後半(切り合い関係から、5号地下式土坑より4号地下式土坑の方が新しい)、14号地下式土坑が18世紀末～19世紀前半、63号土坑が19世紀中葉となる。各遺構の陶磁器の出土量は、①総破片数(出土した陶磁器すべての破片数：2片が接合している場合には2点として計算)、②底部(ないし高台部)が1/2以上残存している資料の個体数(以下、底部1/2以上個体数と略称)、という2つの異なる方法を用いて集計した。

表12は、上記の2つの集計方法を用いて、8遺構の磁器(表12①)および陶器(表12②)の出土量を調べたものである<sup>2)</sup>。集計を行なった結果、総破片数を用いた場合の器種毎の組成比

表12 遺構別出土陶磁器総破片数集計表 ①磁器([ ]内は底部 $\frac{1}{2}$ 以上個体数)

Table 12 Numbers of porcelain and other glazed ceramics recovered from eight features

遺構No		2号土坑	1号井戸	6号地下式土坑	4号井戸	5号地下式土坑	4号地下式土坑	14号地下式土坑	63号土坑
碗	肥前	79 [11]	23 [3]	45 [2]	39 [2]	40 [2]	25 [3]	4 [2]	5 [1]
	瀬戸・美濃	[ ]	[ ]	[ ]	[ ]	[ ]	[ ]	[ ]	32 [1]
	その他	5 [1]	[ ]	[ ]	[ ]	[ ]	[ ]	[ ]	[ ]
	産地不明	[ ]	[ ]	[ ]	[ ]	[ ]	[ ]	[ ]	[ ]
小・中皿	肥前	50 [5]	244 [14]	208 [8]	37 [2]	64 [2]	78 [5]	4 [ ]	15 [ ]
	瀬戸・美濃	[ ]	[ ]	[ ]	[ ]	[ ]	[ ]	[ ]	1 [ ]
	その他	[ ]	2 [1]	[ ]	[ ]	[ ]	[ ]	[ ]	[ ]
	産地不明	[ ]	[ ]	[ ]	[ ]	[ ]	[ ]	[ ]	[ ]
小鉢	肥前	1 [ ]	[ ]	3 [ ]	[ ]	4 [1]	[ ]	[ ]	5 [ ]
	瀬戸・美濃	[ ]	[ ]	[ ]	[ ]	[ ]	[ ]	[ ]	[ ]
	その他	[ ]	[ ]	[ ]	[ ]	[ ]	[ ]	[ ]	[ ]
	産地不明	[ ]	[ ]	[ ]	[ ]	[ ]	[ ]	[ ]	[ ]
大皿・鉢	肥前	81 [2]	51 [ ]	37 [ ]	1 [ ]	5 [ ]	8 [ ]	[ ]	[ ]
	瀬戸・美濃	[ ]	[ ]	[ ]	[ ]	[ ]	[ ]	[ ]	[ ]
	その他	[ ]	[ ]	[ ]	[ ]	[ ]	[ ]	[ ]	[ ]
	産地不明	[ ]	[ ]	[ ]	[ ]	[ ]	[ ]	[ ]	[ ]
その他	肥前	29 [2]	40 [3]	56 [ ]	20 [6]	15 [ ]	20 [1]	1 [1]	[ ]
	瀬戸・美濃	[ ]	[ ]	[ ]	[ ]	[ ]	[ ]	[ ]	10 [1]
	その他	[ ]	[ ]	[ ]	[ ]	[ ]	[ ]	[ ]	[ ]
	産地不明	[ ]	[ ]	[ ]	[ ]	[ ]	[ ]	[ ]	1 [1]
器種不明	肥前	[ ]	2 [ ]	23 [ ]	5 [ ]	32 [ ]	32 [ ]	[ ]	[ ]
	瀬戸・美濃	[ ]	[ ]	[ ]	[ ]	[ ]	[ ]	[ ]	[ ]
	その他	[ ]	[ ]	[ ]	[ ]	[ ]	[ ]	[ ]	[ ]
	産地不明	[ ]	[ ]	[ ]	[ ]	[ ]	[ ]	[ ]	[ ]
計		245 [21]	362 [21]	372 [10]	102 [10]	160 [5]	131 [9]	9 [3]	69 [4]



表12 遺構別出土陶磁器総破片数集計表 ②陶器(〔 〕内は底部1/2以上個体数)

Table 12 Numbers of porcelain and other glazed ceramics recovered from eight features(continued)

遺構No		2号土坑	1号井戸	6号 地下式土坑	4号井戸	5号 地下式土坑	4号 地下式土坑	14号 地下式土坑	63号土坑
碗	肥前	10〔2〕	8〔1〕	34〔2〕	1〔1〕	〔 〕	3〔 〕	2〔 〕	1〔 〕
	瀬戸・美濃	5〔1〕	〔 〕	22〔1〕	99〔18〕	227〔12〕	364〔17〕	2〔 〕	21〔 〕
	その他	〔 〕	3〔 〕	2〔 〕	〔 〕	57〔1〕	140〔4〕	〔 〕	〔 〕
	産地不明	〔 〕	〔 〕	〔 〕	21〔1〕	20〔2〕	26〔4〕	1〔 〕	28〔2〕
小・ 中皿	肥前	〔 〕	30〔3〕	52〔7〕	8〔1〕	8〔1〕	3〔 〕	〔 〕	〔 〕
	瀬戸・美濃	17〔2〕	7〔 〕	1〔 〕	1〔 〕	12〔3〕	47〔2〕	2〔 〕	3〔 〕
	その他	1〔 〕	〔 〕	〔 〕	11〔1〕	〔 〕	2〔1〕	〔 〕	〔 〕
	産地不明	2〔 〕	〔 〕	〔 〕	〔 〕	〔 〕	1〔 〕	〔 〕	〔 〕
小鉢	肥前	〔 〕	〔 〕	〔 〕	〔 〕	12〔1〕	〔 〕	〔 〕	〔 〕
	瀬戸・美濃	〔 〕	2〔1〕	〔 〕	〔 〕	〔 〕	1〔 〕	〔 〕	2〔 〕
	その他	〔 〕	〔 〕	〔 〕	1〔 〕	11〔 〕	2〔 〕	〔 〕	〔 〕
	産地不明	〔 〕	〔 〕	〔 〕	3〔2〕	29〔5〕	6〔 〕	〔 〕	2〔 〕
大皿・ 鉢	肥前	5〔 〕	20〔1〕	12〔 〕	1〔 〕	23〔1〕	11〔 〕	〔 〕	〔 〕
	瀬戸・美濃	5〔 〕	9〔 〕	1〔 〕	1〔 〕	71〔1〕	34〔3〕	〔 〕	〔 〕
	その他	〔 〕	〔 〕	〔 〕	〔 〕	〔 〕	〔 〕	〔 〕	〔 〕
	産地不明	〔 〕	〔 〕	〔 〕	〔 〕	〔 〕	〔 〕	〔 〕	〔 〕
徳利	肥前	〔 〕	〔 〕	〔 〕	〔 〕	〔 〕	〔 〕	〔 〕	〔 〕
	瀬戸・美濃	〔 〕	〔 〕	75〔2〕	154〔1〕	162〔8〕	281〔14〕	79〔9〕	477〔10〕
	志戸呂	2〔 〕	〔 〕	36〔 〕	38〔1〕	200〔3〕	235〔3〕	〔 〕	〔 〕
	備前	〔 〕	〔 〕	16〔1〕	〔 〕	〔 〕	〔 〕	〔 〕	〔 〕
	その他	〔 〕	〔 〕	〔 〕	〔 〕	〔 〕	〔 〕	〔 〕	〔 〕
搦鉢	肥前	〔 〕	〔 〕	〔 〕	〔 〕	〔 〕	〔 〕	〔 〕	〔 〕
	瀬戸・美濃	13〔2〕	8〔 〕	5〔 〕	23〔3〕	15〔1〕	11〔 〕	〔 〕	3〔 〕
	信楽系	29〔 〕	11〔 〕	〔 〕	1〔 〕	6〔 〕	4〔 〕	〔 〕	〔 〕
	備前系	5〔 〕	〔 〕	3〔 〕	4〔1〕	30〔 〕	20〔 〕	2〔 〕	6〔 〕
	その他	〔 〕	〔 〕	〔 〕	〔 〕	〔 〕	〔 〕	〔 〕	〔 〕
燈明皿	肥前	〔 〕	〔 〕	〔 〕	〔 〕	〔 〕	〔 〕	〔 〕	〔 〕
	瀬戸・美濃	〔 〕	〔 〕	〔 〕	1〔 〕	6〔2〕	4〔 〕	1〔1〕	〔 〕
	志戸呂	〔 〕	〔 〕	〔 〕	〔 〕	1〔1〕	5〔 〕	〔 〕	〔 〕
	その他	〔 〕	〔 〕	〔 〕	〔 〕	〔 〕	〔 〕	〔 〕	〔 〕
その他	肥前	〔 〕	〔 〕	〔 〕	〔 〕	〔 〕	〔 〕	〔 〕	〔 〕
	瀬戸・美濃	25〔 〕	17〔 〕	13〔 〕	34〔4〕	15〔1〕	67〔7〕	〔 〕	15〔 〕
	その他	20〔 〕	31〔1〕	21〔 〕	6〔 〕	33〔 〕	21〔 〕	〔 〕	4〔 〕
	産地不明	〔 〕	〔 〕	15〔 〕	〔 〕	40〔 〕	148〔 〕	〔 〕	84〔2〕
器種 不明	肥前	〔 〕	〔 〕	〔 〕	〔 〕	〔 〕	〔 〕	〔 〕	〔 〕
	瀬戸・美濃	3〔 〕	1〔 〕	〔 〕	〔 〕	51〔 〕	〔 〕	〔 〕	〔 〕
	その他	〔 〕	〔 〕	〔 〕	〔 〕	〔 〕	〔 〕	〔 〕	〔 〕
	産地不明	7〔 〕	〔 〕	〔 〕	〔 〕	〔 〕	〔 〕	20〔1〕	5〔 〕
計		150〔7〕	170〔7〕	308〔13〕	408〔34〕	1029〔43〕	1437〔56〕	109〔11〕	651〔14〕

は、個体数の比率を正しく反映していないことがわかった<sup>3)</sup>。器種毎の組成比を調べる場合の最終的な目標は、出土した破片の総量ではなく、個体数の比率であるから、ここでは底部1/2以上個体数を用いて、組成比の時間的変化について検討する。

表13の①は、表12のデータを用いて、底部1/2以上個体数に基づき、各遺構における器種

表 13 各遺構における組成比 (カッコ内は%)  
Table 13 Numbers and percentages of various types of ceramics

①器種別

器種	2号土坑	1号井戸	6号地土	4号井戸	5号地土	4号地土	14号地土	63号土坑
碗	15( 53.6)	4( 14.3)	5( 21.7)	22( 50.0)	17( 35.4)	28( 43.1)	2( 14.3)	4( 22.2)
皿・鉢	9( 32.1)	20( 71.4)	15( 65.2)	6( 13.6)	15( 31.3)	11( 16.9)	0	0
徳利	0	0	3( 13.0)	2( 4.5)	11( 22.9)	17( 26.2)	9( 64.3)	10( 55.6)
その他	4( 14.3)	4( 14.3)	0	14( 31.8)	5( 10.4)	9( 13.8)	2( 14.3)	4( 22.2)
不明	0	0	0	0	0	0	1( 7.1)	0
計	28(100.0)	28(100.0)	23( 99.9)	44( 99.9)	48(100.0)	65(100.0)	14(100.0)	18(100.0)

②磁器と陶器の割合

器種	2号土坑	1号井戸	6号地土	4号井戸	5号地土	4号地土	14号地土	63号土坑
磁器	21( 75.0)	21( 75.0)	10( 43.5)	10( 22.7)	5( 10.4)	9( 13.8)	3( 21.4)	4( 22.2)
陶器	7( 25.0)	7( 25.0)	13( 56.2)	34( 77.3)	43( 89.6)	56( 86.2)	11( 78.6)	14( 77.8)
計	28(100.0)	28(100.0)	23(100.0)	44(100.0)	48(100.0)	65(100.0)	14(100.0)	18(100.0)

③生産地別

産地	器種	2号土坑	1号井戸	6号地土	4号井戸	5号地土	4号地土	14号地土	63号土坑
肥前	碗	13	4	4	3	2	3	2	1
	皿・鉢	7	18	15	3	6	5	0	0
	徳利	0	0	0	0	0	0	1	0
	その他	2	3	0	6	0	1	0	0
	不明	0	0	0	0	0	0	0	0
	小計	22( 78.6)	25( 89.3)	19( 82.6)	12( 27.3)	8( 16.7)	9( 13.8)	3( 21.4)	1( 5.6)
瀬戸・美濃	碗	1	0	1	18	12	17	0	1
	皿・鉢	2	1	0	0	4	5	0	0
	徳利	0	0	2	1	8	14	9	10
	その他	2	0	0	7	4	7	1	1
	不明	0	0	0	0	0	0	0	0
	小計	5( 17.9)	1( 3.6)	3( 13.0)	26( 59.1)	28( 41.2)	43( 66.2)	10( 71.4)	12( 66.7)
その他	碗	1	0	0	0	1	4	0	0
	皿・鉢	0	1	0	1	0	1	0	0
	徳利	0	0	1	1	3	3	0	0
	その他	0	1	0	1	1	0	0	0
	不明	0	0	0	0	0	0	0	0
	小計	1( 3.6)	2( 7.1)	1( 4.3)	3( 6.8)	5( 10.4)	8( 12.3)	0	0
産地不明	碗	0	0	0	1	2	4	0	2
	皿・鉢	0	0	0	2	5	0	0	0
	徳利	0	0	0	0	0	0	0	0
	その他	0	0	0	0	0	1	0	3
	不明	0	0	0	0	0	0	1	0
	小計	0	0	0	3( 6.8)	7( 14.6)	5( 7.7)	1( 7.1)	5( 27.8)
計		28(100.1)	28(100.0)	23( 99.9)	44(100.0)	48( 99.9)	65(100.0)	14( 99.9)	18(100.1)

別組成比を示したものである。表から明らかな通り、器種別組成比は、遺構毎に異なった特徴を示している。第一に、徳利の割合は、時代が下るにつれて増加する。特に、14号地下式土坑および63号土坑では、徳利の割合は非常に高く、ともに全体の半数以上を占めている。第二に、1号井戸および6号地下式土坑では、皿・鉢類の占める割合が非常に高い。表12をみると、これらの大部分は、肥前産の小・中皿であることがわかる。ただし、両遺構の資料とも、火災の後の一括廃棄と考えられることから、このような組成比の差異が、時期的な特徴を示すものなのか、あるいはそれ以外の原因を反映しているのかについては、さらに検討を要する。

表13の②は、各遺構における磁器と陶器の比率を示したものである。表から明らかな通り、17世紀代の2遺構(2号土坑、1号井戸)においては、磁器が組成の主体を占めているが、18世紀以降になるとこの比率は逆転し、陶器の方が組成の主体を占めるようになる。

近世遺跡における磁器と陶器の割合について、佐々木(1987)は、時代が新しくなるにつれて磁器の割合が増加する傾向を指摘している。今回の検討の結果、本地点において、全く逆の結果が得られたことは、非常に興味深い。佐々木が検討対象とした資料の多くが町屋遺跡の調査例であるのに対し、本地点が大名屋敷の一部であることを考え合わせるならば、町屋では磁器の使用が少なかった17世紀代に、大名屋敷では磁器が多く使用されていた可能性が考慮される。

表13の③は、各遺構における生産地別の組成比を示したものである。表から明らかな通り、2号土坑、1号井戸、6号地下式土坑では、肥前産の陶磁器の占める比率が非常に高く、瀬戸・美濃産の陶磁器の占める比率はわずかである。ところが、4号井戸以降になると、この比率は逆転し、瀬戸・美濃産が組成の主体を占めるようになる。肥前産の出土資料の大部分が磁器であることを考え合わせるならば、このような傾向は、表13の②に示した磁器と陶器の割合の時間的変化を引き起こした主な原因と考えられる。

生産地別の組成比のもうひとつの特徴として、18世紀中頃から、生産地不明の資料の割合が増加する点が指摘される。このことは、近世後半、特に19世紀代に、各地に地方窯が起ってくることと対応すると考えられる。現在までのところ、これら地方窯が考古学的に調査された例はきわめて少ないため、これらの資料の生産地同定を行うことは現段階では困難である。

以上、各遺構から出土した陶磁器について、①器種別組成、②磁器と陶器の割合、③生産地別組成、の3点について述べてきた。上記の遺構内一括出土資料は、消費地遺跡における陶磁器のセット関係を示すものであり、その量的な把握は、江戸時代における陶磁器の流通と消費を考える際の大きな手がかりとなる。今後、他遺跡において、同様のデータが蓄積されていくことを期待する。

註

- 1) 村上伸之氏の御教示による。信楽の窯跡出土品については、信楽町窯業試験場所蔵の資料を実見させていた  
 だいた。窯業試験場の福村哲氏に謝意を表する。
- 2) 表 12 においては、器種および生産地は、集計結果(表 13 および表 14)よりも細かく分類してある。したがっ  
 て、表 13・14 における、器種「皿・鉢」は、表 12 における「小・中皿」、「小鉢」、「大皿・鉢」の 3 項目の合  
 計であり、表 13・14 における、器種「その他」は、表 12 における、「播鉢」、「燈明皿」、「その他」の 3 項目の  
 合計である。また、表 12 では、「徳利」、「播鉢」、「燈明皿」の 3 項目の生産地分類は、他器種よりも細くなっ  
 ているが、表 13 では、「肥前」、「瀬戸・美濃」以外の生産地は、全て「その他」として集計した。
- 3) 総破片数と底部 1/2 以上個体数という 2 つの異なる算定方法を用いた場合、得られる結果は大きく異なるこ  
 とがわかった(表 14)。例えば、碗は、総破片数を用いた場合、底部 1/2 以上個体数を用いた場合と比べて、  
 いずれの遺構においても低い比率に計算される。この理由は、皿などに比して、碗では、全体のうちで底部(高  
 台部)が占める割合が比較的大きいことに起因すると思われる。これに対し、徳利は、全体に細長く、底部以  
 外の部分の表面積が大きいため、いずれの遺構においても、総破片数を用いた場合には底部 1/2 以上個体数  
 を用いた場合よりも高い比率が得られている。皿、鉢類は、全体としては、総破片数を用いた場合の方が低く計  
 算される傾向を示しているが、2号土坑では、総破片数を用いた場合の割合の方が高くなっている。これは、  
 2号土坑においては、口径に対する高台径の比率が小さい皿(特に大皿)の出土量が多いためであると考えら  
 れる。このような結果は、近世陶磁器の組成比を計算する場合には、データの作成方法が得られる結果に重大  
 な影響を与えることを示すものである。

表 14 総破片数を用いた場合と底部 1/2 以上個体数を用いた場合の集計結果の比較 (上段：  
 総破片数，下段：底部 1/2 以上個体数，カッコ内は%)

Table 14 Comparison of numbers and percentages of various types of ceramics  
 obtained by different counting methods

器種	2号土坑	1号井戸	6号地土	4号井戸	5号地土	4号地土	14号地土	63号土坑
碗	99( 25.1)	34( 6.4)	103( 15.1)	160( 31.4)	344 ( 28.9)	558 ( 35.6)	9( 7.6)	87( 12.1)
	15( 53.6)	4( 14.3)	5( 21.7)	22( 50.0)	17 ( 35.4)	28 ( 43.1)	2( 14.3)	4( 22.2)
皿・鉢	162( 41.0)	365( 68.6)	314( 46.2)	64( 12.5)	239 ( 20.1)	193 ( 12.3)	6( 5.1)	28( 3.9)
	9( 32.1)	20( 71.4)	15( 65.2)	6( 13.6)	15 ( 31.3)	11 ( 16.9)	0	0
徳利	2( 0.5)	23( 4.3)	127( 18.7)	192( 37.6)	362 ( 30.4)	516 ( 32.9)	79( 67.0)	477( 66.3)
	0	0	3( 13.0)	2( 4.5)	11 ( 22.9)	17 ( 26.2)	9( 64.3)	10( 55.6)
その他	122( 30.9)	107( 20.1)	113( 16.6)	89( 17.5)	161 ( 13.5)	301 ( 19.2)	4( 3.4)	123( 17.1)
	4( 14.3)	4( 14.3)	0	14( 31.8)	5 ( 10.4)	9 ( 13.8)	2( 14.3)	4( 22.2)
不明	10( 2.5)	3( 0.6)	23( 3.4)	5( 1.0)	83 ( 7.0)	0	20( 16.9)	5( 0.7)
	0	0	0	0	0	0	1( 7.1)	0
計	395(100.0)	532(100.0)	680(100.0)	510(100.0)	1189 ( 99.9)	1568 (100.0)	118(100.0)	720(100.1)
	28(100.0)	28(100.0)	23( 99.9)	44( 99.9)	48 (100.0)	65 (100.0)	14(100.0)	18(100.0)

文献

小田省三，1982：宮崎のやきもの。永竹威他，日本やきもの集成 12 九州II 沖縄，pp.118—121。平凡社。  
 斎藤菊太郎，1976：呉須赤絵・南京赤絵。陶磁体系 45。平凡社。  
 佐々木達夫，1987：江戸へ流通した陶磁器とその背景。国立歴史民俗博物館研究報告第 14 集，pp. 189—230。

## 2. 徳利

秋元 智也子

本項では、理学部7号館地点より出土した徳利について、瀬戸・美濃産灰釉徳利を中心として記載および考察を行う。具体的には、まず徳利の変遷および容量について述べ、二次的な加工痕を有するものについても取り上げる。最後に、本地点から出土した徳利の時期による生産地の推移から、徳利の流通についても考察を試みる。

### (1) 徳利の変遷

本地点において最も一般的に出土した徳利は、瀬戸・美濃産灰釉徳利である。他に客体的に、志戸呂産徳利、瀬戸・美濃産鉄釉徳利<sup>1)</sup>が確認された。また備前産徳利もわずかだが存在する。

瀬戸・美濃産灰釉徳利の変遷に関しては、長佐古真也の論考がある(長佐古 1988)。長佐古は、徳利を容量と製作技法の違いから3系統に分け、それぞれの系統をA・A'・Bとした。この内、系統Aと系統A'には、製作技法による違いはない。さらに長佐古は、それぞれの系統の時間的変化を前半と後半に2分し、前半をI期、後半をII期とした。各期はさらに細分される。そして、各期の実年代は、I期を17世紀末～18世紀中葉、II期を18世紀後半～19世紀中葉と考えている。

図205は、本地点出土の瀬戸・美濃産灰釉徳利の変遷である。系統と時間的変化は、長佐古の分類に準じた。以下、長佐古の分類に応じて、本地点から出土した資料の記載を行う。

本地点からは、17世紀中葉から幕末にいたる近世の各時期の陶磁器を伴う遺構が検出されている。このうち、17世紀代の陶磁器を主体的に出土する遺構には、瀬戸・美濃産灰釉徳利はほとんど伴わない。2号井戸からは、17世紀代の可能性がある徳利が2点出土しているが(2号井戸-6, 8: 図25)、いずれも破片であったため、器形の全容は確認できなかった。これらの時期には志戸呂産徳利(2号井戸-7: 図25, 83号土坑-9: 図128)も確認されるが、全体を通じて徳利の出土量は少ない。

徳利の出土量が増加するのは、18世紀以降である。18世紀の初めから、長佐古の分類のI期にあたる時期は、本地点の出土遺物からさらに前半と後半の2時期に細分される。

前半の時期は17世紀末から18世紀初頭の陶磁器を伴う(図205-1, 2, 3)。系統A・A'と系統Bでは、器形、製作技法、用いる釉薬の点ではっきりと異なっている。特に釉薬では、系統A・A'が鉄釉に灰釉を流しかけるのに対し、系統Bでは灰釉を用いている。

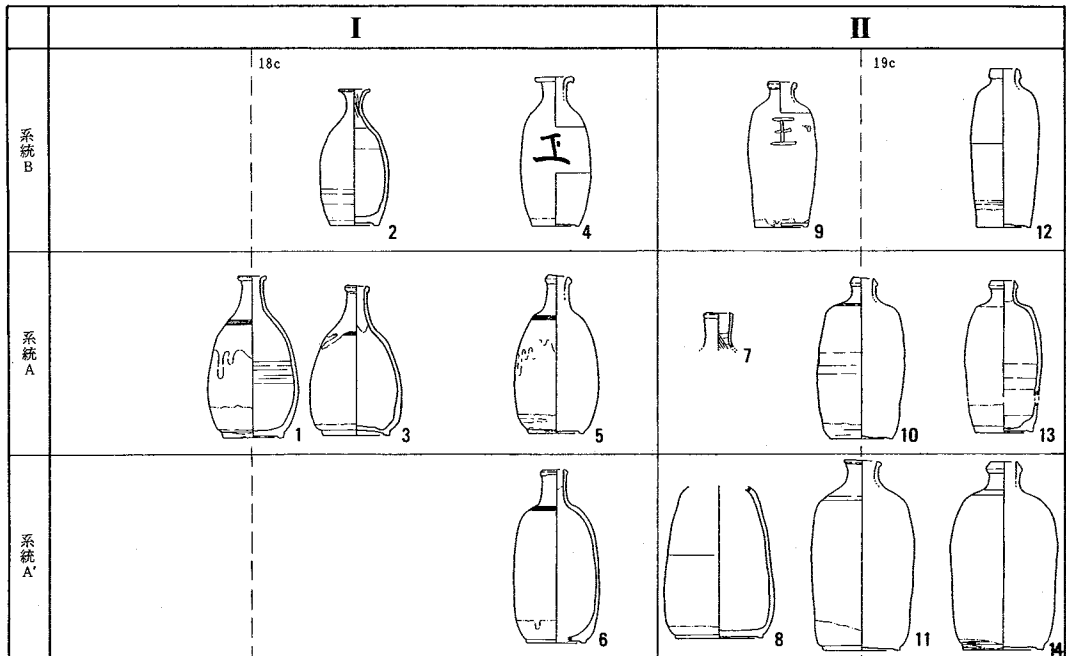
後半の時期は18世紀前半～中葉の陶磁器を伴う(図205-4, 5, 6)。系統A・A'・Bともに、

肩がやや張る器形に変化する。また、系統 A・A'では、前半では鉄分を多く含む釉薬を用いていたが、この時期には鉄分の割合が減り、不純物を含む釉薬へと変化する。さらに、灰釉の流しかけはこの時期においてほとんど姿を消す。また、この時期においては、次のII期に続く要素を多く持った徳利も出現する(図 205-6)。これらは、I期からII期へと変化していく過渡的な流れの中で、先駆的なものであったと解釈される。

I期全体では、系統 A'に属する徳利はわずかで破片で確認されたものが多数を占めた。それに対して、この時期には志戸呂産徳利が多く確認されている(4号地下式土坑-63:図 39, 5号地下式土坑-48:図 47, 6号地下式土坑-38:図 56, 4号井戸-62, 64:図 140 など)。

18世紀後半から19世紀中頃に至るII期に相当する時期は、本地点の出土遺物からは前半と後半の2時期に細分される。

II期の前半は18世紀後半から19世紀初頭の陶磁器を伴う(図 205-7, 8, 9, 10, 11)。この時期では、I期の要素を持つものが過渡的に残るものの(図 205-7, 8), 系統 A・A'・Bは共にいよいよ肩の張る器形となる。また、I期において長かった頸部は短くなる。系統 A・A'の釉薬は鉄釉から灰釉へと変化していく。系統 Bでは、口縁部を折り返すようになり、施釉方法も、I期のような全体に施釉した後に底部の釉薬をふきとる方法から、釉薬の中に徳利を上下



1: 6号地下式土坑-33 2: 3号井戸-30 3: 4号井戸-54 4: 4号地下式土坑-44 5: 4号地下式土坑-45 6: 4号地下式土坑-46  
7: 13号地下式土坑-17 8: 13号地下式土坑-19 9: 11号地下式土坑-7 10: 14号地下式土坑-9 11: 27号土坑-16 12: 63号土坑-14  
13: 63号土坑-21 14: 63号土坑-30

図 205 理学部 7号館地点における瀬戸・美濃灰釉徳利の変遷

Figure 205 Temporal changes of *tokkuri* (liquid containers)

逆にして浸し、底部と胴部の一部は無釉として残す方法へと変化する。全体的には、この段階から系統 A・A' と系統 B の間の形態的な差は失われていく。

Ⅱ期の後半は 19 世紀中葉の陶磁器を伴う。この段階において、系統 A・A' と系統 B の間の形態的な差はほぼ完全に失われる。口縁部の作りは算盤玉状を呈し、頸部は短く、寸胴である。器形全体はゆがみが激しく、粗雑な作りである。釉薬は不純物が多量に混合する灰釉である。施釉方法は、系統 A・A' では底部の釉薬をふきとるが、系統 B では底部を無釉にする。

瀬戸・美濃産灰釉徳利はⅡ期に至って出土量が增大する。特に系統 A' は、Ⅰ期に較べてはるかに増加する。しかし、Ⅰ期では一定の量をもって共伴していた志戸呂産徳利は、Ⅱ期の前半では急激に減少し、後半では姿を消す。

## (2) 徳利の容量

瀬戸・美濃産灰釉徳利は、液体の取引用容器という機能から考えて、いくつかの定まった容量が存在していたと推測される。

表 15 は、本地点で出土した瀬戸・美濃産灰釉徳利の容量の計測値の一覧である。計測に使用した徳利は、完形品および実測図上で復元可能な徳利全 30 点である。完形品に対しては頸部の最も細い部分まで水を注ぎ、その水の容量を 1000 cc のビーカーを用いて計測した。また、実測図上で復元した徳利に対しては、内径を頸部の最も細い部分から 5 mm 刻みに底部まで n 個計測し、以下の数式を用いて概算した。

$$V = \sum_{j=1}^n [\pi \{ \{D(j) + D(j+1)\} / 2 \}^2 \times K / 10^3]$$

V：徳利の容量 [cc]

$\pi$ ：円周率

D(j)：首から (j-1)K [mm] 下がった部分の内直径 [mm]

D(j+1)：首から (j)K [mm] 下がった部分の内直径 [mm]

K：高さ方向の刻み値 [mm] (今回の測定では K=5 mm とする。)

計測した徳利のうち最小の容量値を示す資料は 3 号井戸-30 の 2.57 合であり、最大の容量値を示す資料は 63 号土坑-30 の 11.72 合である。また、容量 2 合半以上 4 合未満の徳利は 12 本、4 合以上 5 合未満では 4 本、5 合以上 7 合未満では 8 本、7 合以上 1 升未満では 3 本であった。

近世遺跡から出土する徳利について最初に注目した関口広次は、日枝神社境内遺跡出土の徳利を用いてその容量を計算している (関口 1979)。これによれば、完形品全 26 点のうちで最小

表15 徳利容量計測値一覧 (底径・口径・器高の単位は cm)

Table 15 Measurement of the volume of *tokkuri* (liquid containers)

遺物 No	図版番号	底径	口径	器高	容積(cc)	合	備考
* 3号井戸-30	28	6.4	3.8	17.8	463	2.57	I期
* 4号井戸-54	140	8.7	2.6	19.8	913	5.07	I期
4号地下式土坑-44	38	6.2	4.5	19.7	630	3.50	I期
4号地下式土坑-45	38	7.4	2.5	20.8	940	5.22	I期
* 4号地下式土坑-46	38	7.8	2.7	22.9	1287	7.15	I期
* 5号地下式土坑-37	47	6.0	—	—	470	2.61	I期
* 6号地下式土坑-33	55	7.9	3.1	21.3	999	5.55	I期
11号地下式土坑-7	148	6.8	3.3	19.2	680	3.78	II期
14号地下式土坑-7	155	6.6	3.5	20.6	750	4.17	II期
14号地下式土坑-9	155	8.0	2.6	21.3	1150	6.36	II期
* 14号土坑-17	90	6.9	3.0	21.1	864	4.80	II期
27号土坑-13	95	6.8	3.5	19.6	630	3.5	II期
27号土坑-16	95	9.8	4.1	25.3	1980	11.00	II期
63号土坑-14	107	7.1	3.3	20.8	690	3.83	II期
* 63号土坑-19	107	7.3	3.0	20.2	831	4.62	II期
* 63号土坑-20	107	7.6	2.9	20.6	910	5.06	II期
* 63号土坑-22	107	7.4	3.3	22.2	1125	6.25	II期
* 63号土坑-27	108	9.4	3.4	23.6	1545	8.58	II期
* 63号土坑-28	108	9.4	3.0	23.5	1641	9.12	II期
63号土坑-30	108	10.4	3.3	24.9	2110	11.72	II期
75号土坑-3	113	7.8	2.9	21.1	965	5.36	II期
108号土坑-2	173	6.5	3.4	19.2	500	2.78	II期
108号土坑-3	173	6.6	3.6	20.1	600	3.33	II期
137号土坑-10	186	6.2	2.6	21.7	700	3.89	II期
137号土坑-11	186	6.6	3.4	19.4	454	2.52	II期
* 141号土坑-4	188	10.3	3.8	24.3	2039	11.33	II期
1号集中-12	115	7.5	3.3	20.7	900	5.00	II期
5号集中-4	117	9.1	4.3	19.5	660	3.67	II期
5号井戸・136・137号土坑-7	186	6.4	2.8	19.3	560	3.11	II期
遺構外-49	199	8.0	2.7	20.2	820	4.56	I期

\*実測図より算出。

の容量値は2合以上2合半未満の値を示し、最大の容量値は1升以上1升5合未満の値を示す。容量値が最も集中するのは、2合半から3合半の間である。他に、4合半から1升の間にも小さなピークを有する。

小林謙一は、港区飯倉分館構内遺跡の報告の中で、同遺跡出土の完形品の徳利について容量、底径、重量を計測している(小林1986)。そして、小林はこれらの容量、底径、重量間に強い相関が認められたとしている。小林は、これらの徳利をほぼ2合用、3合用、5合用、1升用のグループに類別することが可能と思われるとし、実際の徳利の容量は、該当する合数に対して20%ほどの余裕を有している様であるとしている。また、3合用の底径は平均6.6cmでほぼ6.3~6.9cm、5合用は平均7.8cmでほぼ7.4~8.2cm、1升用のものは平均10.7cm、ほぼ10.



0~11.3 cm の範囲に収まり、底径から合数を推定することは、おおよそ可能であるとしている。

また、長佐古真也は、先に述べた徳利の変遷の中で、徳利を容量の違いから大、中、小に分け、それぞれを系統 A'・A・B としている。そしてこれらの容量については、I 期においては系統 A' の容量は京柁の 1 升強前後で、3 つの系統の容量の比 (概ね A' : A : B = 1 : 1/2 : 1/4) も、通常の柁の組合せ (1 升 : 5 合 : 2 合半) とよく一致するとしている (長佐古 1988)。

長佐古および小林は、瀬戸・美濃産灰釉徳利の容量に大きく 3 つのグループが存在することを指摘している。このうち大、中は両者ともそれぞれ 1 升、5 合としており、小は、長佐古は柁の大きさから 2 合半、小林は 3 合としている。

本地点においては、徳利の容量は 2 合半以上 4 合未満と 5 合以上 7 合未満とにピークを持つ。この 2 つのピークは、それぞれ徳利の小および中に相当し、また、1 升以上の徳利は大に相当すると推定される。関口が報告した日枝神社境内遺跡の徳利においても、2 合以上 3 合半未満という小と推定される容量に最大のピークを有する。

このように、瀬戸・美濃産灰釉徳利はほぼ大・中・小という規格を有して生産され、それぞれの容量値は、大が 1 升、中が 5 合、小が 2 合半ないし 3 合であったと考えられる。

### (3) 二次加工痕を有する徳利

徳利は、本来は液体を収納するための容器であるが、遺跡から出土する徳利には、しばしば二次的に加工を施して再利用したものがある。ここでは、これらについて考察する。なお、二次加工痕のうち釘書については、第 2 節 3 の小林謙一の論考にゆずる。

本地点の徳利のうち、二次加工痕を有するものを表 16 に示す。これらのものには、瀬戸・美濃産灰釉徳利のみならず、志戸呂産徳利や瀬戸・美濃産錆釉徳利も含まれる。

これらの加工痕は大きく 2 つに分けられる。1 つは底部を 1ヶ所以上穿孔するものである。もう 1 つは、肩部を打ち欠くもので、打ち欠き部はきれいに調整されている。また、これらが両方施されている場合もある。

底部が穿孔された例については、植木鉢等の用途が考えられる。近世遺跡においては、最初から植木鉢として使用する目的を持って作られた遺物も存在するが(12号土坑-2: 図 87)、このように不用となった陶磁器の底部を穿孔して植木鉢として使用することも、日常的に行われていたものと推測される。

肩部を打ち欠く例には様々な使用法が考えられる。何らかの容器として再利用したと思われるが、植木鉢のように特定の用途を考えるより、用途は多岐にわたっていたと考えた方がよいであろう。

表 16 二次加工痕を有する徳利一覧

Table 16 List of *tokkuri* with secondary modifications

遺物No	図版	時期	加工内容
4号井戸-64	140	志戸呂	底部1ヶ所穿孔
11号地下式土坑-9	148	Ⅱ期	肩部打ち欠き
11号地下式土坑-12	149	Ⅱ期	肩部打ち欠き
11号地下式土坑-13	149	Ⅱ期	肩部打ち欠き
14号地下式土坑-12	155	Ⅱ期	肩部打ち欠き、底部1ヶ所穿孔
12号土坑-6	87	Ⅱ期	底部4ヶ所穿孔
14号土坑-24	90	Ⅱ期	底部1ヶ所穿孔
14号土坑-25	90	Ⅱ期	肩部打ち欠き
52・53号土坑-6	102	錆釉	底部1ヶ所穿孔
73号土坑-1	111	Ⅱ期	底部1ヶ所穿孔
107号土坑-15	172	Ⅱ期	底部1ヶ所穿孔
138・139・140号土坑-5	187	Ⅱ期	肩部打ち欠き

#### (4) 徳利の流通

近世における徳利の生産地別の割合は、時期により変化する。ここでは、変化の過程を本地点の遺物から検討したい。

徳利の変遷において若干ふれた通り、近世を通じ、瀬戸・美濃産灰釉徳利は17世紀代にはわずかしか見られず、18世紀にはいと増加し始め、18世紀後半以降は爆発的に増加する。特に、系統A'に相当する大型の徳利は、18世紀後半以降に目立つようになる。この増加に伴い、瀬戸・美濃産錆釉徳利も増す傾向にある。志戸呂産徳利は、17世紀末から18世紀中葉にかけては一定の量が確認されるが、それ以後は急激に減少し、19世紀に入ると姿を消す。備前産徳利は、近世を通じまれに見られるだけである。瀬戸・美濃産徳利の数の増加について、長佐古は、17世紀後半以降の江戸の急速な拡大の中での、自給的な生産基盤を持たない都市における液体加工品の需要の増加を直接的な要因としている。また、18世紀後半からの徳利の急増については、消費階層の質的变化を要因としている（長佐古1988）。

本地点における瀬戸・美濃産徳利の増加の過程も、このような潮流の一部として解釈できる。特に、本地点における18世紀後半以降の瀬戸・美濃産徳利の増加は、消費階層の質的变化による徳利需要の増加が、大名屋敷という居住者の階層が常に一定と想定できる特殊な場所においても認められることを示すものであり、たいへん興味深い。

徳利は、胴部および底部に施される釘書や墨書から、大部分は液体加工品を販売する商店の所有物であったと推定される。本来ならば、これらの徳利は店から消費者に販売の際に貸し出されていたものと考えられる。しかし、これらの徳利が消費者が居住していた場所から大量に発掘されるということは、徳利＝商店が貸し出す、というルールが、近世後半には変質していくことを暗示している。つまり、大量生産されるようになった徳利は、消費者からの返却を待

たなくても商店にとっていつでも補充できるものとなり、消費者の側でも、商店に徳利を返却する習慣が次第に希薄になっていった可能性が考えられる。表 16 にあげた二次加工痕を有する徳利が 18 世紀後半以降に出現していることも、徳利が消費者にとって手軽に手にはいる代用品として扱われていたことを示している。

このような瀬戸・美濃産徳利の増加に対して、志戸呂産徳利は 18 世紀後半以降急激に減少し、19 世紀に入ると姿を消す。これは、瀬戸・美濃産灰釉徳利系統 A' の増加と反比例する傾向にある。

志戸呂焼は、現在の静岡県金谷町で焼かれた製品である。志戸呂は中世から続く生産地であるが、徳利をはじめとする日常雑器を生産しはじめたのは近世からである。その生産は現在まで続いているが、明治以降は衰退していく。志戸呂産徳利の容量は、1 升と考えられ、これは瀬戸・美濃産灰釉徳利系統 A' と同一である。このような事実から考えるならば、徳利の需要がそれほど高くなかった当初においては、消費地において両者が共存していたが、瀬戸・美濃の生産力の増大につれて、その生産力に志戸呂焼が破れたのではないかと、とする推測が成り立つ。志戸呂焼の窯跡について分布調査を行っている足立順司によれば、近世における志戸呂焼の窯は 2 基前後が同時に存在し、それぞれの窯は徳利以外にも様々な日常雑器を主体に生産したようである（足立 1988）。それに対して瀬戸・美濃では窯数も多く、器種毎に専門職も発生しており、このような手工業の発達と生産力の増大に、志戸呂のような小規模生産地は対抗し得なかったものと思われる。

以上、江戸における徳利の流通について本地点の遺物を通して大まかにみてきた。近世の前半においては、瀬戸・美濃以外の生産地も参入する余裕のあった江戸の徳利市場は、消費の拡大と需要の増大に伴って瀬戸・美濃の生産力が増大するにつれ、瀬戸・美濃によって独占されたと考えられる。また、徳利の増加に伴い、徳利は消費者にとって手軽に手にはいる代用品としても認識されていったのだろう。

#### 註

- 1) 瀬戸・美濃において、18 世紀後半以降生産が増大した、茶褐色で不透明な釉を施した徳利である。胴部の一部をへこませる場合が多く、「ぺこかん徳利」と呼称される。本地点においては、52・53 号土坑—6（図 102）、遺構外—50（図 199）がこれに相当する。

#### 文献

- 足立順司, 1988: 歴史にみる県下の窯 II 近世～現代。季刊静岡の文化第 12 号, 静岡県文化財団: 42—47。  
小林謙一, 1986: 7 釘書。麻布台一丁目郵政省飯倉分館構内遺跡, 港区麻布台一丁目遺跡調査会, pp. 298—306。  
関口広次, 1979: 美濃・高田徳利の生産と消費に関する覚書。考古学研究 100: 105—118。  
長佐古真也, 1988: 近世「徳利」の諸様相——江戸に於ける液体加工品流通と徳利——。江戸遺跡研究会第 1 回大会「江戸の食文化」報告要旨, pp. 6—12。

### 3. 徳利胴部の釘書について

小林 謙一

本遺跡出土の鉄釉系徳利及び灰釉系徳利胴部に刻まれるマークについて表 17 に模式図で集成した。資料は遺構、遺構外出土の、釘書の観察可能な完形、半完形、大型の胴部破片計 105 個体である。表には、麻布台一丁目郵政省飯倉分館構内遺跡（小林 1986）での観察に習い、判読資料の遺存状態を附記した。なお、判読が不明確なもの（カで示す）、破損により不明ながら続きのありそうなもの（□で示す）にも注記を附した。便宜上、各種類を、タイプ 1～タイプ 30 と呼称した。ここでは 30 のタイプを挙げたが、破片のため不明の中にも異なるものが 6 種は存在している。数量は、鉄釉系と灰釉系に 2 分し、灰釉系徳利については、麻布台一丁目遺跡で示した基準で、底径より 2.5 合（2 合、3 合）、5 合、10 合に区分し、各々その個数を算定した。

釘書及びそれに準ずるマークとして、たがねによるベタ、線刻、点刻<sup>1)</sup>の焼成後の釘書、焼成前たがね彫、焼成前鉄錆書、及び焼成後の墨書が認められた。鉄釉系には釘書ベタによるものが殆どを占め、タイプ 7（11 号地下式土坑—9）等に釘書線刻が見られたのみである。

一方、灰釉系には各技法のものが見られたが、釘書線刻、点刻によるものが最も多く、釘書ベタはタイプ 8（5 号地下式土坑—37）等に若干例、焼成前たがね彫はタイプ 10（11 号地下式土坑—7）、タイプ 17（114 号土坑—7）の 2 例、焼成前鉄錆書はタイプ 8（4 号地下式土坑—44）の 1 例であった。なお、114 号土坑—7 には底部に刻印が見られたが不明である。墨書には、比較的新しい時期に属するもので釘書なしの徳利底部に「㊥」と記すもの（137 号土坑—10）、タイプ 11 の釘書が付く徳利底部に同じく「㊥」と記してあると思われるもの（5 号井戸・136・137 号土坑一括）がある。これら底部内の墨書は、胴部の釘書と同様の性格を有すると思われる<sup>2)</sup>。また、胴下部無釉部分に、「合」の墨書（遺構外灰釉系 2.5 合例）、半弧状モチーフを連ねる墨書（底面「㊥」の墨書を持つものに多い。137 号土坑—10、5 号井戸・136・137 号土坑一括—7、122 号土坑—6）が認められ、異なった性格を持つものがある可能性もある。

この他、鉄釉系徳利のタイプ 6（4 号井戸—55）、灰釉系徳利のタイプ 29（5 号遺物集中—8）には、釘書に墨を塗りこんだと思われる痕跡があり、釘書使用時の状況を考えさせる好資料であるとともに、今後釘書資料の取扱いに注意を促すものであると言える。

#### 註

- 1) 徳利の容量、釘書の技法については長佐古（1988）の記述にしたがう。
- 2) 日枝神社境内遺跡では、釘書と底部墨書では書かれる文字に違いがみられ、問題が残る（関口 1978）。

文献

小林謙一, 1986: 釘書。麻布台一丁目 郵政省飯倉分館構内遺跡, pp. 298-306.

長佐古真也, 1988: 近世「徳利」の諸様相—江戸に於ける液体加工品流通と徳利。江戸の食文化, 江戸遺跡研究会 第一回大会・報告要旨: 6-12。江戸遺跡研究会。

関口広次, 1978: 美濃・高田徳利の生産と消費に関する覚書。考古学研究, 100。

表 17 徳利胴部の釘書

Table 17 List of identification marks on *tokkuri*

(遺存状態) ●全面完存 □全面存 ▲一面完存 ×破損

釘書	1 ●	2 ●	3 ●	4 □	5 ●	6 ●	7 □	8 ●	9 ●	10 ●	11 ●	12 ●	13 ●	14 ●	15 ×	16 ●	17 □	
釘書	△	吉	半	大	柄	角	長	玉	玉川	玉	玉	玉	玉	玉	玉	玉	玉	
鉄釉	1	1	1	1	1	1	1	1	1									
灰釉	2.5合 1							2		3	4		11	1				
灰釉	5合							1		2	1	1	4		1	1		
灰釉	10合									1			8			1	1	
備考						墨入れ		焼成前鉄錆1 (2.5合) 4地土 5地土		焼成前線彫1 (2.5合) 11地土 73土坑 108土坑	1) 5井戸・ 136・137 土坑一括 75土坑		2) 14土坑 62土坑 141土坑 142土坑			142土坑 11地土	底部印刻力 焼成前線彫 114土坑	
遺構	4地土	6地土	4地土	88土坑	107土坑	4井戸	11地土	5地土	13地土	108土坑	75土坑	1土坑	14土坑	14地土	11地土	11地土	114土坑	
釘書	18 ●	19 ●	20 □	21 ●	22 □	23 ▲	24 ▲	25 □	26 ▲	27 □	28 □	29 ×	30 □					
釘書	△	△	□	力	力	半	半	大	大	田	田	田	田	田	田	田	田	
鉄釉																他・不明	なし	
鉄釉																1	○ <sup>4)</sup>	
灰釉	2.5合 1	8	7		1			1				1				5	6	
灰釉	5合 1	3	3						1	1						1	2	
灰釉	10合 2	1		1		1	1				1		1		1		19	
備考												墨入れ					5)	
遺構	14地土 3地土	13土坑 14土坑 30土坑 63土坑 109土坑 1集申	27土坑 3地土 11地土	27土坑	5集申	14土坑	遺構外	14土坑	11地土	1集申	74土坑	5集申	27土坑				52・53 土坑 107土坑	63土坑 5井戸・ 136・137 土坑一括

註1) うち、1点(2.5合)は、胴下部墨書、底部墨書「玉」カ。他に2点、胴下部墨書カ。

2) うち、2点は底部墨書カ。

3) 文字不明

4) 数量未確認

5) うち、1点は、胴下部墨書「合」。2点は、底部墨書「玉」カ。

## 4. 播鉢

山口 剛志

播鉢の出土数は、総数 541 点（接合したものは 1 点として算定）を数える。これらの多くは細片であるため、報告に際して実測図を示し得たのは 40 点である。遺構毎の出土状況は、10 点前後のものが圧倒的に多く、概して遺構の規模が大きい井戸、地下式土坑、大型の土坑で多量に出土する傾向を示す。

播鉢は、破片の出土量が比較的多いにもかかわらず形態を把握する資料が少ない。そこで、本項は、基礎的な分析に重点を置いて、形態の特徴と遺構別、時期別の出土状況から本地点出土の播鉢について検討を加えるものである。

### (1) 形態の特徴

播鉢は、胎土、形態、製作技法等の特徴によって A～D 類に大別可能である。以下、それぞれの形態の特徴について、実測図を示し得た 40 点を中心に概観する。なお、播鉢の観察表に形態の特徴を示してあるので、参照していただきたい。

A 類：本類は、信楽系と考えられる播鉢で、総数 98 点（内 11 点を図示）が認められる。1) 胎土が灰色に近い色調を呈し、石英質の白色鉱物粒を含む砂粒が多量に混入する炆器質、2) 外面下半部を中心に指頭調整痕が認められる、という 2 点を最大の特徴とする。形態は、体部がやや外反ぎみに開いて立ち上がり、口縁部は、断面三角形を呈する 1 号井戸—52、19 号地下式土坑—13、1 号土坑—34、2 号土坑—48 の 4 点と、外面に沈線を伴う縁帯が形成される 1 号土坑—35・38 の 2 点とがある。1 単位あたりの櫛目の本数は、5 本が 1 号井戸—51、5 号地下式土坑—52、19 号地下式土坑—13、1 号土坑—34、2 号土坑—48 の 5 点、6 本が 1 号井戸—52、1 号土坑—35 の 2 点、7 本が 1 号土坑—36・38、2 号土坑—47・49 の 4 点にそれぞれ認められる。また、見込の播目は、中央で交差させた直線状の 2 単位の周囲へ円形を巡らせた 1 号土坑—35（図 206—1）と、直線状の 3 単位を中央で交差させた 19 号地下式土坑—13（図 206—2）とがある。なお、実測図を示していない 1 号土坑の 1 点に、直線状の 1 単位の周囲へ円形を巡らせたものがある（図 206—3）。その他に、底部を破損して全容が判明しないものの内、円形に巡らせた部分のみが認められる 1 号井戸—51、1 号土坑—36、2 号土坑—47・49 と、同じく直線状の櫛目の一部が認められる 5 号地下式土坑—52、1 号土坑—34 とがある。

B 類：本類は、瀬戸・美濃の製品と考えられる播鉢で、総数 175 点（内 12 点を図示）が認められる。1) 石英質の白色鉱物粒が多量に混入した乳白色の色調を呈する胎土で、錆釉もしく

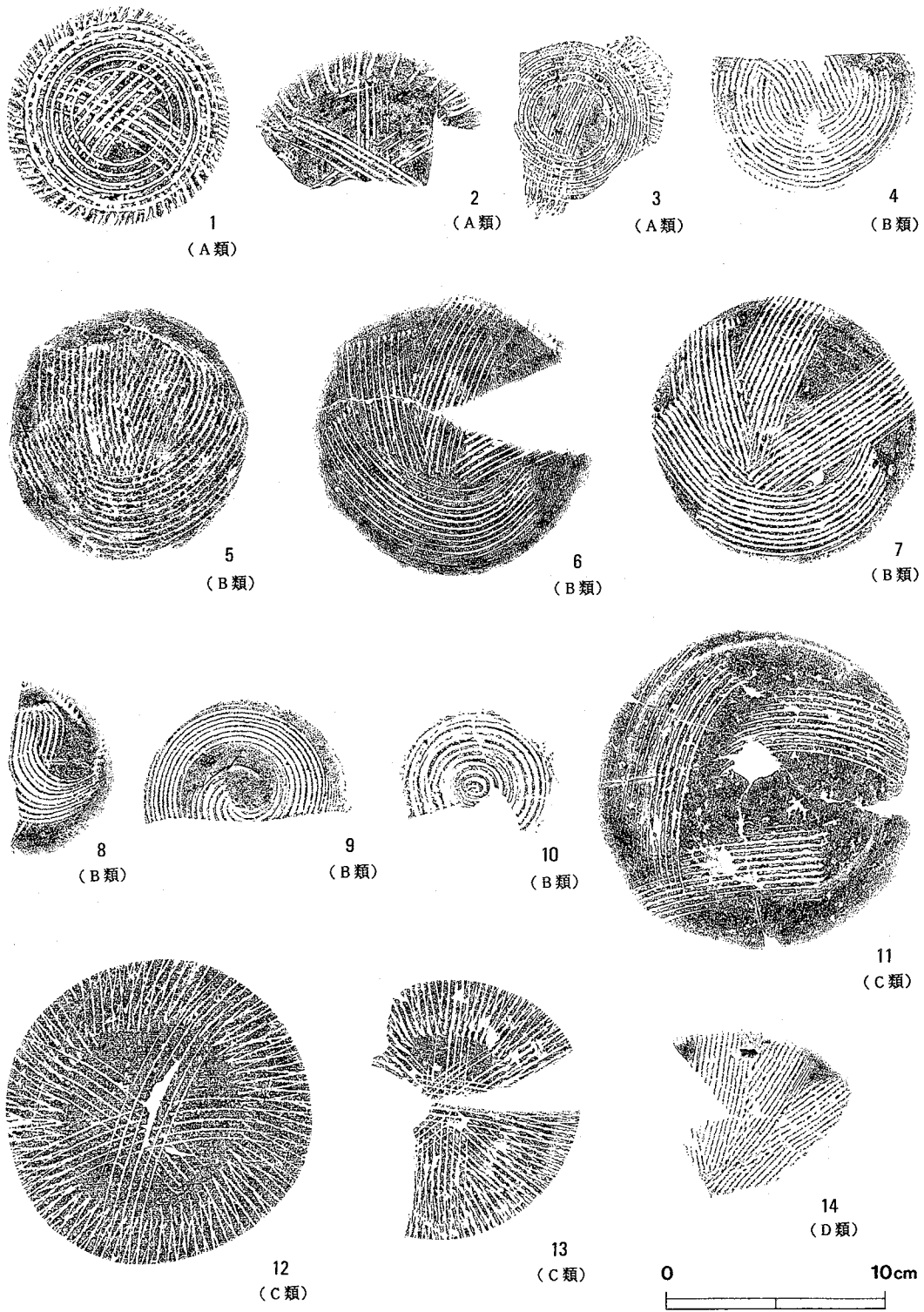


図 206 播鉢形態別の見込播目拓影図  
Figure 206 Rubbings of grinding bowls

は鉄釉が施釉された陶器質、2)外面下半部にヘラケズリと釉剥ぎが行われ、底部外面に右回転の糸切痕を残す、という2点を特徴とする。形態は、体部が直線的に外へ開いて立ち上がる。口縁部は、次の三種類の形態があり、内面に突帯を形成する1号井戸-50、3号井戸-41の2点、外面に縁帯を形成する5号地下式土坑-53、9号地下式土坑-14、21号地下式土坑-4の3点、段状に外へ折れた4号井戸-65・66、2号土坑-45、136号土坑-9の4点がそれぞれ認められる。1単位あたりの櫛目の本数は、12本が21号地下式土坑-4の1点、13本が18号地下式土坑-23、2号土坑-45の2点、15本が1号井戸-50、136号土坑-9の2点、16本が5号地下式土坑-53の1点、17本が4号井戸-66の1点、18本が3号井戸-41、4号井戸-65・67の3点である。櫛目の本数は、A~D類の中で最も多い。見込の摺目は、次の七種類が認められる。まず、弧状と直線状の櫛目を施したものでは、直線状の櫛目の単位数に違いが認められ、1単位のもの3号井戸-41(図206-4)、2号土坑-46の2点、2単位のもの4号井戸-66(図206-5)、5号地下式土坑-53の2点、3単位のもの4号井戸-65(図206-6)の1点、4単位のもの4号井戸-67(図206-7)の1点である。次に、中央で1回転させた2号土坑-45(図206-8)の1点、渦巻状に施した18号地下式土坑-23(図206-9)の1点、全面に円形に巡らせた136号土坑-9(図206-10)の1点がそれぞれ認められ、多様なあり方を示す。また、釉は、光沢のない暗茶褐色~紫色を呈する錆釉が1号井戸-50、4号井戸-65・66、2号土坑-45・46、136号土坑-9の6例、やや光沢のある茶褐色を呈する鉄釉が3号井戸-41、4号井戸-67、5号地下式土坑-53、9号地下式土坑-14、18号地下式土坑-23、21号地下式土坑-4の6点にそれぞれ認められる。

C類：本類は、備前系と考えられる摺鉢で、総数270点(内14点を図示)が認められ、A~D類の中で最も多い出土量である。1)胎土が赤褐色を主体とする色調を呈し、石英質の白色鉱物粒を含む砂粒が少量混入する炆器質、2)口縁形態が沈線を伴う縁帯、突帯を形成する、という2点によって特徴づけられる。形態は、体部がやや丸みを帯びて外へ開きながら立ち上がるものである。口縁部は、外面の縁帯と内面の突帯に認められる沈線の本数によって、次の四種類がある。まず、2本沈線の縁帯は、沈線のない突帯との例が63号土坑-36の1点、1本沈線の突帯との例が4号地下式土坑-67、7号地下式土坑-22、13号地下式土坑-21、16号地下式土坑-11、16号土坑-11、75号土坑-9の6点、2本沈線の突帯との例が19号地下式土坑-15、遺構間接合-25(14号、54号、63号土坑、1号遺物集中)の2点である。次に、3本沈線の縁帯と1本沈線の突帯との例は、5号地下式土坑-54の1点である。1単位あたりの櫛目の本数は、7本が13号地下式土坑-21の1点、9本が5号地下式土坑-54、7号地下式土坑-22、19号地下式土坑-14の3点、10本が4号井戸-68、4号地下式土坑-67の2点、11本が63号土坑-36、遺構間接合-25の2点、12本が19号地下式土坑-15、16号土坑-11、75号土坑-9、



遺構間接合—12 (5号, 19号地下式土坑) の4点, 13本が16号地下式土坑—11, 遺構間接合—11 (26号土坑, 柱穴) の2点である。見込の播目は, 次の三種類が認められる。直線状の櫛目を三角状に3単位施した75号土坑—9 (図206—11) の1点, 直線状の3単位を中央で交叉させた4号井戸—68, 13号地下式土坑—21 (図206—12), 遺構間接合—11・12の4点, 直線状の4単位を中央で交叉させた19号地下式土坑—14 (図206—13) の1点である。また, 4号井戸—68, 13号地下式土坑—21の2点は, 底面に高台を設けている。

D類: 本類は, その他及び産地不明の製品であり, 総数8点 (内3点を図示) が認められる。いずれも細片のため形態を把握できるものはない。1号土坑—37は, 胎土に鉄分と思われる黒色粒を多量に含み, 口縁部外面に鉄釉が施釉される。1単位あたりの櫛目の本数は9本であり, 唐津の製品であると考えられる。遺構外—59・60の2点は, 光沢のある鉄釉が施釉されたもので, 胎土は瀬戸・美濃の製品に類似する。1単位あたりの櫛目の本数は, 59が16本, 60が13本である。59は, 見込の播目が中央から放射状に多くの櫛目を施しており (図206—14), 底部外面がナデ整形される。瀬戸・美濃の製品の可能性もあるが, 産地不明としておきたい。時期的には, 新しいものであると考えられる。

本地点からは, 播鉢全体の形態を把握できる資料が少量しか出土していないため, 今回は, 口縁形態, 1単位あたりの櫛目の本数, 見込の播目に関する各類別の特徴を明瞭にすることができなかった。しかし, 出土した資料に関しては, これらの属性が各類毎に比較的明瞭に異なることを指摘できる。

## (2) 遺構別出土状況

ここでは, (1)で分類されたA~D類の播鉢が, 遺構内でどのような出土状況を示すかを検討する。

表18は, 柱穴を除いた遺構別の出土状況を分類別にまとめたものである。この表を基にA~D類の出土状況をみると, A類14例, B類41例, C類43例, D類3例であり, 遺構内からは, B類とC類を出土する例が多い傾向を認めることができる。この内, A類1例, B類11例, C類18例, D類1例は, それぞれ遺構内で各類の共伴が認められない単一の出土である。その他は, A~D類の共伴が認められ, A類とB類が4例, A類, B類とD類が1例, A~C類が7例, A~D類が1例, B類とC類が17例である。これらの共伴関係から, A類とC類のみの例はなく, B類の瀬戸・美濃の製品を中心とした共伴関係であって, 特にB類とC類の例が最も多いという傾向が窺える。

## (3) 時期別出土状況

表 18 播鉢の遺構別出土状況

Table 18 Numbers of grinding bowls found from each feature

報告No	A類	B類	C類	D類	計	図版番号	備考
70号土坑	3				3		
1号井戸	8	1			9	図22-50~52	
3号井戸	2	11			13	図29-41	
9号地下式土坑	2	4			6	図124-14	
18号地下式土坑	2	2			4	図161-23	
1号溝	1	1	1		3		
4号井戸	1	14	4		19	図141・142-65~68	
4号地下式土坑	4	11	15		30	図40-67	A類1点、C類2点が5号地下式土坑と3例接合
5号地下式土坑	6	13	21		40	図47・48-52~54、図193-12	A類1点、C類2点が4号地下式土坑と3例接合、C類1点が19号地下式土坑と接合
13号地下式土坑	1	5	4		10	図153-21	
19号地下式土坑	1	3	8		12	図163・164-13~15、図193-12	C類1点が5号地下式土坑と接合
1号土坑	29	1	1	2	33	図69・70-34~38	A類1点が柱穴と接合
2号土坑	16	6	2		24	図80・81-45~49	
30号土坑	1	1	2		4		
5号井戸	1	1			1		
12号地下式土坑	2				2		B類1点が10号地下式土坑と接合
17号地下式土坑	1				1		
21号地下式土坑	1				1	図169-4	
18号土坑	1				1		
27号土坑	1				1		
36号土坑	3				3		
82号土坑	2				2		
88号土坑	1				1		
138・139号土坑	4				4		
141号土坑	1				1		
2号井戸	3	2			5		
3号地下式土坑	5	8			13		
6号地下式土坑	4	3			7		
7号地下式土坑	6	7			13	図60-22	
7・8号地下式土坑	3	8			11		
10号地下式土坑	2	1			3		B類1点が12号地下式土坑と接合
14号土坑	1	6			7	図195-25	C類1点が1号遺物集中、54号土坑、63号土坑と接合
16号土坑	3	6			9	図92-11	
26号土坑	2	4			6	図193-11	C類1点が柱穴と接合
43号土坑	1	1			2		
63号土坑	3	4			7	図108-36、図195-25	C類1点が1号遺物集中、14号土坑、54号土坑と接合
74号土坑	1	2			3		
108号土坑	1	1			2		
135号土坑	1	2			3		
136号土坑	2	1			3	図184-9	
137号土坑	1	3			4		
142号土坑	1	3			4		
1・2号地下式土坑	1				1		
14号地下式土坑	2				2		
16号地下式土坑	6				6	図157-11	
20号地下式土坑	1				1		
11号土坑	2				2		
24号土坑	2				2		
52・53号土坑	2				2		
54号土坑	2				2	図195-25	C類1点が1号遺物集中、14号土坑、63号土坑と接合
62号土坑	1				1		
72号土坑	4				4		
75号土坑	4				4	図113-9	
85号土坑	1				1		
107号土坑		10			10		
109号土坑	1				1		
111号土坑	1				1		
1号遺物集中	1				1	図195-25	C類1点が14号土坑、54号土坑、63号土坑と接合
2号遺物集中	1				1		
5号遺物集中	2				2		
83号土坑			1		1		
柱穴(一括して)	1	2			3	図193-11	A類1点が1号土坑と接合、C類1点が26号土坑と接合
合計	78	131	165	4	378		
遺構外	20	44	105	4	173	図199-59・60	
総数	9	175	270	8	551		

註) 総数551点の内、遺構間接合が8例(18点接合)あるので、実際の総数は10点を引いた541点である。

ここでは、A～D類の時間的關係について、遺構内で共伴する陶磁器の製作推定年代を参考に  
して検討する。なお、検討の対象とし得るのは、A類13例76点、B類33例120点、C類33例  
140点、D類3例4点である。

まず、信楽系と考えられるA類は、17世紀代に推定される陶磁器が主体の遺構で8例62点、  
17世紀後半～18世紀前半のそれで5例14点がそれぞれ出土した。18世紀後半以降を主体とす  
る陶磁器との共伴關係は認められず、特に17世紀代に推定される陶磁器を共伴する1号土坑で  
29点、2号土坑で16点が出土した例は注目される。このことから、A類は、17世紀を主体にし  
て18世紀前半頃まで認められることが指摘される。

瀬戸・美濃の製品と考えられるB類は、17世紀代に推定される陶磁器が主体の遺構で11例  
22点、17世紀後半～18世紀前半のそれで12例74点、18世紀後半～幕末のそれで10例24点  
がそれぞれ出土した。時期別の出土遺構数に変化は認められないが、出土点数は17世紀後半  
～18世紀前半に推定される陶磁器との共伴が最も多い。このことからB類は、17世紀～幕末ま  
で認められるものの、17世紀後半～18世紀前半がピークであることを指摘できる。

備前系と考えられるC類は、17世紀代に推定される陶磁器が主体の遺構で6例15点、17世  
紀後半～18世紀前半のそれで13例69点、18世紀後半～幕末のそれで14例56点がそれぞれ出  
土した。時期別の出土遺構数は、時期が新しくなるにつれて漸増し、出土点数は17世紀後半～18  
世紀前半と18世紀後半～幕末に推定される陶磁器との共伴が主体である。このことからC類  
は、17世紀～幕末まで認められるものの、その中心は17世紀後半～幕末であることを指摘でき  
る。

その他及び産地不明のD類は、17世紀代に推定される陶磁器が主体の遺構で2例3点、17世  
紀後半～18世紀前半のそれで1例1点がそれぞれ出土し、A類と同様の傾向が認められる。

以上の点を時期別にまとめてみると、17世紀には、A～D類の全てが認められるものの、主  
体は信楽系と考えられるA類である。18世紀に入ると、瀬戸・美濃の製品と考えられるB類、  
備前系と考えられるC類が主体を占める。18世紀後半以降には、A類とその他及び産地不明の  
D類が認められなくなり、B類とC類のみによって構成され、特にC類を主体としたあり方が  
把握される。

#### (4) まとめ

本項では、胎土、形態、製作技法等から播鉢をA～D類に分類し、図示した40点を中心にそ  
れぞれの特徴を抽出した。分類別における各属性の關係については、分析対象にし得る資料が  
少ないために明らかにできなかったが、各分類別の特徴は比較的明瞭に把握することができた。  
そして、共伴する陶磁器の製作推定年代から各分類の時期別出土状況を検討し、17世紀にA類

の信楽系、18世紀前半にB類の瀬戸・美濃とC類の備前系、18世紀後半以降にC類の備前系の製品が主体に出土する傾向を指摘した。

本地点におけるこれらの傾向が、他の江戸遺跡においてどのように展開するのか今後の課題である。新宿区三栄町遺跡の時期別出土状況は、第I期（17世紀後葉まで）に信楽、瀬戸・美濃、第II期（18世紀後葉まで）に瀬戸・美濃、備前系、第III期（19世紀第3四半期まで）に備前系の製品が主体であるという傾向を指摘しており（扇浦1988）、本地点とほぼ同様なあり方を示す。このことは、近世都市江戸における播鉢の流通の一端を表していると考えられるのであるが、そのためには、大名・武家屋敷の他に町屋、江戸近郊の農村部等の様々な性格の遺跡をまず検討する必要があるだろう。

この点に関連して、播鉢の産地同定の問題がある。佐々木達夫の調査によれば、安政三年（1856）における江戸へ流入した一年間の陶磁器の内、堺播鉢が全体の2.7%を占めるとされる（佐々木1985, 1987）。この堺播鉢が何を意味するのかという史料的問題を佐々木は指摘しているが、この堺の製品のみが播鉢と明記されている点は注目され、幕末期には相当量の堺播鉢が江戸へ流入したとみてよいであろう。そして、堺焼と考えられる播鉢を出土した兵庫県伊丹市有岡城跡・伊丹郷町遺跡の報告によれば、形態、色調等が備前焼の播鉢と酷似するが、注ぎ口に刻印が存在、見込及び底部外面に認められる焼き台（窯道具の痕跡）等によって、識別可能であるという（藤本1987）。このことから、本地点におけるC類は、この堺播鉢を含んでいると考えられる。また、最近では丹波播鉢と信楽播鉢についての見解が呈示されている（稲垣1988, 森村1988）。その中で森村健一は、見込の播目が異なる点を指摘し、丹波播鉢は図206-1のように円形の播目が存在する形態、信楽播鉢は図206-2のように円形の播目が認められない形態であるという。従って、本地点のA類は、両地域の播鉢が含まれている可能性が高い。このように、播鉢の産地同定の問題は、消費地遺跡における今後の課題である。この点が明らかになれば、播鉢の流通についての研究がさらに進展すると考えられる。

#### 文献

稲垣正宏, 1988: 関西の主要な遺跡出土の丹波・信楽、堺播鉢について。江戸遺跡研究会会報, 14: 1-6。江戸遺跡研究会。

扇浦正義, 1988: 三栄町遺跡出土遺物の変遷。三栄町遺跡: pp.245-265。新宿区教育委員会。

大橋康二, 1980: 中世播鉢考(1)～(3)。考古学ジャーナル, 175: 11-15, 177: 18-25, 179: 5-10。  
ニューサイエンス社。

佐々木達夫, 1985: 物資の流れ——江戸の陶磁器——。季刊考古学, 13: 48-50。雄山閣。

佐々木達夫, 1987: 江戸へ流通した陶磁器とその背景。国立歴史民俗博物館研究報告, 14, pp.189-230。国立歴史民俗博物館。

藤澤良祐, 1986: 瀬戸大窯発掘調査報告。瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要V, pp.1-292。瀬戸市歴史民俗資料館。

藤本史子, 1987: 伊丹郷町における出土陶磁器の様相。有岡城跡・伊丹郷町I, pp.135-147。大手前女子学園有岡城跡調査委員会, 兵庫。

森村健一, 1988: 堺環濠都市遺跡出土の近世陶磁器。考古学ジャーナル, 297: 37-44。ニューサイエンス社。

## 5. 焼塩壺

山口 剛志

焼塩壺の出土数は、身 170 点、蓋 75 点の総数 245 点（接合したものは 1 点として算定）を数える。この内、身 139 点と蓋 59 点が遺構内から出土した。各遺構毎の出土量は少なく、1 号土坑の 61 点を除けば 5 点前後を出土した遺構が大半を占める。また、総数の約 6 割は、細片のために形態の復元が困難であり、特に身はこの傾向が強い。このような資料上の制約は存在するが、本項では、遺構内出土の一括資料を重視しつつ焼塩壺の身と蓋について検討を加える。

### (1) 形態的特徴

**身** 製作技法の違いによって、輪積みによる成形の身 A 類、板作りによる成形の身 B 類、ロクロによる成形の身 C 類に大別される。以下、それらの形態的特徴を概観する。なお、焼塩壺の観察表に形態的特徴を記載してあるので参照されたい。

**身 A 類**：内面に布目痕と輪積み痕を残し、口縁部内面から外面にかけてナデ調整されたもので、53 点が認められる。口縁部に太い沈線状のえぐりが巡る身 A 1 類とえぐりのない身 A 2 類とがある。身 A 1 類は、形態から「ミなと藤左衛門」銘の身に類似しており、2 号土坑から 50 など 3 点が出土した。この他は全て身 A 2 類に属し、1 号土坑からは 48～63 など 41 点の一括資料がまとまって出土した。身 A 2 類 50 点の内の 14 点には、「天下一堺ミなと藤左衛門」銘の刻印が認められる。これらは、刻印枠が二重のもの（1 号土坑—48～56 など 11 点、A・B 区柱穴類—2、遺構外 1 点）と一重のもの（9 号地下式土坑—15）とに細別される。

**身 B 類**：板状の粘土を型に巻きつけた体部に、底部を貼りつけて成形したもので、46 点が認められる。内面の布目痕と口縁部内側を段状に高くした蓋受けを有する。身 B 類に認められる刻印の種類は多く、「泉湊伊織」銘 4 点（3 号地下式土坑—34、4 号地下式土坑—71、13 号地下式土坑—23、16 号地下式土坑—12）、「泉州麻生」銘 3 点（83 号土坑—11、遺構外—70・71）、「泉州磨生サカイ御塩所」銘 3 点（4 号地下式土坑 1 点、7 号地下式土坑—23、遺構外—72）、「泉川麻玉」銘 1 点（1・2 号地下式土坑—10）、「摂州大坂」銘 1 点（4 号井戸—70）がそれぞれ出土した。刻印毎の形態はそれぞれ異なるが、その中で「泉湊伊織」銘の一群は、刻印銘不明の中で形態、内面の布目痕、底部成形等によりこの銘に分類可能なものを含めると、次の二種類が認められる。まず、断面筒形を呈し器高が 9 cm 前後を測る身 B 1 類で、16 号地下式土坑—12 と刻印銘不明の 5 号地下式土坑—58、135 号土坑—3 がこれにあたる。次に、身 B 1 類より底径が小さい断面深鉢形を呈し器高が 7.3～8 cm を測る身 B 2 類で、4 号地下式土坑—71、13 号

地下式土坑—23 と刻印銘不明の 4 号地下式土坑—72, 5 号地下式土坑—57, 遺構外—73 がこれにあたる。その他, 4 号井戸—70 の「摂州大坂」銘のものは, 東京都内で平河町遺跡(後藤・扇浦 1986) の 1 点が認められるのみであり, 今後の類例が待たれる。なお, 3 号井戸—44, 10 号地下式土坑—12 は, 形態から判断して「御壺塩師堺湊伊織」銘の身と考えられる。

身 C 類: 内外面に明瞭なロクロ痕と底部に左回転の糸切痕を残すもので, 71 点が認められる。口縁部に段状の蓋受けを有する身 C 1 類と, 口縁部が平坦な身 C 2 類とがある。身 C 1 類は, さらに蓋受けの形態から, 身 B 類と同様に内側を高くした「大極上壺塩」銘の 13 号地下式土坑—24 と, 口縁部の中央を窪ませた 3 号地下式土坑の 2 点, 遺構外—74・75 など 3 点とに識別可能である。計測値は, いずれも身 B 2 類とほぼ同様の数値を示す。身 C 2 類は, 無銘の 12 号地下式土坑—8, 27 号土坑—18 を除いて刻印銘不明であるが, その多くは無銘であると思われる。器高が 7 cm 前後を測る身 C 1 類に近い大型のもの(4 号井戸—3, 12 号地下式土坑—8)と, 器高が 5 cm 前後を測る小型のもの(27 号土坑—18, 36 号土坑—8, 62 号土坑—7, 63 号土坑—37, 遺構外—76・77)とが認められる。

蓋 形態の違いによって, かえし部が外へ開いた断面逆皿状を呈する蓋 I 類, 断面逆凹状を呈する蓋 II 類, 断面平板状を呈する蓋 III 類に大別される。以下, それらについて概観するが, 焼塩壺の観察表も参照されたい。

蓋 I 類: 手づくねによる成形で, 外面平坦部に指頭調整痕, 内面と外面かえし部にナデ調整が認められる。9 号, 18 号地下式土坑各 1 点, 1 号土坑—39~47 など 20 点, 遺構外 1 点の計 23 点が出土し, 特に 1 号土坑の出土資料は, 身と共にまとまった一括資料である。

蓋 II 類: 内面に布目痕を明瞭に残した型作り成形であり, 33 点が認められる。形態, 布目痕, 胎土等から次の四種に分類される。かえし部が深く明瞭に作り出されたものは, まず全体に薄手で内面に密な布目痕を残し, 胎土に金雲母片を含まない蓋 II a 類で, 3 号井戸—42・43, 6 号地下式土坑—39, 遺構外—63・64 がこれにあたる。次に, 全体に厚手で内面に粗い布目痕を残し, 胎土に金雲母片を含むもので, 外面平坦部から直角に曲がってかえし部を作り出す蓋 II b 類と, 外面平坦部とかえし部の接合部が面取りされて丸みを帯びた蓋 II c 類とがある。蓋 II b 類は数量的に多く, 3 号地下式土坑—33, 5 号地下式土坑—55・56, 6 号地下式土坑—41, 7・8 号地下式土坑—23・24, 19 号地下式土坑—16, 109 号土坑 1 点, 111 号土坑—11, A・B 区柱穴類—15 など 2 点, 遺構外 3 点がかこれにあたる。蓋 II c 類は, 3 号地下式土坑—32, 4 号地下式土坑—69, 6 号地下式土坑—40, 13 号地下式土坑—22, 遺構外—61・62 がこれにあたる。最後に, かえし部が僅かに残存する浅い作りで, 内面に粗い布目痕が認められる蓋 II d 類は, 4 号井戸—69, 11 号地下式土坑—14, 12 号地下式土坑—7, 120 号土坑—1, 遺構外 1 点がかこれにあたる。これらの計測値を検討すると, 蓋 II a~c 類は, 口径, 器高では差を認めることができない

が、内面のかえし部の深さが明瞭に異なる。蓋II a類は0.9~1.1 cm、蓋II b類は0.6~1.0 cm、蓋II c類は0.4~0.6 cmを測り、内面が蓋II a・b・c類の順に浅い作りになっている。また、蓋II d類は、蓋II a~c類より小型であり次の蓋III類に近い計測値を示す。なお、3号井戸-43の外表面平坦部には、「天下一焼塩」の釘書きが焼成後に行われており、蓋II a類の時期を考える上で注目される。

蓋III類：かえし部の認められない内面がほぼ平坦なもので、27号土坑-20、36号土坑-9、43号土坑-14、52・53号土坑-7、遺構外-65~68など19点が表19に示した遺構から出土した。型作り成形で、内面に布目痕を若干残すものもある。

## (2) 各形態の遺構別出土状況

表19は、遺構別出土状況について身・蓋の形態別にまとめたものである。以下、この表を基にして共伴関係について検討を加える。

まず、焼塩壺の身を出土した38遺構の内、身A類と身B類の共伴が3例、身B類と身C類の共伴が6例認められ、身A類と身C類の共伴はない。この内、細別可能な共伴例は、前者において4号地下式土坑（身A2類の70と「泉湊伊織」銘の身B2類の71・72、「泉州磨生サカイ御塩所」銘の身B類1点）及び3号井戸（身A2類1点と「御壺塩師堺湊伊織」銘と考えられる身B類の44）である。後者においては、まず3号、13号地下式土坑（「泉湊伊織」銘のB2類と身C1類）があり、特に13号地下式土坑-23・24は1ヶ所にまとまって同一層から出土した。4号井戸は、「摂州大坂」銘の身B類の70と身C2類の3が認められる。

次に、各形態内の細分別にみると、身A1類と身A2類、身C1類と身C2類は、それぞれ共伴することなく単一の出土である。身B類は、先の4号地下式土坑の例と5号地下式土坑の「泉湊伊織」銘の身B1類の58と身B2類の57が判明しているにすぎない。

蓋は、28遺構に認められるが、蓋I~III類がそれぞれ共伴することなく単一の出土である。蓋II類の細別された各形態別では、3号地下式土坑の蓋II b類の33と蓋II c類の32、及び6号地下式土坑の蓋II a類の39、蓋II b類の41、蓋II c類の40が共伴する。

最後に、身と蓋を共伴した21遺構について蓋を中心にまとめてみると、蓋I類の3例は全て身A2類と共伴する。蓋II類は、身A・B類と2例、身B類と2例、身B・C類と3例、身C類と2例がそれぞれ共伴し、一様ではない。蓋III類は、身B類と1例、身B・C2類と1例、身C2類と7例である。共伴関係が多様な蓋II類を細別された各形態別に検討してみると、蓋II c類の3例（3号、4号、13号地下式土坑）は全て「泉湊伊織」銘の身B2類と、蓋II d類の2例（4号井戸、12号地下式土坑）は全て器高が7 cm前後を測る身C2類と共伴する傾向が認められる。また、蓋II a類は3号井戸（「御壺塩師堺湊伊織」銘と考えられる身B類）、蓋II b類は

表 19 焼塩壺身・蓋の遺構別出土状況

Table 19 Numbers of salt pots found from each feature

報告No	身(類)				蓋(類)				図版番号	備 考
	A	B	C	計	I	II	III	計		
2号井戸	1			1					☒ 25-9	
9号地下式土坑	1			1	1			1	☒ 124-15	A「天下一塚ミナと藤左衛門」1
18号地下式土坑	1			1	1			1	☒ 161-24	
1号土坑	41			41	20			20	☒ 70-71-39~63	A「天下一塚ミナと藤左衛門」11
3号井戸	1	1		2		2		2	☒ 29-42~44	IIの1点に「天下一焼塩」の釘書き。
4号地下式土坑	1	10		11		1		1	☒ 40-69~72	B「泉湊伊織」1, B「泉州磨生」4「御塩所」か。1
2号土坑	3	1		4					☒ 81-50	
1, 2号地下式土坑	1			1					☒ 32-10	B「泉川麻玉」1
5号地下式土坑		7		7		2		2	☒ 48-55~58	
7号地下式土坑		1		1					☒ 60-23	B「泉州磨生」4「御塩所」か。1
7, 8号地下式土坑		3		3		2		2	☒ 63-22~24	
10号地下式土坑		1		1					☒ 147-12	
16号地下式土坑		1		1					☒ 158-12	B「泉湊伊織」1
83号土坑		2		2					☒ 129-11	B「泉州麻生」1
135号土坑		1		1			2	2	☒ 182-3	
4号井戸		2	1	3		1		1	☒ 136-3, 142-69-70	B「摂州大坂」1
3号地下式土坑		2	2	4		3		3	☒ 35-32~34	B「泉湊伊織」か。1
13号地下式土坑		1	1	2		1		1	☒ 153-22~24	B「泉湊伊織」1, C「大極上壺塩」1
62号土坑		1	1	2					☒ 105-7	
138, 139号土坑		1	1	2						
5号井戸, 136-137号土坑		2	2	4				1	1	
6号地下式土坑						3		3	☒ 56-39~41	
11号地下式土坑						1		1	☒ 149-14	
19号地下式土坑						1		1	☒ 164-16	
109号土坑						1		1		
111号土坑						1		1	☒ 175-11	
120号土坑						1		1	☒ 180-1	
12号地下式土坑		1	1			1		1	☒ 150-7-8	C無銘1
107号土坑		1	1			1		1		
14号地下式土坑		1	1						☒ 155-13	
14号土坑		3	3				1	1	☒ 91-27	
16号土坑		1	1							
27号土坑		2	2				1	1	☒ 95-18~20	C無銘1
36号土坑		2	2				2	2	☒ 98-8-9	
43号土坑		2	2				2	2	☒ 100-14	
48号土坑		1	1				1	1	☒ 193-13	IIIの1点が柱穴と接合。
52, 53号土坑		1	1				1	1	☒ 102-7	
54号土坑			5	5						
63号土坑			3	3			1	1	☒ 109-37	
74号土坑			8	8					☒ 112-11	
112号土坑			2	2					☒ 176-7	
119号土坑			1	1						
137号土坑			3	3					☒ 186-16	
4号遺物集中			1	1						
108号土坑							1	1		
柱穴(一括して)	1	2	3	6		2	○	2	☒ 120-2-15	A「天下一塚ミナと藤左衛門」1, IIIの1点が48号土坑と接合。
遺構内合計	50	40	49	139	22	24	13	59		
遺構外	3	6	22	31	1	9	6	16	☒ 199-200-61~78	A「天下一塚ミナと藤左衛門」1, B「泉州麻生」12 B「泉州磨生」4「御塩所」1
総 数	53	46	71	170	23	33	19	75		

註) ○の部分、接合資料のため数字を加えていない。



3号地下式土坑（「泉湊伊織」銘の身B2類）、5号地下式土坑（「泉湊伊織」銘の身B1類と身B2類に考えられるもの）でそれぞれ共伴する。

### (3) 身と蓋のセット関係

まず、遺構内出土の一括資料からセット関係を考えてみると、蓋I類と身A2類は、1号土坑出土の一括資料（身41点、蓋20点）でも明らかのように、セットになるのは確実である。蓋III類は、身B類と共伴する例が若干あるものの身C2類との共伴が最も多く、形態的にも身の口縁部と蓋の内面が共に平坦であることから、セットになると考えられる。問題は、共伴関係が多様な蓋II類である。

蓋II類は、かえし部の存在から形態的に段状の蓋受けを有する身B・C1類に伴うとみてよいが、身・蓋共に多くの形態に細別可能である。この内、蓋IIc類は、全て「泉湊伊織」銘の身B2類と共伴しており、形態的にも蓋IIa～c類の中で最も浅いかえし部を有する蓋と、身B類の中で最も低い段状の蓋受けを有する身であることから、セットになる可能性が高い。また、蓋II d類は、口径も互いに一致した器高が7cm前後を測る身C2類と共伴する。ただ、形態的には、身C1類の口縁部中央を窪ませて蓋受けとした身ともセットになる可能性があるが、本地点では共伴例が認められない。

この他は、共伴関係から判断できないので形態の特徴から検討すると、蓋IIa類と「泉州麻生」銘のB類は、共に金雲母片を含まない類似した胎土である。そして、蓋II類の中で最も浅いかえし部を有する蓋と、身B類の中で段状の蓋受けが最も高い身であることから、セットになることが考えられる。蓋IIb類は、数量的に最も多いにもかかわらず、身とのセット関係ははっきりしない。恐らく、「泉湊伊織」銘の身B2類と「泉州麻生」銘以外の身B類に伴うものと思われる。

### (4) 各形態の製作年代

焼塩壺の製作年代については、渡辺誠の論考に詳しい(渡辺1985)。そこで、この見解を踏まえつつ本地点における各形態の年代について考えてみたい。なお、特に断りのない限り形態分類は本項のものである。

身A類は、1682(天和二)年まで製作された難波屋の製品で、身A2類に認められる「天一堺ミなど藤左衛門」銘は、1654(承応三)年～1679(延宝七)年頃の期間に使用された刻印とされている。この一括資料を検出した1号土坑は、1650～80年代の製作と推定される陶磁器が中心に出土しており、本地点の出土状況は、渡辺の示した製作年代と矛盾しない。

身B類の内、まず身A類と同系統とされる「泉湊伊織」銘については、18世紀中葉以降の年

代が推定されており、本地点においても大きな違いはない。この銘の身 B 1 類は渡辺の身 B 類に、身 B 2 類は渡辺の身 C 類に相当する。また、「泉州麻生」銘のものは、延宝年間 (1673~80 年) ~享保年間 (1716~33 年) の製品であると推定されており、難波屋の身 A 類から身 B 類への形態的変化が 1682 (天和二) 年と考えられることから、この銘は、身 B 類の他に身 A 類の形態が含まれる可能性を指摘している。この点は、3 号井戸から出土した「泉州麻生」銘の蓋と考えられる蓋 II a 類の 43 に釘書きされた、「天下一焼塩」の解釈が問題となろう。この釘書きは、焼成後に行われており、身 A 2 類に認められる「天下一」銘を意識したものであるとみてまず間違いなからう。「天下一」銘の使用期間に釘書きされたとすれば、「泉州麻生」銘の身 B 類は身 A 2 類と共伴する可能性があり、難波屋より先に身 B 類の形態を使用していたことになる。この点に関して、大塚達朗は、難波屋の製品と「泉州麻生」銘との身の共伴関係を検討した上で、同様の見解を呈示しており (大塚 1988)、今後この形態の出土状況に注意を払う必要がある。「泉州磨生サカイ御塩所」、「泉川麻玉」、「摂州大坂」銘のものは、「泉湊伊織」銘と時間的に大きな違いはないように思われるが、不明な点が多く今後の課題としておきたい。

身 C 類のロクロ製品は、はっきりした年代が示されていないが、本地点においては共伴する陶磁器の推定年代から、19 世紀には確実に製作されている。その上限は、13 号地下式土坑で「泉湊伊織」銘の身 B 2 類の 23 と「大極上壺塩」銘の C 1 類の 24 が 1ヶ所からまとまって出土した例から、18 世紀中頃にはすでにロクロ成形の C 類が出現したと推定しておきたい。

#### (5) 今後の課題

焼塩壺は、身の刻印銘を手がかりとして製作年代を比較的推定し得る遺物の一つである。これは、渡辺誠が先学の成果を発展的にまとめた業績に依るところが大きい (渡辺 1985)。しかし、本地点出土資料の内、身の 6 割以上が細片であることから明らかなように、刻印銘のみを分類基準とした場合には、検討の対象にし得る資料は非常に限られてくる。また、遺構によっては蓋のみが出土した例もあり、製作年代を特定できるという焼塩壺の特徴も十分に活用できないのが現状である。この資料的制約を克服するためには、1) 個々の細片について形態、内面の布目痕、胎土等により細別された各形態別に分類できるような方法、2) 身と蓋のセット関係を詳細に検討することにより、比較的遺存状態の良好な蓋からも製作年代を推定できるような方法、の 2 点を確立する必要がある。特に、後者においては、遺構内出土の一括資料の検討が重要な課題である。遺構内における遺物の廃棄状況の把握という根本的な問題がそこにはあるが、焼塩壺の資料が蓄積されつつある現在、以上の点を考えなければならない時期に来ているように思われる。

## 文献

- 大塚達朗, 1988: 考古学的視点からの焼塩壺の検討。東京の遺跡, 19: 249。東京考古談話会。
- 小川 望, 1988: 焼塩壺——東京大学構内遺跡出土資料を中心に——。江戸の食文化, 江戸遺跡研究会第1回大会・発表要旨: 13-20。江戸遺跡研究会。
- 後藤宏樹・扇浦正義, 1986: 土器(土師質・瓦質)。平河町遺跡, pp.88-90。千代田区教育委員会。
- 菅沼圭介, 1986: 塩壺類について。郵政省飯倉分館構内遺跡, pp.271-272。港区麻布台一丁目遺跡調査会。
- 鈴木重治, 1985: 近世土器の編年。中近世土器の基礎研究, pp.148-157。日本中世土器研究会。
- 高山 優, 1988: 焼塩壺。増上寺子院群 光学院・貞松院跡, 源興院跡——港区役所新庁舎建設に伴う発掘調査報告書——, pp.169-175。港区教育委員会。
- 長瀬 衛, 1985: 塩壺。江戸——都立一橋高校地点発掘調査報告——, pp.206-211。都立一橋高校内遺跡調査団。
- 渡辺 誠, 1985: 焼塩。講座・技術の社会史2 塩業・漁業, pp.312-329, 392。日本評論社。

## 6. かわらけ・燈明具類

羽生 淳子

本項では、(1)かわらけ、(2)かわらけ以外の素焼燈明具類、(3)透明釉を施した燈明具類、(4)陶器の燈明具類について述べる。

### (1) かわらけ

各遺構から出土したかわらけのうち、口径・底径・器高の計測ないし復元が可能であった資料は、302個体を数える。これら302点の遺構内出土資料については、全点実測を行ない、図版に掲載した。この他に、遺構外からも、かなりの量のかわらけが出土しているが、これらについては、底部外面に墨書を有する4点のみを図示し、他の実測図は割愛した。

302点中、2点は、内外面を丁寧に研磨した精製のかわらけである(13号地下式土坑-16: 図152, E・F・G区柱穴および小土坑-1: 図191)。後者は、内面に墨で文様を描いてある。

残りの300点は、底部に回転糸切痕を残すものである。これらのうち、17世紀後半から18世紀中葉の陶磁器を伴う遺構からの出土資料を観察した結果、時代が新しくなるにつれて、口径に対する底径の比が小さくなる、という傾向が認められた。

300個体のうち、145個体は、2号土坑からの出土資料(図81~83)である。これらは、推定生産年代が1630年代~1660年代の肥前陶磁器を伴っていることから、17世紀中葉の資料と推定される。これら145個体の資料の、口径1に対する底径の比の平均は、0.597(±0.036)である。全体に厚手であり、内外面にろくろ整形時の凹凸を残すものも多い。底部の回転糸切整形は、右回転と左回転の両者が存在する。145個体中、85個体には煤の付着が認められることから、これらのかわらけの多くは、燈明皿として用いられていたことが推測される。この点は、

同じ東京大学構内の中央病院診療棟地点におけるかわらけの一括出土例が、儀礼的な宴会の際の食器と推測される点と明らかに異なっている(藤本・萩尾 1987)。さらに、145 個体中、32 個体において、底部外面に墨書の存在が確認された。これらの多くは、「ちや」の左側に数字を記したもので、または数字のみを記したものである(写真 64・65 参照)。

2 号土坑のかわらけとはほぼ同様の特徴を示す遺構内出土一括資料としては、85 号土坑の 18 点(図 131)があげられる。18 点のかわらけの、口径 1 に対する底径の比は、 $0.601(\pm 0.025)$  であり、うち 9 点には、底部外面に墨書が認められる。85 号土坑からは、生産年代が 1640~1650 年代と推定される肥前磁器碗が出土している。

これらの次に古いと考えられるグループは、1 号土坑および 9 号地下式土坑の出土資料である。両遺構とも、共伴する陶磁器は、17 世紀後半の資料を中心とする。1 号土坑出土資料 21 個体(図 71)の口径 1 に対する底径の比の平均は  $0.577(\pm 0.030)$ 、9 号地下式土坑 14 個体(図 124)の平均は  $0.571(\pm 0.021)$  であり、2 号土坑や 85 号土坑に比して、わずかながら口径に対する底径の比の平均が小さくなっている。器壁は、前段階のものよりも薄手になり、ろくろ整形時の凹凸は横方向の丁寧なナデによって調整され、表面はなめらかになる。内面の底部から体部への立ち上がり付近には、浅い凹みが認められるものもある。底部の回転糸切整形は、確認し得たものはすべて左回転である。

次の段階に位置づけられる一括資料は、3 号井戸の 17 個体(図 29:口径 1 に対する底径の比の平均= $0.512\pm 0.020$ )である。この資料は、18 世紀前半~中葉の陶磁器と共伴する。器壁はさらに薄手になり、底部中央および口唇部付近は、特に薄手である。内面底部から体部への立ち上がり部分の凹みはさらに顕著になる。また、組成の中で、小型のかわらけ(3 号井戸-45~49)が目立ってくるのもこの時期の特徴のひとつである。

18 世紀後半以降の陶磁器と共伴するかわらけについては、その絶対量が少ないため、本地点の資料だけでは明確にし得ない部分が多い。4 号地下式土坑は、出土した陶磁器から、18 世紀後半に廃棄されたと考えられる遺構であり、10 個体の復元可能なかわらけ(図 40)が出土しているが、その形態をみると、ヴァリエティに富んでおり、単純に計測値だけでは比較できないことがわかる。4 号地下式土坑-73~75 は、小型のかわらけで、形態的には 3 号井戸-45~49 に類似するが、さらに薄手である。76, 78 は外反する体部と、やや高目の器高を特徴とする資料であり、他に類例を見ない。77, 79, 80 は、丸底に近い形態を示し、体部は内彎する。内外面とも、表面の剥離が著しく、仕上げ段階に化粧土掛けを行なったものとみられる。同様の特徴を示す資料としては、5 号地下式土坑-60, 65(図 48)、3 号地下式土坑-37, 38(図 35)、13 号地下式土坑-29~31(図 153)があげられる。

以上、かわらけの形態およびその他の特徴の時間的変化について、現時点で指摘し得るいく

つかの事実を述べてきた。本地点では18世紀後半以降の良好な一括出土資料が得られなかったため、これ以降の時期に関する細部の検討は今後の課題である。

## (2) かわらけ以外の素焼燈明具類

かわらけ以外の素焼燈明具類として、本地点で最も古い共伴関係を示すものは、素焼の受付燈明皿である。10号地下式土坑は、出土した陶磁器から、18世紀前半～中葉に廃棄されたと推定される遺構であるが、ここからは受付燈明皿が1点出土している(15：図147)。やや下って、出土陶磁器から18世紀中葉～後半の廃棄年代が推定される4号地下式土坑からは、8点の復元可能な受付燈明皿(83～90：図40)と共に、有脚受付燈明皿(91：図40)が出土している。これらの多くは、表面の剝離が著しいことから、内外面に化粧土掛けを行なったものと考えられる。87, 88, 91は、外面に暗褐色顔料の痕跡を残し、部分的には銀色の粉末が残存している。

主な遺構からの素焼受付燈明皿の出土例としては、この他に、5号地下式土坑—67・68(図48：18世紀中葉から後半の陶磁器と共伴)、13号地下式土坑—32, 33(図153：18世紀後半の陶磁器と共伴)、3号地下式土坑—39～41(図35：18世紀後半の陶磁器と共伴)、14号地下式土坑—15(図155：18世紀末～19世紀前半の陶磁器と共伴)などがある。これらの例から明らかな通り、遺構内出土例の大部分は、18世紀中葉～後半に集中しており、確実に19世紀代の遺構に伴う例は確認できない。なお、素焼の有脚受付燈明皿としては、4号地下式土坑の他に、13号土坑—10(図184)があるが、この遺構も18世紀中葉～後半の陶磁器を伴っている。

上記以外の素焼燈明具としては、3号地下式土坑—42(図35)、13号地下式土坑—35(図153)がある。これらは、いずれも、18世紀後半の陶磁器と共伴している。

## (3) 透明釉を施した燈明具類

ここに、透明釉を施した燈明具類として一括したものは、内外面に赤褐色ないし褐色の塗彩を施した後、透明釉を掛けた土師質の燈明具類である。これらの資料には、釉が施されているが、胎土が土師質で、整形上の特徴が素焼のものと類似することから、種別の欄には「土器」として記載した。器種としては、燈明皿(小片のみのため、図示なし)、受付燈明皿(1・2号地下式土坑—11：図32, 16号土坑—16：図92, 27号土坑—21：図95, 14号地下式土坑—14：図155, 107号土坑—20：図172, 113号土坑—7：図177)、有脚受付燈明皿(52・53号土坑—8：図102, 遺構外—57：図199)、その他の燈明具(13号地下式土坑—34：図153, 遺構外—58：図199)がある。

これらのうち、13号地下式土坑—34の燈明具は、18世紀後半の陶磁器を伴う。これ以外の遺構内出土資料は、すべて18世紀末～19世紀代の陶磁器を伴っている。底部に回転糸切痕を残

し、全体に整形が粗い点は、素焼のかわけおよび受付燈明皿に類似するが、素焼のものより、全体に小型である。受付燈明皿の形態は、灰釉を施した陶器受付燈明皿（後述）に類似する。

#### (4) 陶器の燈明具類

陶器の燈明具類は、①鎔釉を施した炆器、②鉄釉を施した陶器、③灰釉を施した陶器、の三者に大別される。

鎔釉を施した炆器は、志戸呂産と考えられるものである(3号井戸-29：図28, 3号地下式土坑-22：図34, 4号地下式土坑-42：図38, 68：図40, 5号井戸-9：図145, 5号井戸・136号土坑・137号土坑-4：図186)。胎土は緻密で、赤褐色ないし灰褐色を呈する。底部外面は、丁寧に整形されるのが通例であるが、4号地下式土坑-68は回転糸切痕を残す。外面体部および内面には、輪状の重ね積み痕を残すものが多い。

これら志戸呂産の燈明皿および、受付燈明皿の出現時期は、3号井戸で18世紀前半～中葉の陶磁器に共伴していることから、18世紀中葉以前と推測される。これより古いと考えられる遺構からの出土例としては、5号井戸（推定廃棄年代は17世紀）の資料があるが、この井戸の覆土上層には、18世紀中葉以降の陶磁器の混入が認められることから、この資料も後世の混入である可能性が強い。下限については明確にし得ないが、19世紀代の遺構に伴う例は、本地点では皆無である。

鉄釉を施した陶器燈明皿・受付燈明皿は、その大部分が、瀬戸・美濃産と考えられるものである。胎土は、志戸呂産のものに比べて粗く、黄色味を帯びるものが多いが、灰褐色を呈するものもある。形態的には、内彎する体部と低い器高を特徴とし、外面体部には削りによる横方向の整形痕を残す。内外面には、輪状の重ね積み痕を残すのが通例である。外面は、底部の釉を拭き取り、その部分に重ね積み痕を残すものと、外側面下半部の釉を蛇ノ目状に拭き取り、その部分に重ね積み痕を残すものがある。

このグループの資料のうち、最も古い共伴関係を示す資料は、18世紀中葉～後半の陶磁器と共に出土した、5号地下式土坑-32・33（図46）である。この2点は、調整が比較的丁寧で、鉄釉の色調が暗褐色に近い点で、共通する特徴を有する。18世紀代の陶磁器との確実な共伴例としては、この他に、4号地下式土坑-43（図38）、11号地下式土坑-15（図149）があげられる。18世紀末～19世紀代の陶磁器を伴う土坑からの出土例は数多い(16号土坑-13, 14：図92, 27号土坑-17：図95, 36号土坑-7：図98, 43号土坑-9：図100, 107号土坑-16, 17, 18：図172, 113号土坑-6：図177, 122号土坑-8：図180, 137号土坑-9：図185)。

灰釉を施した燈明皿、受付燈明皿(3号地下式土坑-20, 21：図34, 119号土坑-3：図179, 遺構外-52, 55：図199)の出土数は、鉄釉のものよりも少ない。胎土は、やや黄色味を帯びた

灰褐色，ないし半磁器質の灰白色を呈し，全体に薄手である。これらの特徴は，いわゆる京焼系と呼ばれる陶器と共通するものであり，窯跡からの出土資料としては信楽が知られている<sup>1)</sup>。図示した5点のうち，3号地下式土坑-21，119号土坑-3，遺構外-52，55の4点は，胎土，調整とも信楽産のものと酷似する。3号地下式土坑-20については，胎土はこれらと同質だが，外面の調整が非常に丁寧で洗練されたつくりであることから，現段階では産地不明としておく。

3号地下式土坑の2点は，18世紀後半の陶磁器と共伴する。119号土坑の資料は，幕末と考えられる端反碗の蓋と共伴している。なお，他遺跡において，比較的一般的に出土する灰釉の有脚受付燈明皿は，本地点からは1点も出土していない。

この他に，注意すべき資料として，1号土坑-31（図68），36号土坑-6（図98）があげられる。1号土坑-31は，瀬戸・美濃産と考えられる燈明皿であり，内面中央に燈芯立ての突起を有する。36号土坑-6は，生産地・時期ともに不明であるが，形態および大きさから燈明皿と考えた。胎土は赤味を帯び，緻密である。底部は非常に薄い。内面および外面口縁部に鉄釉を施し，外側面無釉部には重ね積み痕を残す。18世紀後半～19世紀の陶磁器と共伴している。

#### 註

1) 第5章第2節1の(2)を参照。

#### 文献

藤本強・萩尾昌枝，1987：東京・東京大学構内遺跡（医学部付属病院中央診療棟建設予定地点）。木簡研究 第9号：78-81。木簡学会。奈良。

## 7. 火鉢類・焙烙・その他の瓦質，土師質土器・土製品

山口 剛志

ここでは，施釉されない素焼製品のうち，火鉢類・焙烙・その他の瓦質，土師質土器・土製品について，図示した資料を中心に概観し，本地点におけるこれらの傾向をまとめることにする。なお，遺物観察表にそれぞれの形態の特徴を詳しく記載してあるので，参照していただきたい。

### A. 火鉢類

火鉢類とするものは，遺物観察表の種別の項に火鉢，風炉と記した資料がこれに相当し，底面に三足または四足を有するものである。その出土数は，総数2284点（接合したものは1点と

して算定)を数える。このうち、黄褐色に近い色調を呈する土師質が1627点、器面に炭素を附着させた瓦質が657点であり、総数の71%を土師質のものが占める。遺構別の出土状況では、特に地下式土坑から多量に出土する傾向が窺える。以下、火鉢、風炉について土師質と瓦質に大別し、その形態的特徴について検討する。

#### 1) 火鉢

土師質の火鉢は、30点を図示した。この中で数量的に最も多い、断面鉢形を呈する火鉢は、形態からA～C類の三種類に分類可能である。

A類は、体部が底部から湾曲しながら外へ開いて立ち上がり、口縁部付近に至ってほぼ直立するもので、後述するB類に比して、口径に対する器高の比は小さい。口径18cm前後を測る3号井戸-63(口径1に対する足を除いた器高の比:0.36, 以下同様), 111号土坑-8(0.44), 141号土坑-5(0.42)の3点, 口径21cm前後を測る4号井戸-73(0.37), 5号地下式土坑-74(0.32), 109号土坑-5(0.42), 141号土坑-6(0.40), 遺構間接合(14号, 54号土坑)-27(0.38)の5点, 口径27cm以上を測る1号井戸-55(0.32), 5号地下式土坑-75(0.29), 7・8号地下式土坑-30(0.33), 16号地下式土坑-17(0.32)の4点がそれぞれ認められる。そのほか, 形態的に3号地下式土坑-43, 12号地下式土坑-9の2点は, 本類に含まれると考えられる。

B類は, A類に類似した体部形態を呈するが, A類より体部の外への開きが小さく, A類に比して, 口径に対する器高の比が大きい。口径約18cmを測る4号井戸-74(口径1に対する足を除いた器高の比:0.48, 以下同様), 口径約22cmを測る4号地下式土坑-96(0.52)・97(0.54), 口径約31cmを測る4号地下式土坑-99(0.52)の4点の他に, 形態的に1・2号地下式土坑-13, 4号地下式土坑-98, 6号地下式土坑-45, 7号地下式土坑-31, 19号地下式土坑-20・21, 20号地下式土坑-6, 2号土坑-199の口縁部を欠損する8点が形態的に本類に含まれると考えられる。

C類は, 体部がほぼ直立した立ち上がりを呈するもので, 遺構間接合-16(10号, 19号地下式土坑)の1点がこれにあたる。

これらの他に, 箱形を呈する4号地下式土坑-100, 3号井戸-65(これは, 火鉢以外の可能性も考えられる)や, 小林謙一が分類したVI類(小林1986b)の口縁部と考えられる7号地下式土坑-33がある。

次に, A～C類の火鉢を細かく検討してみると, まず体部外面に認められる塗彩は, A類(14点中)で赤色3点, 銀色4点, B類(12点中)で金色1点, 銀色9点がそれぞれ認められ, A類とB類とでやや違いがある。キセルによるものと考えられる口唇部の敲打痕は, A類(14点



中)で口径27cm以上の4点全てに、B類(8点中)で22cm以上の3点、C類1点にそれぞれ認められ、各類を問わず口径が大きい火鉢に存在する傾向を示す。底面に認められるスグレ痕とちぢれ目についてみると、A類(12点中)で両者3点ずつ、B類(10点中)でスグレ痕2点とちぢれ目7点、C類にちぢれ目がそれぞれ認められ、特にB類ではちぢれ目が主体である。遺構内で共伴する陶磁器の推定年代を参考にすれば、スグレ痕を有するものは17世紀中葉～後半と推定される陶磁器との共伴が多く、ちぢれ目は18世紀以降の陶磁器との共伴が多い。体部内面に認められる指頭調整痕は、A類で14点中4点、B類で12点中8点に認められ、B類に主体的なあり方を示す。

なお、実測し得なかった資料のうち、次の瓦質E類と同一形態で体部外面に短沈線の回転印刻文が施されたものが、16号地下式土坑に1点認められる。また、C類と同一形態で体部外面に沈線と櫛描文が施されたものが、7・8号地下式土坑に1点認められる。

瓦質の火鉢は、11点を図示した。このうち、断面鉢形を呈するものは、D～F類の三種類が認められる。

D類は、土師質のA類と同一の形態である。18号地下式土坑-29の1点がこれにあたり、口径38cmを測る大型の火鉢である。口径1に対する足を除いた器高の比は、0.32である。

E類は、体部が湾曲しながら外へ開いて底部から立ち上がり、口縁部付近で内湾するものである。4号地下式土坑-101、12号地下式土坑-10、13号地下式土坑-36、1号遺物集中-15、遺構間接合-15(4号、5号地下式土坑)・26(14号、54号土坑)の6点が認められ、いずれも口径が20cm以下を測るもので、体部外面に回転印刻文が施される。

F類は、体部がほぼ直立した立ち上がりを呈するもので、土師質C類と同様の形態である。13号地下式土坑-37、63号土坑-38、遺構外-86の3点がこれにあたり、いずれも体部外面に回転印刻文が施される。

これらの他に、箱形を呈するものが、89号土坑-5の1点に認められる。

次に、D～F類について細かく検討すると、E類、F類には、体部外面に認められる印刻文による装飾が認められる。E類の文様構成は、口縁部沈線下に短沈線が施された一段構成の1号遺物集中-15、遺構間接合-26、同じく沈線下に雨垂れ文と菊花文が施された一段構成の4号地下式土坑-101、口縁部は不明であるものの花文が施された一段構成と思われる12号地下式土坑-10がある。また、口縁部沈線下から渦巻文、七宝文、渦巻文の順に、それぞれが沈線によって区画された三段構成の13号地下式土坑-36、同じく唐草文、斜沈線、無文帯の順に、それぞれが沈線によって区画された三段構成の遺構間接合-15がある。F類では、口縁部沈線下から唐草文、短沈線の順に、それぞれが沈線によって区画された二段構成の遺構外-86の他に、帯目が施された口縁部を欠損する63号土坑-38、太沈線による区画内に条線が施された13号地

下式土坑—37がある。口唇部に認められる敲打痕は、E類で5点中1点に認められるのみで、そのほかに口縁部を再調整したものが、E類で5点中2点、F類で2点中1点に認められる。底面に認められるスダレ痕は、D類、F類に各1点、ちぢれ目はE類6点中に1点がそれぞれ認められるのみで、そのほかはナデ調整が行われる。体部内面に認められる指頭調整痕は、E類で6点中3点に認められ、それ以外は明瞭にロクロ痕を残す。

以上、土師質と瓦質別にA～F類に分類したが、A類とD類、C類とF類は質的な違いであり、形態的には同一の形状を呈する。そして、土師質のA類、B類と、瓦質のE類、F類が、本地点の出土資料においては量的な主体を占めている。

本地点の資料のうち、土師質の火鉢A～C類は、同一遺構内から混在して出土する傾向を示しており、各類の間には時間的先後関係は確認できない。したがって各類の中での時間的変化がありそうであるが、本地点においては、18世紀以降と推定される実測可能な資料がないため、この点にははっきりしない。ただし、底面に認められるスダレ痕とちぢれ目については前者が古いと考えられる。また、瓦質の火鉢の内、体部外面に印刻文が施されているE類、F類は、確実に17世紀代と考えられる資料がないことから、18世紀以降に出現したと推測される。

火鉢については、小林謙一によるまとまった論考がある以外、まだ十分に研究が進展していないのが現状である(小林1986a・b)。本地点のA類、B類は、小林のIa類1種(小林1986b)に対応する。小林は、これらを、口唇部・足部の形状を中心にさらに細別しているが、本地点の資料から考えるならば、口唇部や足部の形状の他に、口径に対する器高の比にも注目する必要がある。すなわち、本地点においてB類とした資料(4号地下式土坑—96・97・99、4号井戸—74)は、口径を1とした場合の器高(三足を含まず)の比が0.48～0.54である。これに対し、同じIa類1種でも、筆者がA類とした資料は、口径を1とした場合の器高の比が口径18cm前後を測る資料で0.36～0.44、口径21cm前後を測るもので0.32～0.42、口径27cm以上を測るもので0.29～0.33であり、口径に対する器高の比は、A類とB類の間で明瞭に異なる。小林が指摘する、Ia類1種の形態における強い規格性の存在を考慮すれば、本項で指摘した口径に対する器高の比の差異についても、今後検討を重ねる必要がある。また、E類、F類の瓦質等に認められる回転印刻文の装飾に、さまざまなパターンが存在することも、今後の検討課題として指摘される。

## 2) 風炉

風炉としたものは、口縁部に半円状の窓を有した断面鉢形を呈するもので、9点を図示した。土師質と瓦質のものが認められる。以下、その質別に検討を加える。

土師質の風炉は、3点を図示した。いずれも火鉢B類に窓を設けたような形態を呈し、口径

30 cm 以上を測る大型のものである。1号井戸-54, 3号井戸-64, 7・8号地下式土坑-31がこれにあたる。整形は、内外面共に火鉢より丁寧に行われており、特に外面は顕著なヘラミガキが行われる。3号井戸-64は、体部外面に赤色塗彩が施され、口唇部に敲打痕が認められる。1号井戸-54, 3号井戸-64の底面には、スグレ痕が認められる。

瓦質の風炉は、6点を図示した。形態は、以下の四種類が認められる。まず、遺構外-85は、土師質の風炉と同一の形態を呈するが、底面に認められる足の構造が異なり、中央部が穿孔された円盤状の足を取り付けている。体部外面は、丁寧なヘラミガキが行われ、漆継の痕跡も認められる。次に、2号土坑-198は、火鉢D類に類似した形態を呈し、底径もほぼ同じ大型のものである。体部外面に丁寧なヘラミガキが行われ、底面にスグレ痕が認められる。遺構間接合-14(11号, 16号地下式土坑)は、体部が直立した立ち上がりを呈する火鉢F類と同一の形態である。体部外面に印刻文による紗綾形文が施され、口縁部が再調整される。底面には、ちぢれ目が認められる。最後に、体部が丸みを帯びて外へ開きながら立ち上がり、口縁部が内湾するもので、14号土坑-28, 54号土坑-6, 遺構間接合-17(13号地下式土坑, 26号土坑, 11号遺物集中)の3点がこれにあたる。14号土坑-28は、口縁部内面下に内耳痕が認められることから、この形態には内耳が存在すると考えられる。3点共に、体部外面は光沢のある黒色を呈し、丁寧なヘラミガキが行われる。遺構間接合-17の窓口唇部には、敲打痕が認められる。

以上のように、風炉は、形態的に火鉢との強い関連性が窺われる。さらに細かく検討すれば、火鉢B類, D類, F類に類似した形態と、体部が丸みを帯びて立ち上がって口縁部が内湾する形態とが認められる。その時期的関係の推測は、資料数が少ないために困難であるが、前者は17世紀中葉~18世紀に推定される陶磁器と共伴し、後者は18世紀~19世紀のそれと共伴する傾向が認められる。

## B. 焙烙

焙烙の出土数は、総数692点(接合したものは1点として算出)を数え、瓦質の蓋と考えられる2号土坑-196の1点以外は、全て土師質である。この内の596点が遺構内からの出土であり、特に、4号地下式土坑(101点), 5号地下式土坑(93点)からまとまった出土が認められる。そのほかは、10点前後を出土した遺構が多数を占める。

焙烙は、18点(内3点は蓋)を図示した。これらは、口縁、底部の形状によって四種類に大別可能である。以下、その形態について類別に検討する。

**A類**：口縁部が直線状に外へ開いて立ち上がり、底部が平坦な断面皿状のもので、2号土坑-197の1点が本類に相当する。外面の口縁下部を巡るように指頭調整痕が認められ、底部との

接合部は特に丁寧なへラミガキが行われる。底面にスグレ痕が唯一認められる例であり、特徴的な形態を呈する。

**B類**：本類は、口縁部外面が直立した立ち上がりを呈するもので、口縁部内面および底部の形状によって、さらに二種類に細別可能である。口縁部内面も直立した立ち上がりを呈するB1類は、底部が丸底を呈し、器高に占める口縁部の割合は1/2以上である。9号地下式土坑—30、1号土坑—85、83号土坑—14の3点がこれにあたり、内外面共に口縁部と底部との境界が明瞭である。口縁部内面が底部から斜めに立ち上がるB2類は、B1類と同様に器高に占める口縁部の割合が1/2以上である3号井戸—62、129号土坑—5と、その割合が1/2以下である5号地下式土坑—71、6号地下式土坑—44の計4点が認められる。口縁部と底部の境界は、前者では外面が明瞭、内面がやや不明瞭であり、後者では内外面共にやや不明瞭になる。

**C類**：本類は、口縁部が内外面共に内湾ぎみに立ち上がるもので、器高に占める口縁部の割合は1/2以下である。口縁部の高さは、A類、B類とほぼ同じ5号地下式土坑—70 (3.5 cm)、136号土坑—11 (3.7 cm) の2点と、その高さが3 cm以下の4号地下式土坑—93~95、5号地下式土坑—72の4点がそれぞれ認められる。口縁部と底部の境界は、内外面共に区別しにくくなり、特に後者ではその傾向が強い。

**D類**：本類は、A~C類以外の形態を呈するもので、4号地下式土坑—92の1点がこれにあたる。口縁部外面が直立、内面が斜めに立ち上がり、底部はほぼ平坦である。口径が20 cmの小型のものであり、口縁部に焼成後に行われた穿孔が3ヶ所にそれぞれ2個ずつ認められる。この穿孔は、上位の1個が破損した後にさらにもう1個の穿孔が行われたため、結果的に2個が存在することになったと考えられる。

A~D類に分類された焙烙について、さらに細かく検討すると、B1類の1号土坑—85、D類の4号地下式土坑—92の2点には内耳が無く、それ以外のものには、不明の3点を除き内耳が存在する。このうち、内耳の形状を観察し得るB2類とC類の各3点では、B2類が口縁部内に内耳を設けているのに対して、C類は口縁部から底部にかけて内耳を設けている。底部外面は、A類にスグレ痕、B~D類の全てにおいてちぢれ目が認められる。カマ印は、4点に認められ、「⊖」の3号井戸—62 (B2類)、5号地下式土坑—71 (B2類)、4号地下式土坑—92 (D類) と、「熊」または「態」と判読できる6号地下式土坑 (B2類) であり、B2類に集中している。

以上、A~D類について形態的特徴を概観したが、それぞれ共伴した陶磁器の推定生産年代を参考に時期的な変遷を考えると、まず、A類の2号土坑—197は、17世紀中葉に推定される陶磁器と共伴する。形態的には、瓦質の焙烙と酷似しており、本地点において最も古い時期に位置づけられる(辻1988)。B1類は、17世紀後半に推定される陶磁器との共伴が2点、17世紀

後半～18世紀前半のそれが1点である。B2類は、17世紀中葉～後半に推定される陶磁器との共伴が1点、17世紀末～18世紀前半のそれが2点、18世紀前半のそれが1点である。C類は、17世紀末～18世紀前半に推定される陶磁器との共伴が1点、18世紀前半のそれが5点、D類は、18世紀前半に推定される陶磁器との共伴が1点である。

これを時期別にまとめると、17世紀中葉はA類1点、17世紀後半がB1類2点、B2類1点、17世紀後半～18世紀前半がB1類1点、B2類2点、C類1点、18世紀前半がB2類1点、C類5点、D類1点となる。

以上の事実から考えるならば、A類→B1類→B2類→C類、D類という変遷が想定される。特に、B類とC類における口縁、底部の形態は、口縁部外面が直立（B類）から内湾（C類）した立ち上がりへ、同内面が直立（B1類）→斜め（B2類）→内湾（C類）した立ち上がりの変化、器高に占める口縁部の割合が1/2以上（B類）から1/2以下（B2類、C類）への変化が考えられ、底部がより丸みを帯びたものになる。そのほかに口縁部の高さの高いものから低いものへの変化が指摘できる。

以上、本地点出土の焙烙について検討したが、数量的に少ないこともあって、十分な検証ができなかった点も多い。江戸時代の焙烙については、小林謙一(小林 1986 a)、辻真人(辻 1988)によって編年案が示されているが、なお不明な点が多い。今後さらに検討を重ねてゆく必要がある。

### C. その他の瓦質、土師質土器

ここでは、火鉢類、焙烙以外の日常における実用的な瓦質、土師質土器を一括した。総数 237 点（接合したものは1点として算定）を数え、このうち 103 点が遺構内から出土した。遺構内での出土は、1号土坑の 37 点、16号土坑の 12 点を除けば全て 5 点以下である。以下、図示し得た 28 点について器種別に概観する。

灰落としと考えられるものは、火鉢を小型化した形態を呈するが、底面に足部が無く、体部外面が丁寧にヘラミガキされるもので、4 点が認められる。体部が内湾する 13 号地下式土坑—38（土師質）、62 号土坑—8（瓦質）と、直立して立ち上がる瓦質の 3 号地下式土坑—44、5 号地下式土坑—73 とがある。13 号地下式土坑—38 は、口縁部が再調整される。3 号地下式土坑—44 は、口縁沈線下に流水文と唐草文と思われる印刻文が一段構成で施される。5 号地下式土坑—73 は、体部外面に短糸目文の印刻文が施される。

2 号土坑—200 は、口縁部が内湾する断面鉢形を呈する瓦質土器である。体部に長方形を呈する切り込み窓が 1ヶ所に横に並んで 5 個設けられ、その両側にもさらに切り込み窓の痕跡が認められる。体部外面は、比較的丁寧にヘラミガキが行われ、口唇部が摩滅する。風炉に類似し

た使用が考えられる。

七厘の本体は、本地点においては確認されていないが、その付属品と考えられる資料が3点出土した。土師質の4号地下式土坑-103、5号地下式土坑-76の2点は、風口部分と考えられる。14号土坑-31は、灰落し部分と考えられるが、胎土が白色を呈する特徴的なものである。

十能と考えられるものは、107号土坑-23・24、遺構外-87の3点である。底面にちぢれ目が認められ、107号土坑-23には把手の一部が存在する。いずれも土師質である。

植木鉢と考えられるものは、土師質の43号土坑-13、62号土坑-9、63号土坑-39、瓦質の9号地下式土坑-32、1号土坑-90、54号土坑-7の6点である。形態は、体部がやや外反ぎみに開いて立ち上がり、特に口唇部は外反する。底面には、穿孔と回転糸切痕が認められる。口径は、10.6~11.6 cmを測るものが4点、13.4 cmと25.6 cmを測るものが各1点それぞれ認められる。

瓦燈と考えられるものは、6点が認められ、遺構外-84の1点を除いていずれも1号土坑より出土した。瓦燈上部は、1号土坑-86の1点であり、体部外面に丁寧なヘラミガキが行われる。瓦燈下部は、1号土坑-87~89と遺構外-84である。1号土坑-87の皿部内面には、「爪三」のヘラ書きが認められる。1号土坑-88・89の体部外面には、銀色塗彩が施され、88は底面にスグレ痕が認められる。

その他に、用途不明の資料が6点出土している。土師質の3号井戸-66、13号地下式土坑-39、16号地下式土坑-16、83号土坑-15の4点は、何らかの容器と考えられる。遺構間接合-18（75号土坑、9号遺物集中）は、体部外面に蓆目の印刻文が施される。内面に煤が付着することから、燈明具の一種であろうか。16号土坑-15は、胎土が白色の色調を呈するもので、体部の2ヶ所に窓を設けている。この窓の存在から、涼炉の内部等の可能性がある。

#### D. 土製品

ここでは、主として非実用的と思われる素焼の遺物を一括した。土製品の出土数は、総数73点を数え、この内の71点を図示した。その内訳は、人形、ミニチュア製品、泥面子各1点、基石65点、平面正方形の製品2点、土錘状の製品1点である。遺構別にみると、基石は土坑内からの出土が圧倒的に多く、その他の製品は地下式土坑からの出土が多い。以下、種類別に概観する。

人形と思われる製品は、5号地下式土坑-77の1点で、猿を模したものと考えられる。型押整形で、外面に金色塗彩が施される。背に窓状の穴の一部が認められることから、火入れの可能性もある。

ミニチュア製品と考えられるものは、3号井戸-67の三重塔の1点である。褐色を呈する胎

土に透明釉が施釉される。

泥面子は、遺構外—91の1点のみである。上面の円内に口の字状の「釘抜」紋が施され、表面全体に金色塗彩が施される。

土製の基石は、総数65点が出土し、土製品の総数のほとんどを占めている。径1.9~2.3cm、厚さ0.5~0.8cmを測り、ほぼ一定した数値を示す。表面に白色塗彩と黒色塗彩されるものが各16点ずつ認められるが、その他のものについては塗彩の有無は不明である。

平面が正方形を呈する製品は、3号地下式土坑—45、4号地下式土坑—102から2点が認められる。共に、瓦を転用したもので、一辺が6.7cm前後を測る正方形を呈し中央部が穿孔される。形態的には、石製の温石に類似し(扇浦他1988)、表面の一部に煤付着が認められることから、土製の温石と推定しておきたい。

土錘状の製品は、19号地下式土坑—24に認められ、焼塩壺蓋Ⅱ類の転用品である。蓋のかえし部を打ち欠いた後に、両端部にえぐりを作り出したものである。

以上、土製品について概観したが、本地点の特徴として、人形、ミニチュア製品、泥面子等の玩具類が非常に少ないという点が指摘される。これらは、都内の江戸時代遺跡において、比較的多く認められる遺物のひとつであり、特に真砂遺跡(中井1987)、三栄町遺跡(加納1988)等においては、多量に出土している。この玩具類が、おもに子供の遊び道具として使用されたと考えるならば、本地点における玩具類が非常に少ないことは、そこに生活した人間の年齢層を反映するものかもしれない。土製の基石が総数の約九割を占めていることも、このことと無関係ではないであろう。

#### 文献

- 扇浦正義他, 1988: その他の石製品。新宿区教育委員会, 三栄町遺跡, pp.198—204。  
加納梓, 1988: 土製品。新宿区教育委員会, 三栄町遺跡, pp.78—115。  
小林謙一, 1986 a: 瓦質・土師質土器。港区麻布台一丁目遺跡調査団編, 郵政省飯倉分館構内遺跡, pp.258—279。  
小林謙一, 1986 b: 江戸における近世瓦質・土師質火鉢について——麻布台一丁目遺跡出土資料を中心に——。  
慶応義塾大学考古学研究会二十周年記念論集: 79—94。慶応義塾大学考古学研究会。  
辻真人, 1988: 焙烙の変遷。江戸の食文化 江戸遺跡研究会第一回大会・発表要旨: 21—26。江戸遺跡研究会。  
中井さやか, 1987: 人形。土製玩具, ミニチュア。真砂遺跡調査会, 真砂遺跡, pp.271—290。  
原田大介・鈴木泰治, 1987: 陶磁器類。真砂遺跡調査会, 真砂遺跡, pp.148—270。  
渡辺志津子, 1988: 土器。新宿区教育委員会, 三栄町遺跡, pp.56—77。

## 8. 瓦類

加藤 晃

理学部7号館地点における瓦の遺構毎の出土量は、東京大学構内の他の調査地点と比べて、総体的に少ない。特に、軒瓦については同範資料がまとまって出土することがなく、ほとんどが1点のみの出土であるため、遺構からの一括出土資料に基づいた時間的変化の検討が難しい。そのため、瓦の特徴、および東京大学構内の他の調査地点において明らかになった瓦の変遷を参考にして、記載を行った（加藤晃1987、東京大学遺跡調査室 n.d.）。

**軒丸瓦** 軒丸瓦には、梅鉢紋（表20）、連珠三つ巴文（表21）の2文様がある。梅鉢紋は、無剣梅鉢紋（1類）と剣梅鉢紋（2類）とに分類できる。

1類（無剣梅鉢紋）：2範型が確認された。

a：花卉の断面形が長方形状である（70号土坑-3）。

b：花卉の断面形が蒲鉾状である（1号土坑-91）。

2類（剣梅鉢紋）：6範型が確認された。いずれも断面形は蒲鉾状である。範型ごとにa～fに分類した。

梅鉢紋は、東京大学構内の他の調査地点における出土状況を考慮に入れるならば、1類a→1類b→2類の変遷が考えられる（東京大学遺跡調査室 n.d.）。

連珠三つ巴文は、巴と圏線との位置関係により、3類と4類に分類できる。

3類：巴の外側に圏線が巡る。珠文数は16個である（70号土坑-4）。

4類：巴の尾が圏線に接する。珠文数は不明（4号井戸-76）。

**軒平瓦** 軒平瓦には6文様9範型が確認できた（表22）。文様別に6類に分類した。

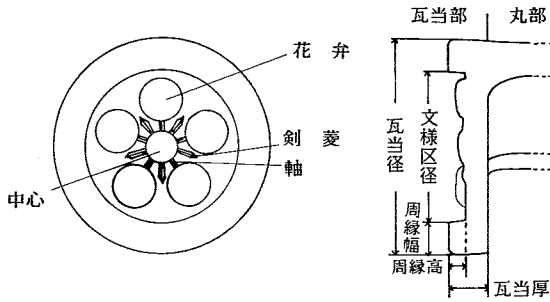
1類：瓦当面の形態がいわゆる「三角垂面形」を呈する（関野1928）。東京大学構内の御殿下グラウンド地点で検出された同範資料には、中心飾りに梅鉢が配され、金箔が貼られている。本地点出土の資料（4号地下式土坑-105）は瓦当面の3分の1のみ残存しているだけであり、被熱を受けているため金箔の痕跡はみられないが、おそらくは金箔瓦<sup>7)</sup>であったと推測される。

2類：文様は、中心飾りと唐草1反転のみ確認できる。金箔を貼るための接着剤としての黒漆が若干残存していることから、金箔が貼られていたことがわかる（18号地下式土坑-30）。

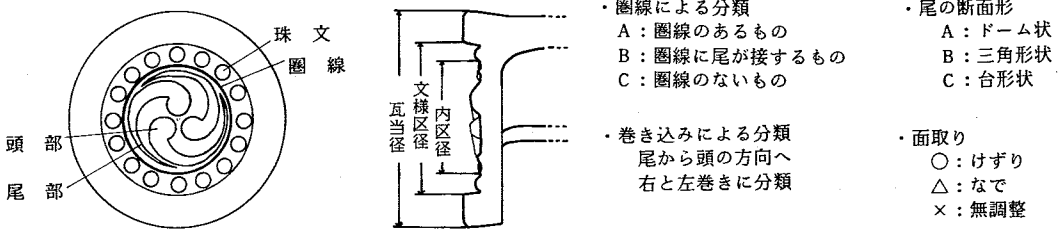
3類：文様は中心飾りと2反転する唐草と子葉から構成される。本地点の出土資料は中心飾りが欠けているが、御殿下グラウンド地点から検出された同範資料から、上部が丸味を帯びる



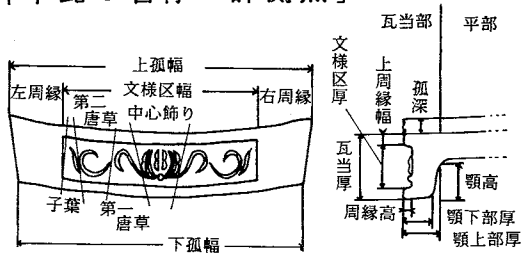
[軒丸瓦・梅鉢紋の名称・計測点]



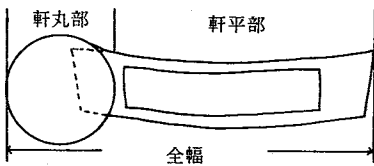
[軒丸瓦・連珠三つ巴文の名称・計測点・分類]



[軒平瓦の名称・計測点]



[軒棧瓦の名称・計測点]



\* 軒丸部・軒平部の名称、計測点は、それぞれ、軒丸瓦連珠三つ巴文と軒平瓦の名称・計測点に準じる。

[丸瓦の名称・計測点]

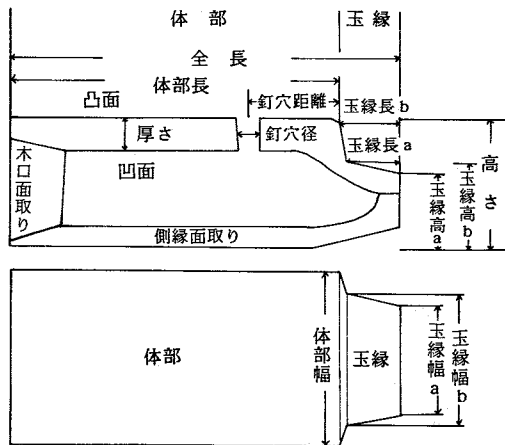


図 207 瓦の名称・計測点・分類

Figure 207 Classifications, measurement points and part names of roof tiles

表 20 梅鉢紋計測値  
Table 20 Measurement of rooftiles with family insignia

単位 (mm)

分類	遺物番号	図版番号	瓦 当		文 様	周 縁 面 取 り				花 弁 径	中 心 径	軸		剣	
			径	厚		区 径	幅	高	内			外	長	幅	長
					区 径					幅	高				
1 類 a	70号土坑-3	図110	152	24	116	18	5	○	○	31	22	10	5		
1 類 b	1号土坑-91	図72	26			23	9	△	○	30	12	4			
2 類 a	6号地下式土坑-52	図56	164	25	114	25	10	△	○	35	21	11	5	11	5
2 類 c	6号地下式土坑-53	図56	163	29	113	25	10	△	○	35	21	11	5	11	5
2 類 b	83号土坑-16	図129	159	29	115	22	7	△	○	32	20	14	5	16	7
2 類 c	112号土坑-9	図176	156	26	108	24	9	△	○	30	23	11	6	11	8
2 類 d	138・139・140号土坑-8	図187	156	27	106	25	8	△	○	33	20	8	6	12	7
2 類 e	54号土坑-9	図103	152	26	114	19	7	△	○	30	22	7	5	10	6
2 類 f	4号地下式土坑-104	図42		30		24	8	△	○	31					

(アンダーラインは復元値を示す)

表 21 連珠三つ巴文計測値  
Table 21 Measurement of rooftiles with renju mitsudomoe mon (rooftile design)

単位 (mm)

分類	遺物番号	図版番号	瓦 当		文 様	内 区 径	周 縁 面 取 り				珠 文 径 数	巴 長 断面	圓 線	卷 込	
			径	厚			区 径	幅	高	内					外
					区 径	幅					高	内	外		
3 類	70号土坑-4	図110	160	26	108	62	24	9	×	○	13	16	A	A	右
4 類	4号井戸-76	図143									13		A	B	右

(アンダーラインは復元値を示す)

表 22 軒平瓦計測値  
Table 22 Measurement of designed flat rooftiles

単位 (mm)

分類	遺物番号	図版番号	瓦 当				文 様 区		周 縁 面 取 り								頭			
			上 弧 幅	下 弧 幅	厚 さ	弧 深	幅	厚 さ	上	内 外	下	内 外	左	内 外	右	内 外	高 さ	上 部	下 部	厚 さ
1 類	4号地下式土坑-105	図42																		
2 類	18号地下式土坑-30	図162					24	8	△	○										
3 類	1号土坑-92	図72			48		26	14	×	○	8	×	△	58	×	△				
4 類	5号井戸-15	図146	252	250	45	23	144	22	15	×	○	8	×	○	54	×	-	54	×	○
5 類 a	5号地下式土坑-78	図50	252	248	45		150	25	9	△	○	11	△	△			51	△	△	
5 類 b	9号地下式土坑-37	図125	254	246	45		148	25	11	×	○	9	×	△	53	×	△			
5 類 c	13号地下式土坑-41	図154			48		27	11	△	○	10	×	△							
5 類 d	26号土坑-7	図94	232	230	38		116	21	10	×	○	7	-	△			48	△	-	
6 類	16号地下式土坑-20	図158	256	256	45		148	26	11	×	○	8	×	○	54	×	○			

(アンダーラインは復元値を示す)

表 23 軒棧瓦軒丸部計測値  
Table 23 Measurement of semi-circular parts of complete rooftiles

単位 (mm)

分類	遺物番号	図版番号	瓦 当		文 様	内 区 径	周 縁 面 取 り				珠 文 径 数	巴 長 断面	圓 線	卷 込	
			径	厚			区 径	幅	高	内					外
					区 径	幅					高	内	外		
1 類 b	4号井戸-75	図143	80	18	50	46	15	6	△	○		44%	A	C	右

中央と外反する脇から構成されることが判明している。唐草は、先端がやや膨らみ丸味を帯びている。子葉は下端が二又に分かれている（1号土坑-92）。

4類：文様は中心飾りと唐草1反転と子葉で構成される。中心飾りは上部が三又に分かれる中央とY字状の脇と、への字状の萼によって構成される。唐草は巻き込みが少ない。子葉は枝分かれしている（5号井戸-15）。

5類：4範型が確認できた。文様は、中心飾りと唐草2反転と子葉から構成される。中心飾りは、点珠と8の字状にくびれがあり沈線で分割されている中央、重線で内湾し外線にくびれをもつ脇で構成される。唐草は重線である。子葉は短い（範型a：5号地下式土坑-78，範型b：9号地下式土坑-37，範型c：13号地下式土坑-41，範型d：26号土坑-7）。範型a・b・cは上弧幅が254mm前後であり、範型dは上弧幅が232mmと狭い。同文異範の資料が他遺跡に多数見られる<sup>2)</sup>。

6類：文様構成は5類と同じである。唐草が単線に変化している。棧瓦葺きに使用された軒平瓦と考えられる（16号地下式土坑-20）。

軒平瓦の大きさは3種類に大別され、3類が大型、4，5a・b・c，6類は上弧幅が254mm前後の中型、5類dのみが上弧幅が232mmと小型である。軒平瓦は、金箔瓦の1・2類が江戸初期で最も古く、次に3・4類、そして5類への変遷が考えられる。

**軒棧瓦** 軒棧瓦には軒平部が8文様9範型確認できた（表24）。うち、一範型では、軒丸部（表23）が確認された。軒棧瓦の文様は、軒平瓦5類と基本的な文様構成が同一である。ここでは、各部の特徴の差異に基づいて、類別を行なっている<sup>3)</sup>。

1類：2範型が確認できた（範型a：AB区柱穴類-16，範型b：4号井戸-75）。唐草は重線で外線に3か所突起がある。子葉は重線で短い。範型bの軒丸部は三つ巴文である。

2類：唐草は重線で、第1唐草は内線が、第2唐草は外線が、巻き込み先端が丸味を帯びている。子葉は単線で短い。右周縁に丸に×の陽刻の刻印が押されている（遺構外-88）。

3類：唐草が単線で巻き込み部の幅が広くなり先端が尖っている。子葉は重線で短い（1号土坑-93）。

4類：唐草は単線で、第1唐草は3か所に突起があり、第2唐草は巻き込み先端が尖っている（5号地下式土坑-79）。

5類：唐草は単線で、第1唐草は突起が3か所にあり、第2唐草は巻き込み部の先端が丸みを帯びている。子葉は単線で短い。右周縁に四つ方形の刻印が押されている（2号遺物集中-2）。

6類：唐草は単線で、巻き込み先端が丸味を帯びる。子葉は短い（4号遺物集中-2）。

7類：唐草は単線で、巻き込み先端が肥大化し円盤状である。子葉は第2唐草の巻き込み部まで伸びている（4号遺物集中—1）。

8類：唐草は単線で、巻き込み先端が肥大化し円盤状である。子葉は第2唐草の巻き込み部まで伸び、太くなっている（43号土坑—15）。

軒棧瓦軒平部の文様は、軒平瓦5類と文様構成が同一であり、細部の特徴の差異が時間的変化を示す。唐草では、軒平瓦5類が重線であることから、軒棧瓦の軒平部でも古い段階のみに重線が用いられていたと考えられる。また、巻き込み先端の変化は、軒平瓦5類では尖っているが軒棧瓦の段階では、2・5・6類にみられるように巻き込み先端が丸味を帯び、さらに7・8類では肥大化し円盤状へと変遷している。子葉でも、重線が早い段階のみに見られ、単線は長大化の傾向が7類にみられ、特に8類が顕著である。

以上の点から1~4類→5・6類→7類→8類の変遷が考えられる。

**丸瓦** 丸瓦は製作痕、法量、形態によって8類に分類が可能である（表25）。

製作痕では、凹面にみられる布袋痕の変化が顕著である。布袋は模骨に被せられ、粘土板がその上から巻かれ、玉縁を成形した後、模骨から粘土筒を抜き易くするために用いられる。布袋には刺し縫いが施され、刺し子と呼ばれる布である。刺し子は、刺し縫いの間隔が開けられて施されている資料と、間隔を開けずに密に施される資料とがある。前者を刺し子a、後者を刺し子bと呼称する。また、布袋は、布の上端と下端のみしか縫い合わせていないために、模骨が直接瓦の凹面に接し、模骨の痕跡が確認される資料もある。

1類：布袋痕には刺し子aが施されている（2号井戸—11、2号土坑—203）。

2類：布袋痕には玉縁付近では刺し子b、体部では刺し子aへと変化している（83号土坑—17）。

3類：布袋痕には刺し子bが施され、体部では横方向にも刺し縫いが施されている。刺し縫いの間から布目が観察できる資料もある（9号地下式土坑—39、17号地下式土坑—9、10、20号地下式土坑—7、1号土坑—98）。3類の資料中には、遺構間で接合した資料が3点ある。その内訳は、20号地下式土坑と17号地下式土坑の間で2点、17号地下式土坑と4号井戸の間で1点である。

4類：軒丸瓦の丸部に当たり、体長が長く、釘穴が2か所にみられ、軒丸瓦用の丸部として製作されている。布袋痕は刺し子bが施されている。刺し縫いの間から布目が観察できる資料もある（1号土坑—95、83号土坑—18）。

5類：布袋痕には刺し子bが施されている。刺し縫いの間から布目が観察できる資料もある

表 24 軒棧瓦軒平部計測値

Table 24 Measurement of flat parts of complete rooftiles

単位 (mm)

分類	遺物番号	図版番号	瓦当				文縁区		周縁 面取り								額					
			全幅	下弧幅	厚さ	弧深	幅	厚さ	上	内外	下	内外	左	内	右	内外	高さ	上部	下部	厚さ		
1 類 a	A・B柱穴類-16	図120			50		25	15	×	○	10	×	○					5	26	18	31	
1 類 b	4号井戸-75	図143			45		27	10	×	○	8	×	○	20	×		4	30	21	28		
2 類	遺構外-88	図200			43		24	10	×	○	9	×	○			49	△	○	5	27	18	28
3 類	1号土坑-93	図72			50		26	14	×	○	10	×	○		50	×	○	7	28	18	31	
4 類	5号地下式土坑-79	図50			47		26	9	×	○	13	×	○				6	24	21	32		
5 類	2号遺物集中-2	図116			46		144	24	12	×	○	10	×	○	4	×	6	28	19	30		
6 類	4号遺物集中-2	図116			45		144	23	11	×	○	11	×	○		45	△	7	27	16	26	
7 類	4号遺物集中-1	図116			44		23	10	×	○	11	×	○		57	×	○	5	29	20	31	
8 類	43号土坑-15	図100			45		142	24	13	×	○	8	×	○	7	×	5	27	17	26		

(アンダーラインは復元値を示す)

表 25 丸瓦計測値

Table 25 Measurement of semi-circular rooftiles

単位 (mm)

分類	遺物番号	図版番号	全長	体長	幅	高さ	玉縁長		玉縁高		玉縁幅		側縁(度)		釘穴		釘穴	
							b	c	a	b	a	b	左	右	距離	径		
1 類	2号井戸-11	図25																
1 類	2号土坑-203	図85																
2 類	83号土坑-17	図129	296	258	137	63	38	38	35	48	80	109	33°	45°	30	13		
3 類	9号地下式土坑-39	図126	320	278	136	70	39	42					35°	37°				
3 類	17号地下式土坑-9	図159			143	70							32°	33°				
3 類	17号地下式土坑-10	図159			146	71							30°	30°				
3 類	20号地下式土坑-7	図169																
3 類	1号土坑-98	図74																
4 類	83号土坑-18	図130	399	362	156	77	34	37	44	60	74	118	29°	26°	39	15	155	13
4 類	1号土坑-95	図73			156	78	38	39	45	61	89	125	30°	30°	48	14	178	13
5 類	9号地下式土坑-38	図126	287	252	138	62	32	36	35	47	70	109	45°	36°				
5 類	1号土坑-96	図73			137	63	32	38	37	47	77	108	30°	31°				
5 類	4号井戸-78	図143			69	32	40	46	55									
6 類	1号遺物集中-17	図116			152	71	20	25	45	56	95	115	31°	36°				
6 類	13号地下式土坑-42	図154			146	72	17	23	50	60	85	113	40°	30°				
6 類	13号地下式土坑-43	図154			143	66	19	21	40	47	91	110	40°	32°				
7 類	1号土坑-94	図72	235		116						67	83			38	10		
8 類	1号土坑-97	図74				55	57											

(アンダーラインは復元値を示す)

表 26 平瓦計測値

Table 26 Measurement of flat rooftiles

単位 (mm)

分類	遺物番号	図版番号	長	幅			厚さ		弧深		弧	葺
				広端	狭端	中心	広	狭	広	狭		
1 類	16号地下式土坑-19	図158	275	251	243	246	18	16	20	22	狭	
1 類	108号土坑-8	図174	260	240			16	18	24	22	狭	

(9号地下式土坑—38, 1号土坑—96, 4号井戸—78)。

6類：布袋痕は刺し子bが施されている。玉縁長が短い(1号遺物集中—17, 13号地下式土坑—42, 43)。

7類：玉縁の付け根に溝が施されている特異な形態を示す資料であり、当該資料は軒丸瓦の丸部である。玉縁付近では刺し子b, 体部では刺し子aへと変化し、横方向の刺し縫いも加えられている。また、抜き取り紐が施されている(1号土坑—94)。

8類：大型の丸瓦であり、棟瓦として使用されていたものと推察される。布袋痕には刺し子bが施されている。また、抜き取り紐が施されている(1号土坑—97)。

布袋痕では刺し子aから刺し子bへの変化が考えられる。また、玉縁長においては2~5類と6類の間の差が顕著であり、後者が短く、時間的变化として捉えられる。

以上の点から、丸瓦の変遷は1類→2・7類→3・4・5・8類→6類が考えられる。

**平瓦** 平瓦(16号地下式土坑—19, 108号土坑—8:表26)は、凹面が丁寧に磨かれ、狭端、両側縁は面取りがなされている。凸面には、砂粒の付着がみられ、狭端近くに孤線状に圧痕がみられる。葺足長は明瞭に観察することができない。

\*

以下、丸瓦の布袋痕について、若干の考察を加える。

布袋に刺し子が施された理由には2つのことが考えられる。第1には、刺し子本来の機能である布の補強のためである。第2には、瓦の製作上、模骨を粘土筒から抜き取る際に布袋痕と粘土筒の密着を強くするために刺し縫いが施された可能性を指摘できる。

室町時代の資料では密着を強くするために一般的に抜き取り紐がWの字上に布袋に縫いつけられていた(奈良市1979)。近世の資料では抜き取り紐は若干残存するだけになる。この理由は、近世の瓦が小型化したため抜き取り紐を施さなくとも十分な密着力が得られるためと考えられる。このことは、8類にみられる大型の丸瓦では抜き取り紐痕が必ず見られる点からも伺える。一方、大型の丸瓦以外では、抜き取り紐痕が認められる資料は、軒丸瓦1類(無剣梅鉢紋)に伴う時期に限定されることから、これらの資料は、中世的要素が残ったものとして理解することができる。

刺し子aからbへの変遷は、刺し子aが無剣梅鉢の時期にしか見られないのに対して、刺し子bは無剣梅鉢、剣梅鉢の両者にともない、剣梅鉢の時期にはbしか認められない点から伺える<sup>4)</sup>。その過渡期には、丸瓦2類にみられるような凹面玉縁よりのみに刺し子bが施される。丸瓦2類にみられる様な布袋の状態は、丸瓦の製作過程において、模骨から抜き取る際に一番重さのかかる部分の密着を強化するためと考えられる。また、全体に刺し子bを施すようになっ

たのは、刺し子自体の技術の向上と推察することができる。

丸瓦3・7類における横方向の刺し縫いは、刺し子本来の機能である布の補強のためとみることができ、瓦の製作に関連するためのものとは考えにくい。

#### 註

- 1) 金箔瓦についての研究は、大阪城出土の金箔瓦の研究をした中村博司の論文が詳しい(中村1982)。
- 2) 東京大学法学部4号館・文学部3号館地点から多数の同文異範が検出されている。また、真砂遺跡(真砂遺跡調査会1987)、台東区浅草寺(加藤晋平1971)からも同文異範が報告されている。
- 3) 東京大学御殿下グラウンド地点から1~7類に同范例が確認され、法学部地点からは8類の同范例が確認されている。加藤晃1987においてその変遷が試みられている。
- 4) 江戸近郊の例としては、葛西城において、明暦の大火以前の層から刺し子aの出土が報告されている(葛西城址調査会1975a, b)。現在最古の例としては、天正4年(1576)に廃城された奈良県多聞城(奈良市1979)に例がみられる。

#### 文献

葛西城址調査会, 1975a: 青戸・葛西城 調査報告II。

葛西城址調査会, 1975b: 青戸・葛西城 調査報告III。

加藤晃, 1987: 近世の瓦について——加賀藩本郷江戸屋敷出土の瓦を中心に。江戸遺跡情報連絡会会報, No.8。

加藤晋平, 1971: 浅草寺私考。物質文化, 18, 物質文化研究会。

関野貞, 1928: 瓦。考古学講座, 雄山閣出版。

東京大学遺跡調査室, n.d.: 東京大学法学部4号館・文学部3号館建設地発掘調査報告。

中村博司, 1982: 大阪城金箔瓦に関する基礎的考察。大阪城の諸研究, 名著出版。

奈良市教育委員会, 1979: 多聞廃城跡発掘調査概要報告。

真砂遺跡調査会, 1987: 真砂遺跡。

## 9. 石製品

山口 剛志

### A. 硯

硯は、本地点から総数36点(接合したものは1点として算出)が出土し、この内の27点が遺構内より出土した。遺構別にみると、6号地下式土坑の8点、4号地下式土坑、27号土坑の各4点以外は、全て2点以下の出土である。以下、図示した15点について概観する。

本地点出土の硯は、全て長方硯と呼ばれるものである。遺存状態は、遺構外—110の1点を除いて全容を窺えるものはない。石質は、泥岩製の4号井戸—82と安山岩製の遺構外—113を除いて、全て粘板岩製である。

形態的特徴をみると、平面形の外面四隅が直角を呈するものは、6号地下式土坑—54、19号地下式土坑—28の2点、面取り整形されるものは、4号井戸—82、4号地下式土坑—106、6号

地下式土坑—55, 遺構外—111～115の8点, 隅丸を呈するものは, 1号井戸—56, 27号土坑—22, 遺構外—110の3点が認められ, 面取り整形されるものが最も多い。平面形の内面四隅は, いずれも隅丸を呈する。硯背と呼ばれる裏面は, 平坦なものがほとんどであるが, 6号地下式土坑—54, 遺構外—115の2点にはえぐり部が存在する。

墨をする陸部には, 長軸方向の擦痕が認められる例が多い。また, 1号井戸—56, 遺構外—110の2点は陸部の全面に短軸方向への削痕状の刻みが認められる。前者は, 墨をするときに生じた擦痕と思われ, 後者は, 墨のすりを良くするために刻みを付けたものである。陸部の中心である墨道は, ほぼ平坦なものが多いが, 4号地下式土坑—106, 6号地下式土坑—55, 遺構外—110・111の4点は明瞭に短軸の断面が凹状を呈する。

硯背に認められる線刻は, 6号地下式土坑—54のえぐり部の内部に, 「上□高嶋石」の線刻があり, 滋賀県高嶋産の硯と考えられる(水野1985)。遺構外—111は, 「清・澗」と判読できる線刻が認められる。この他, 14号土坑—32にも線刻らしきものが認められるが, 欠損しており判読できない。

以上, 本地点出土の硯について概観したが, 彫刻が施された硯や陶硯等が認められず, 長方硯のみの出土であるという点が, 本地点の特徴といえよう。

## B. 砥石

砥石は, 総数117点(接合したものは1点として算出)が本地点において出土した。この内の88点が遺構内から出土したが, 4号, 5号地下式土坑の各9点を除けば, その出土量は5点以下の遺構が圧倒的に多い。

砥石は, 素材の粒子の違いや硬さによって, 荒砥, 中砥, 仕上げ砥の三種類に分類可能である(五十嵐1986)。本地点においては, 荒砥と中砥を識別することができなかったため, ここでは, 粒子の粗いものを荒砥(中砥も含まれていると思われる), 細かいものを仕上げ砥に大別した。以下, 荒砥と仕上げ砥について, 図示した37点を中心に形態的特徴を概観する。

**荒砥**: 総数46点がこれにあたり, この内の18点を図示した。石質による内訳は, 流紋岩18点, 泥岩13点, 砂岩12点, 凝灰岩2点, 安山岩1点であり, 粒子が粗い, または硬質の素材が使用されている。遺存状態は両端部を欠損する例が多く, 完形品は遺構外—120の1点にすぎない。

形態的特徴をまとめてみると, 砥面は, 表裏面と両側面の4面の他に, 端部に至るものまであり, 概して4面以上を使用したものが多い。このため, 砥石の形態は多様であり, 砥石製作時の整形痕が認められる例は少ない。縦断面は, 凹状を呈するものが多く, 特に遺構外—120は, この凹状の面を平坦にするために表面の両端側を削り取った例である。砥面の擦痕は, 比較的



多く認められるが、この中でも2号土坑-204のような溝状の擦痕が多いという傾向が認められる。また、面取り整形される例も認められるが、仕上げ砥に比べると少ない。破損部を再調整する例は、3号地下式土坑-46、5号地下式土坑-80、6号地下式土坑-56の3点に認められる。

**仕上げ砥**：総数71点がこれにあたり、この内の19点を図示した。石質による内訳は、泥岩69点、凝灰岩2点であり、粒子の細かな泥岩が圧倒的に多く使用されている。遺存状態は、荒砥と同じく端部を欠損するものが多く、全体を知り得る資料は6号地下式土坑-58、7号地下式土坑-32、7・8号地下式土坑-32の3点のみである。

形態的な特徴についてみると、砥面が表表面の2面に認められるものが圧倒的に多く、砥面が表面のみのものは、裏面に砥石製作時の整形痕である平ノミ状痕が認められる。側面、端部は、砥石製作時の整形痕である直線状の切断痕が認められ、砥面として使用されたものはほとんどない。従って、平面形は、製作時の形状をそのまま残しており、ほぼ同一の形態である長方形を呈する。側面が砥石製作時の形状を残すもののうち、幅が1.1~2.0cmと極端に狭い6号地下式土坑-58、7号地下式土坑-32の2点を除けば、全て幅が4.6~6.2cmを測るものであり、特にそのうちの半数以上は、幅が4.6~5.0cmの範囲内に集中している。断面形は、やや凹状を呈するものもあるが、概して、ほぼ平坦な長方形を呈する。擦痕は、比較的多く認められるが、荒砥に認められるような溝状の擦痕は、遺構間接合-28(14号-54号土坑間)の破損後に再利用された1点に認められるのみである。面取り整形は、ほとんどのものに認められ、仕上げ砥の特徴のひとつである。破損部を再調整する例は、4号井戸-80、2号土坑-205、107号土坑-25、遺構外-124の4点である。また、破損品の再利用と思われる例は、7・8号地下式土坑-33、遺構間接合-28(14号、54号土坑)の2点に認められる。

以上、荒砥、仕上げ砥に大別して概観したが、両者の出土比率は、荒砥39%、仕上げ砥61%であり、仕上げ砥が多い傾向を示す。この数値を本地点周辺の遺跡と比較すると、郵政省飯倉分館構内遺跡(五十嵐1986)と増上寺子院群光学院・貞松院跡源興院跡(村上・芝本1988)で総数の94%、真砂遺跡(辻本・浜田1987)で総数の75%が仕上げ砥であり、本地点より仕上げ砥の出土比率が高い。また、江戸郊外の遺跡については、八王子市宇津木台遺跡群D地区(松島1987)で総数の96%が荒砥であり、江戸市中の遺跡とは対照的なあり方を示す。この点に関して報告者である松島満は、研ぐ対象物の違いによるものであろうとし、その対象物を農具と想定している。

このような荒砥と仕上げ砥における地域的な出土状況の違いは、注目すべき点である。この違いを研ぐ対象物の違いによるものとした点は、当時の地域的な環境差を考えた場合に現時点では妥当な見解であると言えよう。ただ、本地点におけるように、江戸市中でも荒砥が4割近

くの出土比率を示す例もあり、江戸市中の遺跡間においてもやや差が認められる。この点に関して、増上寺子院群光学院・貞松院跡源興院跡の砥石を検討した村上徹・芝本理香が、砥石の使用者を職人としている点は注目される。その根拠をはっきり呈示していない点が問題として残るが、このことは、そこに住んでいた人々が使用した砥石ではなく、専門の研ぎ職人が使用したものの可能性を示唆するものである。その職人が捨てた砥石が仕上げ砥であるとすれば、先の地域的な出土状況の違いというもの、研ぐ対象物の違いという点と共に、研ぎ職人の介在という江戸市中の社会的な性格を反映しているものと考えられる。

以上、地域的な出土状況の違いについて考えてみたが、江戸市中の遺跡においても、荒砥と仕上げ砥の出土比率に差が認められる。特に、本地点における荒砥の出土比率が高い点は、今後の類例を待って考えなければならない問題である。また、研ぎ職人が介在するのかという点も、検証していく必要がある。

### C. その他の石製品

ここでは、硯、砥石以外の石製品を一括した。図示したものは、24点である。

茶臼と考えられるものは、3点(うち2点を図示)が出土した。形態は、いずれも断面皿状を呈すると思われる。5号地下式土坑-81は、閃緑岩製であり、内外面共に丁寧な研磨によって整形される。A・B区柱穴類-6は、斑レイ岩製であり、同じく丁寧な研磨整形が行われる。茶の葉をひいて抹茶にする茶道具の一種であり、本地点の3点は、その下部受け皿状の部分であると考えられる。

温石(おんじゃく)と考えられるものが2点出土している。18号地下式土坑-28は、滑石と思われる石質で、上端部近くに径8mmの円孔が穿たれる。表面は研磨整形される。これと同形態の製品が、時代は異なるが鎌倉時代に比定される鎌倉市長勝寺遺跡出土の滑石製品に認められ、温石と推定されている(大橋1978)。122号土坑-9は、凝灰岩製で赤化しており、上端部近くに同じく径8mmの円孔が穿たれる。表面は研磨及び面取り整形される。これと同形態の製品は、三栄町遺跡(扇浦他1988)に認められ、温石と推定している。本地点出土の2点は、これらの資料と形態が類似していることから、同様の用途が推測される。

軽石は、3点が出土した。2号土坑-206は、上端部寄りに穿孔が認められる。遺構外-118・119もこれにあたる。3点共に磨滅が激しい。

火打石と考えられるものは、14点(うち9点を図示)が出土した。石質は、チャート9点、瑪瑙3点、長石2点であり、チャート製が最も多い。図示した9点は、稜に敲打痕が明瞭に認められる。12号地下式土坑-11、12号土坑-10、14号土坑-33、54号土坑-10、63号土坑-43、122号土坑-10、遺構外-126~128がこれにあたる。

基石は、7点出土し、すべて粘板岩製の黒石である。径2.0~2.2cm、厚さ0.3~0.6cmを測り、土製の基石よりやや薄い作りである。4号地下式土坑-109、19号地下式土坑-25、63号土坑-42、A・B区柱穴類-12、1号溝-4、遺構外-116・117がこれにあたる。

これらの他に、用途不明の製品として6号地下式土坑-59がある。石質は、長石と思われる。形態は、球形を呈し、中央に径5mmの円孔が穿たれる。表面は、光沢のある丁寧な研磨整形が行われているが、二次的に被熱して破損している。装飾用の珠であろう。

#### 文献

- 五十嵐彰, 1986: 砥石。郵政省飯倉分館構内遺跡, pp.89-90, 104-105, 204, 217-218。港区麻布台一丁目遺跡調査会。
- 扇浦正義他, 1988: その他の石製品。三栄町遺跡, pp.198-204。新宿区教育委員会。
- 大橋几士, 1978: 滑石製品。長勝寺遺跡, pp.139-141。かまくら春秋社。神奈川。
- 鈴木泰浩, 1987: 硯。真砂遺跡, pp.325-329。真砂遺跡調査会。
- 辻本崇夫・浜田晋介, 1987: 砥石。真砂遺跡, pp.317-324。真砂遺跡調査会。
- 長瀬衛, 1985: 石製品。江戸——都立一橋高校地点発掘調査報告——, pp.294-302。都立一橋高校内遺跡調査団。
- 松島満, 1987: 石製品。宇津木台遺跡群IX 1982~84年度(D地区)発掘調査報告書(2), pp.141-174。八王子市宇津木台地区遺跡調査会。
- 水野和雄, 1985: 日本石硯考——出土品を中心として——。考古学雑誌, 70(4):1-31。日本考古学会。
- 村上徹・芝本理香, 1988: 石製品。増上寺子院群 光学院・貞松院跡, 源興院跡——港区役所新庁舎建設に伴う発掘調査報告書——, pp.261-280。港区教育委員会。

## 10. 銅・鉄・錫製品

岩瀬 敏治

本地点からは、銭貨、煙管をはじめとする多数の銅・鉄・錫製品が出土しているが、その大部分、特に鉄製品については、腐食や錆の付着がひどく、実測図を示したものは、銅製品185点、鉄製品16点、錫製品1点の計202点である。

以下、用途別に概観するが、個々の特徴については、遺物観察表を、また、銭貨、煙管については計測値表もそれぞれ参照していただきたい。

**銭貨** 銭貨は、各遺構から、銅銭113点、鉄銭3点、一銭銅貨1点、十銭銀貨1点の計118点が出土しているが、ここでは、近代貨幣と、不明銭1点を除いた115点を図示した。その内訳は、渡来銭6点、古寛永24点、新寛永77点、雁首銭3点、不明5点である。

このうち、渡来銭の銭銘は、元祐通宝(2号井戸-12)、天聖元宝(7号地下式土坑-38)、熙

表 27 錢貨計測值表  
Table 27 Measurement of coins

遺物番号	計測値 (mm)			遺物番号	計測値 (mm)			遺物番号	計測値 (mm)		
	錢徑	穿徑	錢高		錢徑	穿徑	錢高		錢徑	穿徑	錢高
2号井戸-12	24.4	6.8	—	26号土坑-9	24.5	6.5	—	19号地土-51	22.9	6.6	—
2号井戸-13	—	5.9	0.8					19号地土-52	22.9	7.2	0.9
2号井戸-14	25.8	5.9	—	28号土坑-11	24.4	5.5	1.4	19号地土-53	22.8	6.8	1.0
								19号地土-54	22.0	1.9	0.9
4号地土-118	24.5	6.6	—	74号土坑-14	25.7	5.9	—	19号地土-55	21.6	6.6	—
4号地土-119	—	—	—					19号地土-56	21.5	6.5	0.8
4号地土-120	23.5	—	—	5号集中-9	27.8	6.0	1.3	19号地土-57	25.5	5.8	1.0
								19号地土-58	23.2	6.8	—
5号地土-87	25.4	5.8	1.6	6号集中-2	24.5	5.8	—	19号地土-59	24.6	6.9	—
5号地土-88	23.2	6.5	1.3					19号地土-60	24.2	6.2	—
5号地土-89	22.8	6.8	—	A B柱穴類-9	—	—	1.3	19号地土-61	—	—	—
5号地土-90	—	—	—	1号溝-5	—	6.6	—	19号地土-62	24.3	6.4	—
6号地土-67	22.8	6.0	1.3	9号地土-35	25.4	5.8	—	111号土坑-12	25.3	5.8	—
6号地土-68	23.6	6.0	—	9号地土-36	22.9	6.6	—	111号土坑-13	25.1	6.0	1.2
								111号土坑-14	22.4	6.8	1.0
7号地土-38	25.5	6.4	1.4	88号土坑-10	22.8	6.7	0.9	111号土坑-15	24.0	6.3	1.0
7号地土-39	23.9	5.5	1.3	88号土坑-11	22.3	7.0	0.9				
7号地土-40	25.4	6.0	1.4					117号土坑-1	24.5	5.9	1.4
7号地土-41	25.1	6.0	1.3	C D柱穴類-1	22.3	7.3	1.2	136号土坑-13	—	6.2	—
7号地土-42	24.0	6.3	1.2	4号井戸-83	24.4	6.2	1.4	136号土坑-14	24.9	7.0	—
								136号土坑-15	—	6.4	—
7·8号地土-42	24.3	6.5	—	10号地土-16	24.4	6.3	—	136号土坑-16	25.3	7.3	—
7·8号地土-43	24.4	5.9	—	10号地土-17	24.1	5.5	1.3	5号井戸, 136·137号土坑-10	22.0	5.6	1.5
7·8号地土-44	24.5	5.8	—	11号地土-17	24.5	5.3	—				
7·8号地土-45	25.0	5.9	—	11号地土-18	24.6	5.3	1.3	138·139·140号土坑-9	23.5	6.0	1.0
7·8号地土-46	25.4	5.8	—	11号地土-19	24.7	6.6	1.3				
7·8号地土-47	—	—	1.2	16号地土-21	22.4	6.5	—	141号土坑-8	24.4	6.5	1.1
7·8号地土-48	24.9	5.8	1.2	19号地土-35※	22.3	4.3	1.5	141号土坑-9	28.1	6.4	—
7·8号地土-49	23.2	6.6	—	19号地土-36	—	—	—	142号土坑-11	23.2	6.0	—
7·8号地土-50	23.6	6.2	1.2	19号地土-37	24.6	5.6	—	遺構外-133	—	—	—
7·8号地土-51	23.3	6.5	—	19号地土-38	24.8	5.8	—	遺構外-134	19.3	6.9	3.2
7·8号地土-52	22.3	6.8	—	19号地土-39	24.2	6.3	—	遺構外-135	24.4	5.7	1.1
7·8号地土-53	23.2	6.4	—	19号地土-40	24.5	5.7	—	遺構外-136	24.6	6.1	1.3
7·8号地土-54	26.5	6.3	—	19号地土-41	25.0	5.9	1.4	遺構外-137	23.3	6.1	—
7·8号地土-55	25.0	6.4	—	19号地土-42	25.4	5.7	1.3	遺構外-138	23.7	5.9	1.3
7·8号地土-56	24.6	6.5	—	19号地土-43	25.5	5.9	—	遺構外-139	23.0	6.5	1.4
				19号地土-44	25.5	6.1	0.9	遺構外-140	24.3	6.2	0.9
1号土坑-103	24.9	5.6	—	19号地土-45	22.8	6.2	0.9	遺構外-141	23.5	6.7	0.9
1号土坑-104	25.5	6.5	1.2	19号地土-46	23.5	6.5	1.2	遺構外-142	23.3	6.5	—
1号土坑-105	25.0	—	—	19号地土-47	23.2	6.3	—	遺構外-143	22.3	6.4	1.1
1号土坑-106	24.7	6.3	—	19号地土-48	22.5	7.2	0.9	遺構外-144	28.5	6.9	—
				19号地土-49	22.6	6.5	—				
2号土坑-214	24.5	5.5	—	19号地土-50	23.2	6.6	0.8				
2号土坑-215	24.5	5.8	1.4								
2号土坑-216	24.0	5.6	—								
2号土坑-217	24.2	5.5	1.3								
2号土坑-218	23.4	5.7	—								
16号土坑-17	28.2	6.4	1.3								

※19号地土-35 上段長徑、下段短徑。

寧元宝 (7・8号地下式土坑-42), 永樂通宝 (7・8号地下式土坑-43), 大觀通宝 (1号溝-5), 皇宋通宝 (19号地下式土坑-36) であるが, いずれも薄肉であることから, 模鑄銭と考えられる。また, 新寛永の内の元文一ノ瀬銭狭穿 (5号井戸・136・137号土坑-10) と, 銭銘不明の2点 (74号土坑-14, 141号土坑-9) は鉄銭である。

各遺構別の出土枚数は, 大半が1~6枚であるのに対して, 19号地下式土坑からの出土は28枚を数える。そして, この中に北宋銭から雁首銭までの幅広い時期の銭貨が含まれていることから, これらは九六銭と呼ばれる銭差しの一部と考えられる。

**煙管** 本地点から出土した煙管はいずれも銅製で, 各遺構から, 雁首, 吸口ともに20点ずつ, 計40点が出土している。このうち, 特に腐食のひどかったものを除いた, 雁首15点, 吸口19点を図示した。しかし, これらも遺存状態は概ね悪く, 完存品は, 7号地下式土坑-34, 52・53号土坑-9, 19号地下式土坑-31, 32, 33, 108号土坑-7の6点のみである。

表 28 煙管計測値表 (雁首)  
Table 28 Measurement of pipes (bowl parts)

遺物番号	計測値 (mm)							遺物番号	計測値 (mm)						
	a	b	c	d	e	f	g		a	b	c	d	e	f	g
4号地土-110	27.3	16.5	21.6	10.6	-	-	7.0	19号地土-29	61.3	-	-	-	9.1	9.2	-
4号地土-111	47.2	22.2	16.6	14.0	-	-	9.7	19号地土-30	45.5	-	-	-	8.9	8.9	-
5号地土-84	-	19.5	16.6	16.2	-	-	10.0	137号土坑-18	-	-	17.0	16.2	-	-	9.0
7・8号地土-34	43.7	-	-	-	8.4	8.4	-	5号井戸・136・137号土坑-8	41.5	11.5	12.0	10.3	14.0	13.6	-
2号土坑-207	51.6	-	-	-	9.0	9.3	-	遺構外-129	-	-	-	-	-	-	-
63号土坑-44	53.9	-	-	-	8.8	8.4	-	遺構外-130	-	-	-	-	-	-	-
1号集中-16	44.6	-	-	-	-	-	-	遺構外-131	30.4	10.4	-	9.8	7.5	8.9	5.0
13号地土-44	44.3	12.6	-	-	12.5	12.2	-								

註) \_\_\_\_ は現存長。

表 29 煙管計測値表 (吸口)  
Table 29 Measurement of pipes (stem parts)

遺物番号	計測値 (mm)			遺物番号	計測値 (mm)			遺物番号	計測値 (mm)		
	a	b	c		a	b	c		a	b	c
3号井戸-69	-	47.7	-	7・8号地土-35	-	95.2	-	19号地土-32	10.2	46.8	2.9
4号地土-112	-	41.1	2.7	1号土坑-102	-	40.3	-	19号地土-33	12.4	51.3	4.7
4号地土-113	-	51.2	-					108号土坑-7	10.8	35.5	6.1
4号地土-114	-	23.5	-	2号土坑-208	-	60.7	-				
4号地土-115	10.6	49.3	-	52・53号土坑-9	9.5	55.6	5.0	137号土坑-19	-	45.4	-
5号地土-85	-	68.9	-					5号井戸・136・137号土坑-9	12.8	58.4	-
5号地土-86	9.4	34.3	-	14号地土-16	8.9	38.7	-				
7号地土-34	9.4	33.9	4.4	19号地土-31	9.5	54.8	3.8				

註) \_\_\_\_ は現存長。

この中で、首部に波様の点刻が施されているもの1号遺物集中-16や、羅字接合部が八角形に成形されている19号地下式土坑-31が目される。なお、1号土坑-102, 19号地下式土坑-32, 33, 108号土坑-7, 137号土坑-19, 5号井戸・136・137号土坑-8の6点は、羅字と思われる木質部が残存している。

**釘** 本地点からは、各遺構から、銅製8点、鉄製2253点の計2261点が出土しているが、鉄釘のほとんどは腐食のための破損や、錆の付着がひどいため、図示したのは13点のみである。

内訳は、頭巻釘が銅製2点(7号地下式土坑-36, 119号土坑-7)、鉄製5点(69号土坑-1, 2, 3, 112号土坑-10, 11)の計7点、太鼓鋸が銅製4点(6号地下式土坑-66, 7・8号地下式土坑-36, 37, 遺構外-132)、平鋸が銅製1点(13号地下式土坑-46)、頭・脚部欠損のため不明の銅釘が1点(18号地下式土坑-35)である。このうち、頭部がTないしH形に成形された69号土坑-2や、木片の付着している112号土坑-10が目される。

**刃物類** 本地点から出土した刃物類は6点である。いずれも鉄製で、かなり腐食が進んでいる。内訳は、鎌(5号地下式土坑-82)、和鋏(6号地下式土坑-60)、小柄(2号土坑-212)、菜切り包丁(27号土坑-24)、短刀(遺構外-146)、不明(1号土坑-101)である。このうち、和鋏には、片面に炭化した畳状の繊維が付着していたが、これについては第6章第4節を参照し

表30 釘出土点数表  
Table 30 Numbers of nails recovered from the site

遺構番号	数量	遺構番号	数量	遺構番号	数量	遺構番号	数量
1号井戸	7	12号土坑	6 4	72号土坑	2	123号土坑	4
2号井戸	1 6	13号土坑	2 1	74号土坑	7	124号土坑	1 6
3号井戸	1	14号土坑	1 4 8	75号土坑	2 7	126号土坑	2
4号井戸	3	16号土坑	2 7	76号土坑	6	127号土坑	2
5号井戸、136		18号土坑	7	80号土坑	1	129号土坑	3
・137号土坑	1 3	19~21号土坑	1	81号土坑	5	130・131号土坑	2
3号地下式土坑	4	22号土坑	5	83号土坑	7 8	135号土坑	4
4号地下式土坑	7 0	24号土坑	1 2	84号土坑	1	136号土坑	4 2
5号地下式土坑	8 6	26号土坑	1 2	87号土坑	2	137号土坑	1 3
6号地下式土坑	7 3	27号土坑	2 2	88号土坑	8	138~140号土坑	7
7号地下式土坑	6 2	30号土坑	1	89号土坑	5	141号土坑	3 7
7・8号地下式土坑	6 3	35号土坑	2	90号土坑	1	142号土坑	7
9号地下式土坑	2 2	36号土坑	5	96号土坑	1 9	1号遺物集中	2 3
10号地下式土坑	6	43号土坑	2 5	99~101号土坑	3	2号遺物集中	2
11号地下式土坑	1 4	44号土坑	1	103号土坑	1	4号遺物集中	1
12号地下式土坑	1 9	45号土坑	1	106号土坑	1	5号遺物集中	1 2
13号地下式土坑	1 0 5	48号土坑	1 5	107号土坑	1 2	7号遺物集中	1
14号地下式土坑	2 8	52・53号土坑	8 6	108号土坑	2 9	10号遺物集中	1
16号地下式土坑	1	54号土坑	6 8	109号土坑	5 1	11号遺物集中	5
17号地下式土坑	4	56号土坑	1	111号土坑	1 3	1号溝	5
18号地下式土坑	2 5	57号土坑	2	112号土坑	5	柱穴・その他	1 1 4
19号地下式土坑	2 7	60号土坑	2	113号土坑	1 0	遺構外	1 2 4
1号土坑	5 9	62号土坑	3 6	114号土坑	4		
2号土坑	9 6	63号土坑	9 5	115・116号土坑	3		
5・6号土坑	3	68・69号土坑	1 5	119号土坑	1 7		
8・9号土坑	1	70号土坑	3	120号土坑	1		
11号土坑	1 1	71号土坑	1 0	121号土坑	8	計	2 2 5 3

ていただきたい。また、小柄は柄のみの出土で、刃部は確認していない。

**切羽** 切羽は、6号地下式土坑-63、14号土坑-34、88号土坑-8、9の4点が出土し、いずれも銅製である。このうち、14号土坑-34は周縁が鋸歯状に成形されており、88号土坑-9は、表面に繊維状の物質の付着が認められた。

**箸** 本地点から出土した箸と思われるものは、3号井戸-68と142号土坑-10の2点で、ともに銅製である。

**耳かき** 耳かきは、銅製の1点が遺構外から出土している（遺構外-145）。本資料は、その形態から、簪等の転用ではなく、初めから耳かきとして製作されたものと考えられる。

**水滴** 119号土坑-6はその色や軟度から錫製と考えられるが、本地点から出土した銅、鉄以外の金属製品はこの1点のみである。また、この破片は、中心部が穿孔されていることから、水滴の一部と考えられる。

**飾り金具** 本地点から出土した飾り金具と考えられるものは、4号地下式土坑-116、2号土坑-209、210、11号地下式土坑-20の4点で、いずれも銅製である。具体的な用途は不明である。

**蝶番** 6号地下式土坑-64は、蝶番と考えられる銅板で、釘穴とみられる穿孔が2ヶ所に認められる。

**錠前** 43号土坑-16は、円形の銅板である。鍵穴型の穿孔と、釘穴とみられる穿孔が認められることから、錠前の鍵穴部に用いられたと考えられる。

**鈎** 119号土坑-5は、長S字形を呈する鉄棒で、鈎として使用されたと考えられる。

**引手具** 引手具と考えられるのは、4号地下式土坑-117、9号地下式土坑-34の2点で、ともに銅製である。遺存状態は悪く、原形をとどめていない。

**つまみ** 6号地下式土坑-65は、容器の蓋や、小引出し等に付けられるつまみに類するものと考えられる。銅製である。

**釣針** 本地点から出土した釣針は2点で、ともに銅製である。内訳は、両面に波様の模様が点刻されている2号土坑-211と、釘からの転用と思われる81号土坑-1である。

**容器** 本地点から出土した容器は2点（7・8号地下式土坑-39、40）で、ともに銅製である。このうち、7・8号地下式土坑-40は皿の破片か、容器底部の破片と考えられる。

**鎖** 本地点から出土した鎖状に成形された銅線は、6号地下式土坑-62、10号地下式土坑-18の2点である。具体的な用途については、ともに不明である。

**線** 本地点からは鎖の他にも、3つ折りにされた状態で、錆のために固着した銅線が出土している（7号地下式土坑-35）。具体的な用途は不明である。

**管** 18号地下式土坑-34は管状銅製品である。具体的な用途は不明である。

以上、用途別に銅・鉄・錫製品について概観したが、本地点からは、この他にも用途不明の

ものが8点(6号地下式土坑-61, 7号地下式土坑-37, 7・8号地下式土坑-38, 2号土坑-213, 26号土坑-8, 71号土坑-9, A・B区柱穴類-5)出土している。このうち、鉄製の6号地下式土坑-61と、2号土坑-213を除いた6点は銅製である。

#### 文献

赤羽根秀一, 1976: 寛永通宝(古寛永銭) 大分類の手引き専門用語の解説つき。古仙堂。  
貨幣手帳 1974年版。ポナンザ。  
静岡いづみ会, 1986: 穴銭入門 四十~五十二。

## 11. ガラス製品

西田 泰民

ガラス製品は容器の一部と見られるもの4点, 棒・管の一部2点, 板状のもの2点が出土しているが, いずれも小さな破片であるため全体の形状を知ることができない。ほとんどが江戸時代後期の遺構から出土している。成分分析の結果は6章2節にまとめた。

7・8号地下式土坑-41, 12号地下式土坑-12はそれぞれ特徴的な発色をしており国産のガラス容器の一部であろう。両方とも鉛ガラスで薄手である。

119号土坑-3, 62号土坑-10は江戸の遺跡でよく出土する棒・管状のガラスでともに鉛ガラスである。119号土坑-3はねじりを加えた中実のガラス棒で簾, 筆巻の一部とも考えられる。弘化年間に作られた前田家の『表御納戸御道具目録帳』にも「ひいとろの簾」の記載がある。62号土坑-10は大部分が青緑色であるが白い部分もあり縞となっていたかも知れない。

9号遺物集中-7は角形の瓶の側部で表面に皺状の細かな起伏が見られる。これは形作りのために生じたもので, ヨーロッパ製品であることを松蔭女子学院大学の棚橋淳二先生に御教示戴いた。13号地下式土坑-45も稜を持つ容器の一部である。これらはソーダガラス製である。

その他の2点の板状ガラスもソーダガラスであるが用途は特定できない。135号土坑-5は片面に石灰様の付着物があり何かに貼付けられていたものようである。

なお通常最も多く出土するかんざしと確実に言えるものはなかった。

## 12. 骨角・鼈甲製品

秋元智也子

本地点からは, 全8点の骨角・鼈甲製品が出土している。

これらは, 大別すると, 装飾用品, 日用品, 用途不明の製品の3者に分けられる。大部分の



資料は破損しており、原形をとどめていない。

### (1) 装飾用品

#### 櫛 (80号土坑-1: 図127)

鼈甲製である。完形で出土した。左右は不対称で、片端の幅が狭くなる。両面には、歯を研ぎ出すための目安として、弧線が引かれている。

このような製作技法は、一橋高校地点の出土例と共通する。一橋高校地点では、2点の鼈甲製の櫛が確認されているが、2点とも、目安のための弧線を引き、歯を研ぎ出している(都立一橋高校内遺跡調査団1985)。また宇津木台遺跡群D地区でも、左右不対称をなす鼈甲製の櫛が出土している(八王子市宇津木台地区遺跡調査会1987)。近世における櫛の出土例は、木製品が大勢を占め、それらの大部分は、左右対称である(安藤他1988)。しかし、この左右対称の傾向が鼈甲製品についても同様であるかどうかについては、出土例が少なく、不明である。

#### 簪状製品 (5号地下式土坑-83: 図50)

大型の獣骨を研磨して製作したもので、両端は欠損しているが、次第に細くなる傾向が確認でき、両端を尖らせていたものと思われる。真砂遺跡では、本地点のものと類似した製品が確認されているが、これらは、一端のみを尖らせている(真砂遺跡調査会1987)。これらの用途として、簪、筭、箸等が考えられるが、現時点では、用途の特定は困難である。

#### 管状製品 (121号土坑-2: 図180)

大型獣の四肢骨を利用し、全面を研磨している。同様のものが、真砂遺跡においても出土している。緒締めなどの可能性が考えられる。

### (2) 日用品

#### 篋状製品 (4号遺物集中-3, 4: 図116)

骨を薄い篋状に加工し、全体に研磨を施す。類似した製品は、一橋高校地点、及び真砂遺跡でも確認されている。篋、あるいは柄であった可能性があるが、2点とも破損して、一部しか残存しておらず、性格は不明である。

#### 算盤の目盛り? (14号土坑-35: 図91, 27号土坑-25: 図96)

大型獣の骨を、細く薄い板状に加工する。表面には等間隔に、墨書で、数字、及び単位が施される。おそらく、算盤の上にはりつけて、計算の際の目安にしたものと思われる。このような製品の出土例は、他には確認されていない。

### (3) 用途不明の製品

板状製品 (63号土坑—45: 図 109)

全体を研磨し、薄い板状に加工する。破損しており、用途は不明である。

\*

近世の骨角製品は材質の原形を留めないほど研磨するため、原材料の動物学的な同定に必要な特徴が失われることが多く、今回出土した7点については、種の同定を行うことができなかった。ただし、製品の大きさを考慮すれば、これらは大型獣の骨から作られたことが推測される。

文献

安藤広道, 他, 1988: 櫛. 芝公園一丁目増上寺院群光学院・貞松院跡源興院跡——港区役所新庁舎建設に伴う発掘調査報告書——. 東京都港区教育委員会, pp. 406—414.  
 都立一橋高校遺跡調査団, 1985: 江戸——都立一橋高校地点発掘調査報告——。  
 八王子市宇津木台地区遺跡調査会, 1987: 宇津木台遺跡群 IX。  
 真砂遺跡調査会, 1987: 真砂遺跡。

13. 木製品・繊維類

岩瀬 敏治

本地点からは、各遺構から、多量の木片が出土しているが、その大部分は、細片であるうえ炭化しており、木製品の一部であるのか、あるいは、人為的な加工が施されていない木片であるのかを判別することは困難である。炭化物を出土した遺構の一覧を表 31 に示す。このうち、炭化材がまとまって出土した遺構 (1号井戸, 6号地下式土坑, 7・8号地下式土坑, 10号地下式土坑, 75号地下式土坑) の炭化物については、一括して千野裕道氏に同定を依頼した。また、これ以外の遺構から出土した炭化物のうち残存状態の良好なものおよび特に興味深いと考えられる 25 点については、松谷暁子氏に同定を依頼した。

保存状態が比較的良好で、明らかに木製品と認められた 10 点の資料については実測図を示し

表 31 炭化物出土遺構

Table 31 List of features with carbonized wood samples

1号井戸	10号地下式土坑	16号土坑	54号土坑	103号土坑	129号土坑
2号井戸	11号地下式土坑	18号土坑	55号土坑	107号土坑	136号土坑
3号井戸	13号地下式土坑	19~21号土坑	62号土坑	108号土坑	137号土坑
5号井戸, 136 -137号土坑	14号地下式土坑	24号土坑	63号土坑	109号土坑	141号土坑
	16号地下式土坑	26号土坑	68・69号土坑	111号土坑	142号土坑
3号地下式土坑	17号地下式土坑	27号土坑	71号土坑	112号土坑	1号遺物集中
4号地下式土坑	18号地下式土坑	28号土坑	74号土坑	113号土坑	3号遺物集中
5号地下式土坑	1号土坑	41号土坑	75号土坑	121号土坑	11号遺物集中
6号地下式土坑	2号土坑	43号土坑	76号土坑	122号土坑	1号溝
7号地下式土坑	11号土坑	46号土坑	81号土坑	123号土坑	柱穴・その他
7・8号地下式土坑	12号土坑	48号土坑	88号土坑	124号土坑	
9号地下式土坑	14号土坑	52・53号土坑	96号土坑	128号土坑	

た。これらの10点は、いずれも井戸内からの出土であり、その内訳は、1号井戸(図23)から、容器底部ないし蓋と思われる資料が1点(57)、底板と思われる資料2点(58, 59)、4号井戸(図144)から、下駄1点(84)、箸2点(85, 86)、底板と思われる資料3点(87, 88, 89)、墨書を有する板1点(90)である。このうち、4号井戸—90以外の9点、および、1号井戸、3号井戸、4号井戸の井戸底粹材については、上記の炭化物とともに千野裕道氏に同定を依頼した。この他に、漆製品の断片(写真77)が出土しているが、保存状態は不良である。

また、図示はしていないが、本地点からは、3遺構から繊維が出土している。その内訳は、9号地下式土坑から、布4片、1号土坑から、金糸数十本、7・8号地下式土坑から、縄状繊維5片である。なお、これらはいずれも、中田節子氏に鑑定を依頼した。

### 第3節 動植物遺存体

#### 1. 動物遺存体

秋元 智也子・小宮 孟

##### (1) 貝類

貝類は、全21種が同定された。種名は以下に示す通りである。

##### 軟体動物門 Mollusca

##### 单板綱 Class Monoplacophora

コドモガイ *Collisella (Conoidacmea) heroldi* (DUNKER)

##### 腹足綱 Class Gastropoda

クロアワビ *Nordotis discus* (REEVE)

ダンベイキサゴ *Umbonium (Suchium) giganteum* (LESSON)

サザエ *Batillus cornuts* (LIGHTFOOT)

サンショウガイ *Homalopoma nocturnum* (GOULD)

ウミニナ *Batillaria mnltiformis* (LISCHKE)

ツメタガイ *Nevertia (Sloosaulax) didyma* (RODING)

アカニシ *Rapana thomasiana* (CROSSE)

斧足綱 Class Pelecypoda

- アカガイ *Scapharca broughtonii* (SCHRENCK)  
ムラサキインコ *Septifer (Mytilisepta) beenae* NOMURA  
イガイ *Mytilus coruscus* GOULD  
イタヤガイ *Pecten (Notovola) albicans* (SCHROTER)  
ナミマガシワガイ *Anamia chinensis* PHILLIPPI  
マガキ *Crassostrea gigas* (THUNBERG)  
シジミガイ属種不明 *Corbicula* spp.  
アサリ *Tapes (Amygdala) philippinarum* (ADAMS et REEVE)  
ハマグリ *Meretrix lusoria* (RODING)  
バカガイ *Mactra chinensis* PHILLIPPI  
ミルクイ *Tresus beenae* (KURODA et HABE)  
シオフキ *Mactra veneriformis* REEVE  
オオノガイ *Mya (Arenomya) arenaria oonogai* MAKIYAMA

出土した貝類の中で特に目立つ量を示したのは、クロアワビ、サザエ、アカガイ、シジミガイ属、アサリ、ハマグリである。これらは現在でも代表的な食用貝類である。このことは、近世において食用として選択された貝類が、現在ときほど変化していないことを示している。

アワビでは、クロアワビのみが同定された。その大部分が原形をとどめず、破片となっていたものも多い。7号地下式土坑、9号地下式土坑、4号井戸で数多く検出されている。

サザエは、9号地下式土坑、1号土坑、2号土坑など、覆土の堆積年代が17世紀であると推定される遺構で、数多く検出された。特に2号土坑では、最小個体数で103個と出土したサザエ全体の1/3の量が検出された。

アカガイもサザエと同様に、覆土の堆積年代が17世紀であると推定される遺構からの出土が目立つ。中でも最も量の多い遺構は9号地下式土坑、90号土坑である。

シジミガイ属は、近世の各時期の遺構から出土しているが、2号土坑と12号土坑とで全体の約81%を占める。シジミガイ属には、ヤマトシジミ、マシジミなど、複数の種が含まれる。しかし、形態的にこれらを分類することは困難を要する。今回採集された標本には数種のシジミガイ属が含まれるが、以上の理由により種名は同定できなかった。

ハマグリも近世の各時期の遺構から出土し、特に2号土坑と12号土坑の出土量が多く、全体の出土量の約79%を占める。

アサリは、63号土坑から全体の約80%が出土し、他の遺構からの出土はわずかである。

表 32 出土貝類遺構別最小個体数

Table 32 Minimum numbers of shells recovered from each feature

	コ ド モ ガ イ	ク ロ ア ワ ビ	ダ ン ベ イ キ サ ゴ	サ ザ エ	ツ メ タ ガ イ	ア カ ニ ン	ア カ ガ イ	ム ラ サ キ イ ン コ	イ ガ イ	イ タ ヤ ガ イ	ナ ミ マ ガ シ ワ ガ イ	マ ガ キ	シ ジ ミ ガ イ 属	ア サ リ	ハ マ グ リ	バ カ ガ イ	ミ ル ク イ	シ オ フ キ	オ オ ノ ガ イ	
2号井戸		1			2															
4号井戸		4			18	4	7		1				1		5					
4号地下式土坑					1							1			1					3
5号地下式土坑		1			4	1														
7号地下式土坑		5			18		10					27	33	1	12		1			
9号地下式土坑		6			22		37			2			21		13					
11号地下式土坑					1	1														
13号地下式土坑					4															
16号地下式土坑		3			12		3					3				1				2
18号地下式土坑					3															
19号地下式土坑					2															
20号地下式土坑					1															
1号溝					5															
1号土坑					35		1													
2号土坑					103		13						604	5	282					
12号土坑	1	3			1	2	3						514	5	380					
13号土坑		1					1													
14号土坑					1		1						11							
16号土坑		2			3	2	8								5					
18号土坑													16		6					
24号土坑		1																		
27号土坑					1															
28号土坑		1																		
30号土坑		1			1										5					
36号土坑		1			1															
43号土坑		5			3		1											3		
47号土坑		1					1													
53号土坑					1		1												2	
54号土坑		1			4	1	1												2	
63号土坑		1			4								1	55	63					
72号土坑					1															
74号土坑						1														
75号土坑		1				3														
76号土坑						3	6					1		1	4					
81号土坑		1																		
82号土坑						1	2						8		1					
83号土坑		1			1															
88号土坑		3			4		14						32							
89号土坑					5															
90号土坑		1			1	1	43								1					
107号土坑		1			4	3									18				1	
112号土坑		2			1		1													
114号土坑					1															
122号土坑															1					
129号土坑							1													
130号土坑		1			1								1							
141号土坑						1														
1号遺物集中		2			1		1								3					
2号遺物集中															1					
5号遺物集中					1		1						2		2					
A B柱穴類					2										1					
C D柱穴類		1			1						1	3			1					
遺構外		16	1		36		25	1					18	2	32					
合計	1	70	1	311	1	30	182	1	1	2	1	35	1262	69	841	1	4	4	4	5

註) 資料の同定と最小個体数の算出は、赤澤威による。

その他、7号地下式土坑からマガキが多量に出土している。また、アカニシは少量づつではあるが全時期を通じて出土する。

このように、貝類は17世紀代と18世紀以降とで出土する種類に量的変化が存在するが、近世の全時代を通じて、選択された貝類にはあまり大きな変化は見られない。(秋元智也子)

## (2) 魚類

魚類は以下に示す30種類に分類された。

- 軟骨魚綱種不明 *Chondrichthyes* order indet.  
ニシン科種不明 *Clupeidae* gen. & sp. indet.  
マイワシ *Sardinops melanostictus* (Temminck et Schlegel)  
カタクチイワシ *Engraulis japonicus* (Houttuyn)  
ウナギ亜目種不明 *Anguilloidei* fam. indet.  
ウナギ *Anguilla japonica* Temminck et Schlegel  
サケ属種不明 *Oncorhynchus* sp.  
コイ科種不明 *Cyprinidae* gen. & sp. indet.  
ドジョウ科種不明 *Cobitidae* gen. & sp. indet.  
ナマズ *Silurus asotus* Linnaeus  
トラ科種不明 *Gadidae* gen. & sp. indet.  
マダラ *Gadus macrocephalus* Tilesius  
スケトウダラ *Theragra chalcogramma* (Pallas)  
カマス科種不明 *Sphyaenidae* gen. & sp. indet.  
カマス属 *Sphyaena* cf. *pinguis*  
ブリ属種不明 *Seriola* sp.  
マアジ属種不明 *Trachurus* sp.  
シイラ *Coryphaena hippurus* Linnaeus  
タイ科種不明 *Sparidae* gen. & sp. indet.  
キダイ *Dentex tumifrons* (Temminck et Schlegel)  
マダイ *Pagrus major* (Temminck et Schlegel)  
クロダイ属種不明 *Acanthopagrus* sp.  
サバ属種不明 *Scomber* sp.  
サワラ *Scomberomorus niphonius* (Cuvier)

カツオ *Katsuwonus pelamis* (Linnaeus)

マグロ 属種不明 *Thunnus* sp.

コチ *Platycephalus indicus* (Linnaeus)

カレイ 亜目種不明 Pleuronectoidei fam. indet.

フグ科種不明 Tetraodontidae gen. & sp. indet.

真骨類種不明 Teleostei order indet.

ニシン目 Clupeiformes

ニシン科 Clupeidae

1) マイワシ *Sardinops melanostictus*

同定資料：腹椎，尾椎

12号土坑および63号土坑のコラムサンプルから水洗分離した資料と7号地下式土坑の発掘採集資料中に混在していた。腹椎は神経棘が完全に離脱し，脊索孔が発達するなどニシン科魚類の腹椎と形態的特徴が一致する。後神経顆突起の特徴的な側面観にもとづくと本種に同定するのが妥当である。なお，尾椎資料は前神経顆突起と前血管顆突起が前方に伸長するものを本種に同定した。資料はいずれも2.0 mm，1.0 mm メッシュ面上で分離された。

2) ニシン科種不明 Clupeidae gen. & sp. indet.

同定資料：尾椎

63号土坑の上層堆積物の一括サンプルから水洗分離された。2.0 mm メッシュを通過した。骨性突起を欠損し，属以下の同定は困難である。

カタクチイワシ科 Engraulidae

3) カタクチイワシ *Engraulis japonicus*

同定資料：尾椎

75号土坑堆積物の一括サンプルから水洗分離された。このサンプルは系統的なコラムサンプルではないので，本資料が堆積物中にどの程度存在するかは明かでない。

ウナギ目 Anguilliformes

ウナギ科 Anguillidae

4) ウナギ *Anguilla japonica*

同定資料：尾椎

63号土坑のコラムサンプル中から水洗分離された。神経弓門と椎体が癒合する。椎体側面にみられる隆線の形状などから近縁のアナゴ科、ウツボ科などと区別して本種に同定した。

なお、科以下の区別が不明瞭な資料は、ウナギ亜目種不明として扱った。

サケ目 Salmoniformes

サケ科 Salmonidae

5) サケ属種不明 *Oncorhynchus* sp.

同定資料：腹椎，尾椎

9号地下式土坑，2号土坑，14号土坑，75号土坑から上記の資料が発見された。資料はいずれも網目状構造が発達し，腹椎前端には神経棘や側突起の離脱痕がみられる。腹椎の神経顆突起は発達しない。神経棘，血管棘は椎体の大きさに比して細い。遺跡から出土するサケ科の椎体資料の正確な同定は困難な場合が多いが，採集資料の大部分は椎体径（背腹径のこと，以下同じ）5 mm以上の大きさをもつことなどからイワナ属 *Salvelinus* などと区別して本属に同定した。なお，遺跡に脊椎以外の部位，たとえば頭骨などがどの程度残存しているかを知ることが，当時の調理法などを復原する上で興味のもたれるところであるが，今回は脊椎以外の部位を同定する余裕がなく，かかる問題の是非を検討することはできなかった。

コイ目 Cypriniformes

ドジョウ科 Cobitidae

6) ドジョウ科種不明 Cobitidae gen. & sp. indet.

同定資料：第3，第4脊椎

63号土坑のコラムサンプルから水洗分離した資料である。分離した第4脊椎および骨囊の形状は，HKC 8204 標本（ドジョウ *Misgurnus anguillicaudatus*，千葉県匝瑳郡光町，1982. VII）とは明らかに異なるが，比較標本の貧弱な現状では属以下の同定は困難である。63号土坑のサンプルからは上記現生標本と類似した脊椎骨資料が2種類出土しているため，この土坑内には2種以上のドジョウ科の骨が混在している可能性がある。なお，採集資料中には顎骨は含まれていなかった。

ナマズ目 Siluriformes

ナマズ科 Siluridae

7) ナマズ *Silurus asotus*



同定資料：胸鱗棘

70号土坑, 81号土坑から発掘中に発見された資料である。鰓棘両側縁に鋸歯状の突起がある。ナマズ以外の近縁種との比較検討は行っていないが、おそらく本種に由来するものと思われる。

タラ目 Gadiformes

タラ科 Gadidae

8) マダラ *Sadus macrocephalus*

スケトウダラ *Theragra chalcogramma*

同定部位：前上顎骨, 歯骨, 上顎骨, 方骨, 腹椎, 尾椎など

2号土坑, 81号土坑など多くの遺構から発掘中に発見された。資料の同定はいずれも現生標本との比較によって行った。しかし、資料の保存状態によっては近縁な両種の区別が困難な場合があり、これらはタラ科種不明 *Gadidae* gen. & sp. indet. として扱った。後出のタイ科魚類と同様にタラ科魚類は当時の調理法などを知ることができる数少ない魚種であるが、今回は、これらの詳細を調査し報告する時間的余裕はなかった。

スズキ目 Perciformes

カマス科 Sphyraenidae

9) カマス属 *Sphyraena* cf. *pinguis*

同定資料：前上顎骨, 歯骨, 口蓋骨

9号地下式土坑, 2号土坑から発見された。いずれも HKC 8613 標本 (アカカマス *Sphyraena pinguis*) と酷似する資料である。なお、上記の遺構からはタチウオ *Trichiurus lepturus* に類似した顎骨破片が出土しているが、両者の比較検討は不十分である。将来、比較標本が充実すれば同定上の問題は解決するはずであるが、今回はこれらを一応カマス科種不明 *Sphyraenidae* gen. & sp. indet. として扱った。

シイラ科 Coryphaenidae

10) シイラ *Coryphaena hippurus*

同定資料：尾椎

12号土坑の発掘時に発見された尾椎前部資料である。神経顆突起がよく発達する。神経棘起部に前上方へ向かう骨性突起があるなど本種標本と全体的な形態が酷似する。

タイ科 Sparidae

11) クロダイ属 *Acanthopagrus* sp.

マダイ *Pagrus major*

キダイ *Dentex tunifrons*

同定部位：前上顎骨，歯骨，上顎骨，角骨，額骨など

7号地下式土坑など多くの遺構から発掘中に発見された。上記3種はいずれも現生標本との比較によって同定したが，種レベルの同定が困難な破損資料についてはタイ科種不明 Sparidae gen. & sp. indet. として扱った。

サバ科 Scombridae

12) サワラ *Scomberomorus niphonius*

同定部位：腹椎

9号地下式土坑から発掘中に発見された資料である。椎体は前後に長く，椎体表面は縦走する細かい皺が存在するが，顕著に強い側隆線や顆突起を除くと骨性突起は弱く，全体に柔軟性のある独特の形態をとる。

13) カツオ *Katsuwonus pelamis*

同定部位：腹椎，尾椎

7号地下式土坑，81号土坑から発掘中に発見された。椎体の形態はマグロ属と類似するが，側隆線の形状や前後の顆突起とつながった血管棘などの特徴によって区別される。スマ *Euthynnus affinis* などの近縁種との比較検討は行っていない。

14) マグロ属種不明 *Thunnus* sp.

同定部位：腹椎，尾椎

7号地下式土坑，63号土坑，89号土坑の発掘時に発見された資料である。椎体径は25mm前後のものが多い。頭骨や尾椎後部の資料が採集資料中に含まれているかどうかを検討する時間的余裕がなく，種の同定は困難である。

15) 真骨類種不明 Teleostei order indet.

目以下の種同定が困難な資料を一括して扱った。この中には保存状態の良い資料も少なからず含まれており(図208)，これらは，比較標本が充実すれば，将来同定可能になるものと思

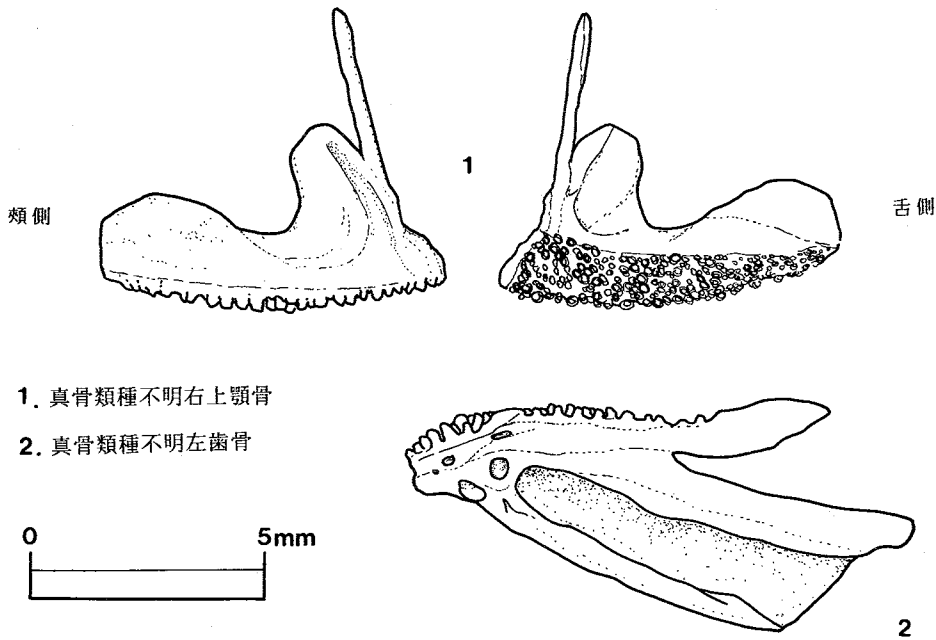


図 208 真骨類種不明実測図

Figure 208 Indeterminate fish bones (Teleostei order indet.)

われる。なお、今回の採集資料中には鋭い切痕のあるものが含まれていた。調理に伴う切痕と推定されるが、主に時間的な制約などから現生標本等との比較検討を充分行うことができなかった。後日、検討する機会が訪れたときこれらの問題について吟味を加える予定でいる。

#### 63号土坑コラムサンプルの水洗分離資料

63号土坑コラムサンプルにおける魚類資料の同定結果をサンプルのカット単位別に示すと表33のようになる。表中に示したサンプル番号①～⑮は各カット単位の採取順をあらわすもので、左から右へ向かうにつれて堆積物の深度が増す。また、サンプル番号の下段に記した数値は、同定資料を水洗分離した試験フルイのメッシュ目寸法を示している。

水洗分離された魚類資料は11種類に分類されたが、資料の出現頻度をサンプルの単位別に見ると、資料は各単位サンプルに一様に出現していないこと、①～④の覆土上層サンプルからは魚類資料が同定できなかったこと、魚類資料の出現頻度が高い単位サンプルは互いに連続しており、大きくは⑥～⑨、⑫、⑭～⑮の3群に分かれること、⑥～⑨の中層の単位サンプルにはドジョウ科とウナギに代表される淡水魚類資料の同定頻度が高く、⑭～⑮の最下層の単位サン

表 33 63号土坑コラムサンプル脊椎動物同定結果

Table 33 Numbers of identified fish bone samples found from a column sample of Pit No.63

種名	同定部位	サンプル番号 メッシュ寸法															合計
		①	②	③	④	⑤ 1 mm	⑥ 1 mm	⑦ 1 2 4 mm mm mm	⑧ 1 2 4 mm mm mm	⑨ 1 mm	⑩ 1 4 mm mm	⑪ 1 mm	⑫ 2 4 mm mm	⑬ 4 mm	⑭ 1 2 4 mm mm mm	⑮ 1 2 4 mm mm mm	
マイワシ	腹椎 尾椎														1 4 4	2	7 4
ウナギ	尾椎							3									3
ドジョウ科 種不明	第2脊椎 第4脊椎						1 3	1 3	20 9	12 5	5						2 3
ドジョウ型 (a)	腹椎 尾椎					1 3	1 3	3 1	20 9	12 5	5						42 18
ドジョウ型 (b)	腹椎 尾椎					1	2	1			1						5 1
サバ属	腹椎 尾椎														1*1*1	1 3	1 6
カツオ	腹椎						1										1
クロダイ属	左前上顎骨														1		1
タイ型	尾椎														1*		1
カレイ型	尾椎									1							1
真骨類種不明	右上顎骨 左上顎骨 腹椎 尾椎 椎体片							3 1 2 1	1 6	1 1		1 4*2* 1*2*		2*2 3*2*1	1*4* 1*2*		1 1 23 14 8
合計					1	5	4 10 34	1 1 27	7	1 1	1	5 6	1	8 6 10	2 10 2	143	

\* 付着物が表面に固着し、外部形態が十分観察できなかった資料。

表 34 12号土坑コラムサンプル脊椎動物同定結果

Table 34 Numbers of identified fish bone samples found from a column sample of Pit No.12

		①	②	③	④	⑤	⑧	合計
		2 4 mm mm	2 4 9.52 mm mm mm	2 4 mm mm	2 1 4 mm mm mm	4		
マイワシ	腹椎		1					1
マアジ属	稜鱗				1			1
タイ科	腹椎			1			1	2
マダイ	左前上顎骨			1				1
サバ属	尾椎	1	1					2
真骨類	腹椎 尾椎	1 2			1		1	1 4
合計		3 1	1 1 1	1 1	1 1	1 1	1	12

プルにはマイワシ、サバ属に代表される海魚の同定頻度が高いことなどが明らかである。

本号土坑の任意の地点から採取したコラムサンプルの内容が、本号土坑覆土全体の傾向をよく代表しているとする、この土坑覆土内には魚種組成を異にする魚骨層が少なくとも3枚堆積している可能性がある。なお、コラムサンプル下層の採集資料には、表面に淡褐色の付着物が固着しているものが多くみられたが、同じ単位サンプルに出現したマイワシ脊椎骨にはこれらの付着物は認められなかった。 (小宮 孟)

### (3) 両棲類, 爬虫類, 鳥類, 哺乳類

本地点より出土した、両棲類, 爬虫類, 鳥類, 哺乳類のうち、同定されたものは、全15種である。種名は以下に示す通りである。また、出土遺構と同定部位は表40に示す。資料の同定は、中里遺跡調査会の野苺家宏氏による。

#### 両棲類

ヒキガエル *Bufo bufo japonicus*

#### 爬虫類

カメ目 種不明 *Testudinata fam. indet.*

#### 鳥類

カモ属 種不明 *anas spp.*

キジ属 種不明 *Phasianus spp.*

シギ科 種不明 *Scolopacidae gen. & sp. indet.*

ヤマシギ *Scolopax wsticola* LINNAEUS

ヒバリ *Alauda awensis japonica* TEMMINCK & SCHLEGEL

ウグイス *Horeites cantans cantans* (TEMMINCK & SCHLEGEL)

#### 哺乳類

ヒト *Homo sapiens sapiens*

ウサギ科 種不明 *Leporidae gen. & sp. indet.*

ネズミ科 種不明 *Muridae gen. & sp. indet.*

イヌ *Canis familiaris*

イタチ科 種不明 *Mustelidae gen. & sp. indet.*

表 35 出土両棲類・爬虫類・鳥類・哺乳類同定結果

Table 35 Identification of amphibian, reptile, bird and mammal bones

遺構	種名	同定部位 (横の数字は、個数)
7号地下式土坑	カメ ネコ ネズミ科 カモ属 ヤマシギ	背甲1。 右上腕骨1。 左大腿骨1。 右上腕骨1、左上腕骨1、左尺骨1、左第Ⅱ第Ⅲ中手骨1。 右第Ⅱ第Ⅲ中手骨1。
9号地下式土坑	ヒキガエル イヌ キジ属 カモ属 シギ科 ウグイス?	右上腕骨1、左上腕骨1、左骨盤(腸骨; δ)1、右橈尺骨1、右大腿骨1、左大腿骨1、右脛腓骨1、左脛腓骨1、頭骨1、椎体1。 指骨3、尾椎1、右第Ⅱ中手骨1、右第Ⅲ中手骨1、左第Ⅱ中手骨1、左第Ⅲ中手骨1、左第Ⅳ中手骨1、左第Ⅴ中手骨1、右第Ⅱ中足骨1、右第Ⅲ中足骨1、右第Ⅳ中足骨1、右第Ⅴ中足骨1、左第Ⅱ中足骨1、左第Ⅲ中足骨1、左第Ⅳ中足骨1、左第Ⅴ中足骨1、左踵骨1、左尺骨1。 右中足骨(♀)1、左中足骨(♀)1。 右上腕骨1、左上腕骨1、左鳥口骨1、左尺骨1。 右脛骨1、右中足骨1。 頭骨1。
16号地下式土坑	イヌ	右上腕骨1、右尺骨1、左尺骨1、右橈骨1、左橈骨1。
2号井戸	カモ属	右鳥口骨1。
16号土坑	カモ属	左第Ⅱ第Ⅲ中手骨1、右第Ⅱ指中節骨1。
18号土坑	ウマ	左上顎第3乳臼歯1。
26号土坑	キジ属	右大腿骨1。
53号土坑	キジ属? カモ属	右大腿骨1。 右第Ⅱ第Ⅲ中手骨1。
54号土坑	ヒト カモ属	第5腰椎1。 右上腕骨1。
63号土坑	キジ属 カモ属	左上腕骨1、左第Ⅱ第Ⅲ中手骨1。 左尺骨1、左第Ⅱ第Ⅲ中手骨1。
70号土坑	カモ属	右尺骨1、右第Ⅱ第Ⅲ中手骨1。
81号土坑	カモ属 シギ科 ヤマシギ	右橈骨1。 右橈骨1。 右第Ⅱ第Ⅲ中手骨1。
88号土坑	カモ属	左第Ⅱ第Ⅲ中手骨1。
89号土坑	カモ属	右上腕骨1、左尺骨1、左橈骨1。
107号土坑	イヌ	右第1切歯1、右第2切歯1、右犬歯1、右下顎第1前臼歯1、右下顎第2前臼歯1、右下顎第3前臼歯1、右第3後臼歯、右下顎骨1。
124号土坑	ウマ	左上顎第1切歯1。
142号土坑	ウマ	右上顎第2乳臼歯1。
1号遺物集中	ウマ イタチ	左上顎第1前臼歯1。 左大腿骨1。
11号遺物集中	ヒバリ	右第Ⅱ第Ⅲ中手骨1。
A B柱穴類	ウマ カモ属	右第4乳臼歯1、左下顎第1乳臼歯1。 右上腕骨1。
E F G柱穴類	ウマ	右上顎第2(第3?)乳臼歯1。
遺構外	ウマ ウサギ キジ属	左上顎第2切歯1。 頸椎4、環椎1、腰椎1、仙椎1、上頸骨1、右上頸骨1、右下頸骨3、左下頸骨2、臼歯14、左切歯1、頭骨1、肋骨2、右第Ⅱ中手骨1、右第Ⅳ中手骨1、右橈骨1、左橈骨1、左脛骨1、右上腕骨1、左上腕骨1、右骨盤1、左骨盤1、右肩甲骨1、左肩甲骨1、右鼓包1、左鼓包1、右大腿骨1、左大腿骨1。 頸椎1、腰椎1、胸骨1、左鎖骨1、右鳥口骨1、右肩甲骨1、左肩甲骨1、右尺骨1、左尺骨1、右上腕骨1、左上腕骨1、左大腿骨1。

ネコ *Felis catus*

ウマ *Equus caballus*

両棲類では、9号地下式土坑から、ヒキガエルが出土している。また、爬虫類では、7号地下式土坑から、カメ目の一種の背甲が出土している。これらの骨には、切痕は認められない。

鳥類では、キジ属およびカモ属の出土が目立ち、これらは魚類以外の脊椎動物遺存体が出土した殆どすべての遺構から出土している。今回同定したキジ属には、ヤマドリ、ニワトリなどの鳥類が含まれ、またカモ属にもマガモ、カルガモなど数種のカモが含まれるが、これらを区別することはできなかった。キジ属およびカモ属の骨の一部には、切痕が認められた。

その他の鳥類では、7号地下式土坑、9号地下式土坑、81号土坑からヤマシギを含むシギ科の鳥類が、11号遺物集中からヒバリが、9号地下式土坑からウグイスと考えられる小型の鳥がそれぞれ同定された。しかし、これらの小型の鳥の骨には、切痕は認められない。

哺乳類で最も出土量が目立つのは、ウマの歯である。ウマの歯は、18号土坑、124号土坑、142号土坑、1号遺物集中、A・B区柱穴および小土坑、E・F・G区柱穴および小土坑、遺構外から全8点出土した。この内の5点は、3才半までに生え変わる乳歯である。その他の部位は、検出されていない。

イヌは、9号地下式土坑、16号地下式土坑、107号地下式土坑から、足の骨などが同定されたが、全身の骨は確認できなかった。ネコは、7号地下式土坑から左上腕骨が1点出土した。また、7号地下式土坑からネズミ科の一種の左大腿骨が、1号遺物集中からイタチの左大腿骨が出土した。ウサギは、遺構外から1個体以上の骨が出土した。これらの骨には、切痕は認められなかった。

54号土坑からは、ヒトの第5腰椎がほぼ完全な形で出土した。年齢は30代以上で性別は不明である。  
(秋元智也子)

#### (4) 考察

以上、理学部7号館地点から出土した動物遺存体について、その概要を述べた。この中から、2つの特徴をあげ、考察する。1つは、遺構の推定廃棄時期の違いによる、出土した動物遺存体の種の違いであり、もう1つは、魚貝類の遺存体の量に較べて、魚類以外の脊椎動物の遺存体が少ないことである。

第一に、時期的な違いについて考察する。表33・34・36～40は、出土した魚骨の同定結果を示したものである。表36と表37は、遺跡から出土した魚骨の各遺構毎の部位別出土数である。表36は、17世紀代の遺構であり、表37は、18世紀以降の遺構である。表33・34は、コラム

表 36 出土魚類同定結果 I, 17 世紀の遺構

Table 33 Numbers of identified fish bone samples found from 17th century features

		9号地土	2号土坑	70号土坑	89号土坑	129号土坑			9号地土	2号土坑	70号土坑	89号土坑	129号土坑	
ウナギ亜目	腹椎		1				タイ科	腹椎 第1間血管棘	1 1					
サケ属	腹椎 尾椎	1	10 3				キダイ	右前上顎骨 左前上顎骨 右主上顎骨 左主上顎骨	1 1 1 1	1 1 1 1				
コイ目	右主鰓蓋骨		1					右歯骨 左歯骨 額骨 副楔骨	1 1 1 1	2 1 3 1				
ナマズ	鱗棘			1										
タラ科	腹椎 尾椎		6 1											
マダラ	右前上顎骨 左前上顎骨 腹椎 尾椎 左方骨	1 1 1 1	1 1 2 11					マダイ	右前上顎骨 額骨 左前鰓蓋骨	1 1 1	1 1			
スケトウダラ	左主上顎骨 右歯骨 左歯骨 尾椎	1 3 2 4					サバ属	右歯骨 腹椎 尾椎	1 1 1	1 1				
							サワラ	腹椎	7					
カマス科	右前上顎骨 左前上顎骨 左歯骨 尾椎 口蓋骨	1 1 1 1 1					マダラ	右前上顎骨 左前上顎骨 左歯骨 尾椎 口蓋骨	1 1 1 1 1	1 1 1 1 1				
							マダラ	右歯骨 左歯骨 腹椎 口蓋骨	1 1 1 1	2 1 1 1				
							ブリ属	右前上顎骨 左歯骨 尾椎	1 1 2	1 1 2				
マアジ属	腹椎 尾椎		3 3				マダラ	右歯骨 左歯骨 左角骨 腹椎 尾椎	1 1 1 1 1	1 1 1 1 1	1 3 1	1 ※		
シイラ	尾椎		3				フグ科	右歯骨 右角骨	1				1 1	
							真骨類	右前上顎骨 右主上顎骨 左主上顎骨 右歯骨 左歯骨 左角骨 腹椎 尾椎	1 1 1 1 1 1 1 1	1 1 1 1 1 1 1 1	1 3 1	1 ※		
							合計		45	90	1	2	2	

※攪乱出土の可能性あり

註) 本表は、発掘調査中に検出された資料の同定結果を示したものであり、水洗選別資料(表38)からの出土数は本表には含まれていない。



表 37 出土魚類同定結果Ⅱ, 18~19世紀の遺構

Table 34 Numbers of identified fish bone samples found from 18th and 19th century features

		3号地下式土坑	7号地下式土坑	13号地下式土坑	12号土坑	14号土坑	18号土坑	27号土坑	43号土坑	53号土坑	54号土坑	63号土坑	74号土坑	75号土坑	81号土坑	88号土坑	115号土坑	11号遺物集中
軟骨魚綱	腹椎																	
マイワシ	腹椎		6															
サケ属	尾椎					2												
コイ目	左主鰓蓋骨 咽頭骨		1								1							
ナマズ	鱗棘															1		
タラ科	腹椎															5		
マダラ	右前上顎骨 左前上顎骨 右主上顎骨 左主上顎骨 右歯骨 左歯骨 腹椎 尾椎 基後頭骨		1				1				2					1		
スケトウダラ	左前上顎骨 右歯骨 左歯骨 腹椎 尾椎		1			1	1				1	1						
ブリ属	左前上顎骨 右主上顎骨 腹椎 尾椎			1			1											1
マアジ属	腹椎		2															
シイラ	尾椎										1							
タイ科	左主上顎骨 右前鰓蓋骨 右角骨 腹椎 尾椎 鱗棘 第1間血管棘 担鱗骨		1															1
			1													1		
			2															
			4															
			4															
			1															
			2															

		3号地 下式土坑	7号地 下式土坑	13号地 下式土坑	12号土坑	14号土坑	18号土坑	27号土坑	43号土坑	53号土坑	54号土坑	63号土坑	74号土坑	75号土坑	81号土坑	88号土坑	115号土坑	11号 遺物集中
マダイ	右前上顎骨		1										1					1
	右歯骨		1			1					1							
	左角骨		1															
	額骨		1															
	左主鰓蓋骨										1							
	左前鰓蓋骨		2															
	左舌顎骨		1															
	尾椎		1													2		
	第1間血管棘		1															
クロダイ属	右前上顎骨			1														
	右歯骨																	
	腹椎		1													1		
サバ属	右前上顎骨					1												
	左歯骨																	
	腹椎		1									1					1	
	尾椎		1			2											3	1
カツオ	尾椎		3												1			
マグロ属	腹椎		1															
	尾椎											1						
コチ	左主鰓蓋骨		1															
	右前鰓蓋骨		2															
カレイ目	尾椎		1											1				
フグ科	右前上顎骨										1							
	左前上顎骨														1			
真骨類	右前上顎骨					2												
	左前上顎骨					1												
	右歯骨					1		1							1			
	腹椎		5			3			1								1	
	尾椎		4		1									5				
合計		1	58	3	1	17	2	1	1	1	9	10	1	13	23	16	1	2

註) 本表は、発掘調査中に検出された資料の同定結果を示したものであり、水洗選別資料(表33・34・39・40)からの出土数は、本表には含まれていない。

表 38 9号地下式土坑堆積物一括サンプル内魚類同定結果

Table 38 Numbers of identified fish bone samples found from a water separation sample of Cellar No.9

		上層 その 1 2 mm	上層 その 2 4 mm
カマス属	右前上顎骨 右歯骨	1	1
マアジ属	尾椎	1	
	合計	2	1

表 39 63号土坑堆積物一括サンプル内魚類同定結果

Table 39 Numbers of identified fish bone samples found from a water separation sample of Pit No.63

		上層 1 mm	上層 4 mm
ニシン科	尾椎	1	
スケトウダラ	右前上顎骨 左前上顎骨 左歯骨 腹椎 尾椎		2 1 1 3 6
	合計	1	13

表 40 75号土坑堆積物一括サンプル内魚類同定結果  
Table 40 Numbers of identified fish bone samples found from a water separation sample of Pit No.73

		南側 床直 1 mm	南側 床直 2 mm	南側 床直 4 mm	南側 床直 9.52 mm	8 5 1 0 0 3 2 mm	8 5 1 0 0 3 4 mm	8 5 1 0 0 2 1 mm
軟骨魚綱	腹椎			1				
カタクチイワシ	尾椎	2						
サケ属	尾椎						1	
スケトウダラ	腹椎 尾椎			3	1			
カレイ目	尾椎			1				
真骨類	腹椎 尾椎	3	3 2			1	1 1	1
	合計	5	5	5	1	1	3	1

サンプルを水洗選別した結果、検出された資料の点数であり、表 38～40 は、一括サンプル(魚骨出土部分の土壌をまとめて採取したもの)の水洗選別により検出された資料の点数である。

表 36 と表 37 を比較すると、17 世紀代と 18 世紀以降との間で、出土した魚種に違いがあることがわかる。17 世紀代に出土し、18 世紀以降には出土していない魚種は、カマス科の一種、アカカマス、キダイ、サワラである。この内、カマス科の一種、アカカマス、キダイは出土部位が多く、17 世紀代の魚種の中でも、目立つ存在である。18 世紀以降に出土し、それ以前には出土していない魚種としては、クロダイ属の一種、カツオがあげられる。それ以外に、軟骨魚綱の一種、ニシン科の一種、マイワシ、カタクチイワシは、17 世紀代の遺構からは検出されていないが、これは、資料の採集方法の違いに起因するかもしれない。また、マグロ属の一種は、17 世紀代の遺構である 89 号土坑から尾椎が 1 点出土しているが、これは攪乱により混入した可能性がある。

貝類は、魚類ほど顕著な差異を示さない。しかし、17 世紀代の遺構から特に多く出土した貝類として、サザエ、アカガイがあげられる。両棲類、爬虫類、鳥類、哺乳類は、資料数が少なく、時期的な違いは特に見いだすことはできない。

以上のように、時期的な差異を示すのは、魚類と貝類である。このような違いが生ずる原因として、次の 2 点が考えられる。1 つは、時代の変化に伴う食生活の変化である。東京都港区の、郵政省飯倉分館構内遺跡の報告の中で、桜井準也は、同遺跡出土の魚骨の中に時期による出土量の変化を有する魚種があることを指摘している。それによると、同遺跡において、時期の新しい遺構ではソウダカツオ、およびマダラは出土せず、時期の古い遺構ではクロダイ、およびマグロは出土しないという。さらに、桜井の調査によれば、マグロは、延享年間(1744～48)までは下品な食べ物とされており、文化 7・8 年(1810・1811)の冬に伊豆相模で 1 日 1 万尾、天保 3 年(1832) 2・3 月にはそれ以上の大漁となった頃から一般に食べられるようになり、マグロによる鮓作りも行われるようになったという記録があるという(桜井 1987)。また、金子浩昌は、都立一橋高校地点の調査報告の中で、カツオは、近世初頭は主としてカツオ節製造用だったのに対して、元禄頃から生食が開始され、江戸時代の食生活における代表的な魚種となることをあげている(金子 1985)。

このように、近世の前半と後半では、食生活の内容に変化が現れる。当然、このような変化は遺跡から出土する魚骨にも反映すると考えられる。今後、遺跡からの資料が蓄積され、文献史料と比較検討されることにより、その内容はより明確になるであろう。

そして、もう 1 つの原因は、17 世紀代とそれ以降との、本地点における遺跡の性格の違いである。本地点は、近世においては、加賀藩の江戸屋敷の一角を占めていた。加賀藩はこの屋敷地を、幕府より下賜された元和 2～3(1616～1617)年頃より天和 3(1683)年頃までは下屋敷

として、それ以降は上屋敷として使用していた。したがって、本地点の遺構も、17世紀後半を境として、下屋敷時代の遺構と、上屋敷時代の遺構とに分けられると考えられる。このことから、本地点の17世紀代の遺構の大部分は、下屋敷時代に構築されたものであると見てよい。

本地点には、上屋敷時代には「御貸小屋」が建てられていたことが記録から判明しており、18世紀以降の遺構は、ほぼ、この「御貸小屋」に伴うものであると思われる。下屋敷時代の状況については、目下のところ不明である。しかし、17世紀代の遺構からは、古九谷様式の色絵磁器片、金糸など、質の高い遺物が出土しており、18世紀以降の遺物とは異なっている。このことから、下屋敷時代の状況は、上屋敷時代の状況と異なっていた可能性がある。

これらの点を考慮するならば、17世紀代と18世紀以降との違いは、下屋敷と上屋敷での性格の違いからも生じている可能性がある。元来、食生活は画一的なものではなく、時代、文化、地域、階層など、様々な要因により変化していくと推定される。考古学資料から食生活を考える場合、これらの点を十分に考慮にいれ、分析を集めていく必要性があろう。

第2に、両棲類、爬虫類、鳥類、哺乳類の遺存体の量が少ない点について考察する。これらの中で、本地点において最も出土量の多いものは、カモ属、次いでキジ属である。両者は共に代表的な狩猟鳥であり、食用鳥である。骨には切痕も認められており、これらの鳥は、本地点においても食用にされたと考えられる。

次に、出土の目立つものはウマの歯で、その過半数は乳歯である。ウマは、歯以外の部位は検出されていない。このことは、これらの歯が、ウマを埋葬もしくは解体した際に生じたものではなく、生存中に抜け落ちたものである可能性があることを示唆している。本地点の南に位置する御殿下グラウンド地点には、18世紀から19世紀初頭にかけて厩が建てられており(上野他1987)、ウマの歯の出土と関係づけられる。

両棲類、爬虫類、小型の鳥類、ウマ以外の哺乳類には、切痕は確認できなかった。

これらを考慮すれば、本地点から出土した魚類以外の脊椎動物遺存体のうち、確実に食用とされたことが判明しているものはカモ属、およびキジ属であり、残りのものについては、他の用途があった可能性も考えられる。

近世の食生活において、一般に獣肉食が禁忌であったことは広く知られている。この禁忌に従えば、食生活の内容は、植物性食品、および魚貝類、鳥類に限られるようになる。近年、人間の骨、もしくは毛髪中に含有される炭素および窒素の量を分析し、そこから食生活を復元する試みが行われ、江戸時代人の毛髪も分析の対象とされている。そして、その値は、野菜食を基本とし、動物性食品としては、ほとんど魚貝類だけを摂取するような食生活を反映していた(南川他1986)。本地点の魚貝類偏重の出土状況もまた、このような食生活を反映しているといえる。

以上をまとめると以下の3点となる。

1. 本地点より出土した遺存体のうち、魚貝類には、17世紀代と18世紀以降とで、出土する種に違いがある。
2. この違いは、食生活の変化、および、17世紀代と18世紀以降との本地点の性格の変化により生じたと考えられる。
3. 本地点において、魚貝類以外の脊椎動物の遺存体の量が少なく、また、確実に食用となったものは主として鳥類であったことは、当時の食生活と合致している。

近年、近世遺跡の発掘調査が増加すると共に、そこから出土した動物遺存体の報告例も増加している。これらの遺存体は、食生活を中心とした当時の生活、習慣について物語っている。今後、このような事例が増加し、さらに分析を進めることによって、文献には描かれていない当時の生活について、より多くのことが明らかになるであろう。 (秋元智也子)

#### 文献

- 秋元智也子, 小宮孟, 1988: 東京大学理学部7号館遺跡出土の魚骨について——加賀藩上屋敷『御貸小屋』における食生活の一端について——。江戸遺跡研究会第1回大会『江戸の食文化』発表要旨, pp.45—50。
- 上野佳也, 寺島孝一, 他, 1987: 東京大学本郷記念館(仮称)建設予定地発掘調査概要報告書。
- 金子浩昌, 1985: V, 4, 一橋高校地点出土の脊椎動物遺体。江戸——都立一橋高校地点発掘調査報告——。pp. 575—607。
- 清棲保之, 1978: 増補改訂版日本鳥類大図鑑。講談社。
- 桜井準也, 山口徹, 1986: 第三章 10 自然遺物。麻布台一丁目郵政省飯倉分館構内遺跡。pp.316—322。
- 堀田秀之, 1961: 日本産硬骨魚類の中軸骨格の比較研究。農林水産技術会議事務局研究成果 5。
- 益田一, 尼岡邦夫, 荒賀忠一, 上野輝彌, 吉野哲夫編, 1984: 日本産魚類大図鑑。東海大学出版会。
- 南川雅男, 柄沢京子, 蒲谷裕子, 1986: 人の食生態系における炭素・窒素同位体の分布。地球化学, 20 (2)。pp. 79—88。

## 2. 植物遺存体

秋元智也子

本遺跡から出土した植物遺存体のうち種子類10点は、松谷暁子氏に同定を依頼した。同定結果は第6章第4節に記載されている。

これらの他にも、大量の炭化物が出土しているが、その大半は材と判別がつかないため、表31にまとめた(第5章第2節13参照)。

## 第4節 遺構各論

### 1. 井戸

羽生 淳子

理学部7号館地点からは、5基の井戸が検出された(表41)。これらの井戸は、整円形のもの(3号井戸、4号井戸)と、やや不整な円形を呈するもの(1号井戸、2号井戸、5号井戸)とに大別される。

3号井戸および4号井戸は、上部周囲に掘り込みを伴う。3号井戸の周囲掘り込みは円形であり、4号井戸の周囲掘り込みは方形であるが、両者とも、覆土がロームを主体とし、遺物をほとんど含まない点で共通する。これらの特徴から考えるならば、周囲掘り込みは、井戸の構築時に掘られた後、すぐに埋め戻された施設である可能性が高い。1号井戸については、上部が攪乱によって破壊されていることから、周囲掘り込みの有無は確認できない。2号井戸には、周囲掘り込みは認められない。5号井戸は、上部で複数の土坑と重複関係を有することから、周囲掘り込みの有無は明らかにし得ないが、135号土坑(特に底の3本の溝状の掘り込み)は、この井戸に伴う可能性がある。

3号井戸および4号井戸は、下部構造においても共通する特徴を有する。これらの井戸底において確認された木枠の材は、いずれも1号井戸のものよりも厚手であり、材の腐食もわずかである。これに対し、1号井戸の井戸底木枠は、厚さが1~2cm前後で、腐食も著しい。2号井戸および5号井戸については、井戸底の調査を行っていないため、下部構造は不明である。

さらに、3号井戸と4号井戸は、出土遺物の点でも共通する特徴を示す。両遺構内の出土遺物は、いずれも、18世紀前半から中葉の肥前陶磁器および瀬戸・美濃系陶器を中心としており、2基とも同時ないしきわめて近接した時期に廃棄されたことが推測される。これに対し、1号井戸の出土遺物は、17世紀中葉から後半を主体とすることから、遺構の廃棄年代は17世紀後半と推測される。2号井戸および5号井戸からは、17世紀代の遺物と18世紀以降の遺物が出土しているが、下層の出土遺物が17世紀代を中心とすることから、この時期に位置づけられる可能性が高い。

3号井戸および4号井戸は、その位置関係から、元禄元年(1688)の絵図面に記録されている井戸に対応する遺構であると推測される(第8章第3節参照)。この絵図面によれば、3号井戸は、南北に長い八筋「四番長屋」の東側に位置する3基の井戸のうちの中央の井戸、4号井戸

表 41 井戸一覧表  
Table 41 List of wells

No	グリッド	周囲の掘り込み	井戸の形状	最大径 (m)	推定廃棄年代	備 考
1	A2・B2	不明	不整円形	1.2	1650～80年代	上部は化学館旧館北棟の基礎によって破壊されている。確認面より約3.5mの深さまで調査。壁面に梯子状の刻み目有。
2	A3・B3	無	不整円形	1.2	17C	
3	A4・A5	有・円形	整円形	1.3	1730～60年代	
4	E4・E5	有・方形	整円形	1.3	1720～60年代	
5	F4・G4	無?	不整円形	1.3	17C	

は、同じく「三番長屋」の3基のうちの中央の井戸と考えられる。長屋中央の井戸は、上記の元禄元年の絵図面の次に古い絵図面(推定年代1761～1771年頃)には描かれていないことから、それ以前に廃棄されていた可能性が高い。これに対し、1号井戸、2号井戸、5号井戸については、現在知られている複数の絵図面(元禄元年～幕末にわたる)のうちに、これらの遺構に対応する井戸を記したものが一枚もないことから考えて、元禄以前に廃棄された井戸と推定される。以上の推測は、出土遺物に基づいた各遺構の推定廃棄年代とよく一致する。

3号井戸および4号井戸の構築年代は、その位置が南北方向に延びる長屋の配置に規定されることから、長屋の建設以降と考えられる。本地点に長屋が構築された時期は、本地点における17世紀中葉～後半の陶磁器を伴う遺構のほとんどが、18世紀以降の遺物を出土する遺構(長屋に伴うと考えられる遺構)とは異なる主軸方向を示すことから、17世紀末から18世紀初頭に限定される。さらに、元禄元年(1688)の絵図面に長屋および井戸が描かれていることから、その下限は1688年と考えられる(第8章第3節参照)。したがって、2基の井戸の構築年代も、1688年以前の17世紀末に限定される。3号井戸、4号井戸の周囲掘り込みから17世紀後半の陶磁器が出土しているという事実は、上記の推測を裏付けるものである。1号井戸、2号井戸、5号井戸については、その構築年代を推測し得る手がかりはない。

## 2. 地下式土坑

山口 剛志

理学部7号館地点からは、21基の地下式土坑が検出された(表42)。これらは、壁がオーバールーフしたロームの天井部を有し、人間が入ることのできる構造であるが、中には、後世の攪乱および崩落によって天井部が失われたものもある。特に、化学館旧館北棟の基礎工事による攪乱を受けた北側地区において検出された地下式土坑は、概して遺存状態が不良である。

本項では、形態と分布から本地点より検出された地下式土坑の特徴を抽出して、そこから派生する問題について検討を加える。



## (1) 形態

本地点から検出された地下式土坑は、いずれも天井部に直接入口部を設けたものであり、階段・スロープ状の出入口施設を有するものは認められない。これらの形態は、断面形から次の四種類に分類される。

A類は、天井部と壁がそれぞれ直線状に掘り込まれ、断面形が「コ」の字形を呈し、両者の境界が明瞭に識別できる形態である。5号、8号、9号、11号、15号、18号、19号地下式土坑がこれにあたる。概して床面積が大きく、入口部に対して三方向に天井部を設けたものが多い。この中で、9号および18号地下式土坑の床面は、入口部直下を一段高くした二段構造になっている。特に、9号地下式土坑は、入口部直下の一段高い床面にさらにロームを主体とした盛土と石によって階段状の施設を設けたものである。両者共に、17世紀後半の陶磁器を伴っていることから、これらはA類の中でも時期的に古い形態であると考えられる。

B類は、天井部と壁との境界が不明瞭な断面アーチ形を有する形態である。2号、6号、7号、16号地下式土坑がこれにあたるが、2号地下式土坑以外は、このアーチ形の断面形の他にA類の「コ」の字形を呈する断面形も認められるものである。本類の地下式土坑は、入口部に対して二方向ないし三方向に天井部が設けられている。概して、床面が深く掘り込まれたものが多く、床面標高は13.5m以下を測る。

C類は、天井部を一方へ僅かに設け、他の三方向の壁が直線状にオーバーハングする形態である。3号、17号地下式土坑の他に、14号地下式土坑も本類に含まれると考えられる。A類、B類に比べて小型であり、床面標高が14m前後を測る浅いものである。

D類は、天井部が認められない形態で、4号地下式土坑がこれにあたる。規模、床面標高がC類とほぼ同じ数値であり、壁、床が丁寧に整形されていることから地下式土坑に分類したが、形態的には土坑と同様であり、地下式土坑として扱うべきかどうか議論の余地がある。

1号、10号、12号、13号、20号、21号地下式土坑は、攪乱および崩落が著しく天井部を確認できないために、どの形態に分類されるのかは不明であるが、残存する部分から判断する限り、A類かB類に含まれる形態と思われる。なお、床面に柱穴が認められる8号、19号、21号地下式土坑は、いずれも古い地下式土坑を切って構築され、その重複部分の壁に沿って柱穴が設けられている。このことから、これらの柱穴は、壁を補強するための施設と考えられる。また、1号、5号、12号地下式土坑には、床面に浅い掘り込みが認められる。いずれも壁際に設けられていることから、入口部に関係する施設の可能性もあり、今後、類例の増加を待って、さらにその機能を検討する必要がある。

A～C類について、遺構内から出土した陶磁器の編年を参考にして時期的な関係を考えるならば、A類は17世紀後半～18世紀後半に位置づけられる。B類は18世紀前半～中葉、C類は

表 42 地下式土坑一覧表

Table 42 List of cellars

No	位置	グリッド	床部の大きさ 東西×南北(m)	底面標高 (m)	覆土の状態	推定廃棄年代	備考	
1	A・B区	B2	2.7 × -	13.3	焼土	不明	2号と重複。	
2		B2・B3	1.4 × -	13.5	焼土	不明		1号と重複。
3		A3・A4・B3・B4	1.5 × 1.5	14.3	暗褐色土	1770～90年代	5号を切る。	
4		B3・B4	1.7 × 1.2	14.3	暗褐色土	18c後半		4号に切られる。
5		B3・B4	1.8 × 2.7	13.6	暗褐色土	18c中葉～後半		
6		A4	2.2 × 1.8	13.1	焼土	18c前半	8号に切られる。	
7		A5・B5	2.2 × -	12.8	焼土	18c前半～中葉		7号を切る。
8		A5・B5	(2.1) × -	13.6	暗褐色土	18c中葉～後半		
9	C・D区	C5・C6・D5・D6	3.4 × 2.1	13.9	黄褐色土	1650～80年代	床面には階段状の盛土が認められる。	
10	E・F・G区	F1・F2	2.3 × 2.1	13.8	焼土	18c前半～中葉	19号に切られる。床面に段を有する。	
11		F1・F2・G1・G2	1.9 × 1.4	13.8	暗褐色土	18c後半		
12		F2・G2	1.7 × 1.8	13.8	暗褐色土	18c後半		13号を切る。
13		E2・F2	2.6 × 2.5	13.6	暗褐色土	18c後半		12号に切られる。
14		E2・F2	1.5 × -	13.6	暗褐色土	1780～1820年代		
15		E3・F3	- × -	13.2	暗褐色土	18c前半～中葉		
16		F4	1.7 × 1.4	13.5	暗褐色土	18c前半～中葉		
17		F4・F5・G4・G5	1.8 × 1.5	14.2	焼土	18c前半～中葉		
18		E4・E5・F4・F5	2.5 × -	13.7	暗褐色土	1650～80年代		
19		E5・F5	4.1 × 1.8	12.9	焼土	18c前半?		18号を切る。21号に切られる。
20		F5	- × -	13.7	焼土	18c前半～中葉		21号を切る。
21	F5・F6	- × -	13.4	黄褐色土	18c前半～中葉	19号を切る。20号に切られる。		

註)1号と2号は、それぞれ重複しているが、新旧関係は不明である。( )内の数字は推定値。

18世紀前半～19世紀前半が推定される。A～C類共に18世紀を中心とするが、A類のうち床面が二段構造の9号、18号地下式土坑は、17世紀後半に位置づけられることから、本地点において最も古い形態と考えられる。そして、C類は、19世紀前半(14号地下式土坑)まで続く形態である、という傾向が指摘される。

## (2) 分布

図209は、井戸、地下式土坑の分布を示したものである。この図から明らかなことは、地下式土坑が、調査区域内の全域に分布しているわけではなく、偏在した分布を示していることである。すなわち、9号地下式土坑を除いて、1～8号地下式土坑がA・B区、10～21号地下式土坑がE・F区の二ヶ所に集中し、それぞれが南北方向へ帯状に分布する。さらに、両区の分布を細かく検討すれば、地下式土坑は、南北方向へ並ぶ中でも重複、または近接して集中する部分が認められる。A・B区は、1・2号地下式土坑、3～6号地下式土坑と7・8号地下式土坑の三ヶ所で、E・F区は、10～14号地下式土坑、15・16号地下式土坑と17～21号地下式土坑の三ヶ所で、それぞれある程度の間隔をあけながら集中する。したがって、地下式土坑は、南北方向へ延びた極めて規則的な分布を示していると言える。

A・B区とE・F区は、地下式土坑と共に、土坑、遺物集中、杭跡等の遺構が多数分布する区域でもある。特に、A・B区の1号、2号地下式土坑と3号、4号地下式土坑の間には、多くの

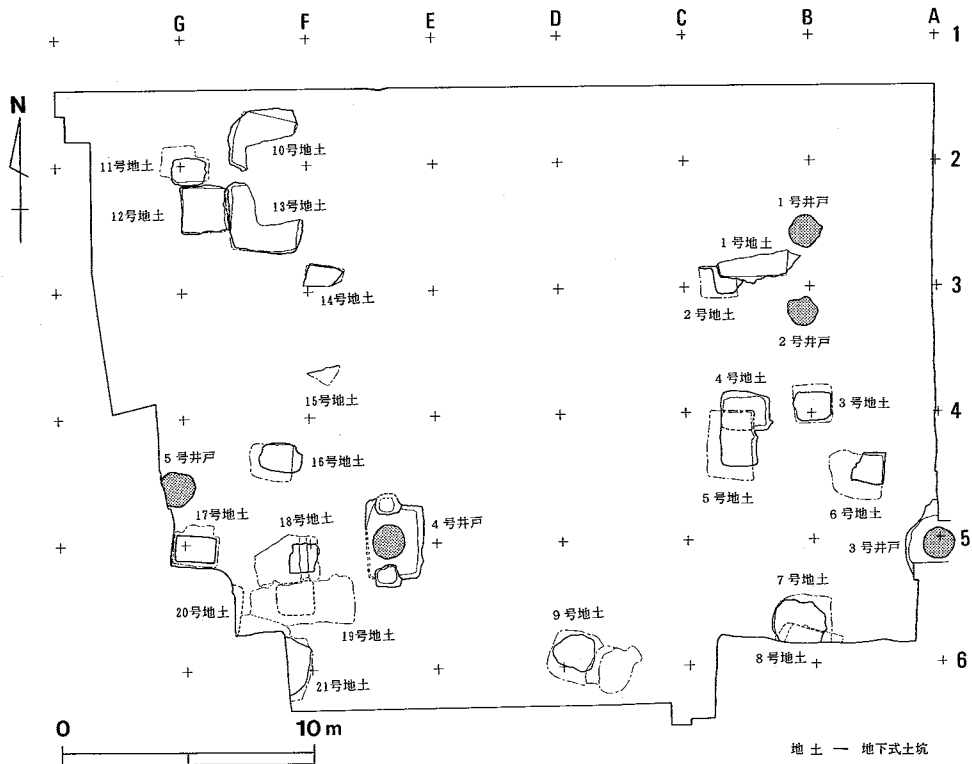


図 209 井戸・地下式土坑分布図

Figure 209 Distribution of wells and cellars

土坑が重複しながら集中しているが、これらの多くはゴミ処理用の土坑と考えられる。さらに、7号、8号地下式土坑の覆土中に魚骨、貝等が多量に認められた例のように、地下式土坑は、本来の機能を失った後、最終的には先の土坑と同様のゴミ処理用として利用されたものが多い。これらの事実は、ゴミ処理用の土坑と同じ空間に地下式土坑が存在したことを示唆するものである。ゴミ処理用の土坑が屋外に存在したと仮定すれば、これと同一の空間に分布する地下式土坑も、建物の内部ではなく、屋外に存在する独立した構造であったことが推測される。この点は、真砂遺跡においても同様の指摘がなされている（小林 1987）。

地下式土坑が屋外に存在したと考えるならば、その上屋構造の有無が問題となる。本地点において、上屋を想定し得る痕跡を有した地下式土坑は認められないが、長屋の建築物の痕跡も認められないことを考えれば、上屋の存在の有無は現時点では判断できない。今後に残された課題である。

### (3) 派生する問題

本地点から検出された地下式土坑について、形態、分布の特徴を抽出した。ここでは、それらの特徴から派生する問題について検討する。

本地点の地下式土坑の形態は、全て天井部に直接入口部を設けたものであり、階段、スロープ状の施設を有しないことが最大の特徴である。この点は、周辺の動坂遺跡(大谷 1978)、白山四丁目遺跡(小野 1981)、真砂遺跡(小林 1987)において、階段、スロープを伴うものが多い点と明らかに異なっている。金丸義一は、このような差異に着目して、形態差から機能を推定している(金丸 1985)。金丸は、動坂遺跡の地下式土坑(地下室)を検討する中で、これらの一部が火災時の取蔵庫として用いられた可能性を指摘し、その必要条件として、「①収納し易い。②収納後ただちに防火工作ができる。③鎮火後取り出し易い。④戸、畳、障子収納の為の天井高の確保。⑤独立した地下室では雨対策が充分。」の5項目をあげている。そして、本地点と同様の形態である7号室は⑤を、また、直階段を有する4号、5号室は②と⑤を満たせば、火災時の取蔵庫として使用された可能性があるとしている。

本地点の地下式土坑は②を満たしている点で、階段、スロープ状の施設を有するものよりも、より火災時の取蔵庫に適した構造を備えていると言える。機能を具体的に示すような痕跡、出土状況等は、本地点で確認されていない。ただし、加賀藩の文献史料には、「穴蔵」に関する記載があり、「穴蔵」は火災時の取蔵庫の役割を果たしていたことが窺える(第8章第1節参照)。この「穴蔵」がどのような構造であるのかは文献史料から判断し得ないが、これらが地下式土坑に相当すると考えるならば(小林 1986)、地下式土坑は、少なくとも火災時の取蔵庫という機能を有していたと考えられる。

本地点の地下式土坑が、火災時の取蔵庫以外の目的にも利用されたのかどうかは明らかでない。日常的な使用という面から考えるならば、本地点の地下式土坑は、階段、スロープ状の施設を有するものより出入りが不便な形態である。本地点の地下式土坑が、全て、天井部に直接入口部を設けたものである、という事実は、これらが日常よりも火災時の使用を主な目的としていたことを示唆するのかもしれない。

地下式土坑の分布については、①南北方向へ延びた規則的な配列を示していること、②屋外に存在した可能性の高いこと、の2点が指摘された。①について江戸時代に作成された絵図面によれば、本地点は、少なくとも元禄元年(1688)から幕末にかけて存在した「八筋」と呼ばれる長屋群の一部にあたる。この長屋群は、南北に長く延びた長屋が東西に連なって建てられ、その位置は、元禄元年以降、幕末にいたるまでほとんど変化していないと考えられる(第8章第1節参照)。本地点の地下式土坑のうち、9号、18号地下式土坑を除く19基の地下式土坑は、出土陶磁器により、廃棄年代が18世紀～19世紀前半と推定されることから、「八筋」長屋と併行する時期の遺構であると考えられる。南北方向に延びた分布傾向は、この長屋が建てられた方向と一致することから、長屋の建物配置との強い規則性が窺われる。

②については、第8章第3節において、調査地点の遺構分布と絵図面との対比を行った結果、

1～8号地下式土坑が四番長屋の空地(庭)部分に、10～17号、19～21号地下式土坑が三番長屋の空地部分に、それぞれ相当することが判明した。さらに、この長屋に伴う「空地」は、板塀、垣根によってさらに細かく仕切られ、非常に限られた空間であることも明らかになっている。3号、4号地下式土坑北側の東西方向へ直線状に並ぶ柱穴群や、1号、2号杭跡等は、この板塀、垣根に相当する可能性がある。従って、地下式土坑の分布が重複、近接して集中する、という事実は、この狭い空間の中で造り替えられたことから生じたものと推定される。

この限られた地上空間内に地下式土坑が分布するという点は、先の形態的特徴とも関連する可能性がある。それは、本地点の地下式土坑が、階段、スロープ状の施設を有するものより、地上空間の使用が最少限ですむ天井部に直接入口部を設けた形態である。従って、限られた地上空間を利用するために、階段やスロープ状の入口部を設けることができなかつた可能性も考慮する必要がある。

以上、地下式土坑の形態および分布から派生した問題について検討した結果、形態的特徴については、機能面と共に地上空間との関係が考えられる。現時点では、本地点の地下式土坑の形態が2つの要因のどちらによるものか判断し得ない。今後の検討においては、両者の要因を考慮に入れる必要があろう。また、分布については、「八筋」長屋群の配置との強い関連性が認められ、地下式土坑が屋外に存在した可能性が高いことが明らかになった。

地下式土坑の形態および分布については、他の遺跡においても遺跡の性格と強く関連する傾向が認められる。たとえば、動坂遺跡では、鷹匠同心の仕事に関連した地下式土坑の存在が推定されている(金丸1985)。今後、地下式土坑の機能を考える場合には、各遺跡毎の特徴を抽出した上で、遺跡間の比較、検討を行う必要がある。

#### 文献

- 大谷猛, 1978: 地下室。動坂貝塚調査会, 文京区・動坂遺跡, pp.94-102。  
小野安司, 1981: 地下室跡。白山四丁目遺跡調査会, 文京区・白山四丁目遺跡, pp.21-30。  
金丸義一, 1985: 遺構からみた江戸建築の一例。東京都教育委員会, 都心部の遺跡—貝塚・古墳・江戸一, pp.265-274。  
小林克, 1986: 地下室考。物質文化, 47: 40-59。物質文化研究会。  
小林克, 1987: 地下室。真砂遺跡調査会, 真砂遺跡, pp.94-111。  
玉井哲雄, 1986: 穴蔵と土蔵。江戸 失われた都市空間を読む, pp.123-155。平凡社。

### 3. 長方形のプランを有する土坑

秋元 智也子

近世遺跡から検出される遺構には、特徴的な形態を持ちながら、その性格については十分に

表 43 長方形のプランを有する土坑一覧

Table 43 List of rectangular pits

遺構	長軸 cm	短軸 cm	深さ cm	底面標高 m	床	特徴	推定廃 棄年代
7号土坑	66	59	23	15.7	起伏	木杵有。	—
11号土坑	115	105	36	15.5	起伏	四隅5~10cmの杭痕。木杵有。	18c
12号土坑	129	110	54	15.4	平坦	壁際5~10cm深さ20cmの杭痕。	18c
17号土坑	85	70	105	14.8	段差	四隅10~15cm深さ12cmの杭痕。	—
22号土坑	48	43	40	15.6	起伏	10cm深さ16cmの杭痕。	—
36号土坑	122	91	77	15.3	起伏	5~10cm深さ10cmの杭痕。	18c
61号土坑	97	83	95	14.9	平坦	西半分隅15cm深さ14cmの杭痕。	—
63号土坑	122	116	93	15.0	起伏	壁際溝、溝内15cm深さ25cmの杭痕。西壁杭痕。	19c
74号土坑	119	(90)	28	15.5	平坦	壁際10cm深さ30cmの杭痕。	18c
75号土坑	144	64	78	15.4	平坦	壁際方形ビット、ビット内10cm深さ40cmの杭痕。	19c
119号土坑	105	84	17	15.3	平坦	壁際20cm深さ30cm前後のビット。	19c
121号土坑	113	60	10	15.4	起伏	壁際10cm深さ10cmの杭痕。	—

註) — : 残長、( ) : 推定長

は検討されていないものがある。本項では、そのような遺構の中から、特に長方形のプランを有する土坑を取り上げ、検討を加える。

長方形のプランを有する土坑(以下、長方形土坑と略す)は、本地点から12基が確認されている(表43)。これらは、その呼称通り、長軸約80~145cm、短軸約60~120cmの長方形のプランを持つ土坑である。底面の標高は約14.8~15.7mで、床は平坦なもの、起伏の認められるものがある。壁際や四隅には杭跡もしくは小ピットを有し、周溝が巡る場合もある。7号土坑と11号土坑では、周囲に木杵が残存していた。覆土中には、遺構の残存状態が悪い場合を除き、多量の遺物が包含され、動物遺存体を多量に含むものもある。遺構の推定廃棄年代は、遺物が少なく不明のものを除き、18世紀中葉から幕末までという、比較的限定された範囲の中に収まる。これらの長方形土坑は、遺跡のA、B、F、G区で確認され、A3およびB3区、A5、B5およびB6区、F1区およびG1区の3ヶ所に集中して、全体では、南北に規則的な配置を保つ。この配置は、地下式土坑の配置と基本的には同様の傾向を示す。

表 44 一橋高校地点 小屋? 一覧

Table 44 List of rectangular pits from the Hitotsubashi Koko site

遺構	長径cm	短径cm	深さcm	囲い
I-1	281	227		板囲い、竹囲い、横木
I-2	203	181	30	板囲い
I-3				板囲い、竹囲い
I-4	272	184	70	板囲い、底板
II-1	181	151	15	杭
II-2	181	151		杭
II-3	130	121	15	板囲い
II-4				板囲い
II-5	212	181	36	板囲い、底板
III-2	130		30	板囲い

一橋高校地点では、I層、II層、およびIII層中から、本地点のものよりやや大きい、形態的に類似した特徴を持つ遺構が10基確認されている(都立一橋高校内遺跡調査団編1985)。表44は、報告書のデータに基づいて作成したその一覧である。これらは、長軸約130cm~280cm、短軸約120cm~220cmを測る。遺

構の内部には板囲いを設け、杭をもってそれを支える。板囲いの周囲に竹囲いを設ける例も確認されている。これらの点から、報告者は上屋構造の存在を想定し、遺構の性格を小屋ではないかと推定しているが、上屋構造は確認されていない。これらの遺跡は、Ⅲ層中より確認された1基を除き、火災の痕跡の直後に構築されている。遺構の推定廃棄年代については、報告者は特に言及していない。しかし、Ⅲ層中より確認された1基は、Ⅲ層中の最上部の遺構の年代を、天和3(1683)年から元禄10(1697)年とする点、Ⅳ層の形成時期を明暦3(1657)年とする点から、明暦3(1657)年から元禄10(1697)年の間に廃棄されたと推定できる。さらに、Ⅱ層およびⅠ層から確認された遺構は、元禄10(1697)年以降に構築されたものと考えられる。報告者は、これらの小屋、特にⅡ層およびⅠ層中より確認された遺構が火災の痕跡の直後に出現することから、火災後の仮屋であった可能性を示唆している。

一橋高校地点の遺構の構造から推測するなら、本地点の長方形土坑が有する杭痕は、木杵を支える目的があり、おそらく、木杵の存在が確認されなかった遺構も、当初は木杵を有していたと考えられる。しかし、一橋高校地点の遺構と比較すると、本地点の長方形土坑は、規模の点で相違がある。すなわち、本地点の長方形土坑は、長軸でも200cmを越えるものは皆無であり、一橋高校地点の遺構に比べて小規模である。

一橋高校地点で想定されたように、長方形土坑においても上部構造を想定するなら、これもまた、小規模なものと考えられる。一橋高校地点においては、火災後の仮屋として人の居住が示唆されたが、本地点においては、最も大きな規模を有する63号土坑でも、長軸122cm、短軸116cmと、たとえ上部構造を想定したとしても、人が居住できたとは考えられない。また、長方形土坑の上屋構造の有無は、遺跡からは確認されておらず、長方形土坑が、単に木杵を設けた土坑であった可能性も考えられ、現段階では判別できない。

以上の点から、本地点の長方形土坑は、加賀藩上屋敷が置かれていた当時、本地点に存在していた御貸小屋に付属する、居住以外の目的の施設であったことが推測される。当時の絵図面によれば、御貸小屋には、居住施設である長屋の他に、いくつかの施設が一定の規則的な配置を持って描かれている。これらは、井戸、番所、厠などに相当するものと考えられる。長方形土坑に上屋構造が伴っていたとしても、その規模は小さく、人が恒久的に居住したとは考えられない。したがって、これらは、厠、物置のような、上屋構造が小規模な建物であった可能性もある。また、本地点の長方形土坑の推定廃棄年代の中心が、本地点において地下式土坑が確認されなくなる19世紀に置かれることから、長方形土坑が地下式土坑に替わる役割を持っていた可能性もある。あるいは、上屋構造を伴わず、木杵を周囲に巡らせた芥溜のようなものであった可能性もある。長方形土坑がこのような施設のどれに相当するのか、現段階では特定し得ない。今後の調査例の増加が待たれる。

文献 都立一橋高校内遺跡調査団編、1985：江戸——都立一橋高校地点発掘調査報告——。

## 第6章 遺物の理化学的分析

### 第1節 理学部7号館地点出土古九谷様式磁器片の化学分析による生産地推定

#### 1. 問題の所在および分析資料

羽生 淳子・長佐古 真也・大橋 康二

本節では、東京大学本郷構内理学部7号館地点から出土した古九谷様式磁器片の素地(きじ)について蛍光X線分析および放射化分析を行い、その生産地を推定する。分析の目的は、いわゆる「古九谷」の生産地に関する論争に、ひとつの客観的なデータを提供することである。

理学部7号館地点からは、4点の古九谷様式の磁器片が出土している(4号地下式土坑-1, 1号土坑-4, 4号井戸-16, 遺構外-23)。古九谷様式とは、古伊万里、柿右衛門、鍋島とともに著名な、江戸時代前期における磁器の様式のひとつである。前三者の生産地が有田およびその周辺地域(伊万里、波佐見、嬉野など:以下、これらをまとめて「肥前」と呼称する)と考えられるのに対し、「古九谷」の生産地は、加賀大聖寺藩九谷と考えるのが定説であったが、1938年、北原大輔によって、いわゆる「古九谷」の中には、有田等、他の生産地のものが混入している、との説(北原・藤岡 1938)が唱えられて以来、その生産地は議論的となってきた(Jenyns 1956, 1965, 山下 1968, 今泉 1974, 1987, 林屋 1975, 1983, 嶋崎 1976, 1988, 西田 1978, 北出 1986, 矢部 1985, 村上 1988, など)。その過程において、当初は「古九谷」に分類されていた製品のうち、「藍九谷」と呼ばれる染付磁器、および「吸坂手」と呼ばれる鉄釉磁器の一群は有田産であるとの認識が一般的になった。しかし、色絵「古九谷」については、九谷産説、有田産説を軸に、素地移入説(有田産などの素地が九谷へ運ばれ、そこで上絵付がなされたとする説)など複数の説が提出されており、現在、なお、その生産地は確定されていない。

この問題を考えるひとつの手がかりとして、化学分析に基づいた素地の生産地推定があげられる。現在までに発表されている研究としては、山崎一雄による一連の研究(山崎 1981, 1986, 東京大学遺跡調査室病院班・山崎 1988)、微量成分元素の分析に基づいた河島達郎・松野外男の研究(河島・松野 1985)等があり、九谷産と有田産の判別の基準について、いくつかの元素が指標となることが指摘されている。



そこで、本節では、蛍光 X 線分析および放射化分析を用いて、理学部 7 号館地点から出土した古九谷様式磁器片の主成分元素および微量成分元素の定量を行い、その生産地推定を試みる。対比資料としては、肥前古窯跡から出土した磁器片資料を用いる。なお、理学部 7 号館地点から出土した磁器片のうち、肥前産と考えられる色絵磁器 1 点、中国・景德鎮窯の製品と考えられる染付磁器 3 点、および、中国産のいわゆる「呉須赤絵」と考えられる色絵磁器 2 点もあわせて分析する。

(1) 分析資料 (表 45~47)

a. 理学部 7 号館地点出土資料 (表 45)

古九谷様式の伝世品には、さまざまな絵付が存在するが、大別すると、皿や鉢の内面全面に絵付を施す「青手」と、器面に白地を残すものとに分類される。今回出土した 4 点は、器面に白地を残すものであり、いずれも、内面に、染付と色絵による丸文を有する。このような丸文を有する古九谷様式は、特に「祥瑞手」と呼ばれて、古九谷様式の中でも特殊な一群と見なされている (Jenyns 1965, 林屋 1975, 西田 1978, など)。

1 号土坑-4 (図 66) は、大鉢の底部破片である。推定高台径 17.0 cm をはかる。器形は、高台脇から彎曲しながら立ち上がり、破片上端部ではやや内彎する。内面は、立ち上がり付近を削り込み、浅い段を作り出しており、段部には、染付二重圈線が施される。見込には、赤および黄の色絵具を用いて上絵付が施されているが、描かれている文様の全体は不明である。内側面には、染付線で丸文を描き、丸文の中央寄りにはさらに二重の染付線を施す。丸文内には上絵付を施し、外側の円と二重線の間には波状文を、中央には松と思われる文様を描く。高台内

表 45 理学部 7 号館地点出土分析資料一覧

Table 45 List of chemically analyzed porcelain samples from the No.7 Science Building area

	資料No	名称	蛍光 X 線分析		放射化分析	
			分析No	試料No	分析No	試料No
1	1 号土坑-4	古九谷様式色絵大鉢	TMN 0073	45	87146	TFSD01-01
2	4 号井戸-16	古九谷様式色絵大鉢	TMN 0046	46	87147	TFSD01-02
3	4 号地下式土坑-1 *	古九谷様式色絵皿			87148	TFSD01-03
4	遺構外-23 *	古九谷様式色絵大鉢			87149	TFSD01-04
5	142号土坑-1	肥前色絵大皿	TMN 0071	49	87150	TFSD02-01
6	1 号井戸-1 *	中国・景德鎮染付皿			87151	TFSD03-01
7	遺構外-1 *	中国・景德鎮染付皿			87152	TFSD03-02
8	遺構外-2 *	中国・景德鎮染付皿			87153	TFSD03-03
9	18号地下式土坑-1 *	中国「呉須赤絵」皿			87154	TFSD04-01
10	83号土坑-1 *	中国「呉須赤絵」皿			87155	TFSD04-02

\*印の試料については、蛍光 X 線分析は行っていない。

表 46 肥前古窯跡出土分析資料一覧

Table 46 List of chemically analyzed porcelain samples from Hizen kiln sites

地域	資料No	蛍光 X 線分析		放射化分析		資料提供者No	
		分析No	試料No	分析No	試料No		
有田地区	1	山辺田窯 - 1	TMN 0024	1	87156	POC001-HZYB01-01	1 - 1
	2	山辺田窯 - 2	TMN 0025	2	87157	POC002-HZYB01-02	1 - 2
	3	山辺田窯 - 3	TMN 0026	3	87158	POC003-HZYB01-03	1 - 3
	4	山辺田窯 - 4	TMN 0027	4	87159	POC004-HZYB01-04	1 - 4
	5	山辺田窯 - 5	TMN 0028	5	87160	POC005-HZYB01-05	1 - 5
	6	山辺田窯 - 6	TMN 0029	6	87161	POC006-HZYB01-06	1 - 6
	7	山辺田窯 - 7	TMN 0030	7	87162	POC007-HZYB01-07	1 - 7
	8	山辺田窯 - 8	TMN 0035	9	87164	POC009-HZYB01-09	2 - 1
	9	山辺田窯 - 9	TMN 0031	8	87163	POC008-HZYB01-08	1 - 8
	10	丸尾窯 - 1	TMN 0036	10	87165	POC010-HZMO01-02	2 - 2
	11	丸尾窯 - 2	TMN 0037	11	87166	POC011-HZMO01-03	2 - 3
	12	丸尾窯 - 3	TMN 0038	12	87167	POC012-HZMO01-01	2 - 4
南川原地区	13	柿右衛門窯 - 1	TMN 0041	13	87168	POC013-HZKM01-01	2 - 7
	14	柿右衛門窯 - 2	TMN 0047	14	87169	POC014-HZKM01-02	3 - 1
	15	柿右衛門窯 - 3	TMN 0048	15	87170	POC015-HZKM01-03	3 - 2
	16	柿右衛門窯 - 4	TMN 0049	16	87171	POC016-HZKM01-04	3 - 3
	17	柿右衛門窯 - 5	TMN 0050	17	87172	POC017-HZKM01-05	3 - 4
	18	柿右衛門窯 - 6	TMN 0051	18	87173	POC018-HZKM01-06	3 - 5
	19	柿右衛門窯 - 7 *		19	87174	POC019-HZKM01-07	3 - 6
	20	柿右衛門窯 - 8	TMN 0053	20	87175	POC020-HZKM01-08	3 - 7
	21	樋口窯 - 1	TMN 0067	21	87177	POC022-HZHG01-01	3 - 21
	22	南川原窯ノ辻窯 - 1	TMN 0066	22	87193	POC038-HZNK01-01	3 - 20
	23	南川原窯ノ辻窯 - 2 *		23	87194	POC039-HZNK01-02	3 - 19
白川・泉山・岩谷川内地区	24	天狗谷窯 - 1	TMN 0058	24	87178	POC023-HZTD01-01	3 - 12
	25	天狗谷窯 - 2	TMN 0059	25	87179	POC024-HZTD01-02	3 - 13
	26	下白川窯 - 1	TMN 0057	26	87180	POC025-HZSS01-01	3 - 11
	27	楠木谷窯 - 1	TMN 0033	27	87181	POC026-HZKD01-01	1 - 10
	28	楠木谷窯 - 2	TMN 0062	28	87182	POC027-HZKD01-02	3 - 16
	29	楠木谷窯 - 3 *		29	87183	POC028-HZKD01-03	3 - 17
	30	楠木谷窯 - 4	TMN 0064	30	87184	POC029-HZKD01-04	3 - 18
	31	長吉谷窯 - 1	TMN 0039	31	87185	POC030-HZCD01-01	2 - 5
	32	長吉谷窯 - 2	TMN 0040	32	87186	POC031-HZCD01-02	2 - 6
	33	長吉谷窯 - 3	TMN 0049	33	87187	POC032-HZCD01-03	3 - 8
	34	長吉谷窯 - 4	TMN 0055	34	87188	POC033-HZCD01-04	3 - 9
	35	長吉谷窯 - 5 *		35	87189	POC034-HZCD01-05	3 - 10
	36	長吉谷窯 - 6 *		36	87190	POC035-HZCD01-06	3 - 14
	37	猿川窯 - 1	TMN 0032	37	87191	POC036-HZSK01-01	1 - 9
川板内ノ	38	窯ノ辻窯 - 1	TMN 0042	38	87192	POC037-HZKT01-01	2 - 8
	39	ダンバギリ窯 - 1 *		39	87195	POC040-HZDG01-01	3 - 15
伊万里地域	40	鍋島藩窯 - 1	TMN 0068	40	87176	POC021-HZNH01-01	3 - 22
嬉野地域	41	吉田窯 - 1	TMN 0034	41	87196	POC041-HZYD01-01	1 - 11
	42	吉田窯 - 2	TMN 0045	42	87197	POC042-HZYD01-02	2 - 11
	43	不動山皿屋谷窯 - 1	TMN 0043	43	87198	POC043-HZFS01-01	2 - 9
	44	不動山皿屋谷窯 - 2	TMN 0044	44	87199	POC044-HZFS01-02	2 - 10

\*印の試料については、蛍光 X 線分析は行っていない。

表 47 他遺跡出土分析資料一覧

Table 47 List of chemically analyzed porcelain samples from other sites

	資料No	名称	蛍光 X 線分析	
			分析No	試料No
1	参考資料-1	瀬戸美濃染付碗	TMN0069	47
2	参考資料-2	「再興九谷」色絵杯	TMN0070	48

には、染付を用いて、高台寄りに一重圏線、高台の中央寄りには二重圏線を施す。高台脇から高台部にかけては、二重圏線が施される。外側面には文様は認められない。高台内釉面には、手跡が残されているので、整形の後は、素焼きを行わず、直接釉薬を掛けて（この方法は「生掛け」と呼ばれる）、本焼きを行ったと考えられる。高台畳付の整形は丁寧であり、内外面とも釉削りを行っている。

4号井戸-16 (図 137) は、大鉢の口縁部破片である。小片のため口径は復元できない。高台脇から立ち上がり、ほぼ直線的に外傾し、口縁部がわずかに外反する器形と考えられる。口縁部は輪花(波状)である。内側面には、染付線による丸文を施し、丸文中央寄りには、1号土坑-4と同様、染付線によって二重の円を描く。外側の円と二重線の間には、渦巻文が、中央には杵を線描きした斜行線が、いずれも上絵付によって施される。口唇部には、口鏝(鉄)の痕跡が認められる。

4号地下式土坑-1 (図 36) は、皿の底部破片である。小片のため高台径は復元できないが、残存部から判断すると、大皿とは考えられない。内面には、染付と色絵による幾何学文を地文として、丸文を描き、丸文中央寄りには、さらに一重の染付線を施す。丸文中央には、色絵によって捻花文を描く。外側面には、染付により唐草文を線描きし、濃みを施す。高台脇から高台部にかけては染付二重圏線、高台内は、高台寄りに一重、中央寄りに二重の染付圏線が施される。高台畳付は外面に粗い釉削りを施しており、砂がわずかに熔着する。

遺構外-23 (図 197) は、4号井戸-16と器形、文様ともに類似する大鉢口縁部破片である。両者は同一個体の可能性もあるが、本資料の場合には、丸文は内外面とも施されている。内面丸文の外側の染付線と中央寄りの二重線との間は、線描きに濃みを施した染付文様を、丸文中央には、上絵付による菊花文を描く。外面の丸文は、外側の円と中央寄りの二重線のみを染付で描き、上絵付で幾何学文様を施す。口唇部には、口鏝の痕跡が認められる。

現在知られている代表的な「祥瑞手古九谷」の伝世品としては、東京国立博物館蔵の色絵山水文大鉢(写真 85-1)、色絵山水鹿文輪花大鉢(写真 85-2)、色絵花鳥文輪花大鉢(写真 85-3)、松岡美術館蔵の竹双鳥文輪花大鉢(松岡美術館 1984)、金沢市立中村記念美術館蔵の山水文輪花

大鉢(嶋崎 1976, 図版 77, 78), 等があげられる。写真 85—1 の大鉢は, 1 号土坑—4 と, 器形その他の特徴が非常に類似しており, ①高台内の中央寄りに染付による二重圏線を描く, ②内面立ち上がり付近を削りこみ, 浅い段を作り出す, ③高台暈付の両側面に釉削りを施す, ④高台内釉面に手跡を残す, など, 絵付以外の点でも, 1 号土坑—4 といくつかの特徴を共有する。

4 号井戸—16 および遺構外—23 の直線的に開く器形は, 写真 85—2, 3 や, 松岡美術館蔵の色絵竹双鳥文輪花大鉢, 金沢市立中村記念美術館蔵の色絵山水文輪花大鉢と類似する。ただし, 色絵竹双鳥文輪花大鉢には, 口鏽は施されていない。4 号地下式土坑—1 については, 底部小片のため, 類似する伝世品を特定することはできない。

蛍光 X 線分析の試料としてガラスビードを作成するためには, 0.500 g の試料粉末が必要とされる。そのため, 蛍光 X 線分析に関しては, 絵付の部分が破片全体の表面積に比して小さく, 0.500 g の試料の採取を行ってもその破片の特徴を著しく損なわないと判断した 2 点 (1 号土坑—4, 4 号井戸—16) についてのみ分析を行った。放射化分析については, 必要とされる試料の量が 50 mg (蛍光 X 線分析の十分の一) と少量なので, 4 点全点を分析した。

この他に, 分析資料として, 理学部 7 号館地点から出土した 6 点の磁器片を用意した。142 号土坑—1 (図 189) は, 推定高台径 7.9 cm をはかる大皿の底部破片で, 内面に緑の色絵具による上絵付を施す。全体の文様構成は不明である。胎土は灰色味を帯びる。高台暈付の整形は, 平坦であり, 暈付の内外面には釉削りは認められない。類品は山辺田 4 号窯で出土している。

1 号井戸—1 (図 15), 遺構外—1 (図 196), 遺構外—2 (図 196) の 3 点は, いずれも中国江西省景德鎮窯の 17 世紀前半の製品と考えられる染付皿である。胎土は, 肥前の製品に比して緻密であり, 肉眼観察によっても肥前の製品との間には違いが認められる。高台内には, いずれも放射状の削り痕を残す。

18 号地下式土坑—1 (図 160) と 83 号土坑—1 (図 128) は, 「呉須赤絵」と呼ばれるタイプの皿の破片であり, 同じ中国産でも, 中国南部福建・広東省付近の製品といわれている (斎藤 1976)。胎土は灰色味を帯び, 半磁器質である。内面には, 上絵付が施されている。生産年代は 17 世紀前半と推測される。

#### b. 肥前古窯跡出土資料 (表 46)

対比試料としては, 肥前の 15 の窯跡から出土した 44 点の磁器片を用いる。これらの資料は, 有田町教育委員会および佐賀県立九州陶磁文化館に依頼して提供を受けたものである。15 の窯は, その地理的位置によって, 有田, 伊万里, 嬉野の 3 地域に大別される。さらに, 有田の窯は, 黒牟田地区, 南川原地区, 白川・泉山・岩谷川内地区 (以上, 有田町), 板ノ川内地区 (山内町) に分けられる。

表 48 肥前古窯跡出土分析資料観察表

Table 48 Description of porcelain samples from Hizen kiln sites

資料No	名称	推定生産年代	特徴	
1	山辺田窯-1	白磁大皿	1650~1660年代	1号窯出土。高台を含む破片であり、長軸10.5cm。焼成良好。釉は青味があり、内面の降灰が結晶状になる。内外底にロクロ調整痕。
2	山辺田窯-2	白磁大皿	1650~1660年代	2号窯出土。胴部の破片であり、長軸8cm。釉には細かい貫入がある。内面には降灰。
3	山辺田窯-3	白磁大皿	1650~1660年代	2号窯6号床面出土。胴部の破片であり、長軸9.3cm。焼成不十分。釉は褐色を帯び、細かい貫入がある。内面に降灰。外面にロクロ成形痕。
4	山辺田窯-4	色絵素地大皿	1640年代頃	3号窯出土。高台脇から胴部の破片であり、長軸6.5cm。焼成良好。釉は灰色を帯び内面に降灰。高台際と見込周囲に染付二重圏線。
5	山辺田窯-5	白磁大皿	1640~1650年代	4号窯イ室出土。高台を含む破片であり、長軸8.8cm。焼成良好。釉は灰青色であり、内面の降灰が結晶状。高台畳付は1回の平らな釉削りを施し、焼成時の砂が多く熔着。胴部にも焼成時にへたって、窯道具に敷いた砂が熔着。外面にはロクロ調整痕あり。
6	山辺田窯-6	白磁大皿	1640~1650年代	4号窯イ-4出土。高台を含む破片であり、長軸9.5cm。焼成不十分。釉は褐色を帯び、細かい貫入がある。内面には降灰が著しい。高台畳付は釉剥ぎが不十分であり、露胎部は茶色を呈す。
7	山辺田窯-7	白磁台付皿	1640~1650年代	4号窯出土。高台の高い皿であり、長軸22.4cm。焼成良好。釉は青味があり、細かい貫入がある。内面に降灰が結晶状。高台畳付の釉剥ぎは不十分で砂熔着。外面にロクロ成形痕あり。
8	山辺田窯-8	白磁大皿	1640~1650年代	4号窯出土。底部片で長軸8.5cm。焼成不十分であり、釉は褐色を帯び、細かい貫入がある。内面に降灰。
9	山辺田窯-9	色絵素地大皿	1640~1650年代	7号窯E-18区出土。口縁部片であり、長軸6.2cm。焼成良好。釉は灰白色で外面には釉むらがある。口縁部内外に染付一重圏線を引く。外面はロクロ調整痕がある。
10	丸尾窯-1	白磁大皿	1650~1680年代	高台を含む破片で長軸6cm。焼成良好。釉は青味があり、内面に降灰。見込周囲を削り込んで一段作る。高台内にはロクロ調整痕がみられ、釉むらが著しい。
11	丸尾窯-2	染付大皿	1650~1680年代	高台を含む破片で長軸18.4cm。焼成良好。釉は青味があり、外面に手跡が残る。高台内の一部露胎。内面に降灰。内面唐花文。高台内外に圏線を染付し、外側面にも染付文様あり。
12	丸尾窯-3	染付大皿	1650~1680年代	高台から口縁部までの破片で長軸21cm。焼成良好。釉は青味があり、外面に手跡が残る。口縁部を外反りに作り、見込に草花、内側面に蓮弁文、外側面に染付圏線と染付文様あり。
13	柿右衛門窯-1	白磁皿	1660~1680年代	3次調査物原第3層出土。高台を含む底部片で長軸7.5cm。焼成良好。釉は乳白色。
14	柿右衛門窯-2	白磁中皿	1660~1680年代	3次調査物原出土。高台を含む破片で長軸9.7cm。焼成良好。釉は乳白色。外側面に唐草文を線彫。
15	柿右衛門窯-3	色絵素地皿	1660~1680年代	2次調査物原6層出土。口縁部の破片で口縁部長さ4cm。焼成不良。釉は黄味のある灰色で呉須は黒色を帯びる。口錆。外側面に唐草文を染付。
16	柿右衛門窯-4	白磁皿	1660~1680年代	3次調査物原5層出土。底部片で長軸13.6cm。焼成良好。釉は青味あり。底部にハリが熔着。
17	柿右衛門窯-5	白磁大皿	1660~1680年代	3次調査物原出土。口縁部の破片で口縁部長さ10cm。焼成良好。釉は乳白色。外面の釉に細かい貫入あり。
18	柿右衛門窯-6	白磁小皿	1660~1670年代	3次調査物原出土。底部から口縁部までの破片で口縁部長さ6.5cm。焼成良好。型打成形によって内側面に窓絵文を陽刻している。釉は乳白色。口錆。
19	柿右衛門窯-7	色絵素地(?) 小皿	1660~1680年代	C043-1出土。高台を含む破片で長軸6cm。焼成良好。内外に染付圏線を施す。高台畳付は丸く釉剥ぎ。
20	柿右衛門窯-8	染付小皿	1660~1670年代	3次調査Aト8層出土。底部から口縁部までの破片で、推定口径15cm、底径8.8cm、高さ2.8cm。釉に細かい貫入あり。内面に丸文。外面に染付圏線を施す。高台畳付は丸く釉剥ぎ。
21	樋口窯-1	白磁鉢	1690~1730年代	胴部~口縁部にかけての破片で口縁部長さ4.1cm。焼成良好。

	資料No	名称	推定生産年代	特徴
22	南川原窯ノ辻窯-1	白磁鉢	1680~1710年代	AT出土。口縁部片で口縁部長さ5.2cm。焼成良好。型打成形により輪花に作る。口錆。
23	南川原窯ノ辻窯-2	白磁皿か鉢	1680~1710年代	AT4層出土。胴部片で長軸4.3cm。焼成良好。型打成形により、口縁部に亀甲つなぎ文を表す。
24	天狗谷窯-1	白磁小皿	1650年代頃	高台を含む破片で長軸10.3cm。焼成良好。釉は青味を帯び、釉むらがある。内面の降灰は結晶状。型打成形により、内側面に陽刻文。高台置付は平らな釉剥ぎ。
25	天狗谷窯-2	染付鉢	1660~1670年代	胴部から口縁部の破片で口縁部長さ6.7cm。焼成良好。外面に雲と鳳凰と火焰宝珠、口縁部内側に雷文帯を染付。見込は荒磯文を描いたものか。
26	下白川窯-1	白磁壺	1660~1680年代	BT2層出土。アルパレルロ形壺の胴部片で長軸5.5cm。焼成良好。
27	楠木谷窯-1	白磁中皿	1650~1660年代	口縁部片であり、口縁部長さ4.8cm。焼成不十分であり、釉は黄白色を呈す。ロクロ調整痕著しい。
28	楠木谷窯-2	染付小皿	1650年代	ATII層出土。高台際から胴部にかけての破片で長軸5.4cm。釉は青味あり。内側面は型打成形により菊花形。見込に半菊唐草文を染付。
29	楠木谷窯-3	白磁中皿	1650~1660年代	窯床面出土。胴部片で長軸4.8cm。焼成不十分であり、ロクロ成形痕著しい。
30	楠木谷窯-4	白磁鉢	1680~1720年代	ATII層出土。口縁部片で口縁部長さ4.1cm。焼成良好。口錆。型打成形によって輪花形に作る。楠木谷窯以外の窯の製品と推測される。
31	長吉谷窯-1	白磁大皿	1650~1660年代	高台を含む破片で長軸9cm。焼成良好。釉むらがあり、内面に降灰の結晶がみられる。
32	長吉谷窯-2	白磁皿	1660~1670年代	高台から口縁部までの破片で長軸8.4cm。焼成不十分。釉は褐色を帯び、細かい貫入がある。内面に降灰が少しみられる。高台置付は丸い釉剥ぎ。
33	長吉谷窯-3	白磁中皿	1650~1660年代	高台を含む破片で長軸7.8cm。内面の降灰は結晶状。高台脇に手跡。高台置付は2回の釉剥ぎ。高台内にロクロ成形痕。高台を含む破片で長軸15cm。焼成やや不十分。見込の降灰は結晶状。内外に染付圏線を施す。
34	長吉谷窯-4	色絵素地中皿	1650~1660年代	高台を含む破片で長軸11.5cm。焼成良好。釉は青味を帯び、釉むらがある。高台置付は4回程度の釉削りで、外側部分は段ができるほど深く削っている。
35	長吉谷窯-5	染付大皿	1650~1660年代	底部片で底径9.1cm。焼成良好。型打成形により、内面半分に唐草文を陽刻。残りの半分に丸文を染付。高台内外に染付圏線、高台内中央に一重方形枠内に福と思われる文字を染付。高台置付は丸く釉剥ぎ。
36	長吉谷窯-6	染付小皿	1650~1660年代	高台際から胴部の破片で長軸10cm。焼成良好。見込周囲は削り込んで一段作る。その見込周囲と外面の高台際、腰部に染付圏線を引く。内面に降灰あり。
37	猿川窯-1	色絵素地大皿	1640~1650年代	高台を含む底部片で長軸6.4cm。焼成はほぼ良好。釉は青味があり、外面には釉むらが著しい。外面にロクロ成形痕。見込に花卉文を染付。
38	窯ノ辻窯-1	染付手塩皿	1630~1640年代	高台際から口縁部にかけての破片で口縁部長さ1.7cm。釉は青味強く、細かい貫入がある。釉むらあり。
39	ダンバギリ窯-1	白磁角皿	1650~1660年代	推定口径11cm、底径5.5cm、高さ3.2cm。焼成良好。内側面捻り雲文を型打成形で表す。高台置付は丸い釉剥ぎ。
40	鍋島藩窯-1	白磁小皿	18世紀	底部片であり、長軸10.5cm。焼成やや不十分であり、釉は灰色。見込周囲は削り込んで一段作る。高台置付の釉剥ぎは雑であり、砂着。
41	吉田窯-1	白磁皿	1650~1660年代	底部全体と口縁の一部が残ったもので底径13.3cm。焼成普通で内面に降灰が少しあり。見込周囲を削り込んで一段作る。ハリ痕1ヶ所。釉むら著しい。
42	吉田窯-2	白磁大皿	1650~1660年代	2号窯赤焼土混入層出土。口縁部の破片で口縁部長さ6.3cm。焼成はほぼ良好。釉は灰色を呈す。口縁部は折縁に作る。
43	不動山皿屋谷窯-1	白磁大皿	1660~1680年代	2号窯赤焼土混入層出土。高台を含む破片で長軸6.9cm。焼成不良で、釉が十分に焼けていない。高台置付の釉剥ぎは丸い。
44	不動山皿屋谷窯-2	白磁皿	1660~1680年代	



班・山崎 1988)。実際、山崎が示した分析値のうち、九谷古窯跡（九谷 1 号窯，2 号窯：17 世紀～18 世紀初頭の窯，および吉田屋窯：19 世紀の，いわゆる「再興九谷」の窯）の磁器片および陶石 18 試料の酸化チタンの存在量は、すべて 0.10% を越えるものであり、また、有田古窯跡の磁器片および陶石 12 試料のうち、10 試料は酸化チタンの存在量が 0.10% 未満である。したがって、蛍光 X 線分析によって、今回の分析対象とした古九谷様式の磁器片の酸化チタンの存在量が 0.10% 未満であるとの結果が得られれば、今回の分析資料の素地は九谷産とは考えられないと判定できる。

河島、松野（1985）は、主成分元素よりも、微量成分元素の方が九谷産と有田産の判別に有効であるとの考えを示している。そこで、放射化分析によって、蛍光 X 線分析では分析値を得ることができなかった元素について定量を行い、微量成分元素からみた 4 点の古九谷様式の磁器片と有田古窯跡出土磁器片との比較を行う。

分析の第二の目的は、有田の古窯跡から出土した資料の化学的な特徴を明らかにすることである。筆者らは、山崎（1986）の結果から考えて、チタンの存在量が九谷産と有田産の判別を行う際のひとつの有効な指標である、という点では、山崎の主張に賛成である。ただし、河島（1987）、小木（1988）の指摘する通り、現在までに分析された有田古窯跡出土資料（山崎 1986、Pollard 1986、佐賀県窯業試験場 1986）のなかには、酸化チタンの存在量が 0.10% を越えるものが含まれており、0.10% が両者の厳密な判別基準となり得るか否かについては、さらに検討を要すると考えている。したがって、今回の分析では、有田の各窯の資料を数多く分析して、チタンの存在量のばらつきを調べるとともに、他元素の分析値についても検討を加える。さらに、これらの作業を通じて、有田の地域内における窯毎の特徴についても検討する。

第三の目的は、肥前のうち、有田以外の周辺地域の窯から出土した資料の元素組成を検討することである。17 世紀代に肥前において磁器が焼成された地域は、有田だけではなく、伊万里、波佐見、嬉野など複数の地域において窯跡が確認されている。これらの諸窯から出土した磁器片の素地のうちには、有田産の製品とは異なった特徴を有するものが存在することは、肉眼観察からも推測できるが、その化学分析を試みた例は、現在までのところほとんどない。古九谷様式の生産地については、有田と九谷の二者のみが問題とされてきたが、生産地推定に際しては、これらの窯から出土した資料との比較も行う必要があると考え、有田の南東に位置する嬉野（吉田窯，不動山皿屋谷窯）から採集された 4 点を分析資料に加えた。これらの 4 点は、すべて白磁であり、色絵素地と推測される。なお、17 世紀代の磁器片ではないが、伊万里市鍋島藩窯から出土した磁器片 1 点についても、あわせて分析を行った。



## 2. 理学部7号館地点出土古九谷様式磁器片の蛍光X線分析

長佐古 真也

### (1) 分析方法

本項では、蛍光X線分析を用いて、主成分元素の定量値に基づいた、古九谷様式磁器片の生産地推定を試みる。蛍光X線分析は、比較的簡便かつ迅速に多元素を定量でき、主成分元素に関しては、胎土分析に必要な精度が保証されている。

試料は、まず、ダイヤモンド・カッターで表面を研磨し、超音波洗浄器を用いてエチルアルコールで洗浄した。次に、タングステンカーバイト製乳鉢で200メッシュ程度まで細かく粉碎した。この試料粉末0.500gと10倍の溶融剤を正確に秤量・混合し、直径3cmのガラスビード(ガラス状の円盤)を作成した。溶融剤には、4ホウ酸リチウム(Li<sub>2</sub>B<sub>4</sub>O<sub>7</sub>:Spectromelt B10 MERCK社製)を750°Cで約2時間脱水処理したものを用いた。ガラスビードの作成にはビードサンプラーNT1000を用い、約3分間、1000°C付近で溶融した。

分析装置は、理学電気製全自動蛍光X線分析装置DATAFLEX 8010(東京都埋蔵文化財センター分析室)を用いた。分析条件、検量線用の標準試料、検量線の一例は、表49, 50, 図211に示した。

定量した元素は、珪素(Si)、チタン(Ti)、アルミニウム(Al)、鉄(Fe)、マグネシウム(Mg)、カルシウム(Ca)、カリウム(K)の7主成分元素である。

### (2) 分析結果

分析結果を表51に示す。元素存在量は、すべて酸化物の形で示した。これは、岩石学の習慣に従ったものである。

### (3) チタンの存在量

九谷の古窯跡試料および陶石の化学分析は、すでにいくつか行われているが、主成分元素の定量値については、山崎(1986)による酸化チタンの定量値が発表されているのみである(表52)。前述した通り、山崎は、有田の古窯跡出土磁器片・陶石と表52に示した九谷試料の分析値との比較から、酸化チタンが0.10%を基準に、それを越えるものを九谷、それ以下のものを有田と判定している(山崎1981, 東京大学遺跡調査室病院班・山崎1988)。今回は、九谷窯の試料を分析する機会に恵まれなかったため、主成分元素による九谷窯に帰属されるかどうかの判定は、上記の分析結果を援用する。そこで、表52の九谷窯のデータと今回分析した肥前各窯

表 49 蛍光 X 線分析条件

Table 49 Specifications for X-ray fluorescence analyses

X-ray Tube	Rh	Absorber	1.0
Atmosphere	Vac.	Slit	Coarse
Voltage	40kV	PHA	(10-30)
Current	40mA	Time Constant	1
		Repeat Time	3
		Formatting	2

Element	Counter	Crystal	Measure(sec)	Element	Counter	Crystal	Measure
Si	P. C.	EDDT	20	Ca	P. C.	EDDT	20
Ti	P. C.	EDDT	20	K	P. C.	EDDT	20
Al	P. C.	EDDT	20	Rb	S. C.	LiF-1	100
Fe	S. C.	LiF-1	20	Sr	S. C.	LiF-1	100
Mg	P. C.	ADP	40				

表 50 蛍光 X 線分析の標準試料

Table 50 Standards for X-ray fluorescence analyses

試料名	岩石名	産地
1 JG-1 Granite	花こうせん緑岩	群馬県沢入 (沢入花こうせん緑岩)
2 JB-1 Basalt	玄武岩	長崎県佐世保 (北松浦玄武岩)
3 JB-2 Basalt	玄武岩	東京都大島 (三原山昭和溶岩)
4 JA-1 Andesite	安山岩	神奈川県真鶴 (箱根山外輪山) (本小松石)
5 JP-1 Peridotite	かんらん岩	北海道幌満
6 JR-1 Rhyolite	流紋岩 (黒曜石)	長野県和田峠北

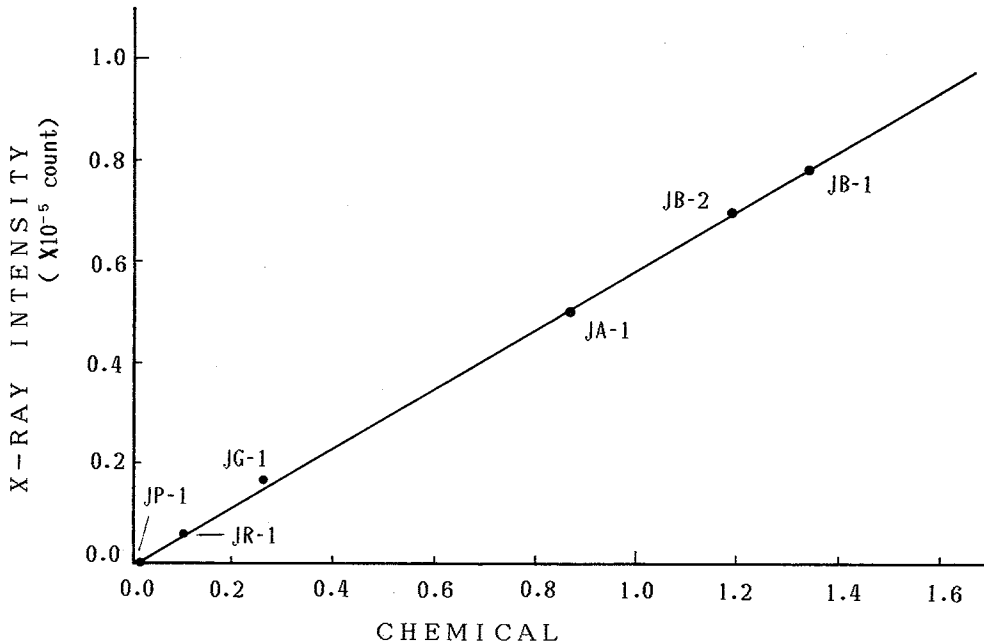


図 211 蛍光 X 線分析の検量線例 (酸化チタン)

Figure 211 Calibration of the X-ray fluorescence analyses (TiO<sub>2</sub>)

表 51 蛍光 X 線分析の結果

Table 51 Results of the X-ray fluorescence analyses (%)

試料No./資料名	SiO <sub>2</sub>	TiO <sub>2</sub>	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	MgO	CaO	K <sub>2</sub> O
1 山辺田窯-1	75.2	0.08	22.5	1.63	0.33	0.17	5.82
2 山辺田窯-2	72.7	0.07	21.7	1.36	0.29	0.23	5.78
3 山辺田窯-3	72.8	0.09	21.4	1.73	0.36	0.65	5.08
4 山辺田窯-4	75.4	0.06	21.6	1.24	0.33	0.33	5.20
5 山辺田窯-5	76.5	0.09	19.7	1.59	0.34	0.21	5.33
6 山辺田窯-6	71.0	0.08	21.1	1.59	0.43	0.19	5.31
7 山辺田窯-7	74.7	0.09	21.3	1.60	0.55	0.27	5.15
8 山辺田窯-8	77.9	0.06	21.1	1.39	0.27	0.27	5.40
9 山辺田窯-9	69.8	0.06	18.4	1.38	0.26	0.25	5.24
10 丸尾窯-1	77.8	0.08	18.1	0.99	0.15	0.19	4.29
11 丸尾窯-2	76.6	0.05	17.6	1.05	0.25	0.27	3.19
12 丸尾窯-3	72.8	0.05	18.4	1.06	0.26	0.17	4.32
13 柿右衛門窯-1	74.1	0.06	18.7	0.60	0.12	0.32	4.64
14 柿右衛門窯-2	78.5	0.06	18.5	0.61	0.16	0.32	4.46
15 柿右衛門窯-3	73.7	0.06	18.8	0.75	0.11	0.24	5.03
16 柿右衛門窯-4	76.1	0.06	18.5	0.96	0.09	0.06	4.28
17 柿右衛門窯-5	75.8	0.05	17.8	0.45	0.23	0.17	4.26
18 柿右衛門窯-6	76.4	0.06	17.8	0.37	0.14	0.34	4.67
20 柿右衛門窯-8	78.0	0.06	18.4	0.77	0.11	0.25	4.26
21 樋口窯-1	78.6	0.05	18.7	0.70	0.11	0.24	3.89
22 南川原窯ノ辻窯-1	75.9	0.05	17.8	0.37	0.04	0.37	4.69
24 天狗谷窯-1	76.7	0.05	16.8	1.00	0.15	0.19	4.17
25 天狗谷窯-2	77.0	0.06	18.0	0.82	0.11	0.16	4.38
26 下白川窯-1	75.5	0.06	19.0	0.69	0.06	0.18	4.44
27 楠木谷窯-1	79.0	0.05	18.3	0.26	0.06	0.23	3.73
28 楠木谷窯-2	76.5	0.06	18.7	0.90	0.27	0.10	4.35
30 楠木谷窯-4	77.1	0.05	19.1	0.46	0.04	0.24	4.79
31 長吉谷窯-1	79.4	0.06	18.9	0.78	0.19	0.25	4.32
32 長吉谷窯-2	75.1	0.05	18.0	0.56	0.12	0.56	3.86
33 長吉谷窯-3	77.0	0.06	18.2	0.73	0.18	0.21	4.14
34 長吉谷窯-4	79.0	0.05	17.4	0.74	0.10	0.18	4.21
37 猿川窯-1	81.2	0.05	17.3	0.88	0.22	0.15	4.25
38 窯ノ辻窯-1	73.0	0.07	17.6	1.04	0.20	0.19	3.89
40 鍋島藩窯-1	75.8	0.05	18.1	0.54	0.14	0.27	4.45
41 吉田窯-1	78.4	0.32	17.7	0.70	0.21	0.43	4.18
42 吉田窯-2	72.4	0.32	17.7	1.08	0.31	0.28	4.22
43 不動山皿屋谷窯-1	66.9	0.68	24.4	1.18	0.70	0.23	4.57
44 不動山皿屋谷窯-2	66.0	0.70	24.4	1.41	0.74	0.13	4.67
45 1号土坑-4	73.6	0.06	20.0	0.98	0.19	0.37	4.82
46 4号井戸-16	73.7	0.06	19.8	0.99	0.27	0.30	5.02
47 参考試料-1	71.4	0.26	22.1	0.55	0.04	0.33	5.22
48 参考試料-2	69.9	0.30	24.0	0.64	0.42	0.29	4.26
49 142号土坑-1	72.1	0.06	21.3	1.69	0.25	0.13	4.56

註 1) 単位はすべて%

註 2) 鉄は 3 価で全量を換算

のデータをもとに、未知試料の酸化チタンの存在量（2点とも0.06%）を評価する。

まず、肥前、九谷双方の酸化チタンの分布をステューデントのt分布によって評価する。t分布は、母集団が正規分布に近い形をとらなければ採用できないが、前出の九谷窯の酸化チタンの濃度分布について吟味すると、濃度の高い群と低い群に分離できる。古九谷様式の試料の分析結果に近い、濃度の低い群（表52にアンダーラインで示す）を九谷のサンプルとして採用する。

肥前産の試料については、まず、有田・伊万里地域と嬉野地域に大きく二分された（表51）。嬉野の不動山皿屋谷窯、吉田窯の素地は、酸化チタンの存在量が0.3%以上と、有田各窯および伊万里市鍋島藩窯の試料とは著しく異なる特徴を持っている。さらに、有田および伊万里の中でも、山辺田窯の試料は、酸化チタンの存在量が他の窯と比較してやや高い傾向を示すことから、別個に取り扱った。

表 52 九谷古窯跡出土破片の素地の酸化チタン存在量（山崎 1986 より）  
Table 52 Elemental abundances of Oxidized Titanium measured by Yamazaki (1986)

破片	資料および番号	TiO <sub>2</sub> (%)
3	第1号窯 青磁皿（九谷6）	<u>0.18</u>
4	第1号窯 褐釉皿（九谷11）	0.82
5	第1号窯 白磁鉢（九谷12）	<u>0.26*</u>
6	第1号窯 白磁鉢（九谷17）	0.40
7	第1号窯 白磁碗（九谷18）	<u>0.22*</u>
8	第1号窯 青磁皿（九谷24）	0.77*
9	第1号窯 灰黑色陶碗（九谷25）	1.12
10	第1号窯 鉄釉碗（九谷27）	<u>0.23</u>
11	第2号窯 白磁鉢（九谷33）	0.74
12	第2号窯 白磁皿（九谷44）	<u>0.16*</u>
13	第2号窯 淡黄釉碗（九谷37）	<u>0.22</u>

\*の酸化チタン存在量は化学分析（比色法）による。  
アンダーラインは、チタン含有量の低い群のサンプル。

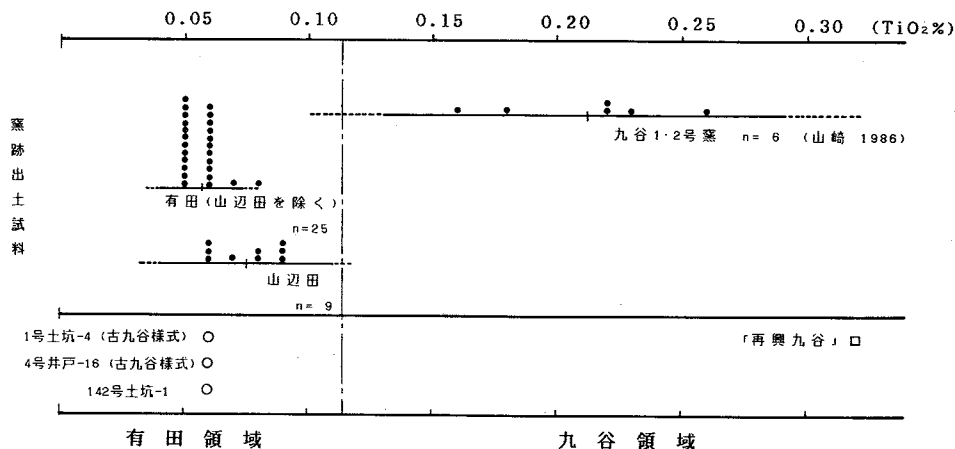


図 212 酸化チタンの存在量分布

Figure 212 Elemental abundances of Oxidized Titanium

以上の各群のうち、判別の必要のある九谷窯、山辺田窯、山辺田以外の有田各窯および鍋島藩窯、の3つのグループについて、95%および98%のt-分布の範囲を図212に示す。2点の古九谷様式の試料が九谷に帰属する確率は、0.5%以下で、今回の分析試料は九谷1号窯・2号窯の製品とは考えられない。

#### (4) クラスター分析

(3)において、2点の古九谷様式の試料は、有田ないし伊万里の製品である可能性を指摘した。そこで、次に、クラスター分析を用いて、古九谷様式の試料と、有田古窯跡および鍋島藩窯出土試料との類似性を検討する。クラスター分析には、『パソコン統計ハンドブックII 多変量解析編』（脇本・垂水・田中1984）所収のプログラムを用いた。変数には、分析した全7元素を採用した。非類似度（dissimilarity）をあらわす間隔尺度としては、標準化ユークリッド距離（standardized squared Euclidean distance）を用い、クラスタリングの方法には、ワード法（Ward method）を用いた。

まず、有田古窯跡および鍋島藩窯出土試料のデンドログラムを示す（図213）。非類似度50で切ると、山辺田窯とそれ以外に区分される。山辺田窯以外の製品の元素組成は、きわめて類似しており、窯毎のまとまりは、図213にはあらわれていない。

理学部7号館地点から出土した3点の磁器片試料を、上記のサンプルと共にクラスター分析にかけた結果を図214に示す。まず、2点の古九谷様式の磁器片（1号土坑-4、4号井戸-16）は非類似度1.01で統合され、きわめて類似した組成を持つことが判る。おそらく、この2点はほぼ同質の原料を用いて製作されたものであろう。そして、この2点は、肥前産と推定される142号土坑-1と共に、山辺田窯のグループにクラスタリングされる。非類似度が最も小さい対比試料（最もよく似ている対比試料）は、山辺田4号窯出土の色絵素地試料である。

以上の結果から、有田古窯跡および鍋島藩窯出土試料と1号土坑-4、4号井戸-16の主成分元素の組成は非常に類似していることが明らかであり、共に有田ないし伊万里産と考えて矛盾する要素はない。

#### (5) 元素存在量分布図による検討

(4)で、2点の古九谷様式の磁器片（1号土坑-4、4号井戸-16）は、山辺田窯のグループにクラスタリングされた。これら2点が実際に山辺田窯に帰属し得る可能性について検討する。

珪素-アルミニウム(Si-Al)分布を図215に、また、珪素/アルミニウム-チタン/鉄(Si/Al-Ti/Fe)分布を図216に示す。

図216によると、1号土坑-4と4号井戸-16は山辺田窯試料の分布する領域に属するが、図

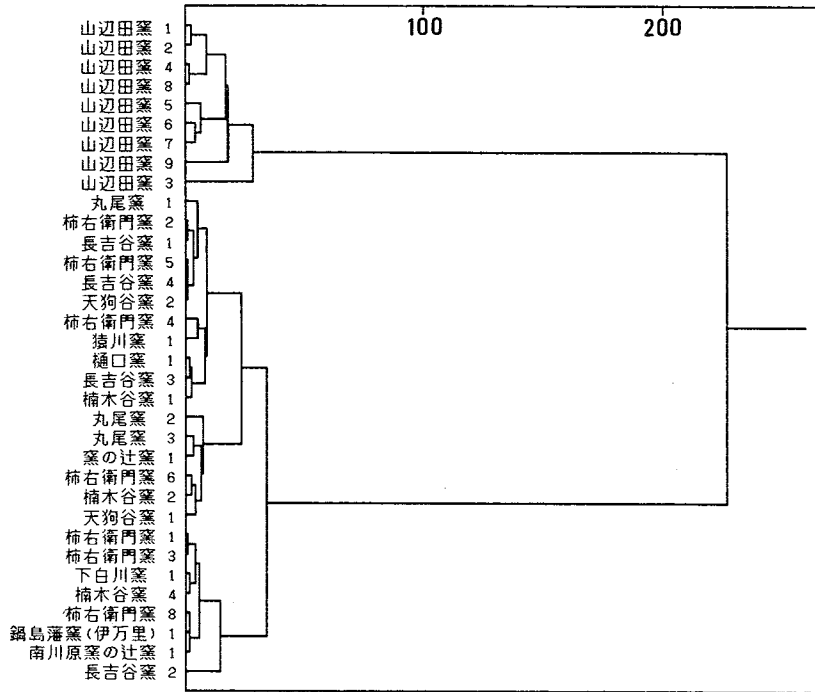


図 213 有田古窯跡および鍋島藩窯出土試料のデンドログラム

Figure 213 Dendrogram from the cluster analysis of samples from Arita and Imari kiln sites

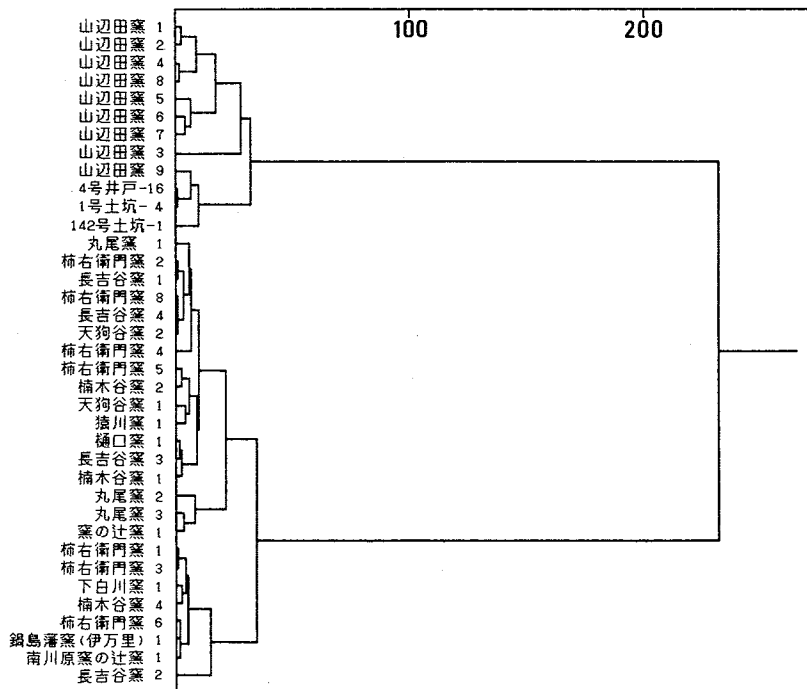


図 214 有田古窯跡・鍋島藩窯出土試料と理学部7号館地点出土試料のデンドログラム

Figure 214 Dendrogram from the cluster analysis of samples from Arita and Imari kiln sites and the No. 7 Science Building area

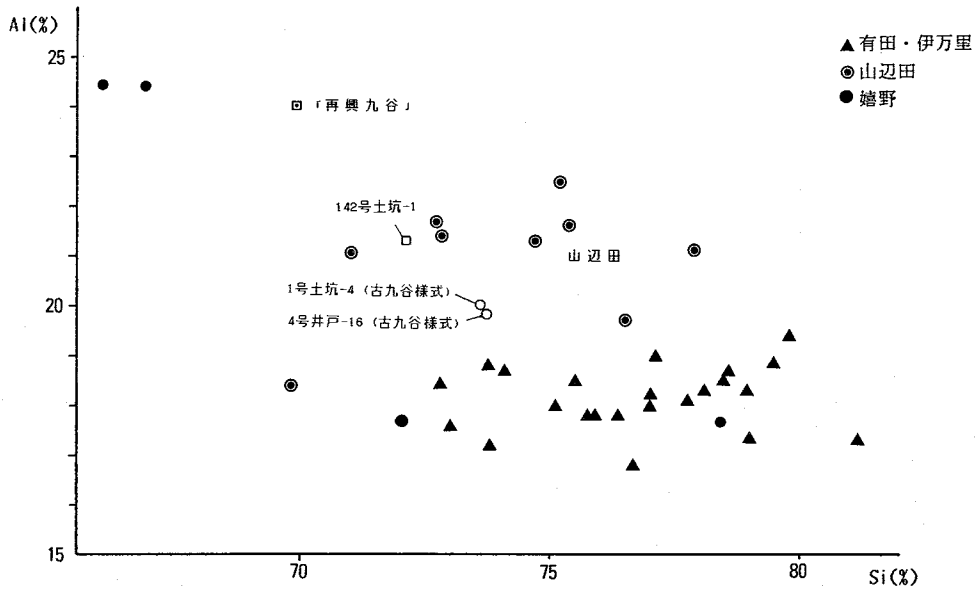


図 215 分析試料の Si/Al 分布

Figure 215 Distribution of Si/Al

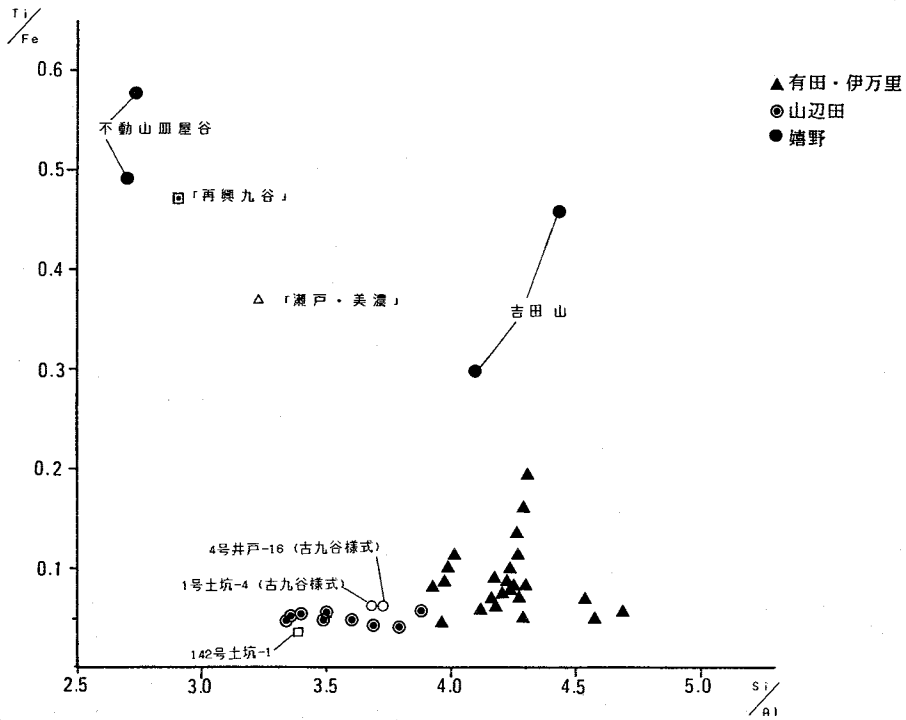


図 216 分析試料の Ti/Fe—Si/Al 分布

Figure 216 Distribution of Ti/Fe — Si/Al

215 では山辺田窯の分布領域と、その他の有田諸窯および鍋島藩窯試料の分布領域との境界付近に分布する。1号土坑-4と4号井戸-16は、確かに山辺田窯の素地に類似しているが、山辺田窯の試料の酸化鉄(Ⅲ)の存在量は1.24~1.73%であり、1号土坑-4(酸化鉄(Ⅲ)の存在量0.98%)および4号井戸-16(酸化鉄(Ⅲ)の存在量0.99%)よりも全体に高い、などの点で微細な相違がある。したがって、今回は、この事実のみを指摘し、焼成した窯の推定は次の機会に譲ることとする。

142号土坑-1は、肉眼的観察から山辺田窯の製品との類似が指摘された資料であるが、この試料については、いずれの分布図とも山辺田窯の領域に分布し、山辺田窯の製品である蓋然性が高い。瀬戸・美濃産、および「再興九谷」と推測される2点の参考試料は、有田・伊万里領域から遠く離れた領域に出現することがわかる。

#### (6) 判定

今回分析した2点の古九谷様式の磁器片は、(3)、(4)、(5)から、有田ないし伊万里産の素地である蓋然性がきわめて高く、かつ、(3)から、九谷産の素地である可能性はほとんどない。よって、2点の古九谷様式の磁器片の素地は、有田ないし伊万里産である。

### 3. 理学部7号館地点出土古九谷様式磁器片の放射化分析

二宮 修治・大沢 眞澄

これまで、考古学試料において、土器、須恵器、古瓦、陶磁器などのケイ酸塩・セラミックス物質について、放射化分析による微量成分元素存在量にもとづく、主として生産地の同定あるいは製作技法に関する検討が行われている(馬淵・富永1983, 大沢・二宮1980, 三辻1980, 馬淵他1977, 河島1983, 小山1984)。本研究では、東京大学本郷構内理学部7号館地点出土磁器片の識別・分類さらに生産地の推定を目的として、放射化分析により磁器胎土中の諸種微量成分元素の定量を行った。特に、本研究では、磁器試料の基礎的研究として、考古学的な研究が進んでおり、さらに近世磁器を論ずる際に最も重要であるところの肥前古窯跡出土磁器(大橋1985)について、磁器胎土の微量成分元素存在量による検討、さらにこれらの検討にもとづく、東京大学本郷構内理学部7号館地点出土磁器片試料の生産地同定の可能性を検討した。

東京大学本郷構内理学部7号館地点出土磁器片試料の識別・分類、肥前古窯跡出土磁器片試料の識別・分類、東京大学本郷構内理学部7号館地点出土磁器片試料の生産地同定には、定量された微量成分元素存在量を変数とする多変量解析・クラスター分析により検討した。

#### (1) 実験方法



分析に供した東京大学本郷構内理学部7号館地点出土磁器片試料ならびに肥前古窯跡出土磁器片試料は、いずれも試料片をダイヤモンドカッターで小片に切断しその一部を分取した。分取された小片試料は、純水—超音波洗浄し、風乾後、ステンレス・スチール製粉砕器で粉砕し実体顕微鏡下でハンド・ピック法により釉部分及び切断面を除去し、胎土部分のみを回収した。回収された胎土試料は、再びステンレス・スチール製粉砕器で粉砕後、さらにメノウ乳鉢で約325mesh(直径0.044mm)程度まで細粉化した。機器中性子放射化分析に供した試料は、すべて風乾状態の細粉試料である。

本研究に用いた機器中性子放射化分析は、一般的な地球化学試料の分析方法(Gordon et al. 1968)を基本としている。詳細については既報の解説(大沢・二宮1983)を参照されたい。

熱中性子照射は、細粉試料約50mgを精秤し、ポリエチレン袋に二重に封入、立教大学原子力研究所TRIGA Mark II原子炉回転試料棚(RSR:熱中性子束 $5.0 \times 10^{11} \text{ n/cm}^2 \cdot \text{sec}$ )にて24時間熱中性子照射した。

生成核種の $\gamma$ 線の測定には、Canberra社製高分解能Ge(Li)半導体検出器—マルチチャンネル波高分析装置を用い、生成核種の半減期の違いにより、各照射試料について以下の測定条件(冷却時間・計測時間)で3回繰り返し測定を行った。

照射	冷却	計測	測定核種 (定量元素)
24時間	4~5日間	1,000秒	$^{24}\text{Na}(\text{Na})$ , $^{140}\text{La}(\text{La})$ , $^{153}\text{Sm}(\text{Sm})$
	1~2週間	5,000秒	$^{140}\text{La}(\text{La})$ , $^{153}\text{Sm}(\text{Sm})$ , $^{177}\text{Lu}(\text{Lu})$ , $^{86}\text{Rb}(\text{Rb})$ , $^{233}\text{Pa}(\text{Th})$ , $^{51}\text{Cr}(\text{Cr})$ , $^{141}\text{Ce}(\text{Ce})$ , $^{59}\text{Fe}(\text{Fe})$ , $^{46}\text{Sc}(\text{Sc})$
	1~2ヶ月間	10,000秒	$^{177}\text{Lu}(\text{Lu})$ , $^{86}\text{Rb}(\text{Rb})$ , $^{233}\text{Pa}(\text{Th})$ , $^{51}\text{Cr}(\text{Cr})$ , $^{169}\text{Yb}(\text{Yb})$ , $^{141}\text{Ce}(\text{Ce})$ , $^{181}\text{Hf}(\text{Hf})$ , $^{59}\text{Fe}(\text{Fe})$ , $^{46}\text{Sc}(\text{Sc})$ , $^{182}\text{Ta}(\text{Ta})$ , $^{134}\text{Cs}(\text{Cs})$ , $^{60}\text{Co}(\text{Co})$ , $^{152}\text{Eu}(\text{Eu})$

定量は、得られた $\gamma$ 線のスペクトルから、上記の核種の定量に用いる $\gamma$ 線のエネルギーのピーク面積(計数值)を算出し、定量のための標準物質として同時照射したアメリカ合衆国地質調査所配布の標準岩石(Flanagan 1973)AGV-1(安山岩), GSP-2(花こう閃緑岩), G-2(花こう岩)のピーク面積と比較する方法により行った(比較法)。

本法により、主成分元素であるナトリウム(Na)、鉄(Fe)、微量成分元素であるルビジウム

(Rb), セシウム(Cs), ランタン(La), セリウム(Ce), サマリウム(Sm), ユロピウム(Eu), イッテルビウム(Yb), ルテチウム(Lu), トリウム(Th), ハフニウム(Hf), タンタル(Ta), コバルト(Co), スカンジウム(Sc), クロム(Cr), の16元素の定量が可能であった。

なお、本法の定量性の検討は、地質調査所配布の標準岩石(Ando et al. 1987) JB-1(玄武岩), JG-1(花こう閃緑岩)を用いて毎行行った。

多変量クラスター分析には、日本マイコン販売製オリジナルソフト「多変量解析」のクラスター分析のプログラムを用いた(日本マイコン1986)。本クラスター分析では、類似度プログラムを用い、間隔尺度データに関して規準化後のユークリッド距離により類似性を求めた処理後のデータを使用した。クラスターの分離基準としては最短距離法を用いた。

## (2) 結果

本研究に用いた機器中性子放射化分析の定量性の検討のための標準岩石 JB-1, JG-1 の定量結果はいずれも文献値とよく一致した。放射能の計測にともなう統計誤差は、最も大きい元素の Rb, Cs, Yb で約 20%, Hf, Ta で約 10%, 他の 11 元素では 5% 以下と良好な結果であった。

東京大学本郷構内理学部 7 号館地点出土磁器片 10 試料の機器中性子放射化分析の結果を表 53 に示す。元素存在量の単位は、主成分元素の Na, Fe は%, 他の微量成分元素は ppm である。

微量成分元素存在量を比較すると、Rb, Cs(両 2 元素は定量の際の計測誤差が大きいが、その誤差の範囲以上に有意な差), 希土類元素, Th, Hf, Sc などにより、古九谷様式色絵 4 点, 肥前色絵 1 点, 中国・景德鎮染付 3 点, 中国「呉須赤絵」2 点の磁器の種類に分類される可能性を示している。

東京大学本郷構内理学部 7 号館地点出土磁器片 10 試料のクラスター分析の結果を樹形図として図 217 に示す。クラスター分析の変数には、定量された 16 元素のうち、その存在量が少ないかあるいは定量誤差の大きい Co, Cr, Yb, Ta の 4 元素を除く Na, Fe(主成分元素), Rb,

表 53 東大理学部 7 号館地点出土磁器 10 試料の微量成分元素存在量

Table 53 Elemental abundances in 10 samples from the No. 7 Science Building area

(ppm except where noted)

試料No.	分析No.	Na(%)	Fe(%)	Rb	Cs	La	Ce	Sm	Eu	Yb	Lu	Th	Hf	Ta	Co	Sc	Cr
87146	TFSD01-01	0.82	0.71	180	11	34	51	5.0	0.24	2.8	0.44	21	3.3	3.2	1.6	3.3	6
87147	TFSD01-02	0.83	0.71	190	11	34	52	4.8	0.27	2.6	0.42	21	3.3	3.4	1.5	3.2	4
87148	TFSD01-03	0.85	0.81	200	12	34	52	4.8	0.26	2.4	0.44	21	3.2	3.0	1.6	3.1	6
87149	TFSD01-04	0.84	0.73	190	10	35	53	4.8	0.24	2.5	0.42	21	3.4	3.2	1.5	3.3	5
87150	TFSD02-01	0.98	1.18	200	11	36	59	5.1	0.29	3.0	0.47	24	3.8	3.7	1.5	3.9	5
87151	TFSD03-01	0.87	0.93	370	53	21	35	4.7	0.68	1.7	0.30	9.5	2.9	5.3	4.5	4.9	4
87152	TFSD03-02	1.96	0.53	400	38	8.3	16	3.8	0.18	1.7	0.23	8.7	2.2	4.8	1.6	2.8	5
87153	TFSD03-03	0.87	0.75	390	47	13	22	4.9	0.39	2.0	0.32	10	2.8	5.1	2.0	3.6	5
87154	TFSD04-01	0.76	1.25	180	3.8	56	91	10	1.2	4.4	0.66	39	5.4	2.8	4.0	7.8	7
87155	TFSD04-02	0.65	1.47	180	4.2	71	99	11	1.5	4.2	0.72	36	5.2	1.9	4.6	8.5	7

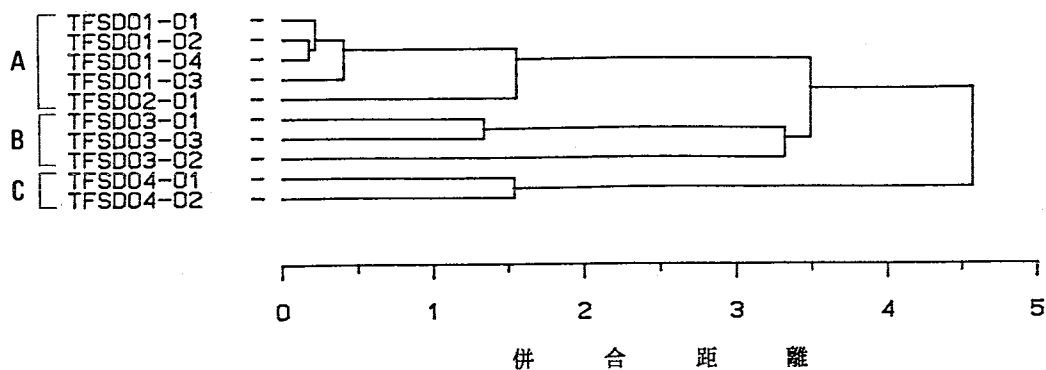


図 217 理学部 7 号館地点出土磁器片のクラスター分析

Figure 217 Dendrogram from the cluster analysis of 10 samples from the No.7 Science Building area

Cs, La, Ce, Sm, Eu, Lu, Th, Hf, Sc(微量成分元素)の 12 元素を用いた。このクラスター分析を行う場合、類似度を算出する際に基準化後のユークリッド距離を用いるので、主成分元素と微量成分元素を一緒に論じて統計処理上の問題は生じない。なお、併合距離は類似性の尺度で、その併合距離が大きいほど類似度が小さい。

東京大学本郷構内理学部 7 号館地点出土磁器片 10 試料のクラスター分析では、大きく 3 クラスターに分類される。A グループは古九谷様式色絵 4 点、肥前色絵 1 点、B グループは中国・景德鎮染付 3 点、C グループは中国「呉須赤絵」2 点に対応している。さらに、A グループは古九谷様式色絵 4 点と肥前色絵 1 点との細分化の可能性を示しているが、現段階では試料数が少ないため、この試料の場合の偶然なのか、両者の胎土に系統的有意な差があるのかについては判断できない。系統的な試料の分析ならびに総合的検討が必要である(後段参照)。また、中国産の試料は、景德鎮染付 3 点と呉須赤絵 2 点の 2 クラスターに分類された。主として微量成分元素存在量により、日本の古九谷様式・肥前のグループと中国産のグループに分類されたこと、さらに中国産のものが景德鎮染付と「呉須赤絵」の 2 グループに分類されたことは興味深く、今後の研究の方向性を示していると考えられる。

肥前古窯跡出土磁器片 44 試料の機器中性子放射化分析の結果を表 54 に示す。元素存在量の単位は表 53 と同じである。

肥前古窯跡出土磁器片 44 試料のクラスター分析の結果を図 218 に示す。用いた変数は東京大学本郷構内理学部 7 号館地点出土磁器片のクラスター分析と同様である。

肥前古窯跡出土磁器片 44 試料のクラスター分析では、有田古窯跡および伊万里市鍋島藩窯の出土磁器片 40 試料と、嬉野の古窯跡出土磁器片 4 試料とが明確に 2 クラスターに分類される。さらに、嬉野の吉田窯と不動山皿屋谷窯とが区別される。

表 54 肥前古窯跡出土磁器 44 試料の微量成分元素存在量

Table 54 Elemental abundances in 44 samples from Hizen kiln sites (ppm except where noted)

試料 No.	分析 No.	Na(%)	Fe(%)	Rb	Cs	La	Ce	Sm	Eu	Yb	Lu	Th	Hf	Ta	Co	Sc	Cr	
1.	87156	HZYB01-01	0.82	1.14	280	13	39	63	5.5	0.36	3.6	0.56	25	4.1	3.6	1.4	3.9	3
2.	87157	HZYB01-02	0.61	0.99	270	11	38	61	5.3	0.30	4.0	0.61	26	4.1	3.5	2.0	3.8	2
3.	87158	HZYB01-03	0.51	1.32	250	9.5	37	54	4.8	0.26	2.8	0.51	25	4.0	3.7	1.3	4.0	6
4.	87159	HZYB01-04	0.99	0.83	190	9.6	35	54	5.2	0.25	3.1	0.46	23	3.7	3.5	0.7	3.5	6
5.	87160	HZYB01-05	0.75	1.07	200	8.3	33	51	4.8	0.26	2.9	0.45	22	3.9	3.1	0.8	3.4	6
6.	87161	HZYB01-06	0.47	1.07	210	10	38	60	5.5	0.30	2.9	0.45	24	4.0	3.2	3.0	3.5	6
7.	87162	HZYB01-07	0.72	1.07	200	8.8	33	52	5.3	0.24	2.9	0.45	23	3.9	3.5	1.0	3.8	11
8.	87163	HZYB01-08	0.82	0.93	200	9.7	33	52	5.2	0.28	3.3	0.48	23	3.8	3.9	-	3.3	3
9.	87164	HZYB01-09	0.55	0.93	220	7.6	34	52	5.1	0.25	3.1	0.41	22	3.7	3.3	1.8	3.5	6
10.	87165	HZM001-01	0.55	0.68	160	7.2	30	48	4.6	0.28	3.0	0.42	19	3.5	2.9	1.0	3.3	7
11.	87166	HZM001-02	0.86	0.76	170	9.6	33	48	4.7	0.21	3.1	0.41	20	3.8	3.6	0.4	3.2	3
12.	87167	HZM001-03	0.41	0.77	130	9.2	31	49	4.9	0.24	2.8	0.44	21	3.3	3.0	0.8	3.2	3
13.	87168	HZK001-01	0.86	0.45	150	10	38	54	4.7	0.32	2.8	0.38	20	3.6	2.7	0.7	2.6	3
14.	87169	HZK001-02	0.70	0.45	150	9.2	36	52	4.6	0.40	2.7	0.38	19	3.3	2.8	0.7	2.5	-
15.	87170	HZK001-03	1.03	0.57	200	10	34	49	4.5	0.29	2.8	0.36	20	3.5	2.7	0.5	2.7	4
16.	87171	HZK001-04	0.64	0.71	160	9.2	35	51	4.5	0.31	2.7	0.41	20	3.3	2.9	-	2.8	3
17.	87172	HZK001-05	0.54	0.36	160	10	36	52	4.7	0.29	2.5	0.38	20	3.3	3.2	0.5	2.5	2
18.	87173	HZK001-06	0.78	0.33	180	9.7	38	53	4.7	0.33	2.6	0.36	20	3.4	3.1	-	2.4	3
19.	87174	HZK001-07	0.81	0.37	180	11	34	51	4.4	0.31	2.6	0.37	20	3.6	3.3	-	2.4	3
20.	87175	HZK001-08	0.82	0.57	170	10	32	49	4.8	0.27	2.6	0.42	19	3.5	3.3	1.1	2.9	5
21.	87177	HZHG01-01	0.35	0.50	140	8.7	34	50	4.5	0.31	4.3	0.38	19	2.9	3.4	0.5	2.5	3
22.	87193	HZK001-01	0.60	0.32	170	16	32	52	4.5	0.25	4.6	0.35	19	3.3	3.5	0.6	2.3	-
23.	87194	HZK001-02	0.62	0.50	180	11	36	55	4.7	0.23	4.4	0.40	20	3.2	3.8	-	2.8	3
24.	87178	HZTD01-01	0.70	0.69	160	8.5	29	48	4.3	0.23	4.5	0.40	18	3.0	2.9	0.9	3.1	5
25.	87179	HZTD01-02	0.67	0.59	170	13	35	52	4.5	0.26	4.0	0.38	19	3.0	3.2	1.0	2.5	5
26.	87180	HZSS01-01	0.68	0.50	160	9.2	34	53	4.5	0.25	3.6	0.38	19	3.2	3.4	-	2.5	2
27.	87181	HZKD01-01	0.35	0.23	120	11	32	50	4.3	0.27	4.3	0.34	18	3.1	3.1	0.8	2.1	-
28.	87182	HZKD01-02	0.50	0.62	160	11	30	49	4.6	0.31	4.2	0.38	18	3.0	3.4	0.9	3.2	6
29.	87183	HZKD01-03	0.38	0.24	130	10	34	49	4.3	0.27	3.9	0.36	18	3.1	3.4	0.7	2.2	3
30.	87184	HZKD01-04	0.35	0.38	170	11	31	47	4.4	0.20	4.4	0.34	18	3.2	3.5	0.6	2.2	3
31.	87185	HZCD01-01	0.54	0.53	160	11	33	50	4.3	0.30	4.2	0.37	18	3.1	3.2	1.0	2.5	-
32.	87186	HZCD01-02	0.55	0.44	150	11	33	50	4.3	0.27	4.4	0.35	18	2.9	2.8	0.4	2.7	4
33.	87187	HZCD01-03	0.54	0.55	150	12	33	51	4.5	0.34	4.5	0.38	19	3.3	3.3	1.2	2.5	4
34.	87188	HZCD01-04	0.57	0.53	160	11	33	50	4.5	0.27	4.3	0.40	19	3.2	3.1	0.4	2.5	4
35.	87189	HZCD01-05	0.54	0.54	170	12	36	52	4.6	0.27	3.8	0.38	19	3.4	3.3	0.6	2.5	5
36.	87190	HZCD01-06	0.55	0.37	150	12	34	51	4.5	0.26	3.9	0.38	18	3.1	3.4	0.9	2.5	2
37.	87191	HZSK01-01	0.67	0.64	170	8.5	31	47	4.5	0.24	4.6	0.43	19	3.2	3.7	0.7	2.7	2
38.	87192	HZKT01-01	0.59	0.76	150	8.1	33	53	4.4	0.30	4.4	0.41	20	3.2	3.4	0.8	3.3	5
39.	87195	HZDGG01-01	0.78	0.79	180	15	44	47	4.4	0.25	4.5	0.42	20	3.3	3.6	0.6	3.0	2
40.	87176	HZNH01-01	0.45	0.45	160	8.8	30	47	4.3	0.21	4.0	0.37	18	3.0	3.3	0.5	2.6	2
41.	87196	HZYD01-01	2.00	0.49	150	5.9	36	62	5.4	0.48	3.5	0.40	18	4.4	2.2	1.1	5.7	18
42.	87197	HZYD01-02	1.79	0.77	160	7.0	38	73	5.8	0.65	5.6	0.55	20	5.3	2.4	1.0	7.4	10
43.	87198	HZFS01-01	0.41	0.92	150	5.3	60	93	6.8	1.7	3.9	0.46	13	6.3	2.0	2.3	12	35
44.	87199	HZFS01-02	0.42	0.96	150	5.3	73	100	7.1	1.7	2.6	0.40	13	6.5	1.4	1.2	11	26

肥前古窯跡出土磁器片 44 試料のクラスター分析において、大きく 1 クラスターを形成した有田古窯跡および鍋島藩窯の出土磁器片 40 試料について、さらに細分化の可能性について検討した。

有田古窯跡および鍋島藩窯出土磁器片 40 試料についての、放射化分析により定量された主成分元素および微量成分元素のうち、クラスター分析に変数として使用した 12 元素のヒストグラムを図 219 に示す。Rb, La, Ce, Sm, Lu などの元素に著しく母集団からはずれる試料が認められる。これらは、山辺田窯の一部とダンバギリ窯出土の磁器片である。

さらに、有田古窯跡および鍋島藩窯出土磁器片 40 試料のクラスター分析の結果を図 220 に示す。変数は、これまでのものと同じである。

有田古窯跡および鍋島藩窯出土磁器片 40 試料のクラスター分析では、左記の微量成分元素存在量ヒストグラムによる考察と同様に、山辺田窯の一部の磁器片 (HZYB-01-01, HZYB-01-02, HZYB-01-03, HZYB-01-06) とダンバギリ窯出土の磁器片 (HZDG-01-01) が主たるクラスターから外れる傾向を示している。さらに、主たるクラスターにおいても、山辺田窯出土磁器片 5 試料 (HZYB-01-04, HZYB-01-08, HZYB-01-07, HZYB-01-05, HZYB-01-09) が 1 クラスターを形成し、他の磁器片試料と区別される。このことは、山辺田窯の特徴を示唆しているかもしれない。しかし、胎土の微量成分元素存在量についての検討では、これらの地域では、長吉谷のまとまりも含めて、一般的に極めて類似した陶石を原料として、磁器が焼成されたと考えられる。

有田諸窯の中での古窯跡出土磁器片の細分化の可能性については、分析点数が少ないため、これらについて論じることは現段階では不可能であり、ここでは、細分化せずに一系統として取り扱うこととする。

最後に、東京大学本郷構内理学部 7 号館地点出土磁器片 10 試料の生産地推定について、クラスター分析により検討した。ここでは、肥前有田ないし伊万里地域の磁器であるかどうかという観点で、東京大学本郷構内理学部 7 号館地点出土磁器片 1 試料ごとに有田古窯跡および鍋島

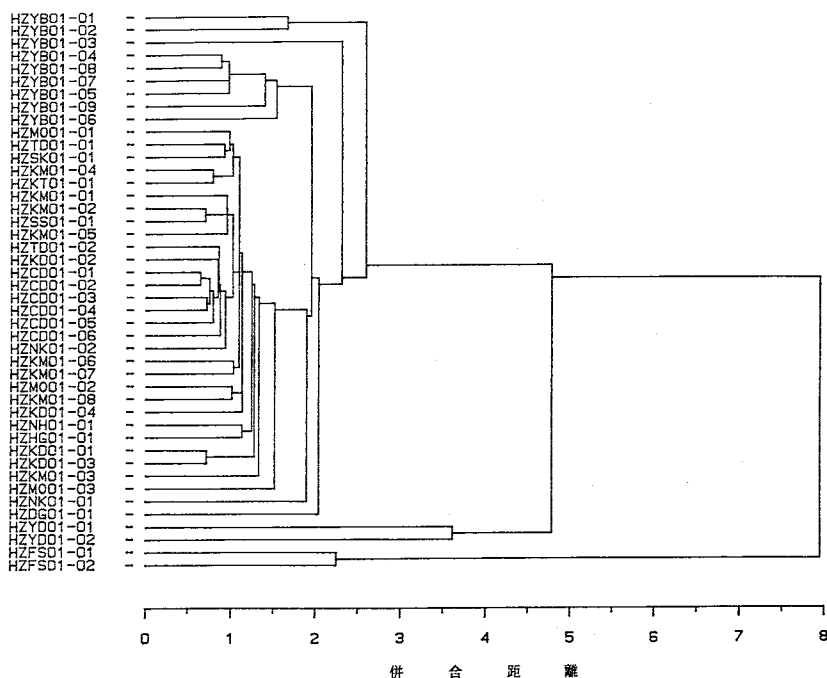
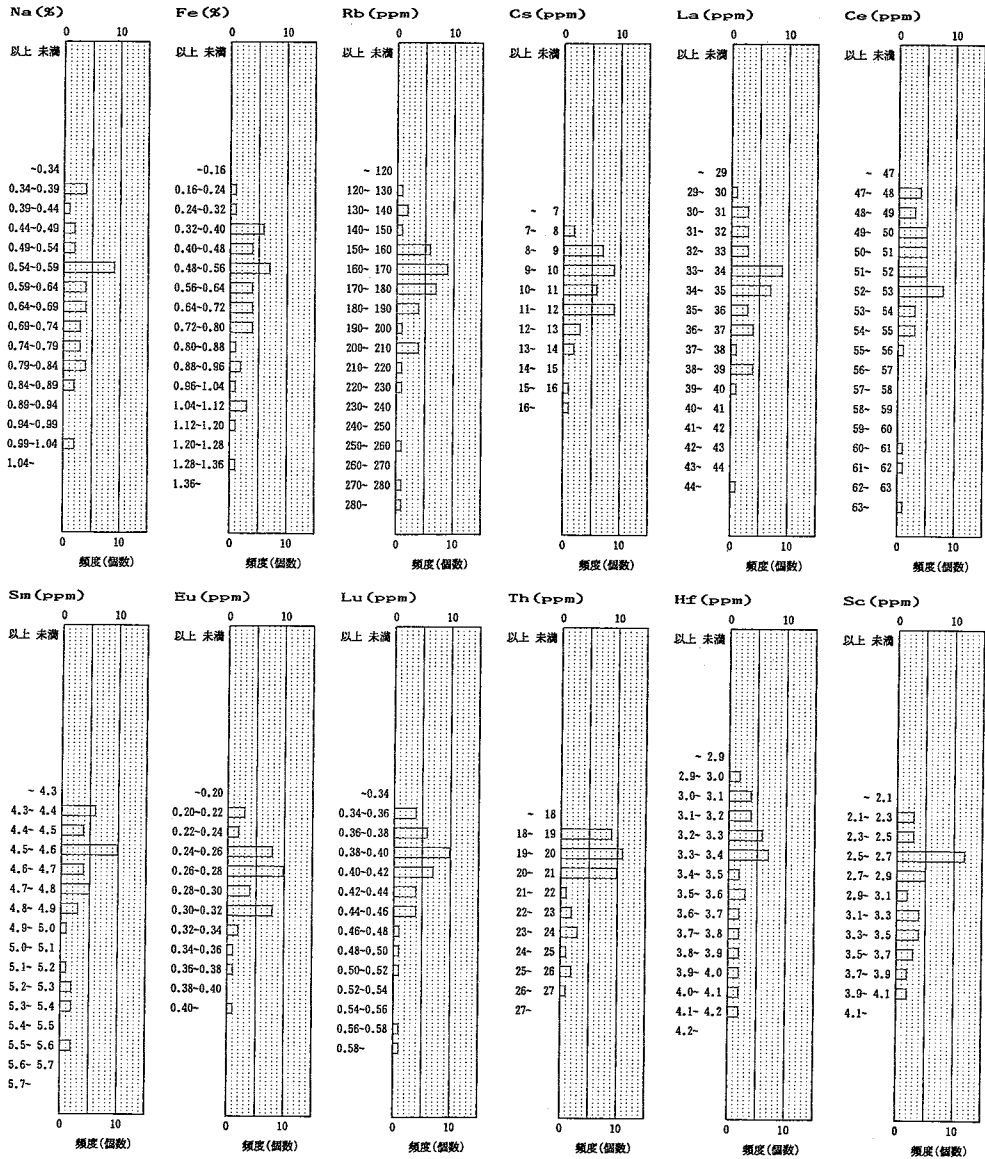


図 218 肥前古窯跡出土磁器片 44 試料のクラスター分析

Figure 218 Dendrogram from the cluster analysis of 44 samples from Hizen kiln sites



	平均値	標準偏差	最大値	最小値
Na (%)	0.63	0.17	1.03	0.35
Fe (%)	0.64	0.27	1.32	0.23
Rb (ppm)	170	40	280	120
Cs (ppm)	10	1.8	16	7.2
La (ppm)	34	3	44	29
Ce (ppm)	51	4	63	47
Sm (ppm)	4.7	0.4	5.5	4.3
Eu (ppm)	0.28	0.04	0.40	0.20
Lu (ppm)	0.41	0.06	0.61	0.34
Th (ppm)	20	2	26	18
Hf (ppm)	3.4	0.4	4.1	2.9
Sc (ppm)	2.9	0.5	4.0	2.1

図 219 有田古窯跡および鍋島藩窯出土磁器片 40 試料における微量成分元素存在量  
 Figure 219 Histograms of elemental abundances in 40 samples from Arita and Imari kiln sites

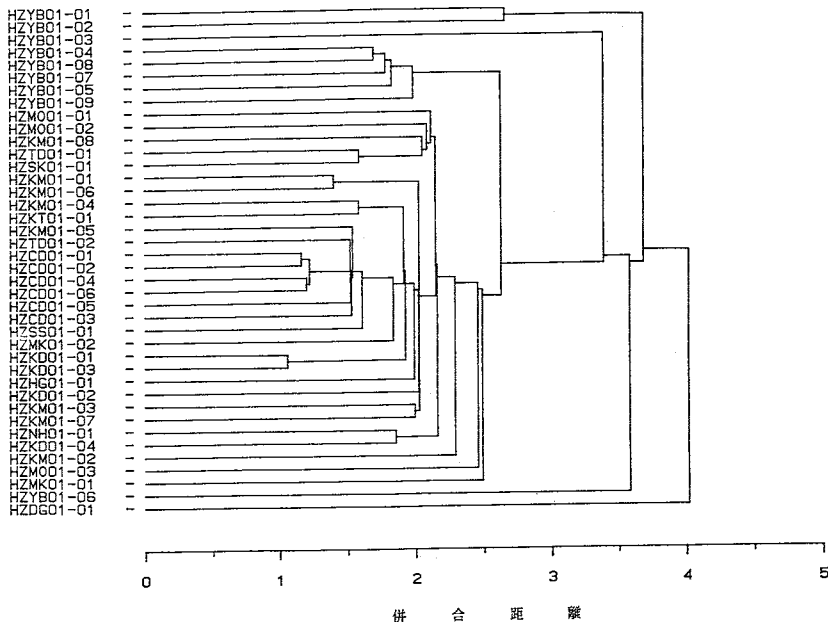


図 220 有田古窯跡および鍋島藩窯出土磁器片 40 試料のクラスター分析

Figure 220 Dendrogram from the cluster analysis of 40 samples from Arita and Imari kiln sites

藩窯の 40 試料とのクラスター分析を行った。その結果の代表例を図 221 に示す。

古九谷様式色絵 4 点、肥前色絵 1 点は、図 221 の上段のように有田古窯跡および鍋島藩窯のクラスターの中に取り込まれる形の併合関係を示し、有田古窯跡および鍋島藩窯と同系統の胎土であると判定できる。一方、中国・景德鎮染付 3 点、中国「呉須赤絵」2 点は、図 221 の下段のように有田古窯跡および鍋島藩窯のクラスターと、併合距離が大きく離れた形の併合関係を示し、有田古窯跡および鍋島藩窯と全く異なった胎土であると判定できる。

以上の結果から、東京大学本郷構内理学部 7 号館地点出土磁器片試料について、磁器試料の胎土の主として微量成分元素存在量にもとづくクラスター分析による分類は、考古学的な分類に対応した。特に、このなかで古九谷様式色絵 4 点、肥前色絵 1 点は、肥前有田古窯跡および鍋島藩窯の胎土と同系統であり、少なくとも肥前有田・伊万里の窯と同じ陶石あるいは肥前有田・伊万里の窯と極めて類似した陶石を原料として製作されたと考えられる。また、中国産の磁器については、微量成分元素の基礎データが少ないので、中国産であるという確認までは至らなかった。

微量成分元素存在量を中心とする磁器試料の生産地に関する研究は有効な方法のひとつであり、今後の検討が期待される。

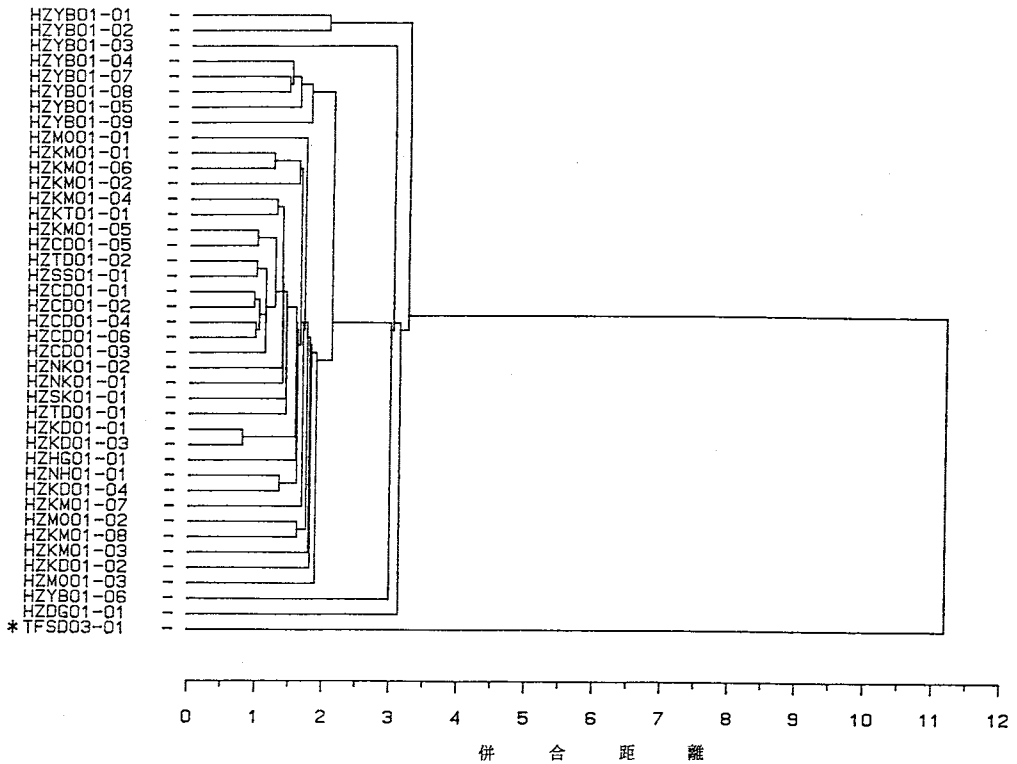
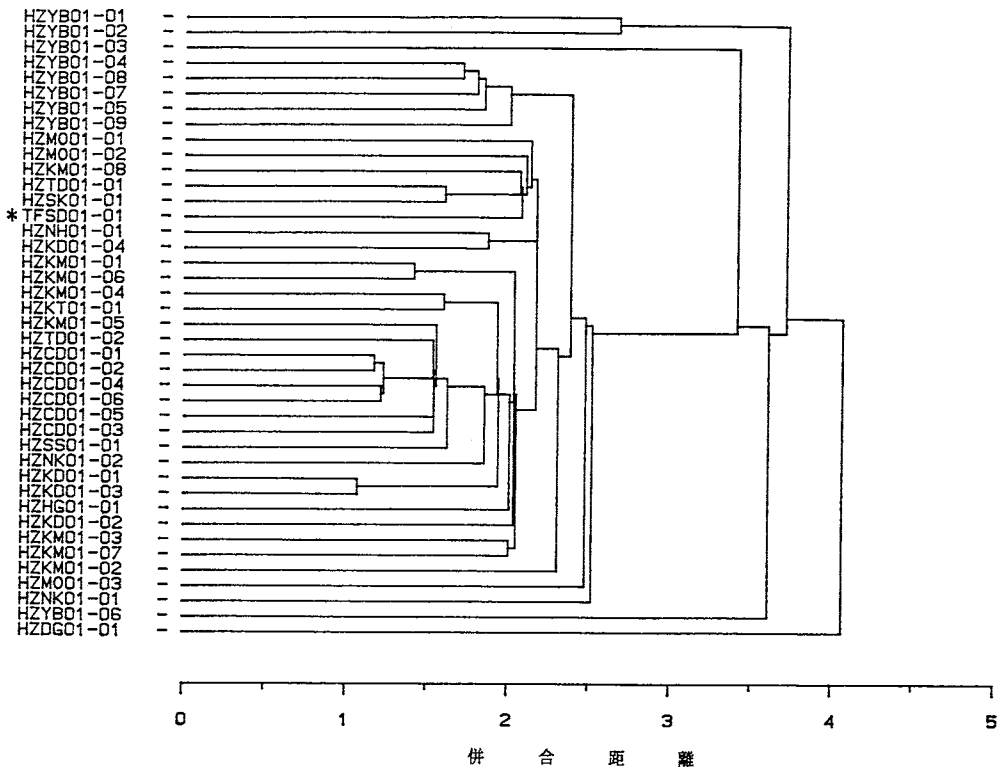


図 221 クラスタ分析による理学部 7 号館地点出土磁器片の生産地推定の一例  
(上段：1号土坑-4，下段：1号井戸-1)

Figure 221 Results of provenance analysis of samples from the No.7 Science Building area



#### 4. 考察およびまとめ

羽生 淳子・長佐古 真也

以上の結果から、理学部7号館地点より出土した4点の古九谷様式の磁器片の素地は、有田古窯跡および伊万里市鍋島藩窯から出土した資料の素地と、主成分、微量成分元素ともに、きわめて類似することが明らかになった。鍋島藩窯の製品については、泉山の陶石を用いたとの記録があり(宮田 1985, pp.90-95)、実際の分析値においても有田古窯跡出土資料ときわめて類似するとの結果が得られた。したがって、以下の考察では、有田古窯跡および鍋島藩窯を、有田・伊万里地域として一括して取り扱うことにする。

今回の対比資料には、九谷古窯跡出土資料が含まれていないので、九谷産一有田・伊万里産の判別に際しては山崎(1986)の分析値を援用した。今後、九谷古窯跡出土資料の分析を行う機会が得られれば、今回の生産地推定の結果は、さらに確実なものにすることができると考えている。本節では、上記の分析の結果明らかになった事実に関して、考古学的な視点から考察を加える。

分析対象とした4点の古九谷様式の磁器片のうち、蛍光X線分析を行った2点の資料における酸化チタンの存在量は、いずれも0.10%以下であった。現在までに、酸化チタンの存在量が発表されている、確実な古九谷様式の資料としては、東京大学本郷構内中央病院診療棟地点出土の5点の色絵磁器片(東京大学遺跡調査室病院班・山崎 1988)がある。これらの酸化チタン存在量については、各々0.10, 0.10, 0.10, 0.12, 0.13という分析値が示されている。これらの分析値が、いずれも、山崎が九谷産と有田産の判別基準と考えた0.10%と非常に近接している値であるのに対し、今回の分析結果は、明らかに九谷産ではないと判定できるものである。アルミニウム・鉄・チタン・マグネシウム・カリウムを用いたクラスター分析の結果、および珪素-アルミニウム分布、珪素/アルミニウム-チタン/鉄分布の結果も、有田古窯跡および鍋島藩窯出土資料との類似を示している。

放射化分析の定量値を用いたクラスター分析の結果は、古九谷様式の資料と有田古窯跡および伊万里市鍋島藩窯出土資料との類似が、蛍光X線分析を行った2点のみならず、出土した古九谷様式磁器片の4点すべてについて認められることを示す。4点の古九谷様式磁器片に関する放射化分析に基づいた微量成分元素の定量値は、河島・松野(1985)によって示された有田各窯の試料の分析値ときわめて近い値を示しており、この点からも有田各窯と類似する元素組成を有することが明らかである。

前述の通り、1号土坑-4は、絵付のみならず、①高台内の染付二重圏線、②内面の浅い段、

③高台畳付の釉削り、④高台内釉面の手跡、などの諸特徴が、東京国立博物館所蔵の祥瑞手グループの伝世品と類似する。したがって、今回の分析結果は、これらの伝世品の素地についても、有田産である可能性が高いことを示唆するものである。さらに、中村記念美術館所蔵の山水図輪花大鉢についても、写真(鳴崎 1976, 図版 77, 78) から判断する限りでは、高台内二重圏線の描き方がやや雑で、外側面の文様は異なる(布袋文平鉢に似る: 同書, 図版 23—25) もの、ほぼ同様の特徴を備えているようである。

さらに、肥前窯跡においては、同様の型式学的特徴を有する色絵素地が、山辺田 3 号窯および猿川窯から出土している(大橋 1986, 1988)。これら色絵素地の生産年代は、肥前において色絵磁器の生産が始まったと推測される 1640~1650 年代と考えられる。1 号土坑—4 が肥前産であるという立場にたてば、この時期の製品である可能性が高い。

「古九谷」の生産地に関する論争の過程で、古くから繰り返し提出されてきた仮説のひとつに、素地移入説がある。近年では、有田産の素地が九谷に運ばれ、そこで上絵付がなされたと考えられる、鳴崎丞の見解がある(鳴崎 1976, 1987)。しかしながら、鳴崎の仮説は、有田からの素地の移入を、九谷 1 号窯が廃窯となったと推定される 1670 年代以降に限定しており、今回の分析資料の生産年代を 1640~1650 年代と推定するならば、年代的に 10 年以上の開きが生じることになる。したがって、上記の諸特徴を共有する「古九谷」については、鳴崎の素地移入説によっても、九谷で上絵付が行われたと考えることは困難である。

有田古窯跡および鍋島藩窯の出土資料 34 点の蛍光 X 線分析の結果は、これらの資料の酸化チタン存在量が 0.05% から 0.09% であることを明らかにした。この結果は、有田産の資料の酸化チタンの存在量は 0.10% 未満であるとした山崎 (1986) の結果と矛盾しない。ただし、窯別にチタンの存在量の分布を調べた場合、山辺田窯の資料に関しては、有田の他の窯に比してチタンの存在量がやや高い傾向を示すことがわかった。図 212 から考えるならば、山辺田窯の資料と九谷のうち酸化チタンの濃度の低い群との判別基準は 0.10% をわずかに越える値が妥当と考えられる。前述の、九谷古窯跡出土磁器片および東京大学本郷構内中央病院診療棟地点出土の 5 点の磁器片の分析値は、両者の境界領域付近に位置するものであり、現段階では、生産地の確定が非常に困難な資料と考えられる。

山辺田窯出土資料の蛍光 X 線分析の結果については、チタン以外の元素を用いたクラスター分析によっても、有田の他の諸窯と異なる特徴を有することが明らかになった。山辺田以外の有田諸窯および鍋島藩窯については、窯別のクラスターは形成されなかった。このことは、これらの諸窯が、同一ないしはきわめて類似した陶石を使用していたことを示すものと考えられる。山辺田窯の製品が、他の諸窯とは異なる陶石を用いていたのか、あるいは、素地の調整方法が異なっていたのかについては、さらに検討を要する問題であるが、有田地域内における窯

表 55 参考：佐賀県窯業試験場による肥前古窯跡出土磁器片化学分析資料観察表  
Table 55 List of Hizen kiln samples analyzed by Saga Prefectural Ceramic Research Center

No	資料名	名称	推定生産年代	出土層位および特徴
1.	天神森窯	染付皿	1610~1630年代	7号窯9室出土。見込、扇文。 物原10層出土。高台内にハリ跡。 BT7層出土。高台内にハリ跡。 BT7層出土。型打整形で、内側面に陽刻文様。 蛇の目凹形高台。見込、松竹梅文。内側面、蛸唐草文。  陶胎。胴部に松竹梅文。 2号窯赤焼土混入層出土。高台内、蛇の目軸刺ぎ。
2.	柿右衛門窯	白磁皿	1660~1680年代	
3.	南川原窯ノ辻窯	白磁皿	1690~1710年代	
4.	南川原窯ノ辻窯	青磁皿	1690~1710年代	
5.	南川原窯ノ辻窯	染付皿	19C初~幕末	
6.	長吉谷窯	青磁香炉	1650~1670年代	
7.	猿川窯	白磁皿	1630~1650年代	
8.	百間窯	染付皿	1620~1640年代	
9.	鍋島藩窯	青磁皿	17C末~18C	
10.	鍋島藩窯	染付香炉	18C頃	
11.	不動山皿屋谷窯	青磁皿	1660~1680年代	

表 56 参考：佐賀県窯業試験場による肥前古窯跡出土磁器片の主成分元素存在量  
Table 56 Results of X-ray fluorescence analyses of Hizen kiln samples measured by Saga Prefectural Ceramic Research Center

No	資料名	強熱減量 lg-loss	SiO <sub>2</sub>	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	TiO <sub>2</sub>	CaO	MgO	Na <sub>2</sub> O	K <sub>2</sub> O	Total
1.	天神森窯	0.22	81.38	12.89	0.66	0.04	0.26	0.08	0.87	3.52	99.92
2.	柿右衛門窯	0.18	75.26	18.10	0.49	0.06	0.14	0.11	0.89	4.50	99.73
3.	南川原窯ノ辻窯	0.10	75.77	17.52	0.56	0.05	0.22	0.12	0.63	4.54	99.51
4.	南川原窯ノ辻窯	0.18	76.20	16.92	0.76	0.05	0.26	0.10	0.89	4.62	99.98
5.	南川原窯ノ辻窯	0.20	75.36	18.79	0.70	0.06	0.22	0.08	0.29	4.16	99.86
6.	長吉谷窯	0.12	75.53	16.13	1.02	0.07	0.23	0.08	1.05	5.37	99.60
7.	猿川窯	0.22	74.47	18.30	0.69	0.06	0.26	0.06	1.11	4.67	99.84
8.	百間窯	0.12	70.98	21.64	1.33	0.15	0.14	0.43	0.99	4.19	99.97
9.	鍋島藩窯	0.14	75.99	17.21	1.16	0.10	0.23	0.16	0.86	4.54	100.39
10.	鍋島藩窯*	0.40	70.47	20.79	3.10	0.65	0.26	0.46	0.99	3.28	100.40
11.	不動山皿屋谷窯	0.02	69.73	22.18	2.10	0.47	0.19	0.38	0.20	4.42	99.69

註1) 表55、56は、佐賀県立九州陶磁文化館が佐賀県窯業試験場に依頼した分析資料の特徴および分析結果を、同館の許可を得て、ここに掲載するものである。佐賀県立窯業試験場試験部長河口純一氏と特別研究員中尾浩氏には、格別お世話になった。記して謝意を表す。(表55、56作成：大橋康二)  
2) \*の資料の分析結果が、他の資料と著しく異なっているのは、陶胎のためと考えられる。

別の微細な相違は、有田産の磁器を考える上での今後の研究課題のひとつである。

肥前のうち、嬉野町・吉田窯の資料の酸化チタン存在量は0.32%、0.32%、不動山皿屋谷窯の資料の酸化チタン存在量は0.68%、0.70%と、いずれも有田の資料の酸化チタン存在量をはるかに越えるものであった。「古九谷」に関するこれまでの生産地推定では、有田と九谷の二つの生産地のみが問題とされてきたが、これらのデータは、チタンの存在量が高いからといって、直ちに九谷産であると断定できないことを示すものである。表55および表56は佐賀県立九州陶磁文化館が佐賀県窯業試験場に依頼して分析を行った結果を示したものであるが、これにおいても不動山皿屋谷2号窯の酸化チタン存在量は0.47%との結果が得られており、不動山皿

屋谷窯のチタン存在量が有田諸窯に比して著しく高いことは明らかである。放射化分析の定量値に基づいた図 218 のクラスター分析の結果は、これらの窯の資料の元素組成は、チタン以外についても、有田古窯跡および鍋島藩窯の資料とは異なることを示しており、今後、さらにこれらの窯の資料に関する分析値を積み重ねる必要がある。

\*

以上、理学部 7 号館地点出土の古九谷様式磁器片について化学分析を試み、得られた分析値について検討を加えてきた。その結果、出土した 4 点の磁器片の素地は、いずれも肥前有田ないし伊万里産と考えられることを明らかにし、あわせて、有田および周辺地域の古窯跡から出土した磁器片の元素組成の特徴についても言及した。さらに、4 点のうちの 1 点は、伝世品のいくつかと絵付以外にも製作技法上の諸特徴を共有していることから、少なくとも、今回の分析資料と素地、製作技法、裏文様等において類似する祥瑞手の「古九谷」に関しては、有田ないし伊万里産の素地を用いていた可能性が高いことを指摘した。

今回の研究は、古九谷様式のうち、祥瑞手と呼ばれる一群に分析対象を限定したものであり、絵付、素地、製作技法等において異なる特徴を有する資料については、別個に検討を行う必要がある。しかしながら、古九谷様式のなかには、明らかに有田ないし伊万里産と考えられるものが存在することを化学的に確認できた意義は非常に大きい。染付文様を有する「古九谷」については、以前から、多くの研究者によって、有田の窯跡出土資料との類似が指摘されてきたが、このことを具体的な分析例によって検証できたことは、古九谷様式の生産地を考える上で、研究の一步前進であると筆者らは考えている。

「古九谷」に関する当初の論争は、いわゆる「古九谷」の中に、有田産の製品が混入している、という議論であった（北原・藤岡 1938, Jenyns 1956, 1965）。にもかかわらず、近年、特に一部のジャーナリズムにおいて、「九谷側」「有田側」というような言葉を用いて、「古九谷」に関する論争の結論を二者択一的に扱おうとする傾向が認められる。しかしながら、いわゆる「古九谷」の中に、有田産の素地を用いた製品があることは、これまでの諸研究から明らかであり、一方、九谷において 17 世紀代と考えられる窯が発掘されており、しかも色絵素地となり得る白磁がかなりの量出土している以上、17 世紀代に九谷で焼成された色絵磁器が存在したこともほぼ確実である。

林屋（1976）が指摘する通り、現在「古九谷」と総称される色絵磁器は、絵付、裏文様、素地、製作技法等から考えて、異なる特徴を有する複数のグループに細分できると考えられる。陶磁器を扱う研究者が現在行うべき作業は、既存の「古九谷」という包括的な単位で、これらの製品の生産地を論じるのではなく、このような複数のグループを個別に検討し、それぞれの生産地を客観的な視点から推定することである。古九谷様式の製品の中から、明らかに肥前

産の素地を用いたと考えられる製品を取り除いてゆき、なおかつ残ったグループについて、九谷産の素地を用いている可能性があるか否かを、考古学的、美術史的、化学的な諸側面から検討することが、「古九谷」の生産地に関する論争に結論を与える唯一の道である。

化学分析を用いた「古九谷」の生産地推定は、若干の検討すべき点を除けば、すでに応用段階にある。一点の資料の分析結果は、「古九谷」をめぐる長年の論争に直ちに決着をつけるものではないが、複数の分析結果を積み重ねて行けば、この問題を考える際の重要な判断材料となり得る。本稿は、このような見通しに立って、考古学と化学の共同研究を試みた、ひとつの研究成果の報告である。

#### 文献 (ABC 順)

- Ando, A., S. Mita and S. Terashima, 1987: 1986 Values for Fifteen GSJ Rock Reference Sample, "Igneous Rock Series". Geostandards Newsletter, 11: 159-166.
- Flanagan, F. J., 1973: 1972 Values for International Geochemical Reference Samples, Geochim. Cosmochim. Acta, 37: 1189-2000.
- Gordon, G. E., K. Randle, G. G. Goles, J. B. Corliss, M. H. Beeson and S. S. Oxley, 1968: Instrumental Activation Analysis of Standard Rocks with high-resolution  $\gamma$ -ray Detectors, Geochim. Cosmochim. Acta, 32: 369-396.
- 林屋晴三, 1975: 古九谷。日本の陶磁 11。中央公論社。
- 林屋晴三, 1983: 古九谷様式の色絵磁器。世界陶磁全集 9, 江戸(四), 平凡社, pp.126-139.
- 今泉元佑, 1974: 初期有田と古九谷。雄山閣出版。
- 今泉元佑, 1987: 古伊万里と古九谷 その真実の探求。河出書房新社。
- 河島達郎, 1983: 放射化分析とその陶磁器への応用。セラミックス, 18: 398-403.
- 河島達郎・松野外男, 1985: 放射化分析による古九谷の産地推定。考古学と自然科学, 18: 51-76.
- 河島達郎, 1987: 東大旧大聖寺藩上屋敷出土の古九谷陶片の分析結果について。陶説, 412号: 85-87.
- Jenyns, S., 1956: Japanese Porcelain. In, Catalogue of the Loan Exhibition of Japanese Porcelain, Oriental Ceramics Society, The Arts Council, London. (訳文: ジェーンズ, S., 1956: 日本の磁器。陶説, 第40号: 11-20, 第41号: 16-23.)
- Jenyns, S., 1965: Japanese Porcelain. Faber and Faber, London.
- 北出不二雄, 1986: 九谷。日本のやきもの 10。淡交社。
- 北原大輔・藤岡了一, 1938: 第9章第4節 工芸 陶磁。帝室博物館, 日本美術略史, pp.180-186.
- 小山睦夫, 1984: 放射化分析による土器の産地分析—指標元素とそれらの意義。古文化財の自然科学的研究, 同朋舎, pp.369-379.
- 馬淵久夫・野津憲治・堀井明・不破敬一郎, 1977: 日の出山窯跡瓦の放射化分析。考古学と自然科学, 10: 115-127.
- 馬淵久夫・富永健, 1980: 考古学への応用。核現象と分析化学。化学総説 No 29, 日本化学会編, 学会出版センター, pp. 213-224.
- 松岡美術館, 1984: 館蔵東洋陶磁名品図録。
- 三辻利一, 1980: 土器の微量成分と産地推定: 放射化分析法。考古学・美術史の自然科学的研究, 日本学術振興会: 418-427.
- 宮田幸太郎, 1985: 有田町史 陶業編 I。
- 村上伸之, 1988: 有田の窯業からみた古九谷。青山考古, 第6号: 52-66.

- 日本マイコン販売株式会社, 1986: 多変量解析操作説明書。
- 西田宏子, 1978: 九谷。陶磁体系 22。平凡社。
- 小木一良, 1988: 東京大学構内出土古九谷陶片の産地考。小さな蕾, 229: 53-59。
- 大橋康二, 1985: 17世紀における肥前磁器の変遷——発掘資料を中心として——。MUSEUM, 415: 18-25。  
東京国立博物館。
- 大橋康二, 1986: III 山辺田古窯址群の築窯順序と製品の編年についての考察。有田町教育委員会, 佐賀県有田町山辺田古窯址群の調査(遺物編), pp. 39-73。
- 大橋康二, 1988: 17世紀における肥前磁器について。石川県立美術館・佐賀県立九州陶磁文化館, 伊万里・古九谷名品展, pp. 7-13。
- 大沢眞澄・二宮修治, 1983: 胎土の組成と焼成温度。縄文文化の研究, 第5巻, 縄文土器 III, 雄山閣出版, pp. 20-46。
- Pollard, M., 1986: Description of method and discussion of results. 貿易陶磁研究, No. 7: 145-158。
- 佐賀県窯業試験場: 1986: 附編。有田町教育委員会, 佐賀県有田町山辺田古窯址群の調査(遺物編), pp. 87-95。
- 斎藤菊太郎, 1976: 呉須赤絵・南京赤絵。陶磁体系 45。平凡社。
- 島崎丞, 1976: 九谷。日本陶磁全集 26。中央公論社。
- 島崎丞, 1988: 古九谷について。石川県立美術館・佐賀県立九州陶磁文化館, 伊万里・古九谷名品展, pp. 14-19。
- 東京大学遺跡調査室病院班・山崎一雄, 1988: 大聖寺藩上屋敷と『古九谷』——東京大学医学部付属病院中央診療棟第I期建設地点の調査より——。考古学雑誌, 73(1): 79-97。
- 矢部良明, 1985: 総説・日本の陶磁——技術とその美術性——。東京国立博物館, 特別展日本の陶磁, pp. 253-279。
- 山下朔郎, 1968: 古伊万里と古九谷。雄山閣出版。
- 山崎一雄, 1981: 色絵陶片の化学分析。拓影 石川県立埋蔵文化財センター所報, 第8号: 5-6。
- 山崎一雄, 1986: 九谷ならびに有田古窯跡出土陶磁器片の化学的判別。東洋陶磁, 第14号: 37-42。

## 第2節 理学部7号館地点出土のガラスの化学分析

西田泰民, 小泉好延, 富沢威, 小林紘一, 山下博

### 資料

当地点の遺構から出土した全てのガラスを対象とした。資料番号と出土遺構の対応表を表57に示す。遺物の説明は本文を参照されたい。

### 方法

下記の3種の方法を用いて元素分析を行った。

#### 蛍光X線分析

東京大学アイソトープ総合センターに設置されている、100mCiの<sup>241</sup>Amを線源とし、Si(Li)半導体検出器, マルチチャンネル波高分析器から構成されるエネルギー分散型の装置を用いた。

表 57 資料番号対照表  
Table 57 List of glass samples

	遺物No、番号	推定廃棄年代	色
RD 1	12号地下式土坑-12	18世紀後半	黄色
RD 2	13号地下式土坑-45	18世紀後半	淡緑色
RD 3	119号土坑-3	19世紀	白色
RD 4	135号土坑-5	17世紀~18世紀	透明
RD 5	62号土坑-10	18世紀後半	青緑色
RD 6	12号土坑-9	18世紀中葉~後半	透明
RD 7	9号遺物集中-7	19世紀	暗褐色
RD 8	7・8号地下式土坑-41	18世紀	緑色

表 58 放射化分析の定量に用いた主な核種・半減期並びに  $\gamma$  線エネルギー

Table 58 Isotopes used for the analyses of glass samples

元素	核種	半減期	$\gamma$ 線エネルギー (keV)
Mn	$^{56}\text{Mn}$	2.58hr	847
K	$^{42}\text{K}$	12.5hr	1525
Na	$^{24}\text{Na}$	15.0hr	1369
La	$^{140}\text{La}$	40.2hr	1596
U	$^{239}\text{Np}$	2.35d	106
Ba	$^{131}\text{Ba}$	12.0d	496
Rb	$^{86}\text{Rb}$	18.7d	1076
Th	$^{233}\text{Pa}$	27.0d	312
Hf	$^{181}\text{Hf}$	42.3d	482
Fe	$^{59}\text{Fe}$	45.0d	1292
Sb	$^{124}\text{Sb}$	60.9d	1691
Sc	$^{46}\text{Sc}$	83.8d	1121
Ag	$^{110\text{m}}\text{Ag}$	253d	658
Co	$^{60}\text{Co}$	5.26y	1333
Eu	$^{152}\text{Eu}$	12.2y	1407

測定時間は3000秒前後である。

#### PIXE 分析

東京大学原子力研究総合センターのタンデム型加速器, Si(Li)半導体検出器, マルチチャンネル波高分析器からなる装置を用いた。都合により, RD3とRD8は分析を行うことができなかった。測定時間は300秒程度である。

#### 放射化分析

立教大学原子力研究所の TRIGA II 型原子炉の F 21 孔, 熱中性子束密度  $1.5 \times 10^{12} \text{ n cm}^{-2} \text{ s}^{-1}$  で 18 時間照射を行い, 一週間冷却後, 中寿命, 一ヵ月冷却後長寿命核種の  $\gamma$  線測定を Ge(Li) 半導体検出器, マルチチャンネル波高分析器を用いて行った。なお Na, Mn, K については RSR # 1 孔, 熱中性子束密度  $5.0 \times 10^{11} \text{ n cm}^{-2} \text{ s}^{-1}$  で 20 分間照射し, 一時間冷却後測定を行った。標準試料として, 岩石標準試料 JB-1, NBS ガラス標準試料 No. 89 のほか試薬を調整した試料などを用いた。定量に用いた核種と  $\gamma$  線エネルギーを表 58 に示す。

前者 2 つは非破壊法のため定性分析であり, おもに鉛ガラス, アルカリガラスの分別, 着色剤の判定に用いた。PIXE 分析は 1970 年に初めてデータが発表された比較的新しい方法で, 考古資料に応用できることが以前から知られているにもかかわらず, まだほとんどデータが出されていない。この方法はスペクトルに示したように軽元素の感度がよく, 特別な前処理無しで非破壊で短時間に表面分析ができるという利点を持っている。また, 励起エネルギーの高い  $^{241}\text{Am}$  線源を使った蛍光 X 線分析ではバリウムまでを見ることができるので, 両方法を併用す

表 59 出土ガラスの種別と密度, 分析値  
Table 59 Results of the analyses of glass samples

	R D 1	R D 2	R D 3	R D 4	R D 5	R D 6	R D 7	R D 8
種別	鉛	アルカリ	鉛	アルカリ	鉛	アルカリ	アルカリ	鉛
密度 ( $\text{g/cm}^3$ )	4.06	2.65	3.61	2.45	3.81	2.54	2.70	4.30
PbO* (%)	51		46		47			57
Na <sub>2</sub> O	0.18	4.88	0.52	12.8	0.08	10.5	2.45	0.08
K <sub>2</sub> O	8.5	n. d.	11.8	1.0	6.1	7.6	n. d.	9.0
MnO	0.005	0.643	0.031	0.010	-	0.314	0.157	0.002
Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	3.4	0.71	n. d.	0.08	0.48	0.22	1.47	0.14
Sc (ppm)	n. d.	2.5	1.0	0.4	n. d.	0.6	2.9	3.1
Co	3.2	5.9	n. d.	0.7	10	18	6.4	n. d.
Rb	n. d.	83	100	83	n. d.	n. d.	40	n. d.
Ag	630	1	120	n. d.	5000	n. d.	n. d.	360
Sb	1100	0.3	130	0.1	27	0.7	1.0	630
Ba	5	2100	2	320	8	5	1200	8
La	n. d.	13	0.24	2.9	2.1	n. d.	14	n. d.
Ce	n. d.	11	n. d.	2.4	n. d.	2.5	14	n. d.
Sm	0.05	1.9	0.04	n. d.	n. d.	0.58	n. d.	n. d.
Eu	n. d.	0.37	n. d.	0.16	n. d.	n. d.	0.62	n. d.
Yb	n. d.	0.22	n. d.	0.016	n. d.	0.11	0.19	n. d.
Lu	n. d.	0.11	n. d.	0.04	0.06	n. d.	n. d.	n. d.
Hf	n. d.	2.0	n. d.	0.64	n. d.	0.53	2.2	n. d.
Th	n. d.	1.5	n. d.	0.44	n. d.	0.53	1.8	n. d.
U	n. d.	0.78	n. d.	0.36	n. d.	n. d.	1.4	n. d.

註) \* 酸化鉛の推定値は図 225 による  
n. d. 検出限界以下で定量できず。  
- 未定量



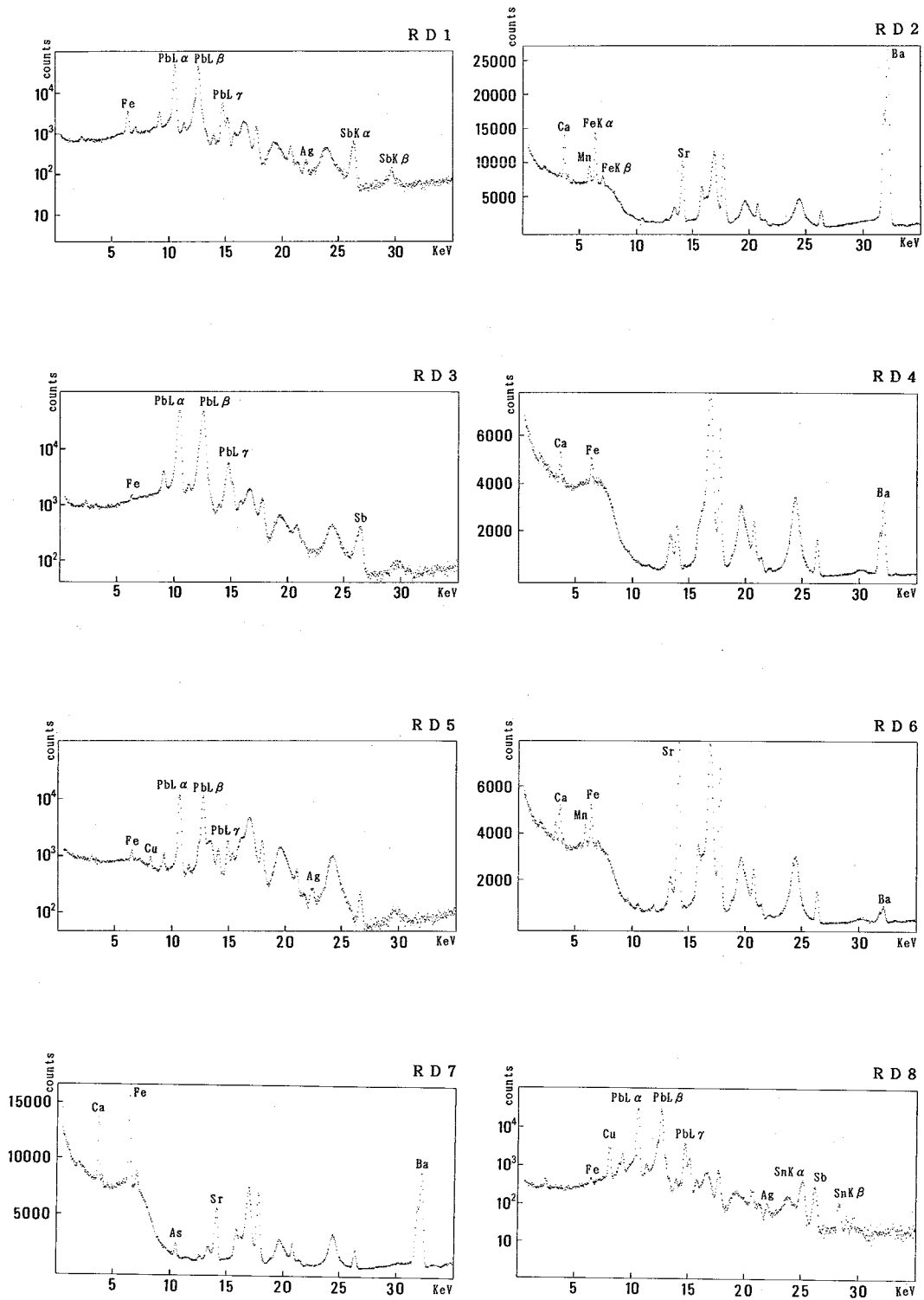


図 222 蛍光 X 線分析スペクトル図  
 Figure 222 XRF spectra of glass samples

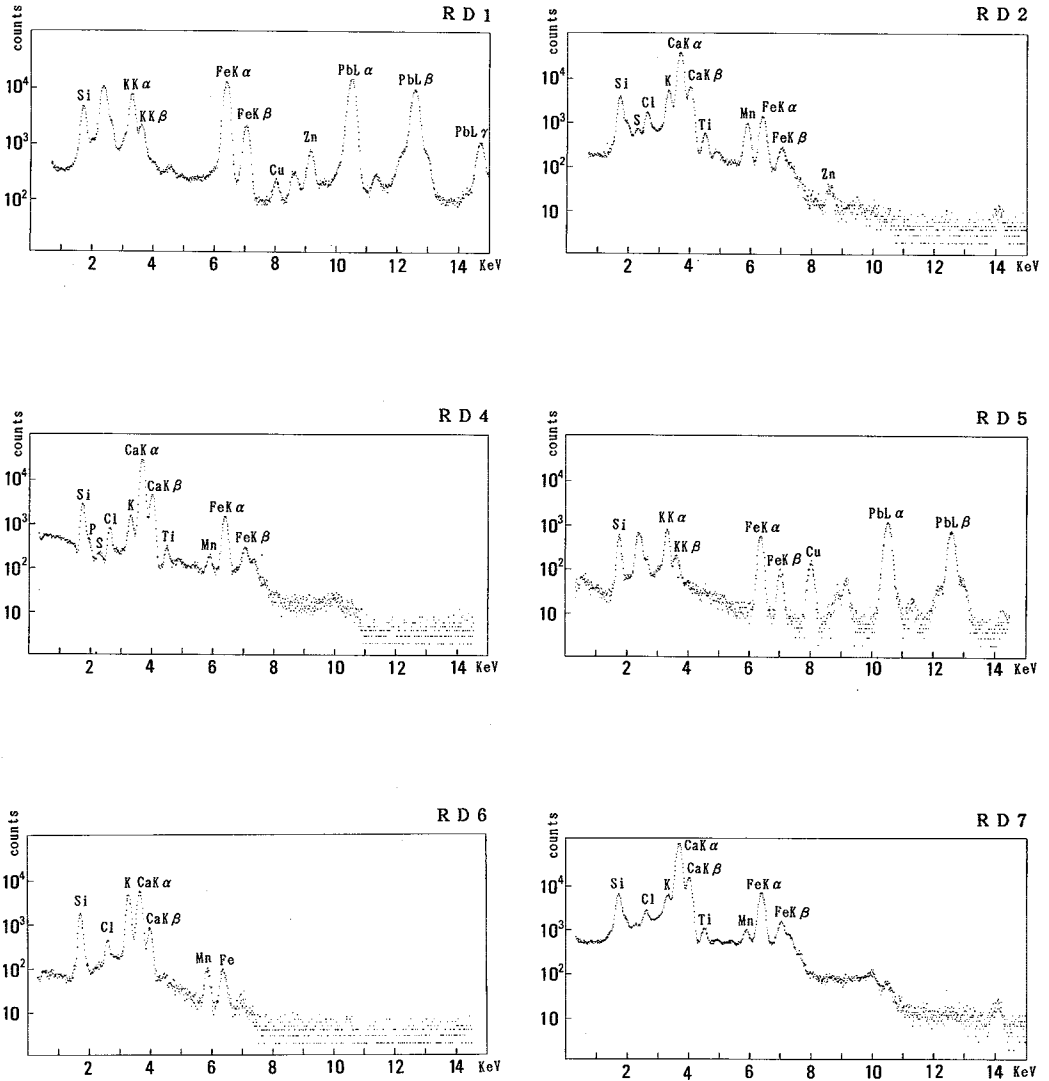


図 223 PIXE 分析スペクトル図  
Figure 223 PIXE spectra of glass samples

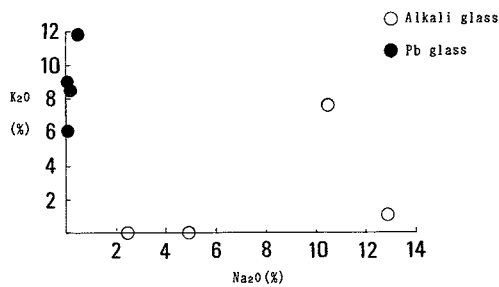


図 224 K—Na 含有量散布図  
Figure 224 Scattergram of  $K_2O$  —  $Na_2O$  contents in glass samples

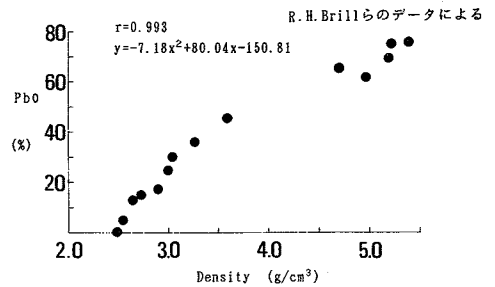


図 225 PbO 量と密度相関図  
R. H. Brillらのデータによる  
富沢威作成 (未発表)  
Figure 225 Correlation between PbO quantity and density in glass samples

ることにより主成分のかなりの部分をカバーすることができる。

定量は放射化分析により行った。

## 結果

蛍光 X 線分析, および PIXE 分析のスペクトルを図 222~223 に示す。また定量の結果を表 59 に示す。蛍光 X 線分析スペクトルで元素名を表示していないピークは線源である<sup>241</sup>Am のバックグラウンドである。

RD 1 は鉄もしくはアンチモン, RD5, RD8 では銅が着色剤となっていると考えられる。RD 7 は鉄の含有量が多いため暗褐色となっている。

表で見られるように鉛ガラスは RD 1, RD 3, RD 5, RD 8 の 4 点で酸化鉛の推定含有量は 50%前後である。鉛ガラスに顕著な元素としては銀, アンチモンがある。銀とアンチモンには RD 5 を除けば正の相関が認められた。銀をガラス製作に用いたことを伝える記録は今のところなく, これは鉛に付随して入ったものとも考えられるが, RD 5 の銀含有量の多さは気にかかるところである。また鉛ガラスへの亜鉛の添加を思わせるのは RD 1 のみであった。

その他の 4 点はアルカリガラスであり, ナトリウムとカリウムの量比を見るとソーダライムガラスの範疇とすることができる。これに対して鉛ガラスではカリウムの量がナトリウムの量より多いことがわかった(図 224)。アルカリガラスに特徴的な元素はバリウムであった。古代中国の鉛ガラスにはバリウムに富むものがあることがゼリグマンらにより明らかにされているが, 今回分析したアルカリガラスに含まれるバリウムはパーセントには至らず, 多くとも数 1000 ppm のオーダーであり, 性格の異なるものである。その由来は現時点では不明とせざるを得ない。同様の分析が行われている文京区真砂遺跡のヨーロッパ産とみられるアルカリガラスからはバリウムはほとんど検出されていない。近世における国産のアルカリガラスの生産, 流通の実態については不明な点が多いので, 今後確実にヨーロッパ産, あるいは中国産と判断されるアルカリガラスの分析が必要である。

## 文献 (ABC 順)

Brill R.H. & J.F.Wosinski, 1986: 中国早期玻璃的物理性質。中国古玻璃研究。

西田泰民・小泉好延・富沢威, 1988: 東大本郷構内遺跡出土の陶磁器ガラス類の材質分析。日本文化財科学会第 5 回大会発表要旨。

Seligman C.G. & H.C.Beck, 1938: Far Eastern Glasses.

棚橋淳二, 1983: 江戸期におけるガラス技術の変遷と伝播。松蔭女子学院大学紀要, 25。

富沢威・葉袋佳孝・馬淵久夫・富永健, 1987: 真砂遺跡出土の江戸時代に製造されたガラス容器の化学分析。

真砂遺跡調査会編, 真砂遺跡。

### 第3節 理学部7号館地点出土木製品および材の樹種同定

千野 裕道

#### (1) はじめに

本遺跡の17世紀後半から19世紀前半の井戸跡、地下式土坑などから発見された木器、板材片、炭化材の樹種についての報告を行なう。

同定を依頼された試料は41試料あり、そのほとんどは一括で採取されたものである。中には樹種の異なった材片が混在していた。炭化した板材片、タケ・ササ類、粒塊などがそれであり、他に下駄、箸などがある。タケ・ササ類については棹の形状および木口面の実体顕微鏡(×6~40)による横断面の観察によって確認し、特に電子顕微鏡による観察、写真撮影などは行っていない。また、試料中には針葉樹の炭化材片が多く、これらについて、それぞれ観察を十分に行なうには、あまりにも多くの時間を費やすものと考えられた。これらは1個体の材が廃棄されていたものとするならば、その時点で破壊され、また埋蔵中にも分解し、発掘の時点においても分離したものである可能性は充分高いと思われるため、かなりの試料の観察を省略した。さらに、当初各試料から針葉樹を1片無作為に抽出し観察を行なおうとしたが時間の都合上、すべての試料についてはできず17試料の21点について電子顕微鏡の観察を行ったのみである。

材と炭化材<sup>1)</sup>からなる試料はそれぞれ観察の方法は異なる。材はカミソリを用いて試料の横断面、接線断面、放射断面の切片を作り、これをガムクロラールで封入して作成し、光学顕微鏡によって観察を行った。

炭化材は試料から横断面、接線断面、放射断面がそれぞれ観察できるように面をカミソリを用いて切断し、電子顕微鏡用試料台に接着し、金蒸着を施し、電圧20~25 Kvで観察を行なった。電子顕微鏡による像は光学顕微鏡によって得られる像とは異なるものがあり同定の作業に難しい部分があった。たとえば、分野壁孔の形状は電子顕微鏡では壁孔縁の観察は難しく、また、ロッセンとオルセンが指摘するように柔細胞の観察は難しい(Rossen・Olsen 1985)。

材の顕微鏡写真は35 mm判のフィルムを用いて撮影し、焼き付けの段階で3倍に引き伸ばした。炭化材は4×5判のポラロイドフィルムを用いて撮影を行なった。試料の番号は採取された時点のラベルの記載内容をそのまま記載し、また別に筆者の方で用いた通し番号も記した。

#### (2) 結果

##### 1. モミ属 *Abies* マツ科 写真 86—1~3

表 60 樹種構成

Table 60 Identification of wood artifacts and carbonized samples

遺構	資料No	試料 No	名称	樹種				
				モミ属	スギ	ヒノキ属	ネズコ	針葉樹
1号井戸	内枠	—	井戸底内枠材	—	—	+	—	—
	外枠	—	井戸底外枠材	—	—	+	—	—
	Noなし	13	半炭化材一括	—	—	+	—	—
	Noなし	14	炭化材一括	—	—	—	—	+
	Noなし	15	炭化材一括	—	—	—	—	+
	Noなし	16	炭化材一括	—	—	—	—	—
	Noなし	17	炭化材一括	—	—	+	—	—
	57 (図23)	29	炭化木器	—	—	—	—	—
	59 (図23)	30	榎目材	—	+	—	—	—
58 (図23)	31	榎目材	—	+	—	—	—	
3号井戸	Noなし	—	井戸底枠材	—	—	+	—	—
4号井戸	85 (図144)	32	箸	—	—	—	+	—
	86 (図144)	33	箸	—	—	—	+	—
	88 (図144)	34	榎目材	—	—	+	—	—
	87 (図144)	35	板目材	—	+	—	—	—
	89 (図144)	36	板目材	—	+	—	—	—
	84 (図144)	37	下駄	+	—	—	—	—
	Noなし	—	井戸底枠材	—	—	+	—	—
6号地下式 土坑	Noなし、上層出土	7	炭化材一括	—	cf+	—	—	—
	Noなし、上層出土	8	炭化材一括	—	—	—	—	—
	Noなし、上層出土	9	炭化材一括	—	—	—	—	+
	Noなし、下層出土	10	炭化材一括	cf+	—	—	—	—
	Noなし、下層出土	11	炭化材一括	—	—	—	—	+
	Noなし、下層出土	12	炭化材一括	cf+	—	—	—	—
7・8号地下式 土坑	Noなし	18	炭化材一括	—	—	—	—	+
	Noなし	19	炭化材一括	—	—	—	—	+
	Noなし	20	炭化材一括	—	—	—	—	+
	Noなし	21	炭化材一括	—	—	—	—	+
	Noなし	22	炭化材一括	—	—	—	—	+
	Noなし	23	炭化材一括	—	—	—	—	+
	Noなし	24	炭化材一括	—	—	—	—	+
	Noなし	25	炭化材一括	—	—	—	—	+
	Noなし	26	炭化材一括	—	—	—	—	+
	Noなし	27	半炭化材一括	+	—	—	—	—
10号地下式 土坑	Noなし	28	半炭化材一括	—	—	—	—	+
75号土坑	Noなし	1	炭化材一括	—	—	—	—	+
	Noなし	2	炭化材一括	—	—	—	—	+
	Noなし	3	炭化材一括	—	—	—	—	+
	Noなし	4	炭化材一括	—	—	—	—	—
	Noなし	5	炭化材一括	—	cf+	—	—	—
	Noなし	6	炭化材一括	—	cf+	—	—	—

クリ	シイノキ属	クヌギ類	コナラ類	エノキ	ケヤキ	散孔材	タケ・ササ類	備考
-	-	-	-	-	-	-	-	
-	-	-	-	-	-	-	-	
-	-	-	-	-	-	-	+	
-	+	-	-	-	-	+ A	+	
-	-	-	-	-	+	-	+	
-	-	-	-	-	-	+ B	-	
-	-	-	-	-	-	-	-	
-	-	-	-	+	-	-	-	
-	-	-	-	-	-	-	-	半炭化材
-	-	-	-	-	-	-	-	半炭化材
-	-	-	-	-	-	-	-	
-	-	-	-	-	-	-	-	
-	-	-	-	-	-	-	-	
-	-	-	-	-	-	-	-	
-	-	-	-	-	-	-	-	
-	-	-	-	-	-	-	-	
-	-	-	+	-	-	-	-	
-	-	-	-	+	-	-	-	板状木炭片
-	-	-	-	-	-	-	+	
-	-	-	-	-	-	-	+	
-	-	-	-	-	-	-	+	
-	-	-	-	-	-	-	-	
-	-	-	-	-	-	-	-	
-	-	-	-	-	-	-	-	
-	-	-	-	-	-	+ C	+	
-	-	-	-	-	-	-	+	
-	-	-	-	-	-	-	+	
-	-	-	-	-	-	-	-	
-	-	-	-	-	-	-	+	
-	-	+	-	-	-	-	+	
-	-	+	-	-	-	-	-	
-	-	+	-	-	-	-	-	樹皮あり 鋸痕
-	-	+	-	-	-	-	-	樹皮あり
+	-	-	-	-	-	-	-	
-	-	-	-	-	-	-	-	

註) cf…近似種

4号井戸—84：下駄(試料No.37)，7・8号地下式土坑 半炭化材一括(試料No.27)

垂直・水平樹脂道は共になく，放射仮道管はもたず，放射柔細胞の壁は厚く，たくさんの単壁孔をもち，じゅう状末端壁をもつなどからモミ属の材であることがわかる。

常緑針葉樹であるモミ属の樹木は北半球の温帯から亜寒帯にかけて40種類あり，日本にはモミ，ウラジロモミ，アオモリトドマツ，シラベの5種類がある。これらの中でもモミは温帯下部から暖帯中部に分布する常緑高木で径50～80cm，高さ20～30mにもなる。5種の中では最も低位帯に分布する樹種でもある。材の耐久性は低いが大径材であるので建築材，土木材などに利用されることが多い。

2. モミ属近似種 cf. *Abies* マツ科 写真 88—13～15

6号地下式土坑 炭化材一括(試料No.10)，(試料No.12)

垂直・水平樹脂道は共になく放射仮道管はもたず，放射柔細胞の末端壁はじゅう状であることからモミ属の材に近似することがわかる。電子顕微鏡を用いた組織の観察に不確定な部分もあったため，ここではモミ属近似種としておく。

3. スギ *Cryptomeria japonica* D. Don スギ科 写真 86—4～6

1号井戸—59：柾目材(試料No.30)，1号井戸—58：柾目材(試料No.31)，4号井戸—87：板目材(試料No.35)，4号井戸—89：板目材(試料No.36)

垂直・水平樹脂道は共になく，らせん肥厚を欠き，分野壁孔はスギ型のものが1分野に2個あることからスギ科のスギであることがわかる。

本州，四国，九州に分布し，日本特有の属を代表する。本来の自生地域は不明とされている。建築材として多く用いられ，家具，器具，包装など用途は広範である。

4. スギ近似種 cf. *Cryptomeria japonica* D. Don スギ科 写真 88—16～18

6号地下式土坑 炭化材一括(試料No.7)，75号土坑 炭化材一括(試料No.5)，(試料No.6)

分野壁孔はスギ型に類似し，他の特長もスギであることを示すが，この分野壁孔がスギ型であるか，ヒノキ型であるか不明瞭な部分もあるので，ここではスギ近似種としておく。

5. ヒノキ属 *Chamaecyparis* ヒノキ科 写真 87—7～9

1号井戸 井戸底内枠，井戸底外枠，半炭化材一括(試料No.13)，炭化材一括(試料No.17)，

4号井戸—88：柾目材(試料No.34)，井戸底枠材，3号井戸 井戸底枠材

垂直・水平樹脂道を共に欠き，らせん肥厚を欠き，分野壁孔はヒノキ型で1分野2個あることなどからヒノキ科ヒノキ属の材であることがわかる。日本にはヒノキ属の樹木はヒノキ(*C. obtusa*)とサワラ(*C. pisifera*)が分布するが，その材構造は互いによく類似している。

ヒノキは福島県以南から九州，屋久島まで分布し，温帯から暖帯にかけて山の中腹から尾根筋を好んで生ずる。サワラは岩手県以南の本州および九州の一部に自生し木曾地方，秩父地方

などに多く、山の中腹以下の大岩のゴロゴロした溪流沿いなどに林を形成することが多い。

ヒノキ材は古墳時代以降建築材を中心として用いられ、特に宮殿、都城に多く用いられた。サワラ材はヒノキ材に劣るが同じ用途に用いられることがある。

6. ネズコ *Thuja standishii* Carr. ヒノキ科 写真 87—10~12

4号井戸—85：箸（試料No.32），4号井戸—86：箸（試料No.33）

垂直・水平樹脂道を共に欠き、放射仮道管がなく、仮道管にらせん肥厚がなく樹脂細胞は晩材部に遍在する。分野壁孔はスギ型で1分野に2~6個あり、インデンチャーがみられることなどからネズコの材であることがわかる。

本州から四国の中央山地に特産し、瘦尾根あるいは湿原の周囲などを好んで生ずる常緑高木。天井板、家具、下駄などに用いられる。

7. クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 写真 89—19~21

75号土坑 炭化材一括（試料No.5）

年輪の始めに大道管が2~3列並び、そこから道管は順次径を減じてゆき夏材部で薄壁が角ばった小道管が火炎状に配列する環孔材で、道管の穿孔は単一、放射組織は単列同性であることなどからクリの材であることがわかる。

クリは樹高15~20m、胸高直径は30~40cmで、大きいものは1mにも達する落葉広葉樹である。北海道（石狩、日高以南）から九州にかけて、温帯から暖帯にわたって分布し、山野に自生し、また植栽されている。材は耐久性に富み、建築材、枕木などに利用されている。

8. シイノキ属 *Castanopsis* ブナ科 写真 89—22~24

1号井戸 炭化材一括（試料No.14）

年輪の始めに大道管が接線方向に連続せず配列し孔圏外に移るにしたがって大きさを減ずる。夏材部の小道管は小型で角ばっており火炎状に配列する。放射組織はすべて単列同性であることなどからシイノキ属の材であることがわかる。スダジイとツブラジイの識別はできない。ここでは両者を含めた意味でシイノキ属としておく。

シイノキ属の中でもスダジイは本州（福島県、新潟県以南）、四国、九州、濟州島に分布し、日本の暖帯林を構成する最重要樹種である。建築材、枕木、薪炭材などに利用されている。

9. クヌギ類 *Quercus* cf. *acutissima* Carr. ブナ科 写真 90—25・26

7・8号地下式土坑 炭化材一括（試料No.21），75号土坑 炭化材一括（試料No.1~4）

年輪の始めに大道管が2~3列並び、そこから円形で厚膜の小道管が夏材部に配列する環孔材、放射組織は単列同性のものと複合放射組織とをもつなどからブナ科コナラ属のクヌギ（*Q. acutissima* Carr.）かアマベキ（*Q. variabilis* Blume.）のいずれかの材であることがわかる。これらの材構造は類似しており識別は困難である。



クヌギは本州～九州，台湾，朝鮮，中国，ヒマラヤにわたり広く分布するが，ほとんどのものは薪炭林として植えられたもので自然の分布域は不明である。アベマキはクヌギよりも西日本に多く分布する。クヌギは薪炭材として有名であり佐倉炭，池田炭として，アベマキは樹皮をコルクの原材料として用いていた。

10. コナラ類 *Quercus cf. serrata* Thunb. 写真 90—27～29

6号地下式土坑 炭化材一括（試料No7），7・8号地下式土坑 炭化材一括（試料No20）

年輪の始めに大道管が1～2列並び，そこから薄壁で角ばった小道管が火炎状に配列する環孔材で，放射組織は単列同性のものと複合放射組織とをもつなどからブナ科コナラ属のコナラ（*Q. serrata*），かみズナラ（*Q. mongolica*），カシワ（*Q. dentata*），ナラガシワ（*Q. aliena*）のいずれかの材であることがわかる。これらの材構造は類似しており識別は困難である。

11. エノキ *Celtis sinensis* Pers. var. *japonica* Nakai ニレ科 写真 91—30～32

6号地下式土坑 炭化材一括（試料No8），1号井戸—57：炭化木器（試料No29）

年輪の始めに大道管が1～2列並び夏材部の小道管は多数集合して接線方向に配列する環孔材で，道管の穿孔は単一，放射組織は異性1～10細胞幅で輪細胞をもつなどからエノキの材であることがわかる。

エノキは樹高15～20m，胸高直径50～60cmであるが，1.5mに達するものもある落葉広葉樹である。本州，四国，九州，朝鮮，中国中部の温帯から暖帯にかけて分布し，陽の当りの良い湿潤な土地を好む。材は建築材，器具材，薪炭材として多く用いられる。しかし，器具，家具材ではケヤキの，馬鞍などではムクノキの代用材にされ，材質ははるかに劣るとされている。

12. ケヤキ *Zerkova serrata* Makino ニレ科 写真 91—33～35

1号井戸 炭化材一括（試料No15）

年輪の始めに大道管が1列並び夏材部では小道管が多数集合して接線方向につながる環孔材で道管の穿孔は単一，放射組織の幅は1～8幅で異性であることからケヤキの材であることがわかる。

本州から九州，朝鮮，中国の温帯から暖帯にかけて分布し，溪流に近いところを好む落葉高木である。材は建築，彫刻，挽物などに用いられる。

13. 散孔材一種 A 写真 92—36～38 1号井戸 炭化材一括（試料No14）

春材部にやや大きい道管が接線方向に並ぶ傾向を示す散孔材で道管は単独かまたは2個複合する。放射組織は異性で1～2細胞幅で，分野にみられる壁孔はレンズ状のものが横に2～3個連続する材である。しかし，詳細な樹種同定はできず，今後さらに検討してみたい。今回の資料中には1点のみであった。

14. 散孔材一種 B 写真 92—39～41 1号井戸 炭化材一括（試料No16）

単独または2個の道管が放射方向に複合した散孔材で、道管の密度は疎である。放射組織は1~2細胞幅である。しかし、詳細な樹種同定はできず、今後さらに検討してみたい。今回の資料中には1点のみであった。

15. 散孔材一種 C 写真 93—42~44 7・8号地下式土坑 炭化材一括 (試料No.26)

道管は単独または接線方向に2~3個複合する散孔材で道管は階段状、放射組織は3~4細胞幅で異性である。しかし、詳細な樹種同定はできず、今後さらに検討してみたい。今回の資料中には1点のみであった。

(3) まとめ

41点の試料からモミ属2, モミ属近似種2, スギ4, スギ近似種3, ヒノキ属7, ネズコ2, 針葉樹17, クリ1, シイノキ属1, クヌギ類5, コナラ類2, エノキ2, ケヤキ1, 散孔材3, タケ・ササ類14が明らかになった。また、針葉樹が41点の資料中38点に見ることができ、その多さが理解できる。井戸枠材4点はすべてヒノキ属であるように、本属のヒノキが多く用いられていたことを思わせる。広葉樹はすべて炭化材として発見されており、またクヌギ、コナラ類の多かったことから薪炭材に由来するものであったのであろう。しかし、1号井戸の炭化木器・挽物はケヤキではなくエノキであった。これは現代からみると代用材なのであるが、器の木材利用については江戸時代の特有なものがあつたのかもしれない。

多くの木材を消費していた江戸御府内に位置していた本遺跡の木材については種々の問題があると考えられる。しかし、本資料のみでは試料数があまりにも少なく、今後、周辺遺跡などの分析例の増加をまって考察を加えたいと考えている。

註

- 1) ここでは材と炭化材とを区別している。炭化材も木材なのであるが、ここでは炭化し遺存したものを炭化材、炭化以外の条件で遺存したものを材として区別してある。

文献 (ABC 順)

- 倉田 悟, 1971: 原色日本林業樹木図鑑 1~5 (改訂版)。地球出版。
- Rossen, Jack and James Olsen, 1985: The Controlled Carbonization and Archaeological Analysis of SE U.S. Wood Charcoal. *Journal of Field Archaeology* Vol.12: 445—456.
- 島地 謙・伊藤隆夫, 1982: 図説木材組織。地球社。

## 第4節 理学部7号館地点出土植物遺残

松谷 暁子

### (1) 試料 (表61および表62)

未炭化の種子6点の他、炭化した米粒の塊らしきもの、鉄器に付着した畳表らしきものの一部、紙片の炭化したもの、縄の炭化したもの、木材片の炭化したものなど合計35点である。

### (2) 方法

実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて、上記の出土物の微細構造を観察し、材質の識別を試みた。

### (3) 結果

未炭化の種子6点の内、4点はウリ科の種子である。一見、カボチャに似ているが少し異なり、東南アジア原産のトウガンの可能性が高い(大阪市立大学粉川昭平教授の御教示による)。一点は梅の核らしい。出土したときは梅の種子のような形をしていたと容器の蓋に付記されているが、こわれていてよくわからない。梅かもしれないが、遺跡からは桃の核の出土も多いので桃の可能性もある。残りの一点は、半分欠けているが、ニレ科のムクノキの種子と思われる。ムクノキの果肉は食用になる。

米つぶらしいものが炭化した塊は、4点出土している。粃殻は残ってなくて、玄米の塊と思われる。塊の大きさは、おにぎりくらいであるが、形ははっきりしない。稲藁の破片が付着していたり、5ミリ位の厚さの炭化したスギ板にのっていたりする。

鉄器に付着した畳表と思われるものは、編み方から畳表に違いないと思われたが、微細構造の残っているところを探して、縦断面と横断面を観察してみた。現在の畳表の断面とよく似ている。紙様の炭化物についても、走査型電子顕微鏡での観察を試みたが、材質まではわからなかった。炭化した縄についても走査型電子顕微鏡による観察をおこなった。シュロ縄ではないかとのことなので、生垣に用いられているシュロ縄と比較してみたが、残念ながら断定できなかった。木材片の炭化物の方は、構造が比較的良好に残っているものが多かった。針葉樹はマツ、スギ、ヒノキの他、現在の分布が近畿と四国に限られている、トガサワラが認められた。広葉樹は、ブナ科のクヌギ、シイ、クリなど環孔材が大部分で、散孔材が2点あったが樹種は不明である。竹材も比較的多く認められた。

表 61 未炭化種子と観察結果

Table 61 List of uncarbonized seed and nut samples

	遺構No	結果	写真番号
1	3号井戸	ウリ科	94-1b
2	4号地下式土坑	梅または桃の核破片	94-1e
3	7号地下式土坑	ウリ科(6点+破片)	94-1d
4	9号地下式土坑	ウリ科(6点)	94-1c
5	11号地下式土坑	ムクノキ種子?	94-1f
6	12号土坑	ウリ科(約60点)	94-1a

表 62 炭化物と観察結果

Table 62 List of carbonized wood samples

	遺構No	試料	結果	写真番号
7	1号井戸	紙?	紙だが原料は不明*	95-2g
8	1号井戸	炭化米	炭化玄米*	
9	2号井戸	木片	ヒメコマツ*, 炭化米	96-3g~i
10	6号地下式土坑	炭化米?	炭化玄米*	94-1g~i
11	6号地下式土坑	炭化米?	炭化玄米	
12	6号地下式土坑	畳?	畳表*	95-2d~e
13	7・8号地下式土坑	シュロ縄?	材質不明	95-2a~c
14	11号地下式土坑	木片	マツ?, シイ?, 散孔材	
15	14号地下式土坑	木片(炭?)	クヌギ	
16	17号地下式土坑	材, 竹?	クリまたはシイの小枝	
17	1号土坑	炭化材?	クヌギ*	
18	2号土坑	材, 木片	針葉樹, 環孔材, 散孔材	
19	2号土坑	?	針葉樹, クリ?	
20	7号土坑	木樺?(一部)	スギ*	96-3a~c
21	7号土坑	木樺?(一部)	スギ*	
22	7号土坑	木樺(炭化)	針葉樹	
23	7号土坑	木樺(炭化)	針葉樹	
24	7号土坑	木樺(炭化)	土のみ多く構造の観察不能	
25	24号土坑	材?	マツ?, ブナ科, 散孔材	
26	28号土坑	木片	シイ?, スギ?	
27	41・42・43号土坑	炭化材	クヌギ*, シイ*	97-4d~f
28	54号土坑	炭化材	シイ*	
29	54号土坑	炭化材	シイ, マツ?	97-4g~i
30	63号土坑	木片(径約1cmの枝状)	クリまたはシイ	
31	68・69号土坑	?(一部)	ヒノキ	96-3d~f
32	68・69号土坑	竹?	竹材	
33	75号土坑	竹?	竹材	95-2h~i
34	83号土坑	木片	針葉樹	
35	1号溝	木片(外面炭化)	トガザワラ	97-4a~c

\*のついているのは、走査型電子顕微鏡での観察を行ったもので、\*のないのは実体顕微鏡の観察のみ。

## 写真説明 (写真 94～97)

写真 94 [1a～1i] (種子の実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡写真)

a—d: ウリ科種子。a: 12号土坑出土。b: 3号井戸出土。c: 9号地下式土坑出土。d: 7号地下式土坑出土。e: 4号地下式土坑出土梅または桃の核破片。f: 11号地下式土坑出土ムクノキ種子(右は断面)。g—i: 2号井戸出土炭化粒塊より遊離した一粒の全形および拡大写真。iはhの中央部の破片の拡大写真で、稲藁に特有の構造をしている。

写真 95 [2a～2i] (炭化した縄、畳、紙、竹の走査型電子顕微鏡写真)

a—c: 7・8号地下式土坑出土縄。d—e: 6号地下式土坑出土畳表? f: 現在の畳表断面。g: 1号井戸出土紙? h—i: 75号土坑出土竹材 (h: 横断面, i: 縦断面)。

写真 96 [3a～3i] (炭化木材片の走査型電子顕微鏡写真 1)

a—c: 7号土坑出土炭化材(スギ)。a: 横断面(早材から晩材への移行がやや急で、幅の広い晩材部に樹脂細胞が点在している), b: 径断面, c: 接線断面。d—f: 68・69号土坑出土炭化材(ヒノキ)。d: 横断面(早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材部の幅は狭い), e: 径断面, f: 接線断面。g—i: 2号井戸出土炭化材片(ヒメコマツ)。g: 横断面(大型の垂直樹脂道が顕著に認められる), h: 径断面(窓状の分野膜孔と平滑な放射仮導管が認められる), i: 接線断面(水平樹脂道を含んだ紡錘形放射組織が認められる)。

写真 97 [4a～4i] (炭化木材片の走査型電子顕微鏡写真 2)

a—c: 1号溝出土炭化材(トガサワラ)。a: 横断面(厚い晩材部に厚壁のエピセリウムでかこまれた垂直樹脂道が存在している), b: 径断面, c: 接線断面(水平樹脂道を含んだ紡錘形の多列放射組織と仮導管の壁に密に並んだらせん肥厚が特徴的である)。d—f: 41・42・43号土坑出土炭化材(クヌギ)。d: 横断面(孔圏外の道管は円形で壁の厚い小道管が放射方向に配列しており、中央部に多列広放射組織が認められる), e: 径断面(大型の柵状の壁孔が認められる), f: 接線断面(単列放射組織の他に広放射組織が認められる), g—i: 54号土坑出土炭化材(シイ)。g: 横断面(環孔性の放射孔材で、孔圏外の道管は小型で角張り、火炎状に配列している), h: 径断面, i: 接線断面(放射組織はすべて単列であり、左側の道管の内舷にはチロースが認められる)。

## 第5節 理学部7号館地点出土繊維について

中田 節子

東京大学本郷構内理学部7号館地点の3遺構より発掘された繊維の調査結果を報告する。

(1) 9号地下式土坑出土繊維 (写真 98-1・2・3)

残存部は、経 2.3 cm×緯 2.3 cm×厚さ 0.5 cm (写真 98-1)、経 3.0 cm×緯 1.2 cm×厚さ 0.5 cm (写真 98-2) の 2 片、および、径約 1 cm の塊 2 片の計 4 片である。すべて炭化しており、観察できる範囲では、平織繊維と不織繊維の二種類がみられる。これらは、①平織→②不織繊維→③平織→④不織繊維→⑤平織という順に重なっている。

①・③・⑤の平織は、それぞれ、同じものが少なくとも 3 枚は重なっている。繊維は、経、緯とも撚りはなく、見かけの直径は、経糸 0.1 m/m、緯糸 0.2 m/m である。糸は、状態が悪いにもかかわらず、太さ、織りとも非常によく揃っている。密度は、経 21 本、緯 19 本である。糸が芯まで炭化しているため、材質の判定は困難であったが、一部絹と思われる部分が観察された。

②・④は、綿状になり、平織繊維にはさまれた状態で出土している。1 本ずつはかなり縮れている。1 本の見かけの直径は 0.01~0.02 m/m 前後である (写真 98-3)。材質は、明らかに綿の特徴を示しているものと、炭化し判定しにくい一部絹と思われるものも含まれていた。綿と真綿を混ぜて使用したのであろうか。

(2) 1号土坑出土金糸 (写真 98-4・5)

長さ 1 cm 前後の金糸が数十本と (写真 98-4)、金糸が 3.0 cm×2.5 cm の範囲で土塊に付着しているもの 1 点 (写真 98-5) である。土塊に付着しているものは、金糸の上に 5 m/m 厚さで土がかかっている。土の上には、幅約 4 m/m の竹状のもの痕跡がみられる。これは一方向のみである。金糸は、経・緯方向ともに土の下から観察されるが、織ってあるものかどうかは確認不可能である。出土したものは、すべて S 撚りの撚金で、ほとんど隙間なく撚っている。見かけの直径は 0.5 m/m ある。

(3) 7・8号地下式土坑出土縄状繊維 (写真 98-6)

ここより出土した繊維は縄状である。長さ×幅を cm で表すと、3.4×0.9、4.0×0.9、4.0×1.3、4.5×0.8、16.5×0.7 の 5 片であり、すべて炭化している。少しでも動かすとくずれる状態となっている。ただし、くずれた物は粉状にはならず、比較的しっかりとしている。

1 本 1 本に撚りはなく、1 本の見かけの直径は 0.08 m/m 前後とかなり細い。これが集まり、一つの縄状の物となっている。1 本ずつは、炭化しても固くつっぱり、しっかりとしている。すべて S 撚りで、角度は、余りほどけていないもので 25 度前後から 40 度前後であった。

材質は、芯まで炭化しているため判断しにくいだが、シュロに近い材質のものと思われる。

以上出土した資料は数も少なく、小片であったが、いわゆる”良いもの”を思わせるところがあった。炭化するか、金糸でないと残らなかったのが残念である。

## 第7章 理学部7号館地点出土の17世紀の肥前磁器

大橋 康二

肥前磁器の焼造は1610年代ごろに始まると考えられている。本遺跡(理学部7号館地点)ではこの焼造開始当初の時期の製品と確定できるものはないが、1630年代ごろからの製品が多数出土している。

肥前磁器生産の中心である有田皿山は、1637年に窯場の整理・統合が行われ、磁器生産体制が確立される。そして1630年代以降、磁器の生産量の急増が認められ、全国の消費地遺跡の出土状況をもみても、この時期から肥前磁器の出土量の増加と流通圏の拡大傾向が顕著である(佐賀県立九州陶磁文化館1984)。

この流通の拡大を促した最大の理由は、中国磁器の輸入が明末・清初の動乱で、1640年代に境に激減したことであろう。理学部7号館地点では明末の中国磁器の出土量は少ない。このことは、理学部7号館地点の主たる年代が1640年代ごろに始まったための出土品内容といえる。

以下、各時期の肥前磁器の内容をみてみよう。

### <1630年～40年代>

出土磁器のうち、1630年～40年代と推測されるものは、2号土坑の11の染付小坏や3の染付大皿、26の染付小瓶、30の染付小壺などがあり、11・26・30は窯ノ辻窯(佐賀県山内町:佐賀県立九州陶磁文化館1984)出土品に類似している。26の小瓶は鶴首形になるものと思われ、その器形や肩にへう彫りによる菊弁文を施すことなど、この時期に集中的にみられる特徴を有する。30の小壺の形態もこのころを除くと確実な類例を知らない。3はいわゆる鏝縁の大皿であり、口縁部の菊唐草文や器形の特徴から山辺田窯(有田町教育委員会1986)の製品と推測される。山辺田窯は8基の窯が確認されているが、この種の大皿は3号窯や4号窯周辺(4号窯より新しい窯で、4号窯の上に失敗品を廃棄している)、7号窯周辺(6号窯と一部重複しており、6号窯の製品の可能性が強い)で出土している。

1号井戸の4の染付小皿や11・12・13の青磁皿もこの時期のものとして推測される。11の青磁大皿は見込みにへう彫文を施すが、器形、特に高台の成形や三足の形状などがこの時期に多い特

徴を示す。13の青磁大皿の口縁部には辰砂で口紅装飾を施している。磁器に辰砂を用い、紅色の装飾を施すのは小溝窯(佐賀県立九州陶磁文化館 1987)<sup>1)</sup>、山辺田窯、猿川B窯(佐賀県教育委員会 1970, 1971)、小樽2号窯(有田町教育委員会 1986)、山小屋窯(有田町教育委員会 1987)(以上、有田町)、窯ノ辻窯(山内町)、三股古窯(長崎県波佐見町)など、17世紀前半から1650年代ごろの窯で見られるが、その後、江戸時代を通じて有田では辰砂磁器を焼造した形跡はない。13の大皿は三股古窯の可能性が高い。

#### <1630年～50年代>

1630年代から50年代と、前述のものより年代幅を若干大きくみておく必要のあるものは、2号土坑の22の青磁碗、31の白磁香炉や1号井戸の25の染付香炉、26の白磁香炉、27の青磁火入がある。2号土坑の青磁碗は高台無釉であり、高台無釉碗が作られた時期、つまり、1630年代から60年代の中では比較的早い時期に見られるものである。類例は百間窯(山内町:佐賀県立九州陶磁文化館 1985)、小樽2号窯、山辺田窯、谷窯(大橋康二 1988 b)、猿川窯(以上、有田町)などにみられる。2号土坑の31の香炉や、1号井戸の25・26の香炉は窯ノ辻窯、百間窯、猿川窯の香炉などに似通っている。25は口縁部上面の一部に雷文を染付しているが、主に、連続文として用いられる文様を部分的に配するデザイン法はこの時期にいくらかみられる。27の青磁火入は線彫りによる唐草文と、腰部の陽刻蕉葉文で飾る。こうした装飾法や高台部無釉であることなどから、この時期と推測したが、線彫り文は17世紀末までかなりみられるため、いくらか年代が降る可能性もある。

#### <1640年～50年代>

1640年～50年代とみられるものは、2号土坑の13～16の染付碗や、4・5の染付小皿、25の染付鉢、28の染付小瓶、1号井戸の2の染付手塩皿、1号土坑の12の白磁小坏、4の色絵大鉢、142号土坑の1の色絵皿などがある。

2号土坑の13の団竜文碗や16の柳文碗は猿川窯に類品がみられる。これらは1630年代ごろまでのものに比べて染付の線描きが細い。線描きが細くなるのは有田諸窯に一樣ではないが、1640年代ごろから線描きの細い高級磁器が漸次多くなり、1650年代ごろから高級磁器製作の中で急速に細い線描きが一般化する傾向が認められる。13～16の碗をみると、長吉谷窯(佐賀県立九州陶磁文化館 1984、有田町教育委員会 1981)などの高級碗に比べればいずれも底部や高台が厚手に作られている。長吉谷窯は1656年銘白磁蓋や1660年銘染付見込荒磯文碗などから、1650年代中ごろに開窯したと推測される。よって13～16のような碗の下限は1650年代と考えられる。4のような見込にうづくまる鹿を描く意匠は中国磁器を手本とした結果であるが、これ



はこの時期の禅門谷一本松窯(大橋 1988 b)などに類例がある。5のような帆掛船を描き込む山水文の小皿はこの時期の窯に多い。25の鉢に描かれた丸文はこの時期の猿川窯や山辺田窯、窯ノ辻窯などの製品にみられる。28の草文小瓶は底部をくり底に作る。こうした小瓶や玉壺春形(ラッキョー形とも呼ぶ)の瓶の場合、1650年代以前ではくり底形であったが、17世紀後半以降は高台作りとなる。草文はこの時期の小坏によく描かれたラン文を意識したものであろう。小坏のラン文は明末中国磁器小坏を手本とした結果とみてよい。28のような草文小瓶の類例は小樽2号窯や広瀬向窯(大橋 1988 a)にみられる。1号井戸の2の山水文手塩皿は底部を蛇ノ目高台に作る。蛇ノ目高台の皿は1640年代を中心にみられ、早い例としては小溝上窯(佐賀県立九州陶磁文化館 1988)の小皿があるが、大体1630年代のうちに中国磁器(大橋 1987: 第2図15)<sup>2)</sup>の影響で現れたと推測される。1650年代半ばに始まる長吉谷窯にはみられないから、このころにはすたれたと考えてよかろう。2の手塩皿は文様、描法などから1640年~50年代と推測される。1号土坑の12の小坏は高台無釉であることが特徴である。前述の高台無釉の碗が盛んに焼造された1630年~50年代にかけての磁器に、小坏でも高台無釉のものが作られた。こうした小坏がもっとも沢山出土したのは窯ノ辻窯であり、その隣の窯で窯ノ辻窯に続く窯とみられるダンバギリ窯(佐賀県山内町: 佐賀県立九州陶磁文化館 1984)でもかなりの量が出土している。窯ノ辻窯の小坏よりダンバギリ窯の小坏の方が器壁が薄くなり、年代も1650年代ごろと推測される。4の色絵大鉢は見込周囲の二重圏線、内側面の丸文の輪郭線、外面高台脇の二重線、高台内の二重圏線を染付で描く。色絵や成形を含めたこの鉢の特徴は、従来、いわゆる色絵古九谷のうちの祥瑞手と分類されていたものと同様である。これについては第6章第1節で詳述しているが、特に高台内の二重圏線と見込周囲に小さな段を削り出す成形の特徴は、1680年代以前では山辺田窯、猿川窯の色絵素地皿とダンバギリ窯の染付皿にみられるだけである。このうちでも、4の色絵大皿の素地は山辺田3号窯の丸文の輪郭を染付した素地(有田町教育委員会 1986: 第19図144, 148)に似通っている。142号土坑の1の色絵皿は見込に緑絵具で文様を描いている。高台径が比較的小さいこと、高台付近の施釉の処理が荒く、釉むらが著しいこと、内面に降灰の熔着が著しいことなど、この時期の色絵素地の特徴をもっている。類品は山辺田4号窯で出土している。こうした有田産とみられる色絵は、有田の色絵の創始が酒井田柿右衛門家文書(石川県立美術館・佐賀県立九州陶磁文化館 1987)によって、正保4年(1647)6月以前の近い時期と推測されるが、初期の色絵がどのようなものかは明らかではなかなただけに、その内容を明示するものとして重要である。さらに同文書は、この最初の色絵磁器を長崎に持参して加賀藩の御買物師に売ったと記しているので、加賀藩の江戸屋敷跡から出土した色絵の資料は、加賀藩が肥前色絵磁器を購入した記録の傍証となろう。

〈1650 年代ごろ〉

1650 年代ごろとみられるものとしては、2 号土坑の 6・7 の染付小皿、1 号土坑の 2 の染付皿がある。

2 号土坑の 6 の日字鳳凰文小皿はこの時期に多く作られ、弥源次窯（有田町：佐賀県文化館 1970）などに多い。これも明末の中国染付を手本としたものであり、長吉谷窯、柿右衛門窯（有田町教育委員会 1977：図版 13）では寿字鳳凰文小皿が出土しているが、それよりも粗放な筆致で描かれたものが多い。器壁は厚手で口径に占める底径の割合は 2.3 分の 1 であり、高台削りなども 17 世紀前半のいわゆる「初期伊万里」の特徴を残している。7 の鳳凰文小皿は見込に細い線描きで雲に鳳凰を密に描き込み、外側面には牡丹唐草文を描く。高台内中央に二重方形枠内に「福」字を染付する。内外の文様はやはり中国磁器に倣ったものと思われ、高台内の二重方形枠内に「福」字銘も明末の中国磁器の影響で 1630 年代ごろには現れる。口径に占める底径の割合は 1.8 分の 1 と大きい。このように底径の割合が大きい皿は中国磁器をめざした結果生まれたものとみられるが、それが一般化する前の段階の小皿であろう。1 号土坑の 2 の皿は見込の半分に市松文と雷文を交互に描き、地文としている。こうした画面を二分し、半分に地文、半分に白地を活かした文様を配するデザインは、中国・祥瑞が用い、その影響で、1640 年代ごろから多くみられる。底径の割合が比較的大きく、高台内に「太明成化年製」銘を染付している。この「太明成化年製」銘は明末の中国磁器が古い年款を用いたため、それを写した肥前磁器も中国の国・年号銘としてはもっとも早くから用い、もっとも多く用いた。

〈1640 年～60 年代〉

1640 年～60 年代とみられるものは、2 号土坑の 17・18・19 の染付碗、20 の白磁碗、1 号井戸の 10 の染付手塩皿などがある。

2 号土坑の 18 の染付山水文碗は、柳を描くなど、文様や成形の特徴からこの時期とみられる。強いて言えば、1650 年代の可能性が強い。19 の碗は 17・18 に比べれば古式とみられる。1 号井戸の 10 の手塩皿は糸切細工によって成形している。糸切細工成形による変形皿の出現は 1650 年代前半と推測しているが、山辺田 3 号窯周辺出土の角皿（色絵素地）や、百間窯で楕円形ハマが出土していることなどから、1640 年代に上限が遡る可能性も若干残っている。しかし、主として 1650 年代前半に始まるとみられ、10 の手塩皿は貼付高台の成形が粗放で、意匠なども楠木谷窯（有田町：佐賀県立九州陶磁文化館 1987）出土例に類似している。よって糸切細工成形による変形皿の初期の例とみられる。

#### <1650年～70年代>

1650年～70年代とみられるものは、1号井戸の20の染付鉢、6の染付皿、24の染付小香炉、29の色絵瓶、1号土坑の7の染付碗、11の色絵碗、19のルリ釉瓢形瓶などがある。

1号井戸の20の染付鉢は外面の丸文、内側面の牡丹文、見込の雲竜文や器形などの構成要素をみると、長吉谷窯、猿川窯、谷窯などに類似のものがみられる。丸文は中に薦らしき文様を描き込んでおり、この種の薦らしき文様は長吉谷窯、谷窯などこの時期の窯だけにみられる。強いて言えば、年代は1650年代後半から1660年代と推測される。6の染付皿は見込に菊にとまる鳥を描いている。全体に細かい貫入が入り、釉色や底部がやや厚手に成形されている点などに特徴がある。文様の筆致などの特徴も考え合わせるとダンバギリ窯の製品にもっとも類似している。高台内の二重方形枠内に染付した福字もダンバギリ窯には類例がある。ダンバギリ窯は1650年代を中心に操業した短期間操業の窯と推測され、この皿も1650年代の可能性が強いが、こうしたものがいくらか後まで作られた可能性も残るので下限はあえて1670年代としておく。24の染付小香炉は胴部に鳳凰文、口縁部上面に宝文を表す。胴部に描かれた鳳凰と雲はこの時期に沢山焼造された竜鳳文碗・鉢の文様と共通である。またこの香炉は外面全体に施釉しており、無釉部分は内面である。底部に小さな突帯状の高台が作られているが釉は掛っている。このような底部の作りの小香炉がこの時期にのみ、長吉谷窯、柿右衛門窯、谷窯などで出土している。この小香炉は焼成時に天地を逆にして覆焼きしたものであり、無釉の内底に窯道具を当てて窯詰めしている。長吉谷窯ではこの窯詰めに用いたと思われる磁器土で作った小瓶形の窯道具が出土している。29の色絵瓶は頸部の小片だが、赤で青海波の地文を描く。赤の発色や意匠から1650年～70年代と推測される。

1号土坑の7の染付芙蓉手小碗は長吉谷窯に類例がある。年代は長吉谷窯例から考えるならば1660年～70年代の可能性が強い。18の染付芙蓉手鉢もこのころのものであり、これら芙蓉手碗・鉢は中国・明末の芙蓉手小鉢などを手本として作られたものであろう。11の色絵碗は外面上部を斜格子文で埋め、その下に植物らしき文様を描く。赤の色調は1号井戸の29の色絵瓶と同様であり、意匠などからこの時期と推測される。19のルリ釉面取瓢形瓶は底部を蛇ノ目高台に作る点などからこの時期とみられる。

#### <1650年～80年代>

1650年～80年代とみられるものは、1号井戸の7・9・19の染付皿、1号土坑の5の青磁大皿、1号溝の1と19号地下式土坑の1の青磁皿などがある。

1号井戸の7の染付皿は、器形や柳と舟に人物の文様などの特徴からみると、それぞれ下白川窯(有田町：佐賀県立九州陶磁文化館1988)、谷窯などに類品がある。高台内の円圏内に福字

銘も谷窯に似通った例があり、年代は1650年～70年代の可能性が強い。19の染付皿は内面口縁部の一角に植物と思われる文様を描いている。こうした意匠や器形は長吉谷窯に類例があり、この時期と推測される。9の染付色紙形皿は糸切細工成形によるものであるが、形態や成形の特徴から下白川窯出土品に類似の陶片がみられる。1号溝の1と19号地下式土坑の1の青磁葉形皿も糸切細工成形によるが、その特徴や意匠からこの時期の有田の製品とみられる。1号土坑の5の青磁大皿はへら彫りによって見込に花文、見込周囲に雷文帯をめぐらし、内側面に木葉を陰刻している。底部は高台畳付にも施釉する代わりに、高台内を蛇ノ目釉剥ぎし、そこに鉄泥を塗り、チャツと呼ぶ皿形の窯道具を当てて窯詰・焼成している。そのため鉄泥部分にチャツの口部の熔着痕が白く残っている。こうした窯詰法の青磁皿・鉢は17世紀後半に限ってみられるが、同様の窯詰法は中国・明代の青磁盤にみられ、器形や内面のへら彫り装飾法も明の青磁に共通するため、明代の青磁製作の技法が有田の青磁製作に導入されたものと推測される。肥前ではこのような明代の青磁盤と同様のものを作り始めてまもなく、高台内中央部を一段深く削り込むようになる。その時期は17世紀の第4四半期ごろという程度で詳細は明らかではない。5の青磁大皿は削り込んでいないため、17世紀後半のうちでも1680年代より降る可能性は少ない。

#### <1660年～80年代>

1660年～80年代とみられるものは、1号土坑の8・10の染付碗、16の染付鉢、3の染付皿などがある。

1号土坑の8の染付小碗は外面に柴束と紅葉、雪輪を散し、高台内に「宣徳年製」の「徳」の部分が見られる。このような意匠、器形、底裏銘の碗は長吉谷窯に類例が多い。成形や線描きなどの特徴から長吉谷窯の製品の中でも後出と推測しており、1660年～70年代、特に1670年代の可能性が強い。10の染付碗は外面に梅花、折松葉、竹葉を散しており、酷似の碗が長吉谷窯の碗にあり、それは高台内に「宣明化製」の染付銘を施している。このような「宣明化製」、「宣明」などの「宣明」を基本とする銘は中国の国・年号銘に倣っていくうちに作られた銘で、長吉谷窯で沢山出土している。成形や意匠、線描きが細かいことなどから長吉谷窯の製品の中でも後出と推測され、1670年代前後に多く用いられたと考えている。よって10の碗もこのころの年代が推測されるのである。16の染付鉢は見込に朝顔文を描き、高台内に一重方形枠内に福字を染付している。朝顔文は長吉谷窯の碗などに多くみられるものと類似しており、染付銘も長吉谷窯に類例があるから、16の鉢も長吉谷窯あたりの窯の製品とみてよい。年代は長吉谷窯でも後期に属するものであり、1660年～80年代と推測される。3の染付中皿は見込に花鳥文を描き、見込周囲に雷文帯、内側面に花唐草文、外側面にも細かい線描きの花唐草文を配す。これら

の意匠構成要素はそれぞれ柿右衛門窯出土品の中に類例がみられ、年代は1660年～80年代と推測される。

以上、理学部7号館地点から出土した1630年代から1680年代の肥前磁器について、主なものをあげてその特徴を説明した。1690年代以降、18世紀前半には、見込五弁花文やコンニャク印判、型紙摺による装飾、いわゆる渦福字銘などが流行する(大橋1984)。本地点でも6号地下式土坑の2・4・5・8・13、16号地下式土坑の3、3号井戸の1・2・9、4号井戸の5～9・15などがその特徴を示すものである。それに対し、前述の2号土坑、1号井戸、1号土坑などではこの種の肥前磁器は出土していない。肥前磁器の意匠・成形の上で大きな変化が元禄(1688～1703)前後にあったためである。

#### 〈小結〉

東京大学構内遺跡理学部7号館地点出土の17世紀の肥前磁器についてみてきたが、出土品の焼造窯は、肥前の中でも佐賀県の現有田町と現山内町の板ノ川内地区の窯とみられるものがほとんどであった。これらの窯業地域(13ヶ所ないし14ヶ所の窯場からなる)は、当時、有田皿山もしくは有田皿屋と呼ばれた。17世紀の肥前にはこの有田皿山以外にも磁器を焼いた窯場があった。すなわち佐賀県では西有田町の広瀬山(『承応2年[1653]万御小物成方算用帳』には有田皿山以外の窯場として記載されているが、18世紀以降は有田皿山の1つになる)、山内町の筒江山、伊万里市の大川内山、嬉野町の吉田山、不動山、長崎県では波佐見町の三股、永尾、中尾、長田、皿山(当時は稗木場か)、百貫、佐世保市の三川内、木原、江永、平戸市の中野などである。このように広い地域に分布する肥前諸窯の内、本地点の出土品は有田辺の窯の製品とみられるものが多い。

器種は小坏(ぐい呑とも呼ぶ)、大・小の碗、鉢、大・中・小の皿、仏飯器、大・小の瓶、香炉、壺などがあり、種類は染付を主として、白磁、青磁、ルリ釉、色絵がある。この種類は17世紀の有田辺の生産地例でみる種類・割合と大差ないが、生産地でルリ釉よりも比較的多くみられる鉄釉磁器が本地点では認められない。肥前で17世紀前半から1650年代にかけてのみ焼造された辰砂は、青磁の口縁部に塗ったものが出土しているが、染付と共に辰砂を施したものは中国磁器(2号土坑の10など)だけであった。2号土坑の7・26・30、1号井戸の5～7・9・11・13・24～27・29～31、1号土坑の4・5・7～11・15～19、1号溝の1、19号地下式土坑の1など比較的高級磁器が多いことも指摘でき、遺跡・遺構の性格を考えるとときに考慮しなければならない。

## 註

- 1) 窯の報告は佐賀県立九州陶磁文化館 1987 で行われているが、辰砂陶片は表面採集であり、未報告。
- 2) 本地点でも 1 号井戸の 1 など同種の皿がいくつか出土している。

## 文献

- 有田町教育委員会, 1977: 柿右衛門窯跡発掘調査概報。
- 有田町教育委員会, 1981: 長吉谷窯跡。
- 有田町教育委員会, 1986: 佐賀県有田町山辺田古窯址群の調査 (遺物篇)。
- 有田町教育委員会, 1986: 小樽 2 号窯跡。
- 有田町教育委員会, 1987: 山小屋遺跡。
- 石川県立美術館・佐賀県立九州陶磁文化館, 1987, 伊万里・古九谷名品展。
- 大橋康二, 1984: 肥前陶磁の変遷と出土分布。国内出土の肥前陶磁, 佐賀県立九州陶磁文化館, pp.152—169。
- 大橋康二, 1987: 16・17 世紀における日本出土の中国磁器について。東アジアの考古と歴史 下, 岡崎敬先生退官記念論集。同朋社出版, pp.602—627。
- 大橋康二, 1988 a: 西有田の古窯—西有田町史別編。西有田町史編さん委員会。
- 大橋康二, 1988 b: 有田町史古窯編。有田町史編纂委員会。
- 佐賀県教育委員会, 1970: 有田町猿川古窯跡第一部発掘調査概報。
- 佐賀県教育委員会, 1971: 有田町猿川古窯跡第二部発掘調査図録。
- 佐賀県文化館, 1970: 有田外山応法地方弥源次古窯址物原ならびに掛の谷古窯址について。
- 佐賀県立九州陶磁文化館, 1984: 国内出土の肥前陶磁。
- 佐賀県立九州陶磁文化館, 1984: 窯ノ辻・ダンバギリ・長吉谷。
- 佐賀県立九州陶磁文化館, 1985: 百間窯・樋口窯。
- 佐賀県立九州陶磁文化館, 1987: 楠木谷窯・小溝上窯。
- 佐賀県立九州陶磁文化館, 1988: 下白川窯・年木谷 1 号窯。

## 第8章 江戸時代における理学部7号館地点の変遷

### 第1節 文献史料から見た理学部7号館地点

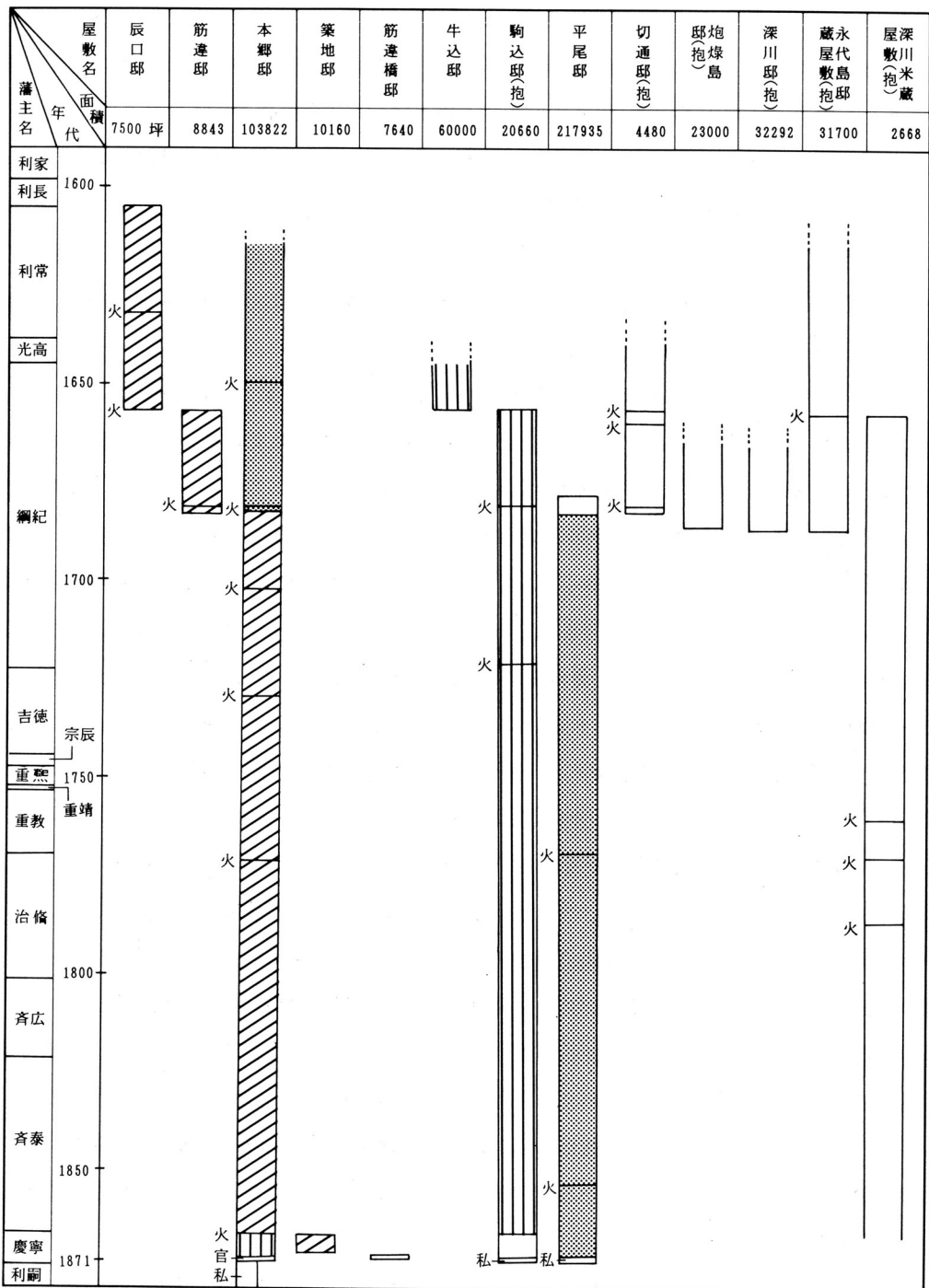
細川 義

本節では、文献史料から理学部7号館地点を考察する。考察にあたり、次の3点に留意した。(1)文献史学の最終目的は発掘地点の解明ではなく、大名屋敷全体（ここでは加賀藩本郷邸）の解明であること。(2)しかしながら、東京大学本郷構内の遺跡調査の場合は、発掘地点である藩邸の「部分」への言及も不可欠であること。本郷構内の遺跡調査の特色として、同一藩邸内の数カ所の地点において並行して調査が行われていることがあげられる。この特色を有効なものとするためには、各調査地点の性格の違いが明らかにされなければならない。このことを考慮するならば、文献の考察においても藩邸全体への言及だけでは不十分であり、より具体的に調査地点である藩邸の「部分」への言及も必要であると言わなければならない。そして、このことは、(1)の課題に藩邸の「部分」からアプローチすることにもなるだろう。(3)文献史料と考古資料の性格の違いを考慮して、本節では考古資料を援用しない。(1)(2)の点から、この節の藩邸の全体と部分、両者の有機的連関という全体的な枠組みを設定した。(3)に関しては、本章第3節において、文献史学と考古学がそれぞれ独自の方法によって得た成果をもとに、総合的な考察を行っている。

#### 1. 加賀藩江戸藩邸と本郷邸

東京大学本郷キャンパスは、その大部分が江戸時代には加賀藩本郷邸のあったところである。加賀藩は前田利家を藩祖とし、「加賀百万石」と称されるように、領国は加賀・能登・越中3国にまたがり、石高も102万5千石余に及ぶ外様の大藩である。以下、加賀藩江戸藩邸全体を概観し、その中で本郷邸を考えていく。

図226は、加賀藩の江戸藩邸の変遷をまとめたものである。この図から言えることは、加賀藩の江戸藩邸は5代綱紀の時代、つまり17世紀後半に明暦3年(1657)・天和2年(1682)の2度の大火を契機とする2回の大きな屋敷替を経て、17世紀末以降明治維新に至るまでの4屋敷の安定期に入るということである。明暦の大火に伴う屋敷替は神田橋門内の辰口邸から外堀



(『加賀藩史料』「東邸沿革図譜」より作成)

註) この他に染井邸があるとされるが、詳細は不明(駒込邸のことか)。駒込邸は便宜的に「中屋敷」として扱ったが、詳細は本文参照。火災は主なもののみ記載した。なお、明治元年(1868)以降については表64参照。

図 226 加賀藩江戸藩邸の変遷

Figure 226 Changes of Kaga Clan properties in Edo



外縁の筋違邸への移動であり、明暦大火後の幕府の都市政策によるものである。屋敷の位置を参勤交代路から考えると、加賀藩の参勤路は寛文年間（1661～73）に東海道から中山道に変更されたといわれ（『東邸沿革図譜』）、その時点で上中下屋敷が参勤路に並ぶことになった（筋違・駒込・本郷邸、1683年以降は本郷・駒込・平尾邸）。その意味で、加賀藩が参勤路変更直後の延宝7年（1679）に中山道沿いに平尾邸を獲得したことは、参勤交代の際しばしば平尾邸に「立寄」っていることから明かなように、参勤交代を念頭においてのことだったと考えられる。ちなみに、筋違邸は現在の千代田区外神田3丁目付近、駒込邸は文京区本駒込6丁目付近、平尾邸は板橋区加賀1・2丁目付近である。

次に、4屋敷時代における屋敷の所有形態について考える。大名家で家督相続があった場合、大名屋敷の相続手続きとして、江戸における所持屋敷を書き上げた書類を幕府（屋敷改）に提出しなければならなかった（『御触書寛保集成』2208号など）。ここでは、文政5年（1822）13代斉泰相続時のもの（金沢市立図書館所蔵加越能文庫「江戸毎日書立書抜」特16・45-47、以下加越能文庫の史料は史料名と請求番号のみ記す）、14代慶寧の時のもの（『加賀藩史料』藩末篇下452～3頁、以下藩末下452～3のように略記する）および安政3年（1856）の編集とされる「諸向地面取調書」などから、加賀藩の江戸藩邸の所有形態を考えると次のようになる。(1)上屋敷本郷邸・下屋敷平尾邸は拝領。本郷邸には「御住居囲込拝借地」1049坪余（文政9年〈1826〉以降）、「町屋敷」101坪の付属地がある（後述）。(2)中屋敷は、「一、抱屋敷無年貢地 駒込式万六百六拾坪」が相当する。駒込抱屋敷は「無年貢地ニて、年久敷駒込拝領屋敷之内ニ一円<sup>(ママ)</sup>致居、同所拝領屋敷上地以後も致所持候」（『江戸毎日書立書抜』、引用史料の変体仮名はすべて通常の平仮名に改めた、以下同じ）、つまり駒込邸は拝領部分と抱屋敷部分から構成されていたが、天和3年（1683）の時点で拝領部分はすべて上地となり、結果的に無年貢地抱屋敷となったのである。そして、正徳5年（1715）以降は「御帳ニ相載（中略）拝領屋敷同事之趣ニて、是以後御改ニも不及」（同前）と、拝領屋敷同様の扱いとなっている。つまり、上中下屋敷は基本的には幕府から拝領するものであり、天和3年の段階で形の上では加賀藩には中屋敷がなくなったことになる。もちろん、加賀藩内では駒込抱屋敷を中屋敷と呼び、実質的にも幕府から拝領屋敷と同じ扱いを認められているが、幕府への正式な届け出はあくまで「中屋敷」ではなく「抱屋敷無年貢地」となるのである。(3)深川米蔵屋敷は抱屋敷年貢地で、宝永4年（1707）以降は「一円之御帳ニ載、拝領屋敷同事ニ、永々込囲家作御免被成候」（同前）と、やはり拝領屋敷同様となっている。このようなことから、加賀藩では、駒込邸・深川米蔵屋敷は「一通り之抱屋敷」（『加賀藩史料』藩末下468）ではないと考えており、通常家督相続の際、抱屋敷に関して必要な「御譲受御所持之旨御認出し、所方名主等えは御持居之儀申渡、請書取立申事」（同藩末下467）といった手続きも取らずに済むものと考えていた。なお、前掲の駒込邸の届け出面

積が、年貢地3万8千坪を含めて約5万9千坪とする『加賀藩史料』編外備考の数字と一致していないことに注意したい。

次に、各屋敷の役割・機能について考える。ここでは本郷邸・平尾邸について藩邸の面積という視点から述べてみたい。表63は、諸藩の江戸藩邸について1万坪以上の上中下屋敷の数を面積別にまとめたものである。付属地を「囲込」でいる場合もあり、実質的な意味で若干数値は動くものと考えられるが、大勢は知りえるだろう。この表から加賀藩の上屋敷・下屋敷ともに諸大名の中で最大の広さを誇り、その面積も群を抜いていることがわかる（但し上屋敷の面積は支藩上屋敷分を含む。後述）。各屋敷が十分な面積を持っていたことは、多くの藩が多数の抱屋敷などを所持して上中下屋敷を補完していたことに比べて、大藩ながら屋敷数がきわめて少ないことになって表れている。本郷邸はもともと郊外の下屋敷であったために広大な面積を持ったと考えられるが、このことは本郷邸の持つ機能にも大きな影響を与えたと考えられる。つまり、本郷邸に江戸藩邸の諸機能のかなりの部分を集中することが可能であったということ

である。上屋敷である本郷邸が出府した藩主の居屋敷であり、主たる年中行事が行われ、幕府や諸藩との交渉の拠点であったことは言うまでもない。

一般に中屋敷の機能・役割の一つとして、隠居した藩主や嗣子などの住む屋敷という指摘があるが（『国史大辞典』大名屋敷の項など）、加賀藩の本郷邸の場合、11代治脩の世子（嗣子）斉敬・斉広の居宅となった「新御居宅」（1789年造営、後に「北之御居宅」と改称）、13代斉泰の世子慶寧の居宅である「東御居宅」（1840年造営）、建設中に焼失したが10代重教の隠居宅「西御殿」（1771～72年）などの事例をみれば、特に18世紀後半以降に本郷邸が、一般にいわれる中屋敷の機能の一部を吸収していたことは明らかである。それ故に多くの長屋が造営され、多数の藩士が上屋敷に居住していたと考えられ

表 63 1万坪以上の上中下屋敷数面積別一覧  
Table 63 List of *daimyo* properties of more than 33,000 m<sup>2</sup>

屋敷面積	上屋敷	中屋敷	下屋敷
10万以上	② <sup>(1)</sup> 加賀藩 ( <sup>2</sup> 水戸藩)	1 ( <sup>1</sup> 紀州藩)	③ <sup>(1)</sup> 加賀藩 ( <sup>2</sup> 彦根藩) ( <sup>3</sup> 郡上藩)
9～10万			1
8～9万			
7～8万	1 ( <sup>3</sup> 尾張藩)		1
6～7万			
5～6万		1 ( <sup>2</sup> 水戸藩)	3
4～5万	1		6
3～4万	1	1 ( <sup>3</sup> 福井藩)	6
2～3万	5	⑥	1 4
1～2万	2 8	1 5	3 4

(単位；坪) (「諸向地面取調書」から作成)  
註)中屋敷の項は、便宜的に諸藩(交代寄合を含む)の中屋敷と駒込邸を比較している。中・下屋敷が複数ある場合はその面積を合計した。網掛けした数値はそこに加賀藩の屋敷が含まれていることを示し、( )は上位3藩を示している。

るのである。また、下屋敷も広大な面積を持っていたが、建築物は南の一角にあるのみで、邸内の大部分は畑・田・茅場となっていた。下屋敷では「狩獵」や「行歩」が行われ、藩主やその家族の保養の場所であったと考えられるが、下屋敷におけるこのような生産物の自給自足的な意味にも注目する必要があるだろう。総じて従来の大木屋敷の研究は、建築史の立場から藩主の御殿を中心に行われてきたと言える。今後は家臣の長屋や非建築空間をも含めた、より広い視野での藩邸研究が必要であると考ええる。

次に、江戸藩邸の詰人数について考える。時期によってかなりの変動があると考えられるが、「江戸屋敷在住書」（特 16・26-138）や『加賀藩史料』（15-946～8，藩末上 294～5，564～5）など数例から推定すると、藩主に謁見できる平士並以上が約 100～200 人、与力・歩が約 130～250 人、足軽・小者が約 2 千人、他に陪臣（837 人「寛政十年詰人高しらへ帳」特 16・48-237，約 500 人『加賀藩史料』15-946～8）や御殿向の女中などがおり、江戸藩邸全体で 3～4 千人規模だったと考えられる。その中で注目したいのは、歩並以上の江戸定府が、多い数字で約 1 割程度にすぎないことである（「御歩並以上御在府詰人名書」特 16・26-142）。このことは、ほとんどの家臣が国元から江戸詰のために出府してくることを示しており、藩校が江戸で準備されていないことなどを考え合わせれば、加賀藩は国元中心の方針を取っていたと言えるかもしれない。

## 2. 本郷邸について

ここでは、本郷邸全体についてその概略を述べる。まず、本郷邸の周囲について。本郷邸は、北側の大部分が水戸藩中屋敷に接し、西側はやや奥まって中山道（現在の本郷通り）に面している。この西側に正門である「大御門」がある。南側は道を隔てて旗本近藤氏の居屋敷に面しており、藩邸の南端は現在の春日通りとほぼ一致する。東側南半分は道を隔てて、高田藩中屋敷（榊原氏）や麟祥院（天沢寺）と、北半分は大聖寺藩・富山藩両上屋敷に接している。大聖寺・富山藩ともに、寛永 16 年（1639）加賀藩 3 代前田利常が隠居した際、次子利次・3 子利治にそれぞれ百塚（後富山）10 万石、大聖寺 7 万石（1821 年から 10 万石）を分封して成立した加賀藩の支藩である。この大聖寺・富山の両上屋敷は「加賀守本郷上屋敷之内、同姓出雲守（富山藩主一細川註，以下同じ）居屋敷」「本郷御屋敷之内、故淡路守様・故飛騨守様（利次・利治）御時分より御借置被成候」（『加賀藩史料』10-935，4-703）とあるように、加賀藩が上屋敷の一部を親類である 2 家に貸し与えたものであった（富山藩 11088 坪，大聖寺藩 5762 坪）。つまり、この両藩は直接幕府から上屋敷の拝領を受けていないのである。「諸向地面取調書」においても両藩の項には上屋敷の記載はなく、註記に「同姓加賀守上屋敷内別門明住宅」とあるのみである。それ故、大聖寺・富山藩邸から出火した場合も、形式上は加賀藩邸内からの出火となり、加賀藩からも指扣の伺書を幕府へ提出しなればならなかったのである（宮崎 1986）。

次に、本郷邸の変遷の概略を述べる(表 64 参照)。この地が加賀藩に与えられたのは元和 2~3 年(1616~17)の頃である。当初は下屋敷として、藩主の子供や生母、小身の家来が居住していたようである。後に隠居した藩主(利常)の居住地ともなっている。その居宅の場所は湯島郷といわれ、藩邸の東の方にあつたと考えられる。前述のように寛永 16 年(1639)支藩創設とともに、本郷邸の東側を支藩上屋敷のために貸し与えている。明暦の大火(1657 年)で上屋敷辰口邸が焼失すると藩主綱紀は本郷邸に常住するようになり、本郷邸は「居屋敷」(『加賀藩史料』4-695)となった。この年 7 月牛込邸が上地となり、その替地の一部として本郷邸南続きの同心組屋敷 2 万坪を与えられている。面積から推定すると、おおよそ「大御門」辺りより南側部分であろう(『文京区史』2-298 参照)。天和 3 年(1683)3 月本郷邸は下屋敷から上屋敷となる。既に天和 2 年(1682)の焼失直後から、上屋敷への移行を前提に、従来とは異なるプランで本郷邸は再建されていた(『加賀藩史料』4-699)。なお、本郷邸内には黒多門邸と呼ばれる一角があつた。これは証人屋敷であり、その始まりは寛永 3 年(1626)頃といわれる(『東邸沿革図譜』)。位置は大聖寺藩上屋敷の東側、道(無縁坂)に面したところである。寛文 5 年(1665)証人制度が廃止された後は聞番・足軽・小者などが居住していたが、天和 3 年に大聖寺藩上屋敷に繰り入れられている(2071 坪)。万治 2 年(1659)には、本郷 6 丁目に町屋敷を購入している(101 坪)。これは、本郷通りに面した「物見(所)」になるところで、「上屋敷地続ニ付囲込」(『江戸毎日書立書抜』)まれている。以下、17 世紀末以降は代表的な絵図面 3 枚を中心に述べていく。現在知られている本郷邸の絵図面として最も古いものは、元禄元年(1688)の尊経閣文庫所蔵「武州本郷第図」である(写真 99)。図は御殿の部分が未完成と考えられる。藩邸の北側は大規模な造成があつたことを窺わせる表現となっている。この時期の特色としては、長屋以外に四角く区切られている部分があることである。これは、「人持分」「頭分」といった記載から上級家臣の独立した住居と推定される。絵図面の記載をまとめると表 65 のようになる。平士や徒(歩)の長屋間口は、次に引用した天和 2 年(1682)の罹災後、上屋敷として再建された際に定められた家臣の「小屋割」の規定に、おおむね従っていると考えられる。

十間	三間梁	庇五尺	空地四間一尺	御番頭
同				御小將横目
同				知行千石以上
九間	同断			
八間	同断			知行七百石
九間之者は、十間にも又は八間にも、至其時頭々見計次第也。若又九間之所有之長屋は是にても。				
七間				知行四百石より六百石迄

表 64 本郷邸年表

Table 64 Chronological table of the Hongo Property

年号	西暦	事項
元和2・3年	1616~17	3代利常、大久保相模守忠隣邸跡地を下屋敷として与えられる。
寛永 3年	1626	初めて周囲を木柵をもって囲む。
4年	1627	利常の子利次・利治や生母寿福院など、国元より出府して居住する。また、邸内に多くの長屋を造営して、小田原町・メッタ町に賃居していた微臣を収容する。
6年	1629	寛永3年から造営の御成御殿竣成。4月將軍徳川家光、前將軍秀忠御成。
10年	1633	前年12月上屋敷辰口邸焼失。利常、本郷邸に仮住して辰口邸再建を指揮する。
16年	1639	邸内の一部(東側)を富山藩・大聖寺藩上屋敷地として貸し与える。隠居した利常も本郷邸に居住する。
17年	1640	3月將軍家光再び御成(『徳川実記』『三壺記』は寛永15年2月につくる)。
慶安 3年	1650	3月本郷富士塚周辺から出火、本郷邸全焼。利常は大聖寺上屋敷に仮住。翌年8月再建なる。
明暦 3年	1657	正月明暦の大火で上屋敷辰口邸焼失。5代綱紀本郷邸に避難して、以後常住する。7月牛込邸の替地の一部として、藩邸南に接続する同心本多丹下・朝比奈左近・坪内惣兵衛の同心組屋敷2万坪を与えられる。
万治 2年	1659	本郷6丁目屋敷(101坪)を200両で永代買取する(本郷「物見所」のところで)。
3年	1660	正月湯島天神前から出火、邸内「御表門」およびその続き長屋焼失。
寛文 3年	1663	3月本郷5丁目門前南角屋敷(11坪余)を165両で永代買取する。
5年	1665	証人制度廃止。その後も黒多門邸(証人屋敷)は存し、間番・足軽などが居住する。
天和 2年	1682	12月白山から出火、本郷邸焼失。綱紀は駒込邸に避難。
3年	1683	3月上屋敷となる。
		8月黒多門邸を大聖寺邸中に加える。
貞享 4年	1687	殿舎(貞享2年から建設)竣成。9月綱紀移徙。
元禄 15年	1702	4月御成御殿竣成(藩邸南側東半分)、將軍綱吉御成。
16年	1703	11月小石川水戸藩邸から出火、本郷邸焼失。宝永5年再建なる。
宝永 5年	1708	8月世子吉徳に徳川綱吉の養女松姫降嫁の命が下り、10月「御守殿」造営。11月吉徳、駒込邸より本郷邸に移り、同月松姫入輿。
享保 6年	1721	2月吉徳夫人死去のため「御守殿」撤去。
		3月牛込木津屋町より出火、邸内北端の「追分御門」など焼失。
15年	1730	正月下谷七軒町から出火、邸内をほぼ全焼。再建は、財政上の問題からその規模を必要最小限にとどめる。
元文 元年	1736	7月宗辰の居館完成(邸内北東隅、後に「隅之御居宅」と称す)。
3年	1738	正月無縁坂町屋から出火、割場・作事所・火消道具置所など邸内東側を焼失。
		3月大書院・小書院・舞台など完成。
延享 2年	1745	7月世子宗辰、襲封のため駒込邸より本郷邸に移る。
宝暦 3年	1753	5月世子重晴、襲封のため本郷邸に移る。
明和 8年	1771	8月10代重教の隠居宅として「西御殿」造営開始。
安永 元年	1772	2月丸山から出火、建設中の「西御殿」や邸内北側長屋などを焼失。
天明 2年	1782	7月地震により被害を受ける。
		8月風害を受ける。
寛政 元年	1789	6月世子斉敬居館「新御居宅」の上棟式を行う。
8年	1796	11月世子斉広の居所となった「新御居宅」を「北御居宅」と改称。
享和 2年	1802	10月重教夫人寿光院のため「梅之御殿」(後11代治脩夫人法楽院居住)を新築。
3年	1803	3月指違町より出火、本郷通り沿いの「物見所」類焼。

年号	西暦	事項
享和 3年	1803	11月「梅之御殿」を「梅之御居宅」、「北之御殿」を「北之御居宅」と改称。
文化 3年	1806	9月「梅之御居宅」を「梅之御殿」の旧称に戻す。
9年	1812	11月地震により小破する。
文政 6年	1823	8月大風により被害を受ける。
8年	1825	7月溶姫のため「御住居」（安政3年2月から「御守殿」と称す）造営開始。この年既に「梅之御殿」なし。 12月邸内「北之御居宅」から出火、「北之御居宅」および富山藩上屋敷・大聖寺藩上屋敷の一部を焼失。
9年	1826	12月幕府、溶姫の「御住居」門前の町家引払を命ず。これを「御拝借地」として邸内に囲い込む。
10年	1827	閏6月節約のため「下御台所」を廃止。 11月溶姫入興。
11年	1828	3月將軍家齊御成（「御通抜」）、齊泰夫人（溶姫）を訪う。
12年	1829	大聖寺藩上屋敷新広式建設のため、邸内東側「御作事所」周辺942坪余を大聖寺藩へ「貸地」する。
天保 元年	1830	2月邸内地蔵堂に天満宮を勧請し、「鎮守」とする。
3年	1832	2月12代齊広夫人真龍院・重教側室青操院、本郷邸より駒込邸に移る。
12年	1840	正月世子慶寧の「東御居宅」竣成（6月移徙）。
弘化 2年	1845	5月本郷邸・平尾邸に「鉄砲角場」竣成。
3年	1846	正月本郷丸山から出火、「南火之見櫓」およびその周辺の長屋を焼失。
嘉永 3年	1850	3月將軍家慶御成（「御通抜」）、齊泰夫人を訪う。
4年	1851	4月邸内北側追分操場周辺に「稽古所」新設を命ず。
6年	1853	12月邸内に「新角場」を建設することを幕府から許可される。
安政 2年	1855	10月安政の大地震により邸内全体にわたり大きな被害を受ける。
3年	1856	8月大風雨により大きな被害を受ける。
5年	1858	2月「御守殿」内に稲荷社を勧請する。
文久 2年	1862	閏8月参勤交代制緩和。 9月世子慶寧、その夫人らとともに帰国する。
3年	1863	「八筋」長屋1〜3番をはじめ、多くの長屋が取り壊される。 4月齊泰夫人、国元へ帰る（元治元年（1864）11月〜明治元年3月再び在府）。
明治 元年	1868	閏4月本郷春木町より出火、本郷通り沿いを残して邸内の大部分を焼失。 10月加賀藩、新政府から本郷邸および平尾邸を従来通り与えられ、他の屋敷は後日与えるべきことを命ぜられる。 同月明治天皇、氷川神社に行幸の途次本郷邸「物見所」に休憩する（明治3年閏10月も）。
		12月木挽町築地元稲葉美濃守（淀藩）の屋敷を与えられ（築地邸）、上屋敷とする。本郷邸は中屋敷、駒込邸は抱屋敷となる。
2年	1869	5月本郷5・6丁目の門前抱込地（抱屋敷）を返納する。
3年	1870	5月築地邸を上地、筋違門（相生橋）内旧福山藩邸（筋違橋邸）を与えられる。 8月筋違橋邸上地。本郷邸を官邸、平尾邸・駒込邸を私邸とする。
4年	1871	6月本郷邸の一部（藩邸東南隅、15078坪）を私邸として、他はすべて新政府に返上。

（『加賀藩史料』『東邸沿革図譜』などより作成）

註）大聖寺藩・富山藩上屋敷に関する事項は除く。

表 65 「武州本郷第図」記載内容一覧

Table 65 List of contents of the historical map made in 1688

○独立した住居

単位：歩（歩未満は省略）

人持分一	403、424	403～424		
二	367、384、393	367～393		
三	258、317	258～317		
頭分一	208、209、209、217、224	208～224		
二	175、178、180、182	175～182		
三	157、160	157～160		
四	143、152、152、152、160、162、162	143～162		
五	132、135	132～135		
役所一	944	役所二 399	役所三 262	役所四 160
役所五	192	役所六 132	外局	記載なし

○長屋（庇あり）

間口単位：間

	間口	長屋	表長屋	計					
番頭並	12	1		1		8	7	2	9
	11	1		1		7	18	4	22
	10	6	1	7		6	29	11	40
使番並	10	3		3		5	6	2	8
	9	2		2	侍分二	6		1	1
	8	5		5	小頭並一	5	2		2
役人並	7	14		14	同二	4	11		11
	17		1	1	徒士 (新番)	5	2		2
	10・5		1	1		4	20		20
	10		1	1	儒医並一	6	1		1
	9	1	1	2	同二	5	2		2
	8	1		1	同三	4	2		2
侍分一	7	1		1	与力並	5		2	2
	17		1	1		4	20	6	26
	12	1		1	小役人並	3	24		24
	10	6	1	7	徒者並	3	5		5
	9	3	1	4		2	123		123
					合計		317	36	353

幕府への届け  
出は徒

平士並以上

↑

与力

徒（歩）

註)足輕並・小者中間並一・同二は相部屋（『加賀藩史料』4-948参照）。家格は尊経閣文庫所蔵「上屋敷殿閣図」（原題「御上屋敷御殿閣図」）の色分け参照。

六間 同三百五十石より二百石或百五十石

五間 同百五十石以下

九間えは小將横目入申心得にて内圍相計可申候。三間梁庇有。

四間 小頭。 三間 徒横目。 二間 組中。

右御徒頭赤尾助左衛門え、以多賀新左衛門被仰渡也。(『加賀藩史料』4-807~8)

既に紀州藩江戸藩邸を例に、身分が高ければ江戸藩邸内でもより広い空間に居住できるという、身分秩序と長屋間口の広狭（占有面積の大小）との相関関係が指摘されているが（西川1972）、同様のことは家臣の独立した住居も含めてこの時期の加賀藩本郷邸についても言えるだろう。さらに、写真99の絵図面から、家臣の多くは平士・与力・徒・足軽というように家格ごとに長屋に集住していたことがわかる。この点は、家格別に色分けされている尊経閣文庫所蔵「上屋敷殿閣図」（原題「御上屋敷御殿閣図」）でも確認できる。また、平士は定番馬廻・馬廻・小將・組外の諸組に分かれ、さらに小將は大小將・表小將・奥小將に分かれるが（『石川県史』）、同じく上屋敷として再建された時の史料に「此度ハ組々一所ニ相あつめ候」（「江戸諸事旧記之内抜書」特16・42-52）とあり、平士はさらにこのような組ごとに集住していたと考えられる。この絵図面の状態は、少なくとも藩邸南の部分については元禄15年（1702）の御成御殿建設まで続いた（御成御殿の位置は藩邸南側東半分、『加賀松雲公』所収「松雲公筆御成御殿略図」）。次に、本郷邸の19世紀初頭の様子を示しているのが写真100の絵図面である。藩邸内の様子は大きく変化している。上級家臣の独立した住居はなくなり、すべて長屋形態となっている。この移行は18世紀前半頃と考えられる。特に、藩邸北側に長屋が多数建設されており、育徳園もかなり様相を異にしている。育徳園の東に「梅之御殿」（1802年造営、10代重教夫人寿光院、後に11代治脩夫人法梁院居宅）、その北東隣に「新御居宅」（＝「北之御居宅」）が見え、18世紀後半に「梅之御殿」建設部分にあった既の本郷通り側に移動している。この既の移動先周辺が、明和8年（1771）「西御殿」が建設された場所である。文政10年（1827）将軍家斉の娘溶姫が、13代斉泰夫人として本郷邸に入興しているが、それに先立ち、本郷邸では「御守殿」（溶姫の「御住居」、安政3年〈1856〉から「御守殿」と称す）や「御住居表御門」（赤門）の造営に伴う大普請工事が行われた。その状況を示しているのが口絵2の絵図面である（1840年代前半）。この「御守殿」建設の時は、殿舎が北の方向に展開したため、藩主の居住空間が若干北に延びている。それに伴い「埋御門」がやや北に移動し、ここにあった既は文政8年（1825）12月火事で焼失した「北之御居宅」跡へ移動している。「梅之御殿」も文政8年にはなくなっており（「兎園小説」）、元のように馬場になっている。なお、「御守殿」造営の時に門前の町屋を取り払い、1049坪余を「拝借」して「囲込」でいる。さらに幕末期になると、文久2年（1862）閏8月の参勤交代制緩和もあり、全体的に長屋数は減少し、「（鉄砲）角場」（1845年）、「稽古所」



(1851年)、「新角場」(1853年)など幕末の政治情勢を反映した諸施設が藩邸北側に作られている。そして、本郷邸は明治元年(1868)に焼失し、その後は再建されなかった。

次に、本郷邸の全体的な特色を何点か指摘しておく。(1)藩邸は、大きく藩主とその家族が占有する空間(「御殿空間」)と家臣が居住する空間(「家臣居住空間」)とに峻別されている。前者が御殿のある藩邸の中心部分であり、これを取り囲むように後者の家臣の長屋や藩邸の機能を支える作事所・割場・会所などの諸役所が配置されている。両空間の境はノシタテ・掛塀など時代と場所によって異なるものの、両者が常に厳密に区分されていたことには変わりはなかった。藩主は、本郷通りに面した「物見(所)」に、「埋御門」の上を歩いて直接行けるようになっていた。つまり、「家臣居住空間」を横切らずに済むようになっていたのである。このことは、両空間の関係を端的に示していると言えるだろう。このような藩邸の構造は、国元の城下の再現であると考えてよいだろう。(2)一般的に江戸藩邸の周囲は表長屋(長屋塀)で囲まれていたとされるが(『国史大辞典』大名屋敷の項、西川1972)、本郷邸の場合は南門周辺から東門にかけての部分のみ平屋建の表長屋になっている。南門周辺が通称「盲長屋」といわれたところである。(3)本郷邸の構造配置は、「御殿空間」を中央におおよそ次の通りと考えられる。北側に藩主に謁見できない与力以下(歩・足軽・小者など)の長屋が集中している。逆に、藩主に謁見できる平士並以上の長屋は、北東の「八筋」と「年寄衆小ヤ」(「御老中小屋」)周辺および表長屋を含めた南側に集中している。一般に表長屋に重臣が居住し、内側の長屋には軽輩が居住したとされるが(西川1972)、本郷邸の場合にはあてはまらない。また、諸役所は藩邸の東側に集中している。(4)本郷邸は慶安3年(1650)、天和2年(1682)、元禄16年(1703)、享保15年(1730)、明治元年(1868)の5回、火災によって藩邸全体が焼失しており、明治元年以外は、再建のために大きな普請工事が行われている。また、安永元年(1772)の火災でも、藩邸の西から北にかけて多くの長屋が焼失している。その他、主に將軍の御成や藩主夫人入興時(特に「御守殿」の必要な場合)に、大普請工事が行われている。つまり、これらの時が藩邸全体のプラン変更の契機となりうると考えられるのである。以上の諸点を踏まえて、次に本郷邸の部分＝調査地点の考察に入る。

### 3. 調査地点について

ここでは、理学部7号館地点が本郷邸のどの部分にあたるかを検討する。方法は、最も単純な絵図面と現在の地図との重ね合わせを行った。絵図面は、現在知られている絵図面のなかで最も精緻に書かれたもののひとつと考えられている口絵2のものを使用した。この絵図面は、1マス1寸(約3センチ)の朱の方眼の上に作図されており、10間(約18メートル)を1寸とした600分の1の縮尺となっている。また、単位の記載も細かく、正確さを期して書かれたこ

とを窺わせるものである。重ね合わせのポイントとしては、赤門、育徳園内の心字池（三四郎池）、「御殿空間」の北端・東端の境（御殿下グラウンドの北端・東端）などが考えられる。但し、現在の赤門は、当時より西に50尺（約15メートル）移動していることに注意（『東京大学医学部百年史』）。重ね合わせの結果は写真101-2のようになる。さらに、同様な作業を他の絵図面でも行ったが（例えば比較的精度が高いと考えられる表66-1・15・18・22・24など）、ほぼ同様な結果を得た。絵図面の精度の限界の問題、重ね合わせの際の誤差などを考慮すれば、最終的な結論は考古学の調査結果とのつき合わせが必要であると考えが、調査地点は18世紀以降「八筋」と呼ばれた長屋群の一角、その3・4番（町）の辺りに相当することはほぼ間違いないと言える。

#### (1) 調査地点の変遷

ここでは、先に導かれた結果をもとに、「八筋」と呼ばれる長屋群の変遷を考える。主な絵図面から「八筋」周辺の状況を示したのが写真102-1~3である。また、現在知られているすべての絵図面について、「八筋」周辺の状況と絵図面への書き込みをまとめたものが表66である。なお、掲載した絵図面を年代順に並べると、写真99→写真102-1→写真100→写真102-2→写真102-4→口絵2（写真101）→写真102-3となる。「八筋」の呼称は長屋8棟ということに由来すると考えられるが（「八筋御長屋切通之方より四筋目之丁」〈『加賀藩史料』7-440〉という表現からわかるように「八筋」の長屋は西側から数えていた）、長屋数が減少しても常に「八筋」と呼ばれていたことは、「家臣居住空間」の中でも「八筋」は何らかの意味で空間的なまとまりを持っていたということであろう。それが、ここで「八筋」を一括して扱う理由でもある。各長屋ともほぼ南北方向に伸び、長さは49間（約89メートル）、このことは元禄から幕末まで変化していない。奥行きは、口絵2の絵図面では3間2尺（約6メートル）となっている。絵図面の中には7筋しか描かれていないものもあるが（写真102-1）、18世紀後半まで8棟が原則だったと考えられる。そして、寛政元年（1789）「新御居宅」建設のため「八筋」の東側3棟、つまり6番から8番が取り壊されて5棟に減少している（写真100など）。その後文政8年（1825）に焼失した「北之御居宅」跡に既が建設されると、既の東側に8番が長さ50間で復活している。これで一応6棟になったことになる。幕末の文久3年（1863）3月に1番から3番までが取り壊され、やがて8番もなくなっている（写真102-3）。文久3年の取り壊しは、時期的に前年閏8月の参勤交代制緩和との関連が想定される。以上、元禄元年（1688）以降の「八筋」長屋群の変遷をまとめれば、8棟→5棟→6棟→3棟→2棟となる。しかし、調査地点に相当する部分については、幕末に3番が取り壊されるのみで、それ以外に絵図面上から考える限り大きな変化はなかったと考えられる。なお、調査地点に該当する3・4番の長屋ともに、19世紀初

表 66 各絵図面「八筋」部分記載内容一覧

Table 66 List of historical maps showing the excavation area

絵図面表題および所蔵番号	年代 ( )内は推定	記載内容 ○ 番(筋・町) [西から] ( ) 長屋間口割間数 [南から]	備考
1 「武州本郷第図」 (尊)番号なし 〔写真99〕	元禄元年 (1688) 12月	8棟 ①「侍分一」(5, 6, 6, 7, 7, 8)「番頭並」(10) ②「侍分一」(6, 7, 7, 8, 9, 12) ③「侍分一」(5, 6, 6, 6, 7, 9, 10) ④「侍分一」(6, 6, 7, 8, 10)「番頭並」(12) ⑤「番頭並」(10)「使番並」(8, 8, 7, 7)「役人並」(9) ⑥「使番並」(7)×7 ⑦「使番並」(8, 7, 7, 7, 10, 10) ⑧「使番並」(8, 7, 7, 8, 9)「番頭並」(10) いずれも計49間	長屋間の距離4間(④⑤の間は7間) 「空地」・庇の記載あり 井戸は3つ(他の絵図面は2つ) 「上屋敷殿閣図」(原題「御上屋敷御殿閣図」)<(尊)8071旧図)は、「八筋」部分は同一で「侍分」の着色がなされている。
2 「前田家本郷御屋鋪図」 三井文庫所蔵 C827-18 〔写真102-1〕	(1761~1771)	7棟 ①欠 ②~⑧「四十九間」	「空地」の記載あり 「割場支配水溜桶」4つ 各棟に「割場支配階子」
3 「江戸御上屋敷図」 (尊)8093	安永6年 (1777) 5月写 (1772~1777)	8棟 ②~⑧「四十九間」 ②「御近習衆御貸小屋」 ④「此老筋御小屋諸頭衆人持衆十七人衆其外諸奉行衆へ相渡ル」	「空地」の記載あり
4 「江戸上屋敷御貸長屋図」 (金)加越能文庫 特16.18-137	(1772~1782)	8棟 「八筋御長ヤ侍小ヤ也」 ①「此一筋近年大工入」	「空地」の記載あり
5 「江戸本郷屋敷之図」(原題「東武御上屋鋪絵図」) (金)090-494-2	(1772~1789)	8棟 ①「此通り八筋之御小屋年寄衆等ノ御小ヤもあり」	「八筋」に「馬持御小屋之印」なし、但しこの絵図面は北半分簡略。
6 「上屋敷総絵図」(原題「御上屋敷総絵図」) (尊)8079旧外	寛政10年 (1798) 秋写 (1772~1777年の状況を 示す絵図面に1789年以降 の状況を朱で加筆)	8棟 ①~⑧「四十九間」 ⑤~⑧を囲み、「御居所」とある(朱書)	「空地」の記載あり 「割場支配水溜桶」3つ 元の図は3・4より古い
7 「加藩江戸本郷屋敷総絵図」 (石)大鋸コレクション	(1792~1796)	5棟 ①~⑤「四十九間」「八筋老~同五」	「空地」内建築物の記載あり ⑤南の一角「空地」囲い実線(他は点線) 8より年代的に下る。
8 「前田家江戸本郷御上屋敷絵図」 (金)氏家文庫 特13.0-75-2-2	(1792~1796)	5棟	「空地」の記載あり 「八筋」長屋の南を東西方向に下水あり (石)大鋸コレクション「加藩本郷屋敷絵図」は同じもの
9 「東都御館諸士等小屋割図」 (金)後藤文庫 特19.9-169	(1796~1802)	5棟 「此ツキハ八筋ト云」 ①~④「土小ヤ」 ⑤「御家老衆御小ヤ等」	「八筋」の北に「此処常ニ馬場也」
10 「東都本郷御館御郭内小屋割図」 (尊)8086	寛政13年 (1801) 2月写 (1800年閏4~6月)	図228を見よ	
11 「前田家本郷屋敷略図」 (金)河野文庫 095.0-85	(1803~1806)	5棟 「都て八筋ト云其内御取払北ノ御居所ニ相成」 ①「四十五間」 ②~⑤「四十九間」 ⑤「此辺年寄衆并侍御貸小屋」	「空地」の記載あり 「梅之御殿」建設直後か 12~15より年代的に遡る
12 「江戸上屋敷小屋絵図」 (金)加越能文庫 特16.18-136	寛政享和頃 (1789~1803) (1792~1796年の状況を 示す絵図面に1802~1825 年加筆)	5棟 「此五棟八筋」 ①~⑤「四十九間」 ①(8, 5, 5, 6, 6, 6, 5, 8)「老番め」 (???) ②(3, 8, 4, 6, 6, 6, 6, 7) 貼紙により修正 ③5つに間口割 ④4つに間口割、南側「人持小ヤ」 「空地」内建築物に貼紙修正あり ⑤3つに間口割、南側「人持小ヤ」	「空地」内建築物の記載、「ハシゴ」4つ、「水溜」の記載あり ⑤井戸3つ、南の一角「空地」囲い実線(他は点線) ③~⑤の間口割も後出の絵図面に類似 (石)大鋸コレクション「加藩江戸本郷屋敷総絵図」は、これを1807~1825年に写したものの。

絵図面表題および所蔵番号	年代 ( )内は推定	記載内容 ○ 番(筋・町)〔西から〕 ( )長屋間口割間数〔南から〕	備考
13 「江戸本郷御上屋敷絵図」 (金)氏家文庫 特13.0-75-2-1 〔写真100〕	(1802～1825)	5棟 ①～⑤「八筋一筋目～同五」「四拾九間」	「空地」内建築物の記載あり ⑤南の一為「空地」囲い実線(他は点線) 「江戸本郷上屋敷之図」(金)加越能文庫 特16.18-134は同じもの。
14 「本郷御屋敷惣絵図」 (金)090-853	文政4年(1821)9月? (1802～1825)	5棟 ①～⑤「八筋一筋目～同五」「四拾九間」	「空地」内建築物の記載あり 12～14はほぼ同時期のもの
15 「御上屋敷御御井惣御小屋割図」 (金)加越能文庫 特16.18-135 〔写真102-2〕	(1802～1825)	5棟 (マ) ①(8.5.4.6.6.6.6.5.8) ②(6.8.4.6.6.6.6.7) ③(15.10.8.8.8)「空地」内に「長屋」 ④(18.10.9.12)「空地」内に「長屋」 ⑤(25.13.11)「空地」内に「長屋」 ①～⑤「四拾九間」、長屋奥行き①「三間三尺」、②～⑤「三間式尺」	「空地」内建築物の記載あり ⑤南の一角「空地」囲い実線(他は点線) 13・14より年代的に下る
16 「本郷邸図」 (尊)8087 〔写真102-4〕	(1827～1829)	5棟 ①8つに間口割、「土小ヤ」 ②5つに間口割、「土小ヤ」、北側「御近習衆」 ③4つに間口割、南から「人持小ヤ」「土小ヤ」 ④4つに間口割、南から「人持小ヤ」「土小ヤ」 ⑤3つに間口割、南側「人持小ヤ」	立体的に描かれた絵図面 「空地」内建築物の記載あり ⑤南の一角「空地」囲いのみノシタテ、他は垣 「八筋」長屋の北と南に東西方向に下水あり
17 「江戸御上屋敷惣御絵図」 (金)清水文庫 特18.6-27-2 〔口絵2、写真101〕	(1840～1845)	5棟 ①～⑤「八筋壹番町～五番町」 ①(8.5.5.6.6.6.5.8) ②(6.8.4.6.6.6.6.7) ③(15.10.8.8.8) ④(18.10.9.12) ⑤(25.13.11)「空地」内に「長ヤ拾五間」 ⑧(5)×10(既の東側) 「空地」の奥行き「四間五尺」、長屋の奥行き「三間二尺」、長屋間距離「三間五尺」(④⑤の間を除く)	「空地」内建築物の記載あり ④⑤南の一角「空地」囲い実線(他は点線)
18 「前田家本郷屋敷之図」 (金)河野文庫 095.0-86	(1845～1851)	5棟 ①～⑤「八筋壹番町～五番町」、間口割間数は17と同じ ⑤「空地」内に長屋「拾五間」 ⑧(5)×10「八筋八番町」(既の東側)	「空地」内建築物配置も17とほぼ一致 ⑤南の一角「空地」囲い実線(他は点線)
19 「加藩江戸本郷屋敷総絵図」 (石)大鑑コレクション	(1845～1851)	5棟 ①～⑤「八筋一番丁～同五番丁」 ⑧「八筋八番丁」	「空地」内建築物の記載あり ⑤南の一角「空地」囲い太線(他は細線)
20 「元治二年二月現在東都御屋敷略図」 (金)氏家文庫 特13.0-75-3	1865	3棟(④⑤、⑧) ⑤「人持小ヤ」 ⑧「侍小ヤ」	①～③なし 「八筋」の北に「八筋馬場」
21 「本郷邸之図」 (尊)番号なし	(1863～1866)	2棟 ④(18.10.9.12)「八筋四番町」 ⑤(25.13.11)「八筋ノ五番町」 「空地」内に「長屋拾五間」	⑧なし ④⑤それぞれ既のマークあり 「空地」内建築物の記載あり ⑤南の一角「空地」囲い実線(他は点線) 1863年3月に取り壊された長屋が記載されているが、同年4月に取り壊された長屋が記載されていないなど記載内容に時間幅のある絵図面。

	絵図面表題および所蔵番号	年代 ( )内は推定	○ 番(筋・町)〔西から〕 記載内容 ( )長屋間口割間数〔南から〕	備 考
22	上中下屋敷絵図(原題「御上屋敷惣絵図」) (尊)8110旧函 〔写真102-3〕	(1865~1868)	2棟 ④4つに間口割、「八筋四番町御貸小屋」 ⑤3つに間口割、「八筋五番町御貸小屋」	間口割や長屋の「空地」内の建築物配置は24と類似 ③なし ⑤南の一角「空地」囲い実線(他は点線)
23	「江戸本郷邸図」 (尊)番号なし	(1865~1868)	2棟 ④⑤記載内容は22と全く同じ(但し註記なし)	22の原因か ④に接続して①~③のあった範囲が点線で囲われている。その中に二重線で囲った部分あり。
24	「江戸屋敷絵図」の内「八筋御貸小屋并御徒町辺共」 (金)加越能文庫 特16.18-131-15	(1865~1868)	2棟 「八筋御貸小屋壹筋目~同五筋目」 ①②「此八筋壹番~貳番御貸小屋文久三亥年三月御取毀相成申候」 ③「此八筋三番御貸小屋文久三亥年御取毀相成申候」 ①~③貼紙で消されている ④⑤「八筋四番~五番御貸小屋」 ④⑤「空地」内に「厩」「番所」 ③貼紙で消されている	間口割や長屋の「空地」内の建築物配置は17と類似 ⑤南の一角の「空地」囲い実線(他は点線) 元の図は文政年間(1818~1829)まで遡るものであり、幕末まで貼紙などで修正され続けた絵図面。④⑤の部分は加筆されており、「八筋」部分は幕末の状況を示していると考えられる。

(尊) 前田育徳会尊経閣文庫所蔵 (金) 金沢市立図書館所蔵 (石) 石川県立歴史博物館所蔵  
註) 年代推定の根拠は、大聖寺藩主・富山藩主の官名や年表(表64)に掲げた藩邸内建築物の記載有無などによる。

頭以降長屋の間口割にも大きな変化はみられないようである。

長屋の建て直しということについて考えてみると、加賀藩は18世紀に入ると慢性的な赤字財政となり、本郷邸においても常に倹約が強調されていた。長屋に関しても、「宝暦五年(1755)に御小屋御修覆交代之節計有之、外之時ハ無之」(「盲杖録」特16・22-152)と修理も厳しく制限されるようになっており、平素長屋が建て直されることは考えにくい。つまり、建て直しは火災による焼失や天災による倒壊の時に限られていたと考えてよいだろう。そこで「八筋」一帯が焼失した藩邸の火事を考えると、長屋の有無は別として、慶安3年(1650)・天和2年(1682)・元禄16年(1703)・享保15年(1730)・明治元年(1868)が考えられる。また、安永元年(1772)の火事も、被害の書き上げには「八筋」の長屋に相当するものがみあたらないが、国元への報告には「八筋へ焼出」(『加賀藩史料』8-799)とあり、焼失の可能性が否定できない。享保15年の火事については、「八筋」周辺は「御居宅続八筋御長屋之内二筋」(同6-701)のみ残して焼失し、その後「北八筋御長屋」の再建工事は「請負入札」によって和泉屋五郎兵衛という人が行うことに決定している(同6-705~6)。このようにみると、確実に「八筋」に長屋の存在が確認できる元禄元年(1688)以降少なくとも3回、もしくは4回の焼失が考えられる。明治元年を除いてその都度再建されているわけであるが、どのように再建されたか詳細は明らかではない。しかし、(1)元禄元年の絵図面(写真99)では、「八筋」を二つに分ける4番と5番の間の距離を7間としており、その後の絵図面で少し詳しいものはすべてこの間隔が他より広く描かれている(写真100~102)、(2)他の長屋間の距離も元禄元年の絵図面では4間、口絵2の絵図面では3間5尺と記されており大きく変化していない、(3)井戸と長屋の位置関係も大

大きく変化していないといった点に注目すると、絵図面を見る限りにおいては焼失後もおおむね元の位置に再建されていたと考えられる。つまり、長屋は南北の方向のみならず、東西方向にも大きくは動いていないと考えられるのである。ところで、19世紀初頭以降のいくつかの絵図面を子細にみると、「八筋」長屋とその南の「御殿空間」北端の境との距離が西へ行くにしたがって狭く表現されている（写真101-2、102-2など）。これは、元禄元年の絵図面などでは認められない点である。この点については詳細は不明であるが、この表現上の相違を重視すれば、長屋の主軸（南北方向）が全体的に若干動いていることも考えられる。しかし、主軸の動きが多少あったとしても、絵図面で見るとは、長屋はおおむね元の位置に再建されていたという推定に、大きな影響はないと考えられる。

なお、安政2年（1855）10月江戸で「安政の大地震」があり、本郷邸も大きな被害を受けている。この時の「八筋」の被害状況は不詳であるが、翌3年8月の大風雨による被害状況は、「八筋五番大小屋中屋潰」「八筋三番より三囲目御貸小屋既吹潰し」（『加賀藩史料』藩末上817~8）と報告されている。後者は、調査地点内の既と考えられる。

ここで、簡単に明治以降の理学部7号館地点の変遷について触れておく。明治元年（1868）の火災で「八筋」の長屋も焼失している（同藩末下826）。その後本郷邸は再建されず、「当年類焼後跡仕抹等不仕、（物見所は）御高覧之通大破至極、其上詰人と申ても少々相詰居申次第」という状況であった（同藩末下938）。明治4年（1871）6月本郷邸の大部分（「八筋」跡も含む）が明治政府に返上された。その後も藩邸跡地は荒廃の進む一方で「荒漠タル原野」だったといわれ、理学部7号館地点も同様であったと考えられる。その後東京大学の敷地となり、理学部が調査地点周辺に移転を開始するのが明治18年（1885）である。最初の化学実験室（後の理科大学本館）が、現在の理学部1号館付近に完成するのが明治21年（1888）である。明治35年（1902）に木造平屋建の人類地理学教室が竣工し、その跡に化学教室（化学旧館）が建てられた。化学教室は、大正2~4年（1913~15）、11~12年（1922~23）の2回にわたって工事が行われており、調査地点北半分に建築物が建てられたのは後者の時である。つまり、明治元年の「八筋」長屋の焼失後大正11年まで、調査地点に記録に残るような建築物は建てられなかったと考えられるのである（『東京帝国大学五十年史』『東京大学百年史』）。

## (2) 調査地点の上部構造

ここでは、「八筋」の長屋はどのようなものであったか上部構造を検討する。尊経閣文庫所蔵「本郷邸図」は、藩邸の様子が立体的に描かれた絵図面である（写真102-4）。溶姫入興直後の藩邸の様子を描いた絵図面であるが（1827~29）、「八筋」長屋については18世紀後半以降の姿を表現していると考えられる。平面図となる写真101-2や図227などを参照して考えると、平

屋建の長屋前にその長屋の住人が占有できる「空地」と呼ばれる空間があり（写真 101-2 の絵図面では 4 間 5 尺〈約 9 メートル〉）、ここにはセツチン（廁）や厩（家来の長屋を兼ねる場合もある）、場所によっては「空地」の入口に門を構えて番所が置かれている場合もある。また、地下には「穴蔵」が掘られていたようである（後述）。写真 102-4 では、一番東の 5 番長屋の南の一角の「空地」の囲いだけがノシタテ（板塀）であり、他は垣根となっている。多くの絵図面で、「空地」の囲いが 5 番の南の一角だけが実線で描かれ（写真 101-2 は 4 番も）、他が点線であったのはこの囲いの違いを表現していたことがわかる。つまり、この一角だけ特殊な意味を持っていたということであり、それは他よりも一段と身分の高い家臣が利用した空間であったことを推測させる。その意味で、この一角に「人持小ヤ」という記載があるのは至極納得のいくことである（人持については後述）。長屋の前の路地には共同使用の井戸があり、その数は元禄元年の絵図面（写真 99）で 3 つ、それ以降の絵図面では 2 つ描かれている。長屋の周囲には下水施設があり、防火関係の水溜（桶）・梯子などが常置されていたことを示す絵図面もある（写真 102-1）。長屋の屋根は、それ以前は不明であるが、瓦葺解禁（1720 年、『日本財政経済史料』4-756）後の享保 15 年（1730）の再建時には、「（国元から）門・長屋は瓦に申付越候」（『加賀藩史料』6-710）とあり、瓦葺で行われた可能性が強い。ところが、写真 102-4 の絵図面では長屋の屋根はノシタテと同じ黄色で着色されており、瓦葺とは考えにくい表現になっている。それ故、「八筋」を含めて長屋の屋根が 18 世紀前半以降常に瓦葺であったのかどうか、または屋根全体が瓦葺であったのかどうかはさらに検討する必要があるだろう。

次に、小松市立博物館所蔵「八筋五番御貸小屋図」から長屋の平面構成を考える（図 227）。この絵図面に関しては長さが 45 間しかないという疑問もあるが（「八筋」の長屋は 49 間）、絵図面の表題や「空地」内の建築物配置がいくつかの絵図面（写真 102-3 など）と酷似していることから本郷邸の「八筋」のものと考えて間違いはないだろう。調査地点（3・4 番）東隣の長屋の平面図ではあるが、同じ「八筋」のものであり、調査地点の長屋を考える上で十分参考になるだろう。この絵図面は長屋の図に朱で荷物の置き場所や造作などを書き込んだものであり、長屋の「空地」内の「垣」が取り払われ（「御先拔次郎左衛門罷越候上、執筆信蔵え相談之上、此垣取払中央部分書き込み）、長い一棟の長屋を一人の家臣で使用した様子が窺える。絵図面から長屋内に家来も同居していたことがわかるが、大きくいって「御門」より右側（南側）は「御客間」「御居間」などがあり、「公」的な要素も持った長屋の主人の居住空間、逆に左側（北側）は家来や奉公人の居住空間と言えるだろう（西川 1956 参照）。両者の区別が存在したことは、「御門」を入れて「空地」内の左右に仕切りがあることから明らかである。「空地」内の「垣」を取り払った状態の長屋全体の平面構成は、「八筋」東南隣の「年寄衆小ヤ」と類似する点が多い（「江戸本郷邸年寄中之小屋図」特 16・18-172、「江戸八筋七手二ノ御小屋図」特 16・

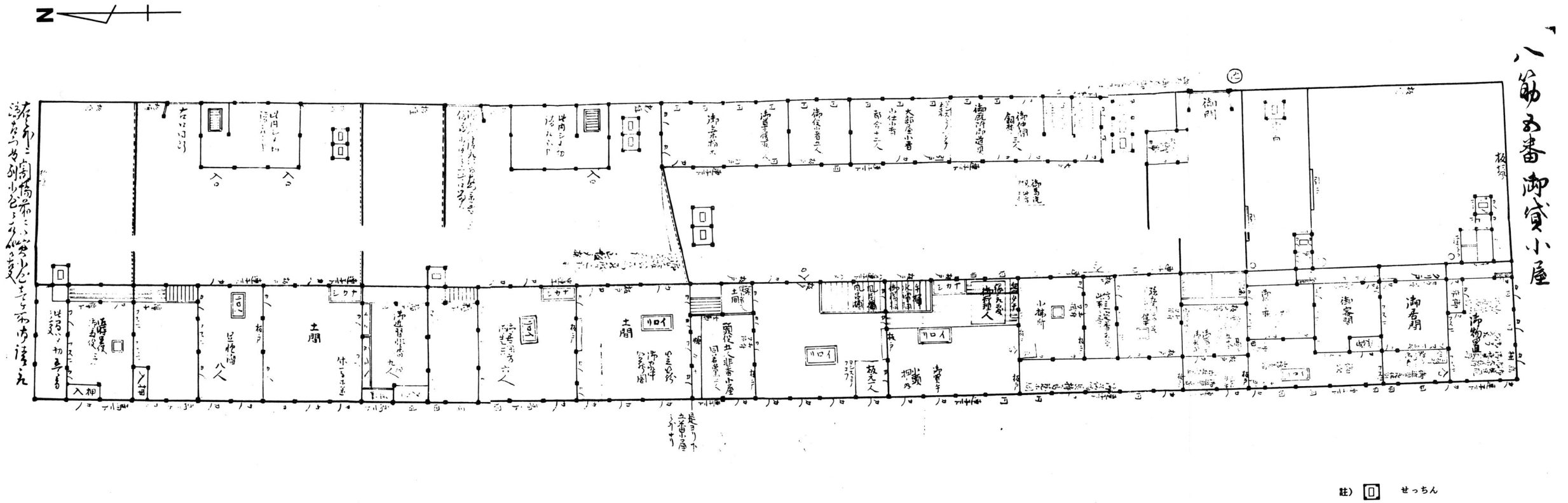


図 227 「八筋五番御貸小屋図」 小松市立博物館所蔵  
 Figure 227 Historical map of *nagaya* near the excavation area



18-173, 「江戸八筋七手御小屋図」特 16・18-174, 後者2つの図に「八筋」とあるが、いずれも「年寄衆小ヤ」のものである。調査地点に該当する部分は8~10間間口の長屋である。藩邸内の他の場所の同じ間口間数の長屋平面図をみると(石川県立歴史博物館所蔵大鋸コレクション「加賀藩江戸屋敷絵図」), 基本的に2空間に分かれていることは同様である。図227の絵図面においても, 「是ヨリ下五番小屋之外ナリ」と書き込まれている部分から左(北)に10間が「空地」の「垣」を取り払う前の一囲いの長屋であったと考えられるが, 切となった門(「御小屋請取, 次郎左衛門参着之上, 信蔵ニも談之上, 此口留ん」と書き込まれた部分)より左(北)側が主人の居住空間, 右(南)側が「土間」を中心とする家来の居住空間であったと考えられる。「空地」には両者を区別する仕切りがあり, せっちんも別々になっているようである。写真101-2の「空地」内の仕切り(点線)などに注目すれば, 調査地点内の長屋もほぼ同様な構造であったと考えてよいだろう。さて, 図227の絵図面は馬が2匹, 家来や奉公人が60人近くを数え, 長屋の主人が重臣であったことを窺わせる。と同時に, 前述のごとく長屋内に陪臣や奉公人も同居していたことがわかる。つまり, 長屋の利用者の家格が高くても, その長屋の住人の大多数は国元から連れて来られた家来や武家奉公人であったということである。このような上級家臣の長屋の畳には耐久性にすぐれた琉球表が使用されたが(「江戸毎日帳早繰」特 16・45-51), 「御貸小屋は都て天井無之, 詰人自分に簀或は紙にて天井拵候」(『加賀藩史料』10-435)と, 天井は各自で作ることになっていたようである。

ここで「穴蔵」について検討する。本郷邸の殿舎を描いた何枚かの絵図面には, 建築物の庭先に「穴蔵」という記載がみられる(尊経閣文庫所蔵「江戸御殿惣絵図」, 「北御居宅惣絵図」特 16・18-167, 「光現大夫人御守殿御間絵図」特 16・18-144など)。この「穴蔵」については, 寛政4年(1792)7月の大火で火の手が本郷邸付近に及んだ時の史料に, 「夜半頃は御殿等も甚危候に付, 御殿向等に有之御道具共等, 夫々御土蔵并穴蔵え入, 不残片付, 御貸屋にても人々家来共え申付, 道具共片付之」(『加賀藩史料』10-356)とあることから, 土蔵同様に火災時には道具などの収蔵庫という役割を果たしていたことがわかる。その構造は詳らかではないが, 絵図面では「穴蔵」も殿舎と同色で着色されていることから, 上屋があったと推察される。一方, 本郷邸の絵図面で, 長屋周辺に長屋の住人が使用したと考えられる土蔵や「穴蔵」を描いているものはひとつもない。しかし, 天和2年(1682)の大火による本郷邸(当時下屋敷)焼失のことを記した江戸詰藩士の記録には, 「又少時有て, 行てミよとてやりぬ, 道具ともとりおさむへき穴蔵などもなけれハ, 隣の小屋ニ有ける穴ニ, 櫃など二ツ三ツ入置ける, 上ニかけ置ける土うすくて, 上ニ有紙包などニ火うつりけるを, 一人の小者かいかいしく打払とて, いまたあたりハ残火しきりなれば, 身もやききたるものも半やきて, 土うちかけて火ハけしぬとて帰る」とある(「江戸火事覚書」特 16・67-15)。ここにあげた2つの史料を考え合わせれば, 長

屋（「小屋」）にも「穴蔵」が存在し、火事の際には土蔵の役割を果たしていたことがわかる。つまり、長屋の場合でも「穴蔵」の重要な機能のひとつは、火災時の取蔵庫ということであったと言える。さらに、「隣の小屋」の「穴」が「穴蔵」のことをさすとすれば、その「穴蔵」は、上から土をかけていることから長屋の前の「空地」（庭）にあり、上屋がなかった可能性も十分考えられる。

次に、長屋の性格について考察する。先の表 66 をみると、18 世紀後半から絵図面などに「御貸小屋」または「御貸長屋」という語がみられ、「八筋」の長屋群に関しては 18 世紀後半から幕末に至るまでの多くの期間が、「御貸小屋」という形で利用されていたことがわかる。ここで、「御貸小屋」とは何かを考えるために 2 つの史料をあげる。

①（前略）拙者儀（村井又兵衛）、当（9 月）十八日発足、其表え致出府候ニ付、御貸小屋請取候様申付、先達て家来服部紋左衛門と申者ニ、足軽小者指添、今十六日為致発足指遣申候（後略）（「江戸状留」特 16・45-48）

②御屋敷内御貸小屋、先年（安政 2 年〈1855〉）之地震等ニて大破ニ相成、居住難成ヶ処、追々建修理被仰付候へ共、未全くも出来不申候処、今度貴君様御着興ニ付、御供之諸大夫等え、南御門続御長屋御貸渡ニ相成申候処、御両殿様（齊泰・慶寧）御重り之節、甚御貸小屋指支、割渡方出来不申候間、如何相心得可申哉、猶更僉儀有之候様、柁源五左衛門等申聞候間、去春之通御用方申送、不指支人々は道中交代ニ相成可然哉（中略）其上ニも御小屋指支可申由ニ候間、同役類役等之内同居、又ハ御中屋敷ニ当分居住為致候様申渡可然哉と、僉儀仕候ニ付奉伺候、猶更被仰出次第奉心得候以上（後略）

（「江戸毎日書立書抜」特 16・45-47）

史料①は、文化 2 年（1805）9 月「相公様（治脩）御内用之趣有之候付」（「江戸急発足大概」特 16・41-141）年寄村井又兵衛が江戸に出府した際、出発に先立ち江戸在住の年寄奥村左京らに宛てた手紙の一節である。この史料は臨時の出府の場合であるが、ここで先発した家来服部紋左衛門が「御貸小屋」を「請取」り、まさに図 227 でみられたような主人到着前の準備を行ったのであろう。史料②は、「安政の大地震」後いまだ長屋の修理が十分でなかった安政 5 年（1858）正月、世子慶寧と婚約した久我建通の娘貴君が本郷邸に到着した。貴君の供に藩邸南側の表長屋などを貸したところ、まもなく世子慶寧が出府してくるので在府中の藩主齊泰と重なり、「御貸小屋」の不足が予想された。そのため、その対策について齊泰に伺いをたてた時の記録であり、「伺之通被仰出」ている。この 2 つの史料から、「御貸小屋」とは国元から江戸に出府した家臣に「割渡」した長屋であることがわかる。つまり、「御貸小屋」とは江戸藩邸に勤務する江戸詰の家臣に貸し与えるために、藩が用意した藩邸内の居住施設と言えるだろう。加賀藩には江戸定府が少なかったことを考えれば、藩邸内の長屋の大部分が「御貸小屋」として利用され

たのであり、それは絵図面の記載などから確認できる。このような「御貸小屋」の性格は、次の「御貸小屋」に関するいくつかの史料からも窺える。

①一、御小屋修覆ノ事

覚

一、湯殿 一、屋ね所々 一、簾垣 一、壁所々

ノ右私御貸長屋損候条、見分之上早速御修覆御申渡可被成候以上

何ノ何月何日 誰判

御作事所 頭奥印

私御貸長屋前井土水渴候条、早速水替御申渡可被成候以上

何ノ何月何日 誰判

御作事所 頭奥印

右之切手頭奥印取、御作事之為持指遣候事（「覚帳六種」特16・40-12）

②一、御屋敷之内小屋々々在之者共罷掃刻は、畳表替、すのこ縁など仕直し、修理を加へ可罷出候。但、上葺・囲・柱等取替申様成普請は、作事より被仰付可被下事。

一、百五十石より下々は、表縁会所より請取、表がへ其外致修理可罷出事。

（『加賀藩史料』3-788、「従先年於江戸御定書品々」特16・23-65にて校訂）

③一、御絵図を以御渡被成候御貸小屋、且亦当分被指置候御絵図之外之御小屋ニ住居被致人々、御小屋損不申様ニ家来等ニ至迄、常々急度御申付可有之候、住居等替候儀は勿論、或ハ棚等釣柱ニ釘打、屋根え人あけ候事不罷成候

一、御小屋破損有之刻ハ、拙子共え可有御案内候、御作事え相達可申候事

（「従先年於江戸御定書品々」，「江戸表御定書并申談之覚之留」特16・23-67にて校訂）

④（安永9年〈1780〉）七月十一日、御邸内御貸小屋、自分に窓明候所も有之躰相聞候条、早速塞候様西尾隼人殿御申聞之旨、御横目中より廻状出。（『加賀藩史料』9-347）

⑤一、深雪ニ成、御貸小屋雪おろし之儀申来候ヶ所ハ、前々之通自家来を以おろさせ候様申談候間、御達申上置候旨、御作事奉行申聞候事（「江戸毎日書立書抜」特16・45-46）

史料①は、「御貸小屋」の修理を作事方に要請する場合の文書のマニュアルである。史料②③は江戸の定書から「御貸小屋」に関するものを抜粋したもの。史料②は万治2年（1659）、史料③は元禄2年（1689）に出されたものである。史料④と同じ触は、天明2年（1782）7月・寛政5年（1793）6月17日にも出されている（「江戸毎日帳早繰」特16・45-51、『加賀藩史料』10-425～6）。史料⑤は、文化6年（1809）12月「御貸小屋」の雪下ろしを利用者に命じたという史料である。これらの史料から、(1)長屋の修理は、建物の基礎にかかわる壁・屋根・垣根・柱や長屋前の井戸などについては藩（作事方）が行い、畳・簀子など利用者により直接消耗さ

れるものは借用した家臣の負担で行われたこと、(2)家臣による長屋の勝手な改築は厳禁であったこと（この2点は紀州藩の江戸藩邸においても同様であった、西川1972）、(3)家臣に貸し渡した後も長屋の維持・管理について作事方から指示が出されていたことなどがわかる。このことは、「御貸小屋」の最終的な所有権が藩側にあり、家臣に一時的に使用させているという、まさに「御貸」という性格を物語っていると言えるだろう。

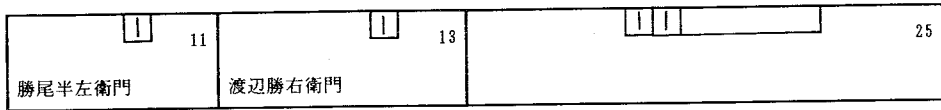
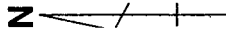
なお、長屋を家臣に貸し与える手続きは「(享保6年<1721>3月駒込邸が焼失したため)御中屋敷に在住人、不残御上邸向寄々々え同居す。御長屋早速渡候趣に被仰出、今夜より取懸り、夫々御小屋札打渡之」（『加賀藩史料』6-224~5）とあり、門柱に「小屋札」（「名札」）を打ちつけることで行われていたと考えられる。この「割渡」も作事方が行っていたようである（図227の「御門」部分書き込みに「此柱ニ御名札、御作事ヨリ打之」とある）。

### (3) 調査地点の利用者について

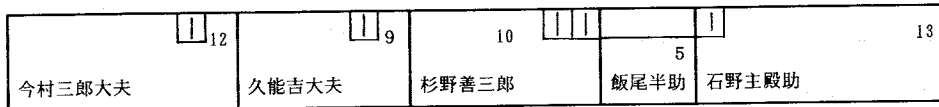
ここでは、「八筋」の利用者について具体的に考える。表66の一覧をみると、時期によって若干の違いはあるものの、「八筋」長屋群は藩主に謁見できる平士（並）以上の藩士が利用していたと考えてよいだろう。そして、18世紀後半頃から4・5番の南の一角は、間口の大きさ、「空地」の囲いの違い、絵図面の記載などから考えて、「人持」が利用した場合が多かったと考えられる。人持とは譜代の家臣であり、家臣団の最高に位置する門閥八家（年寄衆）につぐ家格である。7組に分かれており、各組頭には8人の年寄のうち7人が任ぜられた。禄高は千石から1万4千石で、天明3年（1783）で66家（『天明三年侍帳』特16・30-46、人持組末席を含み寄合人持を含まず、以下同じ）、文化4年（1807）で同じく66家（『帳秘藩臣録』特16・30-50）、安政期（1854~60）で67家（『加賀松雲公』所収「加賀藩侍帳」）、文久期（1861~64）初めて68家（『加賀藩組分侍帳』）を数える。この人持から家老・若年寄が選ばれ、年寄と共に御用部屋を構成するのである。その他、寺社奉行・公事場奉行・小松城番・奏者番・定火消・御近習御用なども人持から選ばれた（公事場奉行・御近習御用は平士からも）。つまり、藩政の中樞を占める譜代の上級家臣だったと言える（『石川県史』『藩国官職通考』参照）。人持以上の家臣は、江戸には常時数名が詰めており（人持3名「寛政十年詰人高しらへ帳」特16・48-237、年寄1名・人持2名「御歩並以上御在府詰人名書」特16・26-142、年寄中等3名『加賀藩史料』藩末上564）、江戸詰家老・江戸留守居は人持の勤めるところであった。「八筋」の東南隣に「年寄衆小ヤ」（「御老中小屋」）があり、通常出府した八家はここを利用したと考えられる。そして、「八筋」4・5番の南の一角を人持が利用したと考えられるのである。先に述べたように、本郷邸で平士並以上が居住していた部分は、表長屋を含めた藩邸南側と、北側では「八筋」や「年寄衆小ヤ」付近であった。「八筋」は、このような平士並以上の家臣の「御貸小屋」群の一部をなし、

その一角には江戸藩邸で中心的役割を担う重臣人持の居住空間を含んでいたとすることができる。しかし、これはあくまで原則であり、臨時の場合はその場その場に応じた利用のされ方がなされたと考えられる。前掲史料中、「御小屋指支可申由ニ候間、同役類役等之内同居」（『江戸毎日書立書抜』特 16・45-47）、「当分被指置候御絵図之外之御小屋ニ住居被致人々」（『従先年於江戸御定書品々』）、「御中屋敷に在住人、不残御上邸向寄々々え同居す」（『加賀藩史料』6-224）といった一節がそのことを具体的に示しているだろう。「八筋」の長屋に関しても、「年寄衆」が使用していたことを示す絵図面もあり、逆に「年寄衆小ヤ」の部分が「御家老小ヤ」という記載になっている場合も多く、年寄・人持の出府人数などによって異同があったと考えられる。

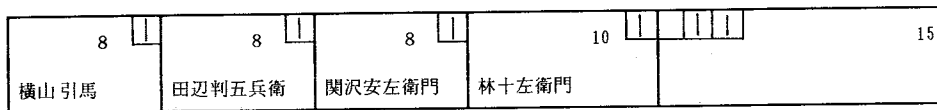
このことを踏まえて、居住者の具体的人名がわかる唯一の例を掲げる（図 228）。これは、尊経閣文庫所蔵「東都本郷御館御郭内小屋割図、寛政拾三年辛酉二月写之」の「八筋」の部分を抜き出して作成したものである。この絵図面は人名がすべて付箋によって記されている。「年寄衆小ヤ」の部分が奥村左京（年寄）・横山又五郎（人持）となっていることから、寛政 12 年（1800）閏 4～6 月の状況を示していると考えられる。この年閏 4 月藩主治脩は 2 人を共に参勤しているが、横山は徳川家光の百五十回忌のため日光山に代拝に行った今枝内記（人持）の代わりであり、遅くとも 6 月には金沢に戻っているからである（『加賀藩史料』10-950～1, 957, 977）。絵図面全体にわたる詳細な検討は、別の機会に譲らざるをえないが、他の絵図面との比較検討から、この絵図面にみられる藩邸内の家臣の居住配置は、臨時のものではなく、おおむね原則的な状況を示していると考えられる。図 228 の「八筋」に関して言えば、すべて平士並以上（医者も含む）の家臣が居住していることがわかる。氏名の記載されていないところは、空き小屋であったか、付箋の脱落かは不明である（但し付箋の脱落があったとしてもそれはわずかであることは、「寛政十年詰人高しらへ帳」特 16・48-237 との人数の比較から推定できる）。禄高を除いて考えれば、1～2 番に表小將を中心に頭分（諸頭）でない平士（「平侍」）が居住しており、3～5 番には平士でもより格の高い頭分が集中している。つまり、5 棟になった段階の「八筋」長屋群においては、東側にいくほどより格の高い藩士が居住していたと考えられるのである。このことは長屋間口が東へいくにつれて広くなることと対応している。少なくとも寛政 12 年の時点で、「八筋」は西側に表小將組に属する平士、東側にはより身分的に高い頭分の平士や人持が居住していたと言える。さらに、(1)「八筋」に居住している藩士の履歴をみると、その半数近くが近習（藩主の側近）関係の役職経験者であり、西側には表小將組に属する藩士が多数居住していること、(2) 2 年後治脩が隠居した後、国元の隠居宅（金谷御殿）付になっているものが、既にここに集中していること、(3) 絵図面の何枚かに「御近習衆」と記載されたものがあることなどから考えて、「八筋」は人持の居住空間を含むという性格以外に、「御近習衆」の居住する長屋群という性格を持っていたと言えるのではないだろうか。ちなみに、4 番南側の石野主



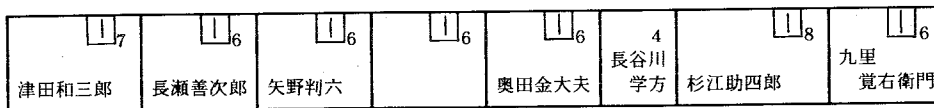
- ①400石 組頭並(寛政10) ①1250石 割場奉行  
 ②600石 定番頭並金谷別 ②馬廻  
 席近習用



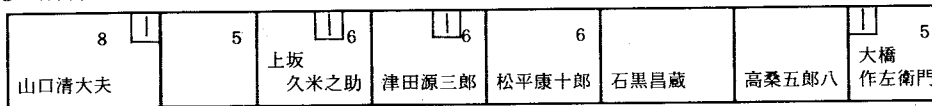
- ①300石 御歩頭 ①250石 御先弓頭 ①300石 御先手(寛政9) ①200石 ①1550石 人持組御近習御用  
 ②文化元年(御小將頭)に死 ②頭役免許 御先(弓または 表御納戸奉行 ②人持金谷別席近習用  
 簡)頭(享和元) ②大小將  
 ②馬廻頭兼役算用場奉行



- ①500石 御近習頭 ①300石 御使番 ①250石 物頭並 ①300石 表小將横目(寛政7)  
 (寛政11) ②先手 ②物頭並金谷近習用 御持筒頭兼御近習(享和2)  
 ②物頭並金谷近習用 ②持筒頭



- ①500石 御馬廻 ①650石 ①350石 表小將 ①250石 ①15人扶持 ①200石 ①1000石  
 (寛政6) 大小將 ②金谷表小將 表小將 御外科 御膳奉行 (内200石与力知)  
 御表小將 ②金谷奥小 ②金谷表小將 ②医者(組外 ②金谷表小將  
 (享和元) 將横目 並以上) 番頭 表小將  
 ②金谷表小將 ②金谷表小將



- ①300石 表小將横目(寛政7) ①200石 ①400石 ①200石 ①20人扶持 ①320石 ①800石 表小將  
 御道中奉行物頭 御表小將 表小將 表小將 御馬医御馬奉 御馬方御用 ②金谷使番  
 (享和2) ②金谷使番 ②金谷表小將 ②使番 行支配 ②組外並馬乗  
 ②先手 ②120石  
 組外並馬医馬奉行支配

(尊経閣文庫所蔵「東都本郷御館御郭内小屋割図」より作成)  
 註) ①は寛政12年当時の禄高(役料を含まず)と役職を示す。確定できない場合は、その前後で判明した最も年  
 代の近いものを掲げた(「諸士系譜」「加賀藩史料」など)。参考のため、②として文化4年(1807)の禄  
 高(変化のあった場合のみ記す)と役職を掲げた(「帳秘藩臣録」)。なお、□は厩、右上の数字は間口  
 間数を示す。

図 228 寛政12年(1800)「八筋」居住者氏名・禄高・役職

Figure 228 List of dwellers in the nagaya around the excavation area in 1800

表 67 寛政 12 年 (1800) 理学部 7 号館地点居住者履歴  
 Table 67 List of dwellers in 1800 in the No.7 Science Building area

○杉野善三郎盟 (多助・野村七兵衛四男)	○久能吉大夫政平 (弁太夫)
(明和2) 300石 御馬廻	(宝暦6) 200石 大小將組御右筆
改作奉行	天明2・6・晦 50石加増合250石
寛政4・閏2・14 物頭並	表小將
段々昇進御馬廻頭に至る	" 6・3・朔 御使番
文化7・7・11 依願御免	寛政8・正・19 御先弓頭
文政7・2・27 定番頭	享和3・2・11 指除
" 9・18 致仕 号晚霞 隠居料300石	
天保 死 (90才)	
○林十左衛門保之 (千之助・織人・平次郎、 山崎茂兵衛二男、娶小森源左衛門妹)	○関沢安左衛門尚房 (安太良、助九良)
(安永6) 250石 大小將	(宝暦12) 150石 組外
天明2 表小將	寛政6・5・13 御膳奉行
寛政2 50石加増合300石	" 9・9・朔 御使番
" 7 表小將横目 是より先御膳奉行	" 10・8・朔 物頭並
段々昇進定番頭に至る	100石加増合250石
文政 御免除	文化5・8・4 御先筒頭
" 11 死	" 8・閏2・16 死
○田辺判五兵衛直廉 (判次郎・義右衛門・学兵衛、 娶武藤左仲女)	
明和4・8・18 新番	
" 8・11・11 太梁公 (治脩) 御近習勤仕	
安永7・7・11 200石承祖 組外 御近習勤如元	
天明4・6・18 50石加増	
寛政4・閏2・10 " 合300石	
" 9・7・朔 御使番	
段々昇進新番頭に至る	
文化13・10・22 隠居 号休焉 隠居料20口	
文政2・6・28 死	

(「諸士系譜」より作成)

殿助は、天明3年(1783)3月500石加増で人持組末席、天明5年(1785)12月500石加増で人持組となった藩士である(「諸士系譜」特16・31-49など)。また、勝尾半左衛門も文化7年(1810)3月500石加増で人持組に加わっている(「帳秘藩臣録」特16・30-50など)。調査地点にかかると考えられる5人の履歴を掲げると表67のようになる。5人とも家格は平士であるが、禄高250~300石の頭分で、役料150石が別にある。つまり、人持につぐ上級藩士と言ってよいだろう。なお、寛政6年(1794)の江戸詰人の規定に従えば(『藩法集』4-111~3)、調査地点にかかると考えられる5人の長屋には寛政12年当時各9~10人の人間が居住していたことになる(馬は各1匹)。図228に関してもう一点指摘しておく、4番南側の石野主殿助の間口割が通常の18間を13間と5間の2つに割って使用されている。これは、長屋の間口割が比較的可動的であり、

都合によって簡単に改築されたことを具体的に示している。さらに、「御小屋も不足候条、御中屋敷之小屋を引、御上屋鋪に建候由御普請有」（『加賀藩史料』7-306）、つまり必要に応じては屋敷間の長屋の移築も容易に行われていたのである。

最後に、「御貸小屋」の使用状況について2つの史料をあげる。

①一、（享保20年〈1735〉）正月二十二日夜四時過、八筋御長屋明小屋五筋目より出火。和田采女初近所面々、家来等も罷出打消、其内御近習火消も罷越候。（後略）

（『加賀藩史料』6-889）

②（天保3年〈1832〉）九月廿六日

一、御横目申越候ハ、昨日八筋明小屋ニ、何者歟居住いたし居候体之旨、以紙面御達申候通ニ付、尚更御横目足輕為致見分候処、右明小屋ニ森権大夫所持之長持縮付指置候処、縮を解品々取出、先日申候紛失之品ニ似寄候品々も有之、且馬とうを敷、枕も有之、寝起もいたし居候体ニて、縁ニは手水之水も有之、火之元之儀遂見分候処、火を焚居候体も不相見得候へ共、側ニ木屑も有之由申聞（「江戸毎日書立書抜」特16・45-47）

史料①は、「八筋」の長屋で放火があったという記事の一部である。この時藩主は在府しているが、「八筋」5番長屋が「明小屋」となっている。史料②は藩主が在国している時であるが、「八筋」に不審な者がいるので調べたところ、「八筋明小屋」に泥棒らしき者が住んでいたという史料である。このように、「御貸小屋」は常に使用されていたわけではなく、やはり長屋の格に相当する家臣が在府しない場合は使用されなかったと考えてよいだろう。なお、史料②から「明小屋」の管理が杜撰であったことも窺えるだろう。

#### 4. まとめ

以上述べてきた理学部7号館地点の文献による考察の結果を、考古学の発掘調査への問題提起を含めつつまとめると次のようになる。調査地点は、本郷邸内の「家臣居住空間」のうち、「八筋」と呼ばれる「御貸小屋」群の一角、3・4番の中央付近に相当する。「御貸小屋」とは、江戸詰の家臣に貸し渡すために藩が用意した居住施設（長屋）であり、調査地点の「御貸小屋」は藩主に謁見できる平士並以上の家臣が利用していた（1800年には、頭分の平士が利用していた）。調査地点の長屋は絵図面を見る限り、元禄元年（1688）以降南北方向にも東西方向にも大きくは動いていないと考えられる。このことが正しいとすれば、調査地点の規模から考えて、「往来筋」（道）・長屋前面の「空地」・長屋（建物）の3パターンが帯状に遺構の粗密などの形で遺跡に現れることが予想される。逆に、南北方向を大きくずれる遺構は下屋敷時代、またはそれ以前の遺構と考えられるのである。また、調査地点内には元禄元年の絵図面でのみ見られ、それ以降の絵図面には見られない長屋中央に位置した井戸跡が存在すると考えられる。この井



戸跡がより正確な調査地点確定のポイントのひとつとなるだろう。長屋の存在の確認できる元禄元年以降、少なくとも3回または4回の焼失をみていると考えられる点、火事の痕跡やそれに伴う遺構のグループ分け、火事に密接に関連する「空地」内の「穴蔵」の存在とその機能についても、考古学の成果を踏まえた総合的な考察が可能であろう。また、調査地点の長屋の利用者は上級藩士であるが、その居住者の多数は必ずしも身分的には高くない陪臣や武家奉公人で占められていた。この点は調査地点からの出土遺物を考える上で十分注意しなければならない点である。つまり、右のことは遺物などにどのような形で反映されているのか、他の調査地点との比較の前提として考察されなければならない点であるからである。

最後に、今後の課題を3点述べて終わりたい。(1)本節の文献からの考察では、史料の制約から下屋敷時代に触れることができなかった。この点は当面考古学の成果に期待せざるをえない。(2)長屋の住人の生活についても触れられなかった。法令や海保青陵の「東臚(あずまのはなむけ)」などからの再現も考えたが(『文京区史』2-374~8参照)、現段階では断片的な域を出ないこと、他節との量的バランスも考えて割愛した。このいわば「社会史」(日常史)の領域こそ、文献では十分言及できない部分であり、近世考古学に最も期待が寄せられる分野であると考える。(3)絵図面の史料批判が不十分であること。それ故、本節の後半は仮説にすぎない。現段階では、建築物などの絵図面に記載された内容がどこまで正確に実態を反映したものか、考古学的調査による検証に頼らざるをえない部分が少なくない。逆にこのことから、ある一定の条件下においては、近世考古学の課題である文献史料と考古資料の総合のための一方法として、文献史学による仮説、考古学による検証という方法が可能であると考えられる。その意味でも、冒頭の留意点(3)に掲げたように、考察過程における文献史料と考古資料との安易な混用は極力戒められねばならないと考える。

本節は、1988年1月28日藩邸研究会で報告した内容を訂正補筆したものである。本稿作成にあたっては、史料閲覧の便宜と多くの貴重な御教示を、杉森哲也・宮崎勝美・吉田伸之各氏を始め多くの方々からいただいた。また、石川県立歴史博物館・金沢市立図書館・小松市立博物館・前田育徳会尊経閣文庫・三井文庫の各史料所蔵機関の方々にも大変お世話をいただいた。末筆ながら厚く謝意を表したい。

#### 史料(刊本)・参考文献

藩法研究会、1963：藩法集、4 金沢藩。創文社。

海保青陵、1806：東臚。瀧本誠一編、日本経済大典、27、啓明社、1929、pp.619-665。

金沢文化協会、1937：加賀藩組分侍帳。

前田育徳会、1929-43、1958：加賀藩史料、全18冊。清文堂出版、1980-81復刻。

- 大蔵省, 1924: 日本財政経済史料, 巻4. 財政経済学会.
- 史籍研究会, 1982: 諸向地面取調書, 1. 内閣文庫所蔵史籍叢刊, 14, 汲古書院.
- 高柳真三・石井良助編, 1934: 御触書寛保集成. 岩波書店.
- 滝沢馬琴, 1825: 兔園小説. 日本隨筆大成, 第2期第1巻, 日本隨筆大成刊行会, 1928. pp. 1-346.
- 富田景周, 1823: 東邸沿革図譜. 景周先生小著集, 石川県図書館協会, 1972 復刻. pp. 1-211.
- 湯浅祇庸, 1811-12: 藩国官職通考. 石川県図書館協会, 1932.
- 文京区役所, 1968: 文京区史, 巻2.
- 大聖寺藩史編纂会, 1938: 大聖寺藩史.
- 日置謙編, 1929: 石川県史, 第3編. 石川県.
- 鬼頭清明, 1985: 近年の歴史考古学の発展にふれて. 三省堂高校社会科教育ぶっくれっと, 2: 14-20.
- 国史大辞典編集委員会, 1987: 国史大辞典, 8. 吉川弘文館.
- 近藤磐雄編, 1908: 加賀松雲公, 全3冊.
- 宮崎勝美, 1986: 江戸藩邸の“境界”と“門”. 1986年6月11日藩邸研究会報告.
- 西川幸治, 1956: 彦根藩江戸上屋敷について. 日本建築学会論文報告集, 54: 821-824.
- 西川幸治, 1972: 日本都市史研究. 日本放送出版協会.
- 西脇裕高, 1987: 江戸大名屋敷の構造—「旧神田小川町御上屋敷絵図」を中心に—. 歴史科学と教育, 6: 1-20.
- 佐藤巧, 1979: 近世武士住宅. 叢文社.
- 桜井松夫, 1975: 大名の屋敷と生活—上田藩主松平氏の場合—. 信濃, 27(2): 28-50.
- 杉森哲也, 1987: 近世考古学と文献史学—東京大学構内遺跡の場合—. 江戸遺跡情報連絡会会報, 6: 1-3.
- 杉森哲也, 1988: 加賀藩本郷邸の「居宅」について. 1988年5月26日藩邸研究会報告.
- 杉森哲也・宮崎勝美・吉田伸之, 1987: 「江戸御上屋敷惣御絵図」解説. 東京大学文学部3号館開館記念品.
- 東京大学医学部創立百年記念会, 1967: 東京大学医学部百年史. 東京大学出版会.
- 東京大学百年史編集委員会, 1984: 東京大学百年史, 通史1. 東京大学出版会.
- 同, 1987: 東京大学百年史, 部局史2. 東京大学出版会.
- 東京帝国大学, 1932: 東京帝国大学五十年史, 下冊.
- 上野秀治, 1987: ある菰野藩士の記録—天保・弘化期の竜崎守道の生活—. 地方史研究, 209: 31-48.

## 第2節 考古資料から見た理学部7号館地点

山口 剛志・羽生 淳子

本節では、理学部7号館地点における遺構の分布傾向およびその変遷について検討する。

理学部7号館地点からは、井戸5基、地下式土坑21基、報告Noを付した土坑142基、溝1本、杭跡3基が、それぞれ検出された。この他に、報告Noを付さずにまとめて図示した柱穴および小土坑(図119, 134, 191)が、計354基確認されている。これらの遺構の分布は、特にA区・B区とE区・F区に集中し、各遺構は複雑な重複関係を示している。これに対し、C区・D区は、遺構の分布密度が低く、重複関係を示す例も少ない。A区・B区とE区・F区の遺構の集中区域は、それぞれ、ほぼ南北方向に延びた分布を示す。

本地点の層序は、表土の下に部分的に江戸時代の堆積物が存在するものの、これは面的な広がりを示すものではなく、調査区域内の大部分では、表土の下は直接ローム層となっている(第3章参照)。したがって、遺跡の基本層序に基づいた遺構の時期的な類別は、本地点では不可能である。そこで、本節では、出土遺物に基づいた遺構の推定廃棄年代および遺構の重複関係を手がかりとして、主な遺構を中心に、遺構群の変遷を検討する。

## 1. 推定廃棄年代が17世紀中葉～後半の遺構

17世紀中葉～後半の陶磁器を伴う主な遺構としては、1号井戸、2号井戸、5号井戸、9号地下式土坑、18号地下式土坑、1号土坑、2号土坑、51号土坑、85号土坑、89号土坑、90号土坑、129号土坑、135号土坑、1号溝があげられる。遺構数は少ないが、各遺構からの出土遺物の量は比較的多く、時期的にもまとまる例が多い。

この時期の遺構の第一の特徴としては、分布が特定の偏りを示さず、調査区域内全域にわたっている、という点があげられる。C区・D区は、江戸時代全体の遺構分布からみた場合には分布密度の低い区域であるが、17世紀代に関しては、9号地下式土坑、85号土坑、89号土坑、90号土坑が検出されており、他の区域に比した場合の分布密度の差異は指摘できない。この結果として、C区・D区では、廃棄年代が判明しないものを除けば、17世紀代に位置づけられる遺構の数が最も多くなっている。このような分布のあり方は、廃棄年代が18世紀以降と推定される遺構の大部分がA区・B区およびE区・F区に集中しているのと対照的である。

17世紀代の遺構の第二の特徴として、主軸方向が明らかである遺構は、18号地下式土坑を除き、1号溝(主軸方向N-19°-E)にほぼ直交または平行している、という点を指摘できる(9号地下式土坑の主軸：N-69°-W, 1号土坑：N-69°-W, 2号土坑：N-73°-W, 51号土坑：N-73°-W, 89号土坑：N-23°-E)。このような特徴は、この時期における本地点の地割りが、N-19°-23°-E、ないしN-69°-73°-Wに近い方向を軸としていた可能性を示すものである。したがって、出土遺物からは廃棄年代を特定できない遺構のうち、上記の遺構と類似する主軸方向を示すものについては、これらと同時期に属する可能性を考慮する必要がある。

上記の遺構のうち、2号土坑は、出土遺物の主体が1640～50年代の肥前磁器であることから、17世紀中葉に位置づけられる。この土坑は、平面形態および覆土の堆積状態から、a・b(2基に細分可)・cの4基に細分できるが、このうちaとcについては、①a-c間で接合した遺物が多いこと、および、②堆積物の層序が複雑な切り合い関係を示すこと、の二点から考えて、複数回にわたって掘り返されたごみ穴と推測される。覆土中から多量の貝類および魚骨が出土したという事実は、この遺構がごみ穴であることを裏付けるものである。85号土坑は、2号土坑と同類のかわらけがまとまって出土していることから、2号土坑とほぼ同時期の遺構と推測さ

れる。この遺構からは、推定生産年代が1640～50年代の肥前磁器碗が出土している。1号溝は、2号土坑に切られることから、17世紀中葉以前に位置づけられるが、明確にこの遺構に伴うと断定できる遺物が皆無であるため、廃棄年代は確定し得ない。覆土は、他の遺構と異なり、粒子の細かな土層であり、かつ遺物をほとんど含まない点から、17世紀初頭までさかのぼる可能性もある。

1号井戸、1号土坑、9号地下式土坑、18号地下式土坑は、出土遺物の主体が、1650～1670年代の肥前磁器であることから、1650～1680年代に位置づけられる。1号井戸は、17世紀代の肥前陶磁器を多量に出土した遺構である。同一文様の資料が複数個体出土した例が多く、さらに二次的な被熱を受けている資料が多いことから、火災の後に廃棄され、焼け跡の残骸が井戸の中に投げ込まれた可能性が高い。1号土坑は、2号土坑の北側に位置する細長い土坑である。2号土坑との形態および位置の類似性から考えて、2号土坑と同様にごみ穴と推測される。出土遺物は1号井戸と同じく1650～1670年代の肥前磁器を中心とするが、1号井戸の場合と異なり、同一文様が複数個体出土する例はほとんどない。9号地下式土坑の出土遺物も、1650～1670年代の資料を中心とする。ここから出土したかわらけの形態および整形上の特徴は、1号土坑の出土資料と類似する。

## 2. 18世紀代の遺構

18世紀代の陶磁器を伴う遺構は数多く、これらは本地点から検出された遺構の量的な主体を占める。この時期の遺構の第一の特徴としては、遺構のほとんどがA区・B区およびE区・F区に集中して分布する、という点があげられる。すなわち、C区・D区において明らかにこの時期と判断できる遺構は、76号土坑、83号土坑、88号土坑の3基にすぎず、B区西端からE区4号井戸までの約11mの間は、この時期の遺構の分布密度が極端に低い区域となっている。この結果として、A区・B区およびE区・F区にみられる遺構の集中は、ほぼ南北に延びる二列の細長い分布を示している。

この時期の遺構の第二の特徴は、主軸方向が判明する遺構の大部分が、ほぼ南北ないし東西方向を軸としている点である。この傾向は、井戸、地下式土坑、土坑のすべてに共通する。

18世紀代に廃棄されたと推定される主な遺構としては、3号井戸、4号井戸、3～8・10～13・15～17・19～21号の各地下式土坑があげられる。この他に、数多くの土坑が検出されている。地下式土坑の大部分がこの時期に集中している点は興味深い。このうち、6号地下式土坑は、17世紀末～18世紀前半の肥前陶磁器を出土遺物の主体とすることから、上記の遺構の中でも古い時期に位置づけられる。1号井戸と同様に、同一文様の資料が複数個体出土している例が多い。覆土が焼土であり、出土遺物の大部分が二次的に被熱している点から、火災の残骸をまとめて

地下式土坑中に廃棄したものと考えられる。19号地下式土坑は、17世紀～18世紀代の出土遺物が混在しているが、被熱している遺物は、17世紀末～18世紀の肥前磁器が多いことから、6号地下式土坑と同時期の可能性はある。

3号井戸、4号井戸、7号地下式土坑、10号地下式土坑、15号地下式土坑、16号地下式土坑、17号地下式土坑、19号地下式土坑、20号地下式土坑、21号地下式土坑は、18世紀前半～中葉に廃棄されたと推定される遺構である。このうち、7号地下式土坑、10号地下式土坑、17号地下式土坑、19号地下式土坑、20号地下式土坑は、いずれも焼土を覆土とする遺構である。陶磁器の出土量は少ないが、いずれも17世紀～18世紀中葉の陶磁器を伴っている。17号地下式土坑および20号地下式土坑からは二次的に被熱した瓦がそれぞれ多量に出土している。17号地下式土坑と20号地下式土坑から出土した丸瓦については、両遺構間で接合した資料が2例ある（第5章第2節8参照）ことから、この2基は同時に廃棄された可能性が強い。16号地下式土坑は、焼土を覆土としないが、やはり17世紀～18世紀中葉の陶磁器を伴っている。3号井戸と4号井戸は、18世紀前半～中葉の陶磁器を出土遺物の主体としており、上記の5基の地下式土坑とほぼ同時期ないしやや後の時期に位置づけられる。出土遺物の中には、二次的に被熱している資料も認められるが、その量はあまり多くない。本地点においては、これらを最後に、井戸は存在しなくなる。なお、17号地下式土坑、および4号井戸から出土した丸瓦についても接合した資料が1点あるので、4号井戸は、17号地下式土坑および20号地下式土坑と比較的近接した時期に廃棄された可能性を指摘できる。15号地下式土坑の出土遺物は少なく、廃棄時期の推定は困難であるが、1690年代～1750年代に位置づけられる肥前磁器碗が出土している。

3号地下式土坑、4号地下式土坑、5号地下式土坑、8号地下式土坑、11号地下式土坑、12号地下式土坑、13号地下式土坑は、出土した陶磁器から18世紀中葉～後半に廃棄されたと推定される遺構である。これらの地下式土坑の中には、焼土を覆土とするものは存在しない。これらの中で、5号地下式土坑は、出土した陶磁器から考えて、これらの中では最も古い時期に位置づけられる。4号地下式土坑は、この5号地下式土坑を切って構築されている遺構であるが、出土遺物の特徴は5号地下式土坑と類似していることから、比較的近接した時期に廃棄されたと推測される。4号地下式土坑—6（図36）の肥前磁器筒形碗を伴うことから考えて、廃棄年代は18世紀前半には遡り得ない。3号地下式土坑、11号地下式土坑、12号地下式土坑、13号地下式土坑は、出土した陶磁器から18世紀後半に位置づけられる。12号地下式土坑と13号地下式土坑は、重複関係から、13号→12号の順に廃棄されたことが確認されているが、出土遺物からは明瞭な時期差は認められない。

### 3. 18世紀末～19世紀代の遺構

18世紀末～19世紀代の陶磁器を伴う遺構としては、14号地下式土坑、30号土坑、48号土坑、63号土坑、75号土坑、113号土坑、119号土坑、122号土坑、141号土坑、142号土坑および1～11号遺物集中等があげられる。これらの遺構は、①A区・B区およびE区・F区に集中して分布する。②ほぼ南北ないし東西方向を主軸とするものが多い、という点で、18世紀代に位置づけられる遺構と共通する特徴を示す。しかしながら、この時期になると地下式土坑の数は激減し、わずかに14号地下式土坑1基が認められるのみである。14号地下式土坑-1の肥前磁器筒形碗(推定生産年代1780～1810年代)を伴うことから、18世紀末～19世紀前半に廃棄されたと推定され、覆土に焼土を含んでいる。

土坑のうち、63号土坑、75号土坑、119号土坑は、長方形のプランを有するものであり、出土遺物から、いずれも廃棄年代は幕末と推定される。75号土坑は、焼土を覆土とし、炭化材が多量に出土している。遺物集中は、A区・B区のみで確認され、その多くは、19世紀代の陶磁器を伴っている。

### 4. まとめ

以上、出土遺物に基づいた遺構の推定廃棄年代を中心として、遺構を3期に大別し、その特徴を述べてきた。上記の検討結果から考えるならば、遺構の分布および主軸方向の違いから、17世紀代と18世紀以降との間に大きな転換期を認めることができる。18世紀～幕末に位置づけられる遺構は、分布および主軸方向について、基本的には変化が認められないことから、この間における遺跡の性格にも大きな変化はないと考えられる。ただし、遺構の種別について考えるならば、18世紀代に数多く確認された地下式土坑が19世紀代にはほとんどみられなくなる点で相違が認められる。

上述した遺構の他に、遺物の出土量が僅少であるために、時期的な把握が困難であった遺構として、杭跡および柱穴があげられる。上記の検討結果に基づくならば、これらのうち、ほぼ南北ないし東西方向を軸とするものについては、18世紀以降に位置づけられる可能性が高いことが指摘できる。主なものとしては、①3号井戸の西側に隣接して1.8mないし0.9m間隔で並ぶ、礎石を伴う5基の柱穴列、②これに直交する形で1.8m間隔に並ぶ2列の東西方向の柱穴列、③ほぼ南北方向を軸として①の西側に隣接し、南端で直角方向に曲がる1号杭跡(検出されたのはごく一部である)、④ほぼ南北方向を軸とし、4号井戸の西側に位置する2号杭跡、およびこれに直交する3号杭跡、⑤2号杭跡の西側に位置し、ほぼ南北方向に延びた分布を示す小柱穴群、等があげられる。これらの遺構は、その配置が建物と考えるには部分的であることから、柵ないし塀のようなものにあたるのではないかと推測される。

### 第3節 絵図面と考古資料との対比

山口 剛志・羽生 淳子・細川 義

第1節および第2節においては、文献史料と考古資料の各々に基づいて、江戸時代における理学部7号館地点について考察を加えた。本節では、これらの考察の結果に基づき、考古学的な調査によって明らかになった遺構の配置と、絵図面との対比を試みる。

考古学的な発掘調査の成果と、絵図面との対比を試みた例としては、金丸(1985)、芹澤(1985)等があるが、加賀藩本郷邸については、比較的詳細に描かれた絵図面が多数存在するため、このような比較研究を行うのに適した条件を備えた遺跡であると考えられる。

文献史料による考察の結果、理学部7号館地点は、加賀藩本郷邸内の「家臣居住空間」の内、「八筋」と呼ばれる長屋群の一角（そのうちの3番長屋および4番長屋の中央付近）に相当することが明らかになった。各長屋は、南北に長い形態を示し、長屋の前面（東側）には「空地」（庭）が存在し、これが「往来筋」（道）を隔てて東西に連なり、長屋群を構成する（口絵2参照）。「空地」内には、厠、厩、番所などの建築物が認められる。井戸は、「往来筋」の「空地」際に存在する。長屋の周囲には下水施設があり、防火関係の水溜（桶）、梯子などが常置されていたことを示す絵図面もある。

絵図面に描かれている各施設の中で、考古学的な調査によって検出された遺構と直接的な対比を行い得るものは、井戸である。井戸以外の遺構については、現段階では機能の特定が困難であり、これらの遺構を、文献史料と考古資料との対比の際の基準点とすることには問題が多い。以上の理由から、必然的に井戸が調査地点と絵図面との対比のポイントになる。

#### 1. 絵図面と考古資料における井戸の対比

現在知られている最古の絵図面である元禄元年（1688）の絵図面（武州本郷第図；写真99）には、3番長屋、および4番長屋の各々について、各3ヶ所の井戸が描かれている。これらは、「往来筋」の「空地」際の南側寄り、中央、北側寄りにそれぞれ位置する。これ以降の絵図面では、中央の井戸はなくなり、両長屋とも、南北両側の2ヶ所の井戸を有するのみになる。

本章第1節-3で、調査地点は、元禄元年以降、3番長屋および4番長屋の中央部付近に当たると考えられることが指摘されている。この絵図面を見ると、4号井戸と3号井戸は、写真99における3番長屋と4番長屋の中央の井戸に対応し得る位置にある。長屋中央の井戸は、元禄元年の絵図面の次に古いと考えられる絵図面（推定年代1761～1771年頃；写真102-1）には描

かれていないことから、それ以前に廃棄されていたことが推測される。出土遺物に基づいた3号井戸および4号井戸の推定廃棄年代は、18世紀前半～中葉であり、上記の推測と矛盾しない。

以上の事実から、3号井戸および4号井戸は、4番長屋および3番長屋の中央に位置する井戸に対比し得ると考えられる。これに対し、1号井戸、2号井戸、5号井戸については、現在知られている複数の絵図面のうちに、これらの遺構に対応する井戸を示したものが1枚もない。さらに、出土遺物に基づいた推定廃棄年代が17世紀代であることから、これら三基の井戸については、元禄元年の絵図面以前、つまり1688年以前に廃棄された遺構であると推測される。

## 2. 元禄元年の絵図面と考古資料との対比

上記の検討の結果、3号井戸および4号井戸は、「八筋」4番長屋および3番長屋の中央の井戸に対比し得ることが明らかになった。そこで、次に、これらの井戸を基準として、絵図面と考古学的な遺構分布との対比を試みる。

図229は、長屋中央の井戸を基準として、絵図面と遺構分布を重ね合わせたものである。重ね合わせに際しては、長屋の一棟の長さが49間であることから、1間を1.81mに換算して縮尺を統一した。重ね合わせの結果、絵図面上における2基の井戸の間の距離と、3号井戸―4号井戸間の実際の距離が一致したことから、この絵図面はかなり正確に描かれていることがわかる。さらに、絵図面には、長屋の間口割間数および長屋間の距離が記載されており（本章第1節、表61―1参照）、これらの値が、絵図面上において比較的正確な比率で復元されている。したがって、絵図面に描かれた長屋の位置関係には大きな誤差はないものと考えられる。

重ね合わせの結果、出土遺物から廃棄年代が18世紀以降と推定される遺構の分布傾向は、絵図面にみられる建物配置ときわめてよく一致することが明らかになった。すなわち、検出された遺構の大部分は、絵図面の「空地」に相当するA区・B区、およびE区西側（4号井戸以西）・F区の2ヶ所に集中し、南北に長い帯状の分布を示すのに対し、絵図面の長屋建物と「往来筋」（道）に相当するC区・D区・E区東側（4号井戸以東）では、遺構の分布密度は非常に低い。

このような遺構の分布傾向は、推定廃棄年代がこの絵図面の年代と近い遺構だけでなく、18世紀以降～幕末に位置づけられる遺構の全てに当てはまるものである。特に、地下式土坑の分布は、図229に示した通り、廃棄年代が1650～1680年代と推測される一基（9号地下式土坑）を除き、すべて「空地」内に分布する。考古学的な調査の結果、このような遺構配置の規則性が見いだされたという事実は、元禄以降、幕末に至るまで、長屋、「空地」、「往来筋」の配置は、大きくは変化していなかった、と考えた本章第1節における絵図面に基づく推測を裏付けるものである。ただし、長屋に相当するC区には、明確に建築物に対応し得る遺構は存在しない。

これに対し、出土遺物から廃棄年代が17世紀中葉～後半と推定される遺構（9号地下式土坑、





18号地下式土坑、1号土坑、2号土坑、85号土坑、90号土坑、129号土坑、1号溝など)については、絵図面上における長屋の建物配置との対応関係は認められなかった。これらの遺構は、特定の区域への集中を示さず、調査地区全体に分布する。さらに、これらの遺構のうち、主軸方向の判明するものは、18号地下式土坑を除いて、長屋の配置(ほぼ南北方向を主軸とする)とは異なる主軸方向を示している。1688年より前の建物配置を記した絵図面は現在知られていないため、文献史料との比較を行うことはできないが、遺構の分布および主軸方向から考えるならば、当時の建物配置は、絵図面に見られる長屋のものとは大きく異なっていたことが推測される。

### 3. 1840年代の絵図面と考古資料との対比

前項では、3号井戸、4号井戸の位置を基準として、元禄元年の絵図面と考古資料との対比を試みた。加賀藩本郷邸については、18世紀以降、幕末に至るまでの、多数の絵図面が残されている(表66参照)が、元禄元年の絵図面以外では、3号井戸、4号井戸に相当する長屋中央部の井戸がなくなるため、重ね合わせの基準点を失うことになる。しかしながら、前項の検討の結果、長屋群の配置は、元禄から幕末に至るまで大きく変化していないことが推測される。

そこで、本項では、1840年代前半の「江戸御上屋敷惣御絵図」(口絵2、写真101)を用いて、長屋の中央部分に井戸を復元して、3号井戸、4号井戸と重ね合わせることにより、この絵図面と考古資料との対比を試みる。「江戸御上屋敷惣御絵図」は、10間を1寸とした方眼上に描かれた縮尺600分の1の絵図面であり、現在知られている絵図面の中で最も正確と考えられるもののひとつである。「八筋」部分の「空地」内には、厩、厩等が描かれていることから、「空地」内の状況を知ることができる(本章第1節-3、表66-17参照)。重ね合わせに際しては、両者の縮尺を統一した上で、絵図面の3番長屋、4番長屋の「空地」際中央に井戸を復元し、これに4号井戸、3号井戸を合わせた。

重ね合わせの結果、長方形のプランを有する土坑のうち、63号土坑、75号土坑、119号土坑の3基は、絵図面上の厩に対比し得る位置に存在することが明らかになった。長方形のプランを有する土坑については、考古学的な検討からは、その機能を特定し得なかったが(第5章第4節-3)、上記の3基は、いずれも、壁際に径15cm以上の大型の杭跡が規則的に巡る点で、特に類似した形態を示すものであり、同一の目的のために構築されたことが推測される。さらに、これら3基の遺構は、出土遺物から、いずれも、廃棄年代が19世紀中葉と推定されており、この年代は、比較に用いた絵図面の年代(1840年代前半)と矛盾しない。

以上の理由から、63号土坑、75号土坑、119号土坑を絵図面上の厩と仮定し、両者の位置を合わせて若干の修正を行った上で絵図面と遺構配置とを重ね合わせたものが、図230である。

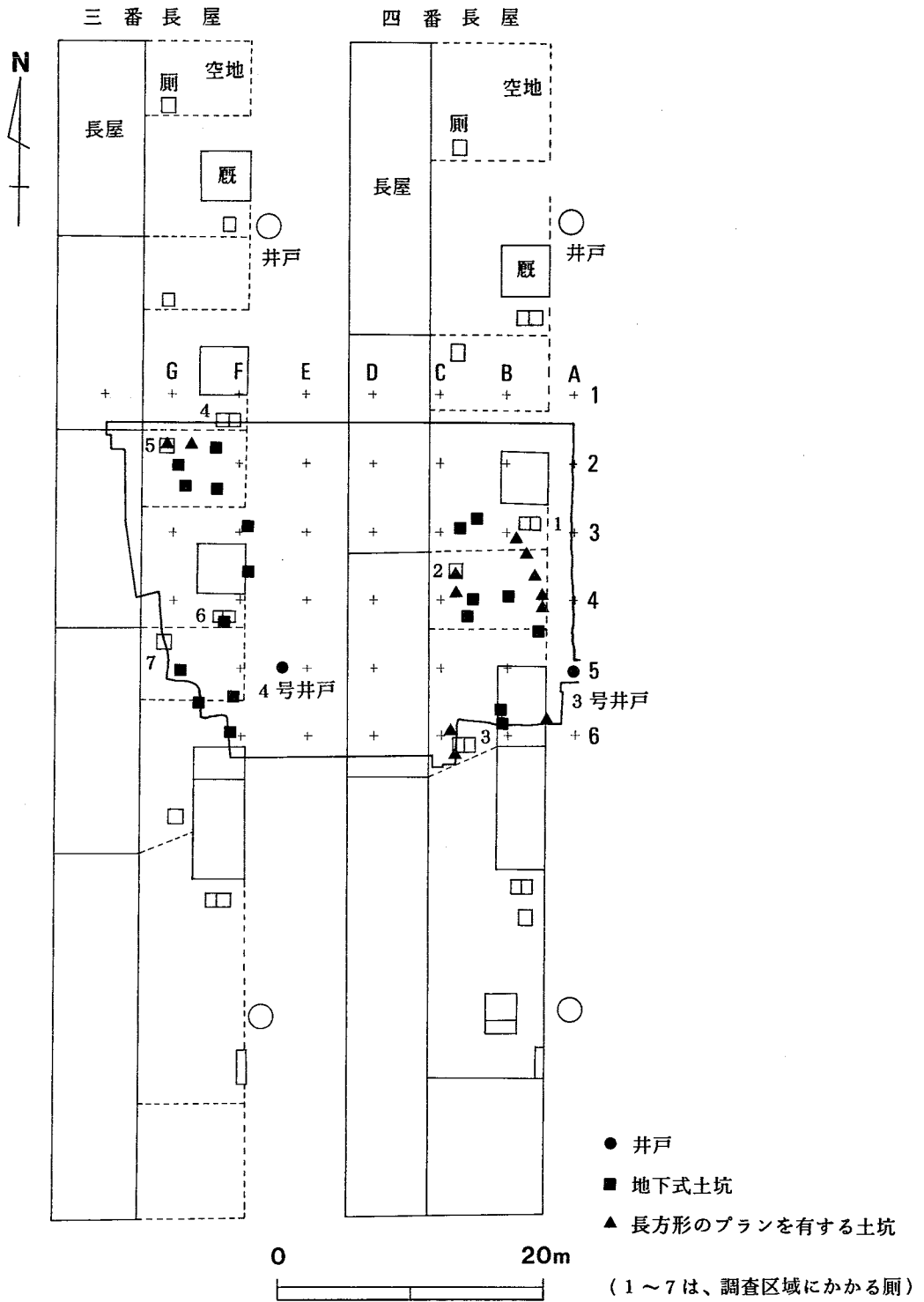


図 230 1840年代前半の絵図面と理学部7号館地点との対比図  
 Figure 230 Location of the excavation area on the 1840's map

この図には、出土遺物から廃棄年代が18世紀以降と推定される井戸、地下式土坑、長方形のプランを有する土坑の分布を示した。

図230から明らかな通り、これらの遺構は井戸を除いてほぼ「空地」内に分布する点で、元禄元年の絵図面の場合と同様の傾向を示す。□で示したものは、絵図面に描かれている厠であり、厠2と63号土坑、厠3と75号土坑、厠5と119号土坑がそれぞれ対応関係を示す。絵図面上の厠1、4、6、7に相当する遺構は検出されていないが、これらは、位置的に深い攪乱を受けている部分に相当することから確認できなかったと考えるも矛盾はない（1は配線工事による攪乱、4は化学館旧館北棟の基礎工事による攪乱、6は16号地下式土坑北側の攪乱、7は理学部4号館基礎工事による攪乱部分に相当する）。

この絵図面には、厠の他に、厩や「空地」の囲いが描かれている。A区・B区およびE区・F区に、南北・東西方向を軸として規則的な配列を示す柱穴（第5章第1節—1、A・B区柱穴および小土坑、E・F・G区柱穴および小土坑、を参照）、および1号～3号杭跡は、「空地」の囲い、もしくは厩に関係する遺構の可能性が高いが、本絵図面との対比では、明確な位置関係をとらえることができなかった。

#### 4. おわりに

以上、考古学的に検出された遺構と絵図面との対比を試みてきた。これらの検討の結果、明らかになったことをまとめれば、以下の4点に要約される：

- 1) 推定廃棄年代が18世紀以降である遺構の分布傾向は、絵図面にみられる建物配置ときわめてよく一致する。すなわち、地下式土坑、土坑等は、絵図面の「空地」部分に集中して分布し、長屋建物および「往来筋」（道）に相当する部分の遺構分布密度は非常に低い。したがって、本章において検討の対象とした絵図面の記載内容は、正確であることが、考古学的な調査の結果、検証された。
- 2) 長屋建物、「空地」、「往来筋」（道）の位置関係は、元禄以降、幕末に至るまで、ほとんど変化せず、建て直しの際にも、長屋はおおむね同じ位置に構築されたことが推測される。
- 3) 長方形のプランを有する土坑の中には、厠に相当する可能性の高いものが認められる。
- 4) 17世紀中葉～後半に廃棄されたと推定される遺構の分布および主軸は、長屋の建物配置と一致しない。したがって、元禄以前の建物配置は、元禄元年以降の絵図面に見られる長屋とは異なるものであったことが推測される。

以上の結果は、発掘調査に基づいた考古学的な考察と、絵図面を中心とした文献史的な考

察とが、多くの点で一致したことを示すものである。さらに、両者の対比を試みた結果、考古学的な考察では明らかにし得なかった長方形のプランを有する土坑について、厠の可能性が指摘された。また、地下式土坑が「空地」内に位置するという結果は、理学部7号館地点においては、地下式土坑が長屋建物内ではなく屋外に位置していたことを示唆するものであり、非常に興味深い。この結果は、本章第1節-3(2)における「穴蔵」に関する文献史学からの指摘ともよく一致するものである。

さらに、注意すべき点として、長屋建物に相当するC区には、建築物に対比し得る遺構が認められなかった点があげられる。C区における遺構の分布は非常に疎であり、柱穴等はまばらに存在するものの、これらは建築物に対比し得るような規則的な配置を示すものではない。このような結果が得られたひとつの原因として、調査地点の上層部が、おそらくは幕末～明治以降に大部分削平された結果、長屋の痕跡が破壊されてしまった可能性が考えられる。しかし、他の遺構の遺存状態が比較的良好であることから、削平が、厚さ数メートルにおよぶ大規模なものであった可能性は考えられず、削平を仮定するにしても、長屋の基礎構造は、その痕跡が比較的残りにくい構造、すなわち、浅い基礎構造を有するものであったことが推測される。

元禄元年以降の絵図面に描かれている長屋の構築年代は、文献史料からは特定し得ないが、考古学的な遺構の分布および主軸方向の変化を検討した結果、17世紀中葉～後半の陶磁器を伴う遺構の配置および主軸方向は、18世紀以降の陶磁器を伴う遺構(明らかに長屋に伴うと考えられる遺構)の配置および主軸方向とは異なることが明らかになった。したがって、考古学的にみた上記の長屋の構築年代は、17世紀末～18世紀初頭と推測され、しかも、元禄元年(1688)の絵図面に長屋が描かれていることから、その時期は1688年以前に限定される。加賀藩本郷邸については、天和2年(1682)の大火を契機とする天和3年(1683)の下屋敷から上屋敷への移行の際に大規模な建物の配置替を行なった、との記録があることから(本章第1節-2参照)、これらの長屋の建設時期は、1682年～1688年の間である可能性が高い。

考古学的な調査の結果、1号井戸(出土遺物に基づいた推定廃棄年代、17世紀後半)、6号・19号地下式土坑(18世紀前半)、7号・10号・17号・20号地下式土坑(18世紀前半～中葉)、75号土坑(19世紀中葉)等の遺構の覆土ないし出土資料は、火災の痕跡を留めていることが明らかになった。文献史料では、本郷邸は、少なくとも慶安3年(1650)、天和2年(1682)、元禄16年(1703)、享保15年(1730)、明治元年(1868)の5回、火災によって藩邸全体が焼失したとの記録が残されている(調査地点に関しては安永元年<1772>の火災で焼失した可能性もある)。したがって、出土遺物に基づいた各遺構の推定廃棄年代が正しいとするならば、1号井戸の廃棄年代は、天和2年(1682)、6号・19号地下式土坑の廃棄年代は、元禄16年(1703)ないし享保15年(1730)、7号・10号・17号・20号地下式土坑の廃棄年代は、享保15年(1730)、

75号土坑の廃棄年代は、明治元年にあたる可能性が、それぞれ指摘できる。ただし、本地点においては、焼土の面的な堆積は確認されていないので、最終的な廃棄年代の推定は、東京大学本郷構内の他地点における、遺物の相対編年と焼土層との対比関係が明らかになった上で行うべきであると考えている。

加賀藩本郷邸に関する絵図面および文献史料は、これまでに調査・報告が行われてきた近世遺跡に比して、質・量ともに格段に豊富である。今回の検討結果は、このような好条件下で比較を行った場合には、考古資料と文献史料との直接的な対比が可能であることを示すものである。東京大学構内では、理学部7号館地点の他にも、すでに4ヶ所の発掘調査が行われており、これらの報告書における検討の結果が待たれる。

#### 文献

港区麻布台一丁目遺跡調査団編，1986：麻布台一丁目郵政省飯倉分館構内遺跡。港区麻布台一丁目遺跡調査会。  
港区芝公園一丁目遺跡調査団編，1988：芝公園一丁目増上寺子院群光学院・貞松院跡・源興院跡——港区役所新庁舎建設に伴う発掘調査報告書——。東京都港区教育委員会。

## 第9章 総括

羽生 淳子

以上、理学部7号館地点の発掘調査について、調査の概要と、検出された遺構、遺物、およびその分析結果について述べてきた。本地点の調査面積は750 m<sup>2</sup>であり、これまでに東京大学構内において調査が行われた5地点のうちで最も小規模な発掘調査であった。しかも、本地点においては、表土の下は直接ローム層の区域が多く、江戸時代の面的な堆積物の残存状況は不良であったため、調査開始時には大きな成果は期待されなかった。しかしながら、調査の結果、井戸5基、地下式土坑21基、報告No.を付した土坑142基、報告No.を付さなかった柱穴および小土坑354基、遺物集中11基、溝1本、杭跡3基が検出され、遺構の残存状態は良好であること、江戸時代の遺跡としては遺構の重複関係は少なく、遺構内からの出土資料の把握に適した遺跡であること、江戸時代に作成された絵図面との対比が可能であること、等が明らかになった。ここでは、特に、①出土した人工遺物、②動・植物遺存体、③文献史料との対比、の三点を中心として調査研究の成果を総括し、本報告書のまとめとする。

調査の結果検出された人工遺物は、膨大な数にのぼる。本報告書では、遺構毎の出土遺物のまとまりを重視し、全ての人工遺物は、種類別ではなく出土遺構別に図示する方法を採った。このような作業の過程において、1)各遺構内から出土した陶磁器は、生産地の編年を基準とした場合、時間的なまとまりを示しており、概して他時期の資料の混入が少ないと考えられること、2)徳利、焼塩壺、かわらけなどの型式学的な変化は、その他の陶磁器類の編年と大筋において一致すること、等が明らかになった。これらの遺構内出土一括資料は、消費地遺跡における陶磁器類のセット関係を示すものであり、編年のみならず器種組成や生産地別組成を考える上での良好な資料となる。第5章第2節1—(3)における遺構別の陶磁器の組成の検討は、このような視点に基づいて出土資料の量的な把握を試みたものであり、今後、他遺跡において同様なデータが蓄積されてゆけば、流通・消費を考える際の大きな手がかりとなり得る。

出土した陶磁器のうち、2号土坑、1号土坑、1号井戸等の出土資料は、17世紀中葉～後半に位置づけられる一括資料である。都内の近世遺跡におけるまとまった17世紀代の陶磁器の報告例は、現在のところあまり多くないことから、これらの資料はその好例となろう。出土陶磁器のうち、生産年代が17世紀代と考えられる肥前磁器については、第7章に詳しく記載されているが、これらの資料は、単に考古学のみならず美術史の観点からも興味深いものである。東京

大学構内においては、中央病院診療棟地点および御殿下グラウンド地点から、多量の17世紀代の陶磁器が検出されており、これらの本報告書が刊行されれば、さらに多くの事実が明らかになることが期待される。

17世紀代の陶磁器のうち、特に注目すべき資料としては、4点の古九谷様式の磁器片があげられる。古九谷様式の資料の出土例としては、同じ東京大学構内の中央病院診療棟地点からの出土例が既に報告されている（東京大学遺跡調査室病院班・山崎 1988）ので、今回の資料は、東京大学構内からの出土資料としては2回目の報告例ということになる。中央病院診療棟地点の資料は、皿や鉢の内面全面に上絵付を施す「青手古九谷」を中心とし、うち5点は、素地の蛍光X線分析の結果、酸化チタンの含有量が0.10%~0.13%であったことから、山崎一雄によって九谷産と判定されている。これに対し、本地点の出土資料4点は、器面に白地を残し、染付と色絵による丸文を有する、いわゆる「祥瑞手」グループに属するものである。これらのうち2点について、素地の蛍光X線分析を行った結果、酸化チタンの含有量はいずれも0.06%であることが明らかになり、有田ないし伊万里産のものである可能性が強いとの結論が得られた。放射化分析に基づいた微量成分元素の検討の結果も、上記の結論を裏付けるものであった。これらの分析結果は、「古九谷」の生産地を考える際の重要な判断材料となるものである。さらに、対比資料とした44点の肥前古窯跡出土資料の分析結果は、近世磁器の素地の化学分析に関する基礎的な資料の報告例であり、その意義は大きい。

陶磁器および土器以外の人工遺物としては、瓦、石製品、金属製品、ガラス製品、骨角製品、鼈甲製品、木製品、繊維類が出土した。このうち、ガラスの化学分析の結果は、近世におけるガラスの成分分析を試みた基礎的な資料の報告例である。木製品および材の樹種同定は、現時点では他遺跡における比較資料の報告例が少ないことから、データの呈示にとどまったが、その結果は、江戸における木材消費の一端を知る手がかりとなる。繊維類の出土は、わずかに3例であったが、17世紀代の遺構から出土した2点について、比較的上質のものではないかとの結論が得られたことは、遺跡の性格を考える上から興味深い。

動・植物遺存体のうち、量的に多数を占めるものは魚骨であった。採集された資料の同定を行った結果、本地点における食生活の一端が明らかにされた。江戸時代の食生活については、その通時的な変化と、居住者の階層等による差異、の2点が問題となるが、本地点の資料は、この2つの問題を考える際の好資料である。さらに、調査時に多量の魚骨の出土が認められた遺構のうち、いくつかについては、覆土サンプルを組織的に採取し、資料の水洗選別を行なった結果、水洗選別方法の有効性が確認された。魚骨の水洗選別は、港区郵政省飯倉分館構内遺跡（港区麻布台一丁目遺跡調査団編 1986）、同区芝公園一丁目増上寺子院群光学院・貞松院・源興院跡（港区芝公園一丁目遺跡調査団編 1988）等の近世遺跡においてすでに試みられているが、



今後、動物遺存体の分析を組織的に進めていくためには、このような資料の組織的な採集が不可欠の条件となるであろう。江戸時代遺跡における動物遺存体の遺存状況は、先史時代遺跡に比して全般に良好であることから、同定作業も比較的容易であり、今後、研究の進展が期待される分野のひとつである。動物遺存体の豊富さに比して、採集された植物遺存体のうち、食物に関係すると考えられる資料はあまり多くない。未炭化の種子は6点出土しており、うち4点はウリ科と同定された。さらに、米粒らしいものが炭化した塊が4点出土している。植物遺存体については、今後、資料の採集方法をさらに検討する必要がある。

今回の発掘調査の結果を興味深いものとしたひとつの要因として、加賀藩本郷邸に関する豊富な古文書類および絵図面の存在があげられる。これらの文献史料に基づいて調査地点の考察を行なった結果、本地点は、江戸時代の大部分の間、加賀藩本郷邸の中の「八筋」と呼ばれる家臣のための長屋の一部であったことがわかった。文献史料によれば、これらの長屋は、その存在が絵図面から確認される1688年から1868年の間に、火災によって3~4回焼失していることが明らかである。しかしながら、絵図面から見る限り、長屋はほぼ元の位置に再建され、その位置は、南北方向・東西方向ともに大きくは移動していなかったようである。このような文献史料の検討結果から、絵図面上における調査地点の推定位置が正しいとするならば、1)元禄元年(1688)の絵図面上に描かれている各長屋の中央部の井戸のうち2基が調査地点内から発見されること、2)調査地点内は、長屋建物、長屋前の庭、長屋裏の路地、という三種類の異なった空間に帯状に分割されていること、が予測された。発掘調査の結果、2基の井戸は、ほぼ推定された位置から検出され、絵図面上における調査地点の推定位置の正しさが証明された。長屋建物の痕跡は確認できなかったが、庭と推定される区域にごみ穴や地下式土坑の大部分が集中していることが明らかになった。

文献史料からの研究は、さらに、「八筋」長屋群の居住者は、「侍」(大名に謁見することを許されている家臣)であり、調査地点は藩邸内に多数存在する長屋の中では、比較的格の高い家臣の居住地であったことを明らかにした。ただし、実際には、長屋も居住者の多くは、上記の「侍」たちが国元から連れてきた彼ら自身の家来や奉公人であったと推測される。したがって、長屋の存在が確認されている元禄以降の出土資料の多くは、身分的にはあまり高いとはいえない、上級家臣の家来や奉公人の使用品であったと考えられる。事実、18世紀以降の出土陶磁器の多くは、瀬戸・美濃産の大量生産品の陶器を主体としており、高級品はごく一部である。

元禄以後の調査地点の利用状況は、絵図面を通じて比較的詳細に復元し得るにもかかわらず、「八筋」長屋の構築時期については文献史料からは特定できない。しかしながら、発掘調査の結果、17世紀中葉~後半の遺物を伴う遺構の大部分は、18世紀以降の遺物を伴う遺構(明らかに長屋に伴うと考えられる遺構)と主軸方向を異にすることが明らかになった。したがって、考

古学資料からは、長屋の構築時期は、17世紀から18世紀への移行期前後であることが推測される。さらに、元禄元年（1688）の絵図面にすでに長屋が描かれていることから、その構築時期は1688年以前に限定される。史料によれば、本郷邸は、元和2・3年（1616・1617）に三代藩主前田利常が、大久保相模守忠隣邸跡地を下屋敷として与えられて以来、加賀藩の下屋敷として機能し、天和2年（1682）の火災を契機として、天和3年（1683）に上屋敷となっている。これらの事実を考えあわせるならば、本地点における長屋の構築は、天和2年（1682）の火災を契機としている可能性が強い。下屋敷時代に関する調査地点の利用状況は、文献史料からは知り得ないが、長屋より前と考えられる遺構から出土した陶磁器に高級品が多く含まれている事実は、長屋より前と長屋以降における遺跡の機能の違いを推測させるものである。

江戸時代の考古学的な研究が本格的に行なわれるようになったのは、近年約10年の傾向であり、その研究史は他時代の考古学的な研究と比べると非常に浅い。その意味で、近世考古学は未だ摸索の段階にあるといえる。遺構密度の高さ、地下式土坑の深さと形態の複雑さ、膨大な遺物出土量、等の問題は、江戸時代遺跡の精密な発掘調査を非常に困難なものとしている。しかしながら、今回の発掘調査の結果、遺構内一括出土資料は、近世遺跡においても先史時代・原史時代遺跡と同様に時間的なまとまりを示していること、土壌サンプルの水洗選別を行なえば魚骨等の食物残滓の組織的な回収が可能であること、等が明らかになり、近世遺跡の精密な発掘調査の必要性が確認された。これらの資料に基づいた、陶磁器その他の流通・消費や食生活の復元などは、文献史料だけからでは復元の困難な分野であり、考古学的な調査が近世研究に大きく寄与し得る領域である。したがって、これからの近世考古学に要求されるのは、美術史的な観点からみた遺存状態の良好な資料のカタログではなく、資料の出土状態および出土量の客観的な把握と、目的に応じた適切なサンプリング方法の選択であると考え。同時に、今後の近世考古学においては、文献史学はもちろん、化学、植物学、動物学、地質学、建築史、美術史など、他分野との共同研究が必要不可欠となることが予測される。

加賀藩本郷邸跡は、遺跡の保存状態が良好であり、出土資料には高級品が多数含まれており、かつ文献史料も豊富である、という三重の好条件に恵まれた遺跡である。本報告書は、その遺跡の成果のごく一部を示したものにすぎない。今後、他地点の発掘成果が加えられることにより、さらに多くの事実が明らかになることが期待される。

#### 文献

港区麻布台一丁目遺跡調査団編、1986：麻布台一丁目郵政省飯倉分館構内遺跡。港区麻布台一丁目遺跡調査会。  
港区芝公園一丁目遺跡調査団編、1988：芝公園一丁目増上寺子院群光学院・貞松院跡・源興院跡——港区役所新庁舎建設に伴う発掘調査報告書——。東京都港区教育委員会。

## おわりに

上野 佳也

発掘開始以来4年余り、その整理を終え、ここに報告書をまとめて刊行することができた。これもひとえに、厳寒、酷暑の中で発掘を続けてこられた諸氏の労苦と、また東京大学事務局及び理学部の方々が、数々の困難の中で学内の文化財保護のため本発掘調査の遂行に当たってこられた御尽力の賜と心から感謝申し上げる。

考古学は遺跡・遺物に基づく歴史学であると言われるが、かつては、文字の無い時代、あるいは文字があっても記されたものの少ない時代を対象とするのが普通であった。しかし最近では、文字すなわち文献の多い時代もその対象となり、中世考古学、近世考古学という分野も考古学で重要な位置を占めるようになってきた。これには、土地開発によって各時代の考古学資料が急増してきたという背景もあるが、かつての生産力発展を第一とする歴史学の狭隘化に対する反省から、学界がより豊かな歴史学の構築へと目を向け始めたことも、考古学の中に新しい時代を対象とする分野の成立を促してきたということができる。またさらに、近世考古学が近代日本に直接先行する時代の物質文化を明らかにしていくという重要な役割を担っていることも特に指摘しておきたい。

そのような近世考古学、ここで具体的には江戸考古学の中で、きわめて大きな地位を占めているのが東京大学構内の遺跡である。なかでもこの理学部7号館地点は、面積は小さいが遺構の残存状態がよく、遺物も豊富であり、かつ加賀藩家臣の日常生活についての多くの情報を提供してくれた。

まず遺物についていうならば、消費地遺跡における陶磁器のセットをよく捉えることができたが、これによって、個々の道具だけでなくその日常性における情報も把握することが可能となった。さらに、当時の陶磁器の流通・消費の実態を明らかにする資料も得ることができ、ことに17世紀という、従来明らかでなかった古九谷様式の陶磁器片が出土したことは特筆すべきである。その詳細については本文に記されているが、ここで考古学と自然科学の学際研究が「古九谷」の生産地に関して貴重な問題を提起した。また動物遺存体からも多くの重要な情報を得ることができた。たとえばその食物の種の構成から、江戸時代の武士の食生活の実際の姿が明らかにされた。これは従来の歴史学では捉えられなかった知見である。さらに絵図面と遺跡の照合がよくできたことも大きな成果であった。われわれはこれによって本地点の遺跡・遺物を

時間・空間の中での的確に位置づけることができた。

今回の理学部7号館地点の発掘は、このように考古学的に多くの事実を明らかにし、近代日本に直接先行する時代の物質文化を解明する貴重な資料を提供することができた。この発掘報告書は近世考古学の発展に大きく寄与するだけでなく、大学における文化財保護活動の成果として今後高い評価を得るものとなろう。

付表 遺構番号対照表 (報告 No. 順)

Appendix : List of features

報告 No.	整理 No.	10号土坑	176号	62号土坑	133号	113号土坑	216号	A3区No.なし	150号
		11号土坑	162a号	63号土坑	144号	114号土坑	218号		
J1号土坑	149号	12号土坑	57号	64号土坑	368a号	115号土坑	257a号		152号
J2号土坑	403号		136号	65号土坑	341号	116号土坑	257b号		153号
J3号土坑	370号	13号土坑	181号	66号土坑	342号	117号土坑	210号		157号
J4号土坑	332号	14号土坑	237a号	67号土坑	334号	118号土坑	220a号		158号
1号井戸	127号	15号土坑	237b号	68号土坑	349号	119号土坑	25号		162b号⑤
2号井戸	148号	16号土坑	58号	69号土坑	349号	120号土坑	16号		175b号
3号井戸	401号	17号土坑	80号	70号土坑	344号	121号土坑	17号		343a号
	404号	18号土坑	355号	71号土坑	339号	122号土坑	18号		343b号
4号井戸	40号	19号土坑	393号	72号土坑	230号	123号土坑	6号		353号
	201号	20号土坑	393号	73号土坑	227号	124号土坑	35号		354a号
5号井戸	60b号	21号土坑	393号	74号土坑	385号	125号土坑	38号		354b号
1号地下式土坑	5a号	22号土坑	63号		402号	126号土坑	30号		358号
2号地下式土坑	5b号	23号土坑	373d号	75号土坑	253号	127号土坑	31号	A4区No.なし	346a号
3号地下式土坑	134号	24号土坑	306号	76号土坑	165号	128号土坑	32号		346b号
4号地下式土坑	135a号	25号土坑	305号	77号土坑	319a号	129号土坑	34号		346c号
5号地下式土坑	135b号	26号土坑	64号	78号土坑	327号	130号土坑	45号		350号
6号地下式土坑	65b号	27号土坑	65a号	79号土坑	55号	131号土坑	46号		367a号
7号地下式土坑	388号	28号土坑	66号	80号土坑	166号	132号土坑	336号		367b号
8号地下式土坑	415号	29号土坑	67号	81号土坑	119号	133号土坑	298号		367c号
9号地下式土坑	192号	30号土坑	381号	82号土坑	91号	134号土坑	70号		367d号
10号地下式土坑	15号	31号土坑	410a号	83号土坑	256号	135号土坑	61号		367e号
11号地下式土坑	7号	32号土坑	380号	84号土坑	269号	136号土坑	60a号		369号
12号地下式土坑	8号	33号土坑	273号	85号土坑	116号	137号土坑	337号		373a号
	9号	34号土坑	274号	86号土坑	131号	138号土坑	328号		373b号
	10号	35号土坑	277号	87号土坑	128号		362号		373c号
	12号	36号土坑	279号	88号土坑	195号	139号土坑	330a号		374号
13号地下式土坑	11号	37号土坑	389a号	89号土坑	219号	140号土坑	330b号		382号
	13号	38号土坑	389d号	90号土坑	89号	141号土坑	82号		387a号⑤
	14号	39号土坑	389b号	91号土坑	26号	142号土坑	124号		387b号
	27号	40号土坑	389c号	92号土坑	4号	1号杭跡	394号		393号
14号地下式土坑	96号	41号土坑	49号	93号土坑	2号	2号杭跡	43号	A5区No.なし	303a号
15号地下式土坑	1号	42号土坑	50a号	94号土坑	53号	3号杭跡	333号		303b号
16号地下式土坑	41号	43号土坑	50b号	95号土坑	54号	1号遺物集中	146号		395a号
17号地下式土坑	307号	44号土坑	188号	96号土坑	48号	2号遺物集中	202号		395b号
18号地下式土坑	132号	45号土坑	198号	97号土坑	113号	3号遺物集中	234号		397a号
19号地下式土坑	180号	46号土坑	199号	98号土坑	74号	4号遺物集中	235号		397b号
20号地下式土坑	272号	47号土坑	182a号	99号土坑	360号	5号遺物集中	145号		397c号
21号地下式土坑	312号	48号土坑	102号	100号土坑	360号	6号遺物集中	178号		397d号
1号土坑	68号	49号土坑	245号	101号土坑	360号	7号遺物集中	177号		398a号
	69号	50号土坑	246号	102号土坑	106号	8号遺物集中	222号		398b号
	340号	51号土坑	244号		107号	9号遺物集中	207号		399号
2a号土坑	372a号	52号土坑	183b号	103号土坑	105号	10号遺物集中	296号		408a号
2b号土坑	372b号	53号土坑	183a号	104号土坑	224号	11号遺物集中	250号		408b号
2c号土坑	372c号	54号土坑	213号	105号土坑	121号	1号溝	51号		408c号
3号土坑	76号	55号土坑	238号	106号土坑	196号	A2区No.なし	77号		410b号
4号土坑	79号	56号土坑	239b号	107号土坑	215号		78号		412a号
5号土坑	123a号	57号土坑	239a号	108号土坑	71a号	A3区No.なし	138号		412b号
6号土坑	123b号	58号土坑	311号	109号土坑	71b号		139号	B2区No.なし	24号
7号土坑	175a号	59号土坑	363a号	110号土坑	71c号		140号	B3区No.なし	122a号③
8号土坑	197a号	60号土坑	364号	111号土坑	179号		141号		122b号
9号土坑	197b号	61号土坑	428号	112号土坑	194号		142号		122c号②

報告 No.	整理 No.	B4区No.なし	318号 320号 321a号 321b号 321c号 321d号 322号 323号 325a号 325b号 326号 331号 347号 356号 357号 359号 361号 413号 414a号 414b号 414c号 414d号 414e号 414f号 418号 161号 174号 375号 379a号 379b号 379c号 384a号 384b号 384c号 386号 390号 391号 392号 416号 417号 236号 241号 242号 243号 249号 251a号 251b号 319b号 319c号 319d号 419号 420a号 420b号	C5区No.なし	420c号 421a号 421b号 421c号 422a号 422b号 423号 424号 56a号 56b号 56c号 168a号 168b号 169号 172号 173号 263号 268号 270号 271号 376a号 376b号 377号 378号 383a号 383b号 383c号 426号 85号 86号 93号 95号 98号 99号 115号 120号 129号 130号 184号 185号 186号 193号 204号 205号 208号 226号 228号 229号 231号 232号 233号 240号 248号	D5区No.なし	252号 254a号 254b号 255号 259号 81号 84号 87号 88号 90号 92号 101号 104号 225号 427号 62a号 62b号 72号 73号 75号 108号 109号 111号 112号 126a号 126b号 126c号 155号 290号 291号 292号 405号 406号 407a号 407b号 407c号 407d号 190号 191号 200号 206号 217a号 217b号 258a号 258b号 258c号 258d号 258e号 258f号 258g号 260号 275号 278号	E5区No.なし	281号 282号 283号 289号 83号 211号 220b号 221a号 221b号 221c号 221d号 221e号 221f号 221g号 265号 19号 39号 52a号 52b号 52c号 28号 29号 37a号 37b号 114a号 114b号 125号 167a号 167b号 167c号 167d号 167e号 167f号 167g号 167h号 167i号 329a号 329b号 329c号 329d号 329e号 329f号 338a号 338b号 365号 276号 280a号 280b号 280c号 366号 266号 267a号 267b号
B3区No.なし	122d号② 147a号 147b号 147c号 147d号 147e号 147f号 147g号 147h号 182b号② 182c号 187号 239c号 247号 297a号 297b号 297c号 297d号 310a号 310b号 310c号 324号 335号 345号 351a号 351b号② 351c号 352a号 352b号 352c号 363b号 368b号③ 371号 425a号 425b号 425c号 287号 288号 308a号 308b号 309号 314a号 314b号 314c号 314d号 314e号 315a号 315b号 315c号 316号 317号	C3区No.なし C4区No.なし C5区No.なし	C6区No.なし D3区No.なし D4区No.なし D5区No.なし	D6区No.なし	E4区No.なし E5区No.なし	E6区No.なし F1区No.なし F3区No.なし F4区No.なし F5区No.なし F6区No.なし			
B4区No.なし									

※は図報告 No. なしは、報告書中で柱穴および小土坑として記載したもの。また、○数字は複数基の重複(数字は基数)を示す。複数区にかかるものは北東区に掲載した。

遺構番号対照表 (整理 No. 順)

整理 No.	報告 No.	53	94 号土坑	105	103 号土坑	149	J1 号土坑	194	112 号土坑
		54	95 号土坑	106	102 号土坑	150	A3区No.なし	195	88 号土坑
1	15 号地土	55	79 号土坑	107	102 号土坑	151	A3区No.なし	196	106 号土坑
2	93 号土坑	56 a	D3区No.なし	108	E4区No.なし	152	A3区No.なし	197 a	8 号土坑
3	欠番	56 b	D3区No.なし	109	E4区No.なし	153	A3区No.なし	197 b	9 号土坑
4	92 号土坑	56 c	D3区No.なし	110	欠番	154	欠番	198	45 号土坑
5 a	1 号地土	57	12 号土坑	111	E4区No.なし	155	E4区No.なし	199	46 号土坑
5 b	2 号地土	58	16 号土坑	112	E4区No.なし	156	欠番	200	E5区No.なし
6	123 号土坑	59	欠番	113	97 号土坑	157	A3区No.なし	201	4 号井戸
7	11 号地土	60 a	136 号土坑	114 a	F4区No.なし	158	A3区No.なし	202	2 号集中
8	12 号地土	60 b	5 号井戸	114 b	F4区No.なし	159	欠番	203	欠番
9	12 号地土	61	135 号土坑	115	D5区No.なし	160	攪乱	204	D5区No.なし
10	12 号地土	62 a	E4区No.なし	116	85 号土坑	161	C3区No.なし	205	D5区No.なし
11	13 号地土	62 b	E4区No.なし	117	攪乱	162 a	11 号土坑	206	E5区No.なし
12	12 号地土	63	22 号土坑	118	攪乱	162 b	A3区No.なし⑤	207	9 号集中
13	13 号地土	64	26 号土坑	119	81 号土坑	163	攪乱	208	D5区No.なし
14	13 号地土	65 a	27 号土坑	120	D5区No.なし	164	攪乱	209	欠番
15	10 号地土	65 b	6 号地土	121	105 号土坑	165	76 号土坑	210	117 号土坑
16	120 号土坑	66	28 号土坑	122 a	B3区No.なし③	166	80 号土坑	211	E6区No.なし
17	121 号土坑	67	29 号土坑	122 b	B3区No.なし	167 a	F4区No.なし	212	欠番
18	122 号土坑	68	1 号土坑	122 c	B3区No.なし②	167 b	F4区No.なし	213	54 号土坑
19	F1区No.なし	69	1 号土坑	122 d	B3区No.なし②	167 c	F4区No.なし	214	攪乱
20	攪乱	70	134 号土坑	123 a	5 号土坑	167 d	F4区No.なし	215	107 号土坑
21	攪乱	71 a	108 号土坑	123 b	6 号土坑	167 e	F4区No.なし	216	113 号土坑
22	攪乱	71 b	109 号土坑	124	142 号土坑	167 f	F4区No.なし	217 a	E5区No.なし
23	攪乱	71 c	110 号土坑	125	F4区No.なし	167 g	F4区No.なし	217 b	E5区No.なし
24	B2区No.なし	72	E4区No.なし	126 a	E4区No.なし	167 h	F4区No.なし	218	114 号土坑
25	119 号土坑	73	E4区No.なし	126 b	E4区No.なし	167 i	F4区No.なし	219	89 号土坑
26	91 号土坑	74	98 号土坑	126 c	E4区No.なし	168 a	D3区No.なし	220 a	118 号土坑
27	13 号地土	75	E4区No.なし	127	1 号井戸	168 b	D3区No.なし	220 b	E6区No.なし
28	F4区No.なし	76	3 号土坑	128	87 号土坑	169	D3区No.なし	221 a	E6区No.なし
29	F4区No.なし	77	A2区No.なし	129	D5区No.なし	170	攪乱	221 b	E6区No.なし
30	126 号土坑	78	A2区No.なし	130	D5区No.なし	171	攪乱	221 c	E6区No.なし
31	127 号土坑	79	4 号土坑	131	86 号土坑	172	D3区No.なし	221 d	E6区No.なし
32	128 号土坑	80	17 号土坑	132	18 号地土	173	D3区No.なし	221 e	E6区No.なし
33	攪乱	81	D6区No.なし	133	62 号土坑	174	C3区No.なし	221 f	E6区No.なし
34	129 号土坑	82	141 号土坑	134	3 号地土	175 a	7 号土坑	221 g	E6区No.なし
35	124 号土坑	83	E6区No.なし	135 a	4 号地土	175 b	A3区No.なし	222	8 号集中
36	攪乱	84	D6区No.なし	135 b	5 号地土	176	10 号土坑	223	欠番
37 a	F4区No.なし	85	D5区No.なし	136	12 号土坑	177	7 号集中	224	104 号土坑
37 b	F4区No.なし	86	D5区No.なし	137	欠番	178	6 号集中	225	D6区No.なし
38	125 号土坑	87	D6区No.なし	138	A3区No.なし	179	111 号土坑	226	D5区No.なし
39	F3区No.なし	88	D6区No.なし	139	A3区No.なし	180	19 号地土	227	73 号土坑
40	4 号井戸	89	90 号土坑	140	A3区No.なし	181	13 号土坑	228	D5区No.なし
41	16 号地土	90	D6区No.なし	141	A3区No.なし	182 a	47 号土坑	229	D5区No.なし
42	攪乱	91	82 号土坑	142	A3区No.なし	182 b	B3区No.なし②	230	72 号土坑
43	2 号杭跡	92	D6区No.なし	143	欠番	182 c	B3区No.なし	231	D5区No.なし
44	攪乱	93	D5区No.なし	144	63 号土坑	183 a	53 号土坑	232	D5区No.なし
45	130 号土坑	94	欠番	145	5 号集中	183 b	52 号土坑	233	D5区No.なし
46	131 号土坑	95	D5区No.なし	146	1 号集中	184	D5区No.なし	234	3 号集中
47	攪乱	96	14 号地土	147 a	B3区No.なし	185	D5区No.なし	235	4 号集中
48	96 号土坑	97	欠番	147 b	B3区No.なし	186	D5区No.なし	236	C5区No.なし
49	41 号土坑	98	D5区No.なし	147 c	B3区No.なし	187	B3区No.なし	237 a	14 号土坑
50 a	42 号土坑	99	D5区No.なし	147 d	B3区No.なし	188	44 号土坑	237 b	15 号土坑
50 b	43 号土坑	100	攪乱	147 e	B3区No.なし	189	攪乱	238	55 号土坑
51	1 号溝	101	D6区No.なし	147 f	B3区No.なし	190	E5区No.なし	239 a	57 号土坑
52 a	F3区No.なし	102	48 号土坑	147 g	B3区No.なし	191	E5区No.なし	239 b	56 号土坑
52 b	F3区No.なし	103	欠番	147 h	B3区No.なし	192	9 号地土	239 c	B3区No.なし
52 c	F3区No.なし	104	D6区No.なし	148	2 号井戸	193	D5区No.なし	240	D5区No.なし

	整理 No.	報告 No.	286	礎石 ?	325 b	B4区No.なし	365	F4区No.なし	397 c	A5区No.なし
			287	B4区No.なし	326	B4区No.なし	366	F5区No.なし	397 d	A5区No.なし
241		C5区No.なし	288	B4区No.なし	327	78 号土坑	367 a	A4区No.なし	398 a	A5区No.なし
242		C5区No.なし	289	E5区No.なし	328	138 号土坑	367 b	A4区No.なし	398 b	A5区No.なし
243		C5区No.なし	290	E4区No.なし	329 a	F4区No.なし	367 c	A4区No.なし	399	A5区No.なし
244		51 号土坑	291	E4区No.なし	329 b	F4区No.なし	367 d	A4区No.なし	400 a	欠番
245		49 号土坑	292	E4区No.なし	329 c	F4区No.なし	367 e	A4区No.なし	400 b	欠番
246		50 号土坑	293	礎石 ?	329 d	F4区No.なし	368 a	64 号土坑	400 c	欠番
247		B3区No.なし	294	礎石 ?	329 e	F4区No.なし	368 b	B3区No.なし③	401	3 号井戸
248		D5区No.なし	295	礎石 ?	329 f	F4区No.なし	369	A4区No.なし	402	74 号土坑
249		C5区No.なし	296	10 号集中	330 a	139 号土坑	370	J3 号土坑	403	J2 号土坑
250		11 号集中	297 a	B3区No.なし	330 b	140 号土坑	371	B3区No.なし	404	3 号井戸
251 a		C5区No.なし	297 b	B3区No.なし	331	B4区No.なし	372 a	2a 号土坑	405	E4区No.なし
251 b		C5区No.なし	297 c	B3区No.なし	332	J4 号土坑	372 b	2b 号土坑	406	E4区No.なし
252		D5区No.なし	297 d	B3区No.なし	333	3 号杭跡	372 c	2c 号土坑	407 a	E4区No.なし
253		75 号土坑	298	133 号土坑	334	67 号土坑	373 a	A4区No.なし	407 b	E4区No.なし
254 a		D5区No.なし	299	欠番	335	B3区No.なし	373 b	A4区No.なし	407 c	E4区No.なし
254 b		D5区No.なし	300	礎石 ?	336	132 号土坑	373 c	A4区No.なし	407 d	E4区No.なし
255		D5区No.なし	301	礎石 ?	337	137 号土坑	373 d	23 号土坑	408 a	A5区No.なし
256		83 号土坑	302	礎石 ?	338 a	F4区No.なし	374	A4区No.なし	408 b	A5区No.なし
257 a		115 号土坑	303 a	A5区No.なし	338 b	F4区No.なし	375	C4区No.なし	408 c	A5区No.なし
257 b		116 号土坑	303 b	A5区No.なし	339	71 号土坑	376 a	D4区No.なし	409	欠番
258 a		E5区No.なし	304	礎石 ?	340	1 号土坑	376 b	D4区No.なし	410 a	31 号土坑
258 b		E5区No.なし	305	25 号土坑	341	65 号土坑	377	D4区No.なし	410 b	A5区No.なし
258 c		E5区No.なし	306	24 号土坑	342	66 号土坑	378	D4区No.なし	411	欠番
258 d		E5区No.なし	307	17 号地土	343 a	A3区No.なし	379 a	C4区No.なし	412 a	A5区No.なし
258 e		E5区No.なし	308 a	B4区No.なし	343 b	A3区No.なし	379 b	C4区No.なし	412 b	A5区No.なし
258 f		E5区No.なし	308 b	B4区No.なし	344	70 号土坑	379 c	C4区No.なし	413	B4区No.なし
258 g		E5区No.なし	309	B4区No.なし	345	B3区No.なし	380	32 号土坑	414 a	B4区No.なし
259		D5区No.なし	310 a	B3区No.なし	346 a	A4区No.なし	381	30 号土坑	414 b	B4区No.なし
260		E5区No.なし	310 b	B3区No.なし	346 b	A4区No.なし	382	A4区No.なし	414 c	B4区No.なし
261		欠番	310 c	B3区No.なし	346 c	A4区No.なし	383 a	D4区No.なし	414 d	B4区No.なし
262		欠番	311	58 号土坑	347	B4区No.なし	383 b	D4区No.なし	414 e	B4区No.なし
263		D4区No.なし	312	21 号地土	348	欠番	383 c	D4区No.なし	414 f	B4区No.なし
264		欠番	313	欠番	349	68 号土坑	384 a	C4区No.なし	415	8 号地土
265		E6区No.なし	314 a	B4区No.なし		69 号土坑	384 b	C4区No.なし	416	C4区No.なし
266		F6区No.なし	314 b	B4区No.なし	350	A4区No.なし	384 c	C4区No.なし	417	C4区No.なし
267 a		F6区No.なし	314 c	B4区No.なし	351 a	B3区No.なし	385	74 号土坑	418	B4区No.なし
267 b		F6区No.なし	314 d	B4区No.なし	351 b	B3区No.なし②	386	C4区No.なし	419	C5区No.なし
268		D4区No.なし	314 e	B4区No.なし	351 c	B3区No.なし	387 a	A4区No.なし⑤	420 a	C5区No.なし
269		84 号土坑	315 a	B4区No.なし	352 a	B3区No.なし	387 b	A4区No.なし	420 b	C5区No.なし
270		D4区No.なし	315 b	B4区No.なし	352 b	B3区No.なし	388	7 号地土	420 c	C5区No.なし
271		D4区No.なし	315 c	B4区No.なし	352 c	B3区No.なし	389 a	37 号土坑	421 a	C5区No.なし
272		20 号地土	316	B4区No.なし	353	A3区No.なし	389 b	39 号土坑	421 b	C5区No.なし
273		33 号土坑	317	B4区No.なし	354 a	A3区No.なし	389 c	40 号土坑	421 c	C5区No.なし
274		34 号土坑	318	B4区No.なし	354 b	A3区No.なし	389 d	38 号土坑	422 a	C6区No.なし
275		E5区No.なし	319 a	77 号土坑	355	18 号土坑	390	C4区No.なし	422 b	C6区No.なし
276		F5区No.なし	319 b	C5区No.なし	356	B4区No.なし	391	C4区No.なし	423	C6区No.なし
277		35 号土坑	319 c	C5区No.なし	357	B4区No.なし	392	C4区No.なし	424	C6区No.なし
278		E5区No.なし	319 d	C5区No.なし	358	A3区No.なし	393	19 号土坑	425 a	B3区No.なし
279		36 号土坑	320	B4区No.なし	359	B4区No.なし		20 号土坑	425 b	B3区No.なし
280 a		F5区No.なし	321 a	B4区No.なし	360	99 号土坑		21 号土坑	425 c	B3区No.なし
280 b		F5区No.なし	321 b	B4区No.なし		100 号土坑		A4区No.なし	426	D4区No.なし
280 c		F5区No.なし	321 c	B4区No.なし		101 号土坑	394	1 号坑跡	427	D6区No.なし
281		E5区No.なし	321 d	B4区No.なし	361	B4区No.なし	395 a	A5区No.なし	428	61 号土坑
282		E5区No.なし	322	B4区No.なし	362	138 号土坑	395 b	A5区No.なし		
283		E5区No.なし	323	B4区No.なし	363 a	59 号土坑	396	欠番		
284		礎石 ?	324	B3区No.なし	363 b	B3区No.なし	397 a	A5区No.なし		
285		礎石 ?	325 a	B4区No.なし	364	60 号土坑	397 b	A5区No.なし		

※報告 No. なしは、報告書中で柱穴および小土坑として記載したものを。また、○数字は複数基の重複（数字は基数）を示す。複数区にかかるものは北東区に掲載した。



# Report of the No.7 Science Building Area Excavation at the Hongo Campus of the University of Tokyo

## Chapter 1

### The Location of the Site

Junko Habu

Throughout most of the Edo Period (1603-1868), a large part of the University of Tokyo was the property of a *daimyo* (feudal lord) of the Maeda Family, Kaga Clan. Since 1983, members of the excavation committee of the university have been excavating four areas of this property, all of which underlie the present campus grounds (Figure 2). The site under consideration here is one of these areas, where salvage excavation preceded the construction of No.7 Science Building. The excavation, which lasted from February 1, 1985 until October 8, 1985, covered approximately 750 square metres.

## Chapter 2

### Excavation Methods and Schedule

Junko Habu

The Excavation area was divided into a grid consisting of  $5 \times 5$  metre squares. Grids A1 to A5 extend north to south, while A1 to G1 lie east to west (see Figure 3). In this report, we refer to grid line A 1 to A 5 as grid row A, and so on.

The northern part of the excavation area had been seriously disturbed by the construction of the Old Chemistry Building. We began our work from this disturbed area and continued towards the southern part of the site.

## Chapter 3

### Site Stratigraphy and Geological Analysis

Masaaki Suzuki

The site is composed of three strata : a modern stratum dating from the Meiji Period (1868-1912) to the present, a historic stratum dating from the Edo Period, and an underlying, undisturbed loam. The stratum containing the Edo Period remains appears in patches throughout the site.

This chapter also discusses the surface topography and tephra stratigraphy of the site. Criteria used

to make assessments included variations in outcrops, changes in the kinds of mineral composition, and amounts and the shape of the volcanic glass shards. We found that :

1. The oldest stratigraphic level is the Tokyo Formation followed by the Musashino Gravels and the Tachikawa-Musashino Loam Formation.
2. The Hongo Upland is divided into two terraces, an upper one (22—20 metres a. s. l.) and a lower one (16-15 metres a. s. l.). The lower terrace corresponds to Musashino 2 ( $M_2$ ) making the upper terrace younger than  $M_2$ . The No.7 Science Building area is located on  $M_2$ .
3. The Aira-Tanzawa volcanic ash (AT) and Tokyo Pumice (TP), both obvious tephra markers, were recognized in the Tachikawa-Musashino Formation. Black Band I (BB I), Black Band II (BB II), scoria and wavy boundaries were also found.
4. All loam strata were weathered. The tephra on the site came mainly from the Older Mt. Fuji Volcano.

## Chapter 4

### Features and Materials of the Jomon, Yayoi and Kofun Periods

Tsuyoshi Yamaguchi

Although the site is primarily historical, there were some prehistoric remains found. Four pit traps (Figure 11,12) were excavated from the Jomon Period (10,000—300 BC), and assorted pot sherds from the Jomon, Yayoi and Kofun Periods (Figure 13) were found.

## Chapter 5

### Features and Materials of the Edo Period

Junko Habu, Tsuyoshi Yamaguchi, Chiyako Akimoto,  
Hajime Komiya, Yasutami Nishida, Akira Kato,  
Toshiharu Iwase

The excavation uncovered five wells, twenty-one cellars, which were probably located outside the houses, four hundred and ninety-six pits and post molds, one ditch, three pit clusters, and eleven concentrations of roof tiles and ceramics. Their distribution is shown in Figure 4. Most of the features were found in grid rows A-B and E-F.

Porcelain, other glazed and unglazed ceramics and roof tiles were the main categories of artifacts excavated from the site. Also found were other artifacts made from clay, stone, metal, bone, glass and wood (see Figure 14 to 204).

Faunal remains consisted primarily of fish bones (see pp. 396—415). Floral materials were also recovered. This chapter contains a reconstruction of the diet of the site inhabitants.

## Chapter 6

### Scientific and Chemical analyses of Artifacts and Materials

#### Section 1 Provenance Studies of Old Kutani Style Porcelain

Junko Habu, Shinya Nagasako,  
Shuji Ninomiya, Masumi Osawa, Koji Ohashi

Four pieces of Old Kutani (Ko Kutani) style porcelain were uncovered from the No.7 Science Building area (Figure 36-1, 66-4, 137-16 and 197-23, see Frontispiece 1). Old Kutani is one of the styles of porcelain made in Japan during the 17th century. Its provenance had been thought to be Kutani in the Daishoji subprovince, which was part of the Kaga province. However, some art historians and archaeologists suggest that it was actually made in Hizen (Arita or its adjacent areas) in Kyushu.

X-ray fluorescence and instrumental neutron activation analyses were applied to the four Old Kutani style pieces to identify their provenance. Six other pieces from the No.7 Science Building area and forty-four pieces from Hizen kiln sites were also analyzed to provide comparative data.

The results indicate a strong similarity between the four Old Kutani pieces and samples from Hizen kiln sites. Since the Old Kutani style can be divided into several sub-types according to minor stylistic differences, these results should not be interpreted to mean that all of the Old Kutani style porcelain was made in Hizen. These results suggest, however, a strong possibility that at least some of the Old Kutani ware was actually produced in Hizen.

#### Section 2 Chemical Analyses of Glass Materials

Yasutami Nishida, Yoshinobu Koizumi,  
Takeshi Tomizawa, Koichi Kobayashi, Hiroshi Yamashita

Eighteenth and 19th century glass fragments found at the site were examined. The possibilities and limitations of various techniques used for the analyses of the compositions of glass are discussed.

Chemical analyses were aided by new approaches such as the PIXE (particle induced X-ray emission) method. Energy dispersive X-ray fluorescence analysis (XRF) and instrumental neutron activation analysis (INAA) were used to determine the concentrations of four major and fifteen trace elements of glass. Glass fragments were classified into two groups of the lead-lime-silica and soda-lime-silica type by chemical composition.

Based on glass density, the concentration of lead oxide in lead-lime-silica type glass was estimated to be about fifty percent. The results show that Pb, Na, Ag and Ba are the most useful elements to distinguish glass types.

### Section 3 Identification of Wood Artifacts

Yasumichi Chino

Samples of wood artifacts, boards and carbonized lumber from eight Edo Period features (Wells No. 1, 3, 4, Cellars No.6, 7, 8, 10, and Pit No.75) were investigated. Forty-one containers were examined. Non-carbonized samples were examined with a microscope using slide sections. Carbonized samples were first analyzed with a stereoscopic microscope, and some were further examined using a scanning electron microscope.

The analysis identified *Abies* (2 samples), cf. *Abies* (2), *Cryptomeria japonica* D. Don (4), cf. *Cryptomeria japonica* D. Don (3), *Chamaecyparis* (7), *Thuja standishii* Carr. (2), other coniferous samples (17), *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. (1), *Castanopsis* (1), *Quercus* cf. *acutissima* Carr. (5), *Quercus* cf. *serrata* Thunb. (2), *Celtis sinensis* pers. var. *japonica* Nakai (2), *Zerkova serrata* Makino (1), diffuse-porous wood (3), and a kind of bamboo (14). Coniferous samples were included in thirty-eight out of forty-one containers. The broad leaf tree samples all came from carbonized lumber samples. They probably had been used for fuel because many of them were identified as *Quercus* cf. *acutissima* Carr, and *Quercus* cf. *serata* Thunb.

### Section 4 Plant Remains and Carbonized Wood Remains

Akiko Matsutani

Uncarbonized seeds and carbonized plant remains found in the No.7 Science Building area, with the exception of those already analyzed in Section 3, were examined with the aid of binocular and scanning electron microscope.

As for the six samples of uncarbonized seeds, four samples were identified as a kind of white gourd and one fragment sample might have been the fruit stone of ume (*Prunus mume*) or momo (*Prunus Persica*). The remaining sample was identified as the seed of the tree, mukunoki (*Aphananthe aspera*). This fruit is edible.

Four lumps of carbonized grains were identified as rice grains without husks.

Carbonized wood remains were comprised of conifers such as goyoumatsu (*Chamaecyparis obtusa*) and togasawara (*Pseudotsuga japonica*), and deciduous trees such as kuri (*Castanea crenata*), shii (*Castanopsis cuspidata*) and kunugi (*Quercus acutissima*). Several samples of bamboo were also identified.

Carbonized fragments of rope and carbonized materials which might have been a *tatami* mat and a piece of paper were also observed under the microscope.

### Section 5 Clothing and Rope

Setsuko Nakada

Small bunches of clothing material, gold thread and rope were found in the No.7 Science Building area. The clothing was made of silk and cotton. Although the quantity of the excavated samples is small, both the clothing and the gold thread are of fine quality.

## Chapter 7

### HiZEN Porcelain of the 17th Century

Koji Ohashi

Much of the HiZEN porcelain excavated from the No.7 Science Building area was probably made after 1630. Most of the samples were blue and white. Some, however, were overglazed enamel. The majority of the samples were probably made in the Arita-Sarayama (present-day Arita-cho, Nishi Arita-cho, and Yamauchi-cho in Saga Prefecture). Some samples, however, must have been made in a kiln at Mitsunomata (Hasami-cho in Nagasaki Prefecture). Most of the pieces were well-made and must have been relatively expensive. This indicates that these artifacts were used by fairly rich people.

## Chapter 8

### A Study Based on Historical Documents and Excavation

#### Section 1 A Study of Historical Documents and Maps

Tadashi Hosokawa

This section presents a discussion of historical documents and old maps relating to the No.7 Science Building area. It is known that much of the campus of the University of Tokyo was the property of the Maeda Family, Kaga Clan during most of the Edo Period. The head of the Maeda Family was the *daimyo*, or feudal lord, who ruled the Kaga area (present-day Ishikawa Prefecture and part of Toyama Prefecture). The Kaga Clan was one of the most influential clans during the Edo Period, second only in size to that of the Tokugawa Shogun.

The history of the property can be divided into two periods: the earlier period is from 1616 or 1617 to 1682 when the property was used as the *shimo-yashiki* (lower property) of the Maeda Family. The later period is from 1683 to 1868 when it functioned as the *kami-yashiki* (upper property) where the *daimyo* himself lived. Little is known about the first period from historical records. On the other hand abundant historical documents were available from the latter period.

Based on studies of maps dating from 1688 to 1868, the No.7 Science Building area was identified as part of the *nagaya* (long or terrace houses) where vassals of the Maeda Family lived during the *kami-yashiki* period. Studies of historical documents from about 1800 show that five vassals, each of whom had eight or nine retainers or servants as well as a horse, were living in these houses at that time.

#### Section 2 A Study of the Distribution of Features

Tsuyoshi Yamaguchi, Junko Habu

In this section, Edo Period features are classified into three stages using the artifact chronology of

objects which were excavated from each feature. The first stage dates to the 17th century; it includes Wells No. 1, 2, 5, Cellar No.9, Pits No.1, 2, 51, 85, 89, 90, 129 and 135. The second stage dates to the 18th century; Wells No.3 and 4, Cellars No.3 to 8, 10 to 13, 15 to 17, 19 to 21 and many pits were identified in this stage. The third stage dates from the end of the 18th century to the 19th century; Cellar No.14, Pits No.30, 48, 63, 75, 113, 119, 122, 141 and 142 were classified in this category. It was suggested that the features of the 18th and 19th century were distributed mainly in grid rows A-B and E-F, with their axes pointed either north-south or east-west. In contrast, the features of the 17th century were distributed randomly over the excavation area, and their axes do not correspond with those of the 18th and 19th century features.

### Section 3 Comparison between Historical Maps and Archaeological Evidence

Tsuyoshi Yamaguchi, Junko Habu, Tadashi Hosokawa

Based on the results of Section 1 and 2, we tried to identify the excavation area on two historical maps during the *kami-yashiki* period. The first map was drawn in 1688; the second one is believed to have been made during the 1840's.

Our study suggests that the grid rows A-B and E-F, where most of the 18th to 19th century features were located, correspond to the garden area of the *nagaya* drawn on these maps. In addition, Wells No.3 and 4 are probably the two identifiable wells shown on the map of 1688.

## Chapter 9

### Conclusion

Junko Habu

The excavation and analyses of the No.7 Science Building area produced three main results. First, the ceramic samples provided data which can be used to reconstruct the circulation and consumption of ceramics during the Edo Period. Second, the analyses of faunal remains helped with the reconstruction of Edo Period dietary patterns. Third, the distribution of features corresponded to patterns shown on historical maps. Thus, we were able to check the accuracy of documents from the Edo Period and hypothesize the function of features.

Edo Period historical archaeology is a new field. The excavation results show that systematic archaeological excavation can provide information not available from the study of documents. Knowledge of Edo Period dietary habits and information about the circulation and consumption of materials such as porcelain can be revealed using archaeological techniques. Such research will add to our understanding of Edo Period society and culture.

## List of Figures

- Figure 1 Location of the site area, the University of Tokyo  
Figure 2 Areas excavated at the University of Tokyo  
Figure 3 Grid system used at the No.7 Science Building area  
Figure 4 Distribution of features at the No.7 Science Building area  
Figure 5 Topographic map of the Hongo Uplands around the excavation area  
Figure 6 Profile of the eastern part of the Hongo Upland  
Figure 7 Geological sections in the excavation area  
Figure 8 Geological sections in the excavation area  
Figure 9 Results of mineral analysis and shape analysis of volcanic glass shards  
Figure 10 Contents of volcanic glasses in the columnar sections  
Figure 11 Distribution of Jomon Period features  
Figure 12 Jomon Period features (Pits No.J1—J4)  
Figure 13 Artifacts of the Jomon, Yayoi and Kofun Periods  
Figure 14 Distribution of Edo Period features in grid rows A and B  
Figure 15 Well No.1 and its artifacts  
Figures 16—23 Artifacts from Well No.1  
Figure 24 Well No.2 and its artifacts  
Figure 25 Artifacts from Well No.2  
Figure 26 Well No.3 and its artifacts  
Figures 27—30 Artifacts from Well No.3  
Figure 31 Cellars No. 1 and 2  
Figure 32 Artifacts from Cellars No.1 or 2  
Figure 33 Cellar No.3 and its artifacts  
Figures 34,35 Artifacts from Cellar No.3  
Figure 36 Cellar No.4 and its artifacts  
Figures 37—43 Artifacts from Cellar No.4  
Figure 44 Cellar No.5  
Figures 45—50 Artifacts from Cellar No.5  
Figure 51 Cellar No.6  
Figures 52—57 Artifacts from Cellar No.6  
Figure 58 Cellars No.7 and 8  
Figures 59—61 Artifacts from Cellar No.7  
Figures 62—64 Artifacts from Cellars No.7 or 8  
Figure 65 Pit No.1  
Figures 66—74 Artifacts from Pit No.1  
Figures 75,76 Pit No.2  
Figures 77—85 Artifacts from Pit No.2  
Figure 86 Pits No.3 — 10  
Figure 87 Pits No.11 and 12, and their artifacts  
Figure 88 Pits No.13 and 14, and their artifacts  
Figures 89,90 Artifacts from Pit No.14  
Figure 91 Artifacts from Pit No.14, Pit No.15  
Figure 92 Pit No.16 and its artifacts  
Figure 93 Pits No.17—25, and artifacts from Pits No.18 and 24

- Figure 94 Pits No.26—29, and artifacts from Pit No.26
- Figure 95 Artifacts from Pit No.27
- Figure 96 Artifacts from Pits No.27 and 28
- Figure 97 Pits No.30—32, and artifacts from Pit No.30
- Figure 98 Pits No.33—36, and artifacts from Pits No.35 and 36
- Figure 99 Pits No.37—42, and artifacts from Pit No.41
- Figure 100 Pits No.43—46, and artifacts from Pits No.43 and 46
- Figure 101 Pits No.47—50, and artifacts from Pits No.47 and 48
- Figure 102 Pits No.51—53 and their artifacts
- Figure 103 Pit No.54 and its artifacts
- Figure 104 Pits No.55—60
- Figure 105 Pits No.61 and 62, artifacts from Pit No.62
- Figure 106 Pit No.63 and its artifacts
- Figures107,108 Artifacts from Pit No.63
- Figure 109 Pits No.64—67, and artifacts from Pits No.63 and 65
- Figure 110 Pits No.68—70, and artifacts from Pits No.69 and 70
- Figure 111 Pits No.71—73, and artifacts from Pits No.71 and 73
- Figure 112 Pits No.74 and 75, and artifacts from Pit No.74
- Figure 113 Artifacts from Pit No.75
- Figure 114 Distribution of Concentrations of rooftiles and ceramics No.1—11
- Figure 115 Artifacts from Concentration of rooftiles and ceramics No.1
- Figure 116 Artifacts from Concentrations of rooftiles and ceramics No.1,2 and 4
- Figure 117 Artifacts from Concentrations of rooftiles and ceramics No.5 and 6
- Figure 118 Artifacts from Concentrations of rooftiles and ceramics No.9 and 11
- Figure 119 Pit Cluster No.1, post molds and small pits in grid rows A and B
- Figure 120 Artifacts from post molds and small pits in grid rows A and B
- Figure 121 Ditch No.1 and its artifacts
- Figure 122 Distribution of Edo Period features in grid rows C and D
- Figure 123 Cellar No.9
- Figures124—126 Artifacts from Cellar No.9
- Figure 127 Pits No.76—82 and artifacts from Pits No.76, 80, 81 and 82
- Figure 128 Pits No.83 and 84, and artifacts from Pit No.83
- Figures129,130 Artifacts from Pit No.83
- Figure 131 Pits No.85—88, and artifacts from Pit No.85 and 88
- Figure 132 Pit No.89, and artifacts from Pits No.88 and 89
- Figure 133 Pit No.90, artifacts from Pit No.90, and artifacts from post molds and small pits in grid rows C and D
- Figure 134 Post molds and small pits in grid rows C and D
- Figure 135 Distribution of Edo Period features in grid rows E, F and G
- Figure 136 Well No.4 and its artifacts
- Figures137—144 Artifacts from Well No.4
- Figure 145 Well No.5 and its artifacts
- Figure 146 Artifacts from Well No.5
- Figure 147 Cellar No.10 and its artifacts
- Figure 148 Cellar No.11 and its artifacts



- Figure 149 Artifacts from Cellar No.11, and Cellar No.12
- Figure 150 Artifacts from Cellar No.12
- Figure 151 Cellar No.13 and its artifacts
- Figures152—154 Artifacts from Cellar No.13
- Figure 155 Cellar No.14 and its artifacts
- Figure 156 Cellar No.15 and its artifacts, and Cellar No.16
- Figures157,158 Artifacts from Cellar No.16
- Figure 159 Cellar No.17 and its artifacts
- Figure 160 Cellar No.18 and its artifacts
- Figure 161 Artifacts from Cellar No.18
- Figure 162 Artifacts from Cellar No.18, and Cellar No.19
- Figures163—166 Artifacts from Cellar No.19
- Figures167,168 Cellars No.20 and 21
- Figure 169 Artifacts from Cellars No.20 and 21
- Figure 170 Pits No.91—104, and the artifact from Pit No.104
- Figure 171 Pits No.105—107, and artifacts from Pits No.106 and 107
- Figure 172 Artifacts from Pits No.107
- Figure 173 Pits No.108—110, and artifacts from Pit No.108
- Figure 174 Artifacts from Pits No.108 and 109
- Figure 175 Pit No.111 and its artifacts
- Figure 176 Pit No.112 and its artifacts
- Figure 177 Pits No.113—116, and artifacts from Pit No.113
- Figure 178 Artifacts from Pit No.114
- Figure 179 Pits No.117—119, and artifacts from Pits No.117 and 119
- Figure 180 Pits No.120—122 and their artifacts
- Figure 181 Pits No.123—129 and artifacts from Pits No.124, 127, 128 and 129
- Figure 182 Pits No.130—135 and artifacts from Pits No.130 or 131, and Pit No.135
- Figure 183 Pits No.136 and its artifacts
- Figure 184 Artifacts from Pit No.136
- Figure 185 Pit No.137 and its artifacts
- Figure 186 Artifacts from Pits No.136, and artifacts from Well No.5, Pits 136 or 137
- Figure 187 Artifacts from Pits No.138—140 and their artifacts
- Figure 188 Pit No.141 and its artifacts
- Figure 189 Pit No.142 and its artifacts
- Figure 190 Pit Clusters No.2 and 3, and artifacts from Pit Cluster No.3
- Figure 191 Post molds and small pits in grid rows E, F and G, and their artifact
- Figures192—195 Refitted artifacts from various features
- Figures196—204 Artifacts found outside features
- Figure 205 Temporal changes of *tokkuri* (liquid containers)
- Figure 206 Rubbings of grinding bowls
- Figure 207 Classifications, measurement points and part names of rooftiles
- Figure 208 Indeterminate fish bones (Teleostei order indet.)
- Figure 209 Distribution of wells and cellars
- Figure 210 Distribution of Hizen kiln sites
- Figure 211 Calibration of the X-ray fluorescence analyses (TiO<sub>2</sub>)

- Figure 212 Elemental abundances of Oxidized Titanium
- Figure 213 Dendrogram from the cluster analysis of samples from Arita and Imari kiln sites
- Figure 214 Dendrogram from the cluster analysis of samples from Arita and Imari kiln sites and the No.7 Science Building area
- Figure 215 Distribution of Si/Al
- Figure 216 Distribution of Ti/Fe-Si/Al
- Figure 217 Dendrogram from the cluster analysis of 10 samples from the No.7 Science Building area
- Figure 218 Dendrogram from the cluster analysis of 44 samples from Hizen kiln sites
- Figure 219 Histograms of elemental abundances in 40 samples from Arita and Imari kiln sites
- Figure 220 Dendrogram from the cluster analysis of 40 samples from Arita and Imari kiln sites
- Figure 221 Results of provenance analysis of samples from the No.7 Science Building area
- Figure 222 XRF spectra of glass samples
- Figure 223 PIXE spectra of glass samples
- Figure 224 Scattergram of  $K_2O - Na_2O$  contents in glass samples
- Figure 225 Correlation between PbO quantity and density in glass samples
- Figure 226 Transformation of Kaga Clan properties in Edo
- Figure 227 Historical map of *nagaya* near the excavation area
- Figure 228 List of dwellers in the *nagaya* around the excavation area in 1800
- Figure 229 Location of the excavation area on the 1688 map
- Figure 230 Location of the excavation area on the 1840's map

## List of Tables

- Tables 1,2 Mineral analysis of various stratigraphic levels of the Kanto Loam Formation
- Table 3 List of pits in grid rows A and B
- Table 4 Concentrations of rooftiles and ceramics in grid rows A and B
- Table 5 Description of individual artifacts from features in grid rows A and B
- Table 6 List of pits in grid rows C and D
- Table 7 Description of individual artifacts from features in grid rows C and D
- Table 8 List of pits in grid rows E, F and G
- Table 9 Description of individual artifacts from features in grid rows E, F and G
- Table 10 Description of refitted artifacts from various features
- Table 11 Description of artifacts found outside features
- Table 12 Numbers of porcelain and other glazed ceramics recovered from eight features
- Table 13 Numbers and percentages of various types of ceramics
- Table 14 Comparison of numbers and percentages of various types of ceramics obtained by different counting methods
- Table 15 Measurement of the volume of *tokkuri* (liquid containers)
- Table 16 List of *tokkuri* with secondary modifications
- Table 17 List of identification marks on *tokkuri*

Table 18	Numbers of grinding bowls found from each feature
Table 19	Numbers of salt pots found from each feature
Table 20	Measurement of rooftiles with family insignia
Table 21	Measurement of rooftiles with <i>renju mitsudomoe mon</i> (rooftile design)
Table 22	Measurement of designed flat rooftiles
Table 23	Measurement of semi-circular parts of complete rooftiles
Table 24	Measurement of flat parts of complete rooftiles
Table 25	Measurement of semi-circular rooftiles
Table 26	Measurement of flat rooftiles
Table 27	Measurement of coins
Table 28	Measurement of pipes (bowl parts)
Table 29	Measurement of pipes (stem parts)
Table 30	Numbers of nails recovered from the site
Table 31	List of features with carbonized wood samples
Table 32	Minimum numbers of shells recovered from each feature
Table 33	Numbers of identified fish bone samples found from a column sample of Pit No.63
Table 34	Numbers of identified fish bone samples found from a column sample of Pit No.12
Table 35	Identification of amphibian, reptile, bird and mammal bones
Table 36	Numbers of identified fish bone samples found from 17th century features
Table 37	Numbers of identified fish bone samples found from 18th and 19th century features
Table 38	Numbers of identified fish bone samples found from a water separation sample of Cellar No.9
Table 39	Numbers of identified fish bone samples found from a water separation sample of Pit No.63
Table 40	Numbers of identified fish bone samples found from a water separation sample of Pit No.73
Table 41	List of wells
Table 42	List of cellars
Table 43	List of rectangular pits
Table 44	List of rectangular pits from the Hitotsubashi Koko site
Table 45	List of chemically analyzed porcelain samples from the No.7 Science Building area
Table 46	List of chemically analyzed porcelain samples from Hizen kiln sites
Table 47	List of chemically analyzed porcelain samples from other sites
Table 48	Description of porcelain samples from Hizen kiln sites
Table 49	Specifications for X-ray fluorescence analyses
Table 50	Standards for X-ray fluorescence analyses
Table 51	Results of the X-ray fluorescence analyses
Table 52	Elemental abundances of Oxidized Titanium measured by Yamazaki (1986)
Table 53	Elemental abundances in 10 samples from the No.7 Science Building area
Table 54	Elemental abundances in 44 samples from Hizen kiln sites
Table 55	List of Hizen kiln samples analyzed by Saga Prefectural Ceramic Research Center
Table 56	Results of X-ray fluorescence analyses of Hizen kiln samples measured by Saga Prefectural Ceramic Research Center
Table 57	List of glass samples
Table 58	Isotopes used for the analyses of glass samples

Table 59	Results of the analyses of glass samples
Table 60	Identification of wood artifacts and carbonized samples
Table 61	List of uncarbonized seed and nut samples
Table 62	List of carbonized wood samples
Table 63	List of <i>daimyo</i> properties of more than 33,000 m <sup>2</sup>
Table 64	Chronological table of the Hongo Property
Table 65	List of contents of the historical map made in 1688
Table 66	List of historical maps showing the excavation area
Table 67	List of dwellers in 1800 in the No.7 Science Building area
Appendix	List of features

### List of Plates

Frontispiece	1	Old Kutani style porcelain from the No. 7 Science Building area
Frontispiece	2	Historical map of the Kaga Clan Hongo Property in the 1840's
Plate	1	Distribution of features in the southern part of the No.7 Science Building area
Plate	2	Geological sections in the excavation area
Plate	3	No.7 Science Building area during the excavation. Geological sections in the excavation area
Plate	4	Jomon Period features (Pits No.J1—J4)
Plate	5	Wells No.1, 2, 3 and 5
Plate	6	Well No.4
Plate	7	Cellars No.1—6
Plate	8	Cellars No.7—9
Plate	9	Cellars No.10—13
Plate	10	Cellars No.14—18
Plate	11	Cellars No.19—21
Plate	12	Ditch No.1 and post molds
Plate	13	Pit Clusters No.2 and 3
Plate	14	Pits No.1 and 2
Plate	15	Rectangular Pits (Pits No.12, 63, 74, 75 and 119)
Plate	16	Pits No.7, 11, 89 and 90
Plate	17	Concentrations of rooftiles and ceramics No.1, 5 and 8
Plate	18	Volcanic glasses
Plates	19—21	Ceramics from Well No.1
Plate	22	Ceramics from Wells No.2 and 3
Plate	23	Ceramics from Well No.3
Plate	24	Ceramics from Cellars No.1 or 2, and No. 3
Plate	25	Ceramics from Cellars No.3 and 4
Plates	26,27	Ceramics from Cellar No.4
Plates	28,29	Ceramics from Cellar No.5
Plates	30,31	Ceramics from Cellar No.6
Plate	32	Ceramics from Cellar No.7
Plate	33	Ceramics from Cellars No.7 or 8

- Plate 34 Ceramics from Pit No.1
- Plate 35 Ceramics from Pits No.1 and 2
- Plates 36,37 Ceramics from Pit No.2
- Plate 38 Ceramics from Pits No.11, 12, and 14
- Plate 39 Ceramics from Pits No.14, 16, 26 and 27
- Plate 40 Ceramics from Pits No.27, 30 and 36
- Plate 41 Ceramics from Pits No.43, 51, 52 or 53, 54, 62 and 63
- Plate 42 Ceramics from Pits No.63, 65, 70 and 71
- Plate 43 Ceramics from Pits No.71, 74, 75 and Concentration of rooftiles and ceramics No.1
- Plate 44 Ceramics from Concentrations of rooftiles and ceramics No.1, 5, 9, 11, post molds or small pits and Ditch No. 1
- Plate 45 Ceramics from Cellar No.9, Pits No.76 and 83
- Plate 46 Ceramics from Pits No.83, 85, 88—90 and post mold or small pit
- Plates 47—49 Ceramics from Well No.4
- Plate 50 Ceramics from Well No.5, and Cellars No.10 and 11
- Plate 51 Ceramics from Cellars No.11—13
- Plate 52 Ceramics from Cellars No.13—16
- Plate 53 Ceramics from Cellars No.18
- Plate 54 Ceramics from Cellars No.18 and 19
- Plate 55 Ceramics from Cellars No.20, 21 and Pit No.107
- Plate 56 Ceramics from Pits No.108, 109 and 111—114
- Plate 57 Ceramics from Pits No.114, 119, 122, 124, 127—131 and 135
- Plate 58 Ceramics from Pits No.136 · 137 or Well No.5, and Pits No.138, 139 or 140
- Plate 59 Ceramis from Pits No.141, 142, Pit Cluster No.3, and refitted artifacts from various features
- Plates 60—62 Ceramics found outside features
- Plate 63 Salt pots
- Plates 64,65 *Kawarake* (earthenware)
- Plate 66 *Hibachi* (braziers) and *horoku* (baking pans)
- Plate 67 Other earthenware and clay artifacts
- Plate 68 Rooftiles
- Plate 69 Ink stones and whetstones
- Plate 70 Stone and metal artifacts
- Plate 71 Metal artifacts
- Plate 72 Pipes
- Plates 73,74 Coins
- Plate 75 Glass and bone artifacts
- Plate 76 Wood artifacts
- Plate 77 Lacquered wood artifacts
- Plates 78—81 Fish bone samples
- Plates 82—84 Chemically analyzed porcelain samples from Hizen kiln sites
- Plate 85 Museum examples of Old Kutani (Ko Kutani) style dishes
- Plates 86—93 Wood samples examined with microscopes
- Plate 94 Seeds examined with a stereoscopic microscope and a scanning electron microscope
- Plate 95 Ropes, *tatami* (mat), paper and bamboo examined with a scanning electron microscope

- Plates 96,97 Carbonized wood samples examined with a scanning electron microscope
- Plate 98 Clothing and ropes
- Plate 99 Historical map of the Kaga Clan Hongo Property in 1688
- Plate 100 Historical map of the Kaga Clan Hongo Property in the beginning of the 19th century
- Plate 101 Location of the excavation area on the historical map in the 1840's
- Plate 102 Historical maps of *nagaya* (long or terrace houses) around the excavation area